
ドリフト TrifT

kishegh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリフト TrifT

【Nコード】

N95460

【作者名】

k i s h e g h n

【あらすじ】

運の無い青年、地獄を見た後たどり着いた世界。

元の世界の居場所をなくし、次の世界でも安寧は得られず、終に流れ着いた異世界では、場所を見つけることが出来るのか？

主人公は、異世界の補正も、勇者の資質も持つてはいない、生まれ持つての特殊能力も持つてはいない。

生きたがりもせず、死にたがりもしない、そんな男の物語。 改訂版です

更なる改訂版が来ておりますので此方は終了です。

新作の方をお楽しみいただければ嬉しいです。

思い返せば、仲間と師匠。不幸の連鎖（前書き）

自分だったらどんな風に異世界を描くのかということ、習作初投稿その改定版です。

間違いや 判りにくいなどご意見ありましたらどうかお寄せください。

個人的な考え方ですが、戦う以上は残虐な描写や死などは切り離せないものだと思いますので。そういったR-15的なパートがあります。

また、恋愛にはなかなか発展して行かないとは思っていますが、発展した場合性描写などもありえますので、お気を付けてください。（本当にそうならR-18で書くかもしれません）

思い返せば、仲間と師匠。不幸の連鎖

もしかしたら、この世界に俺以上、いや、俺以下に運の無い人間は、いないのかもしれない。まあ、命を落とすことも無く26までは、生きて来れたのだから、卑下することは無いのかもしれないのだが。生まれ自体は日本。しかし、俺の国籍が、もう存在してはいないことは確認している、3歳の段階で鬼籍に入っている、と言うことになっていた。訂正することも出来たが、どうせあの国には何も無い。縁も所縁もありはしない。だから、あまり意味を持たない。

俺の親父は、日本人で発電所の開発をしている技師だった。母は、国際的な血筋だったらしい、国籍は日本のものだったようだが、人種的には白人系主体のミックスだったようだ。小柄な人だったと覚えてる。

俺が2歳の時、親父は海外援助で、ある中東の小国に、発電所を建設しに行った。子供も少しは大きくなってきたし、愛する妻とは離れたくなかったのだろう。家族でその国に渡った。他にも、思う所はあったのかもしれない。だが、今となっては、何も確認は出来ない。

当時その小国は、王政を布いていたが、安定はしていた。少なくとも表向きには。だからこそ、自分の出国に少し遅れて、家族を呼んで、生活を始めようとしていたわけだ。

しかし、そこにクーデターが起こった。王の従姉妹、その夫だった軍の将軍は、若手の軍将校や一部の富裕層、知識階級と共に反乱を起こした。

主要施設をすべて占拠、わずか数日で偏った選挙を行い、初代大統領となったその將軍は、国内にいた海外技術者や国内の有力者に選抜を強いた。すなわち、すべてを差し出すか、死。財産も技術もすべてを差し出し、人質を出して恭順を示すか、死。家族を人質に取られた親父は、恭順を取って日本には、家族は事故で死亡したと届けられた。

そのままであれば、数年後には開放されていたかもしれない。30年前ならいざ知らず、すでに国際的に協調路線を取っていた国連が、いつまでも静観はしていなかっただろう。アメリカ辺りが嘴を突っ込んでいたかもしれない。あまりに一方的な死亡通知は、各国が疑っていたからだ。

しかし、歴史的にはアフガン進攻という、東西冷戦の新冷戦期。ソ連に対して、反抗的とも言える首脳部。そして、宗教色を背景に強く持たない政権は、アメリカには、都合が良かった。放置されるどころか支援され、一気に力を増した。

国家的な援助も乏しく、そして、先の展望も無い中。幸せとも、満ち足りていたともいえない。それでも、多くの人質達は、無事に暮らしていた。

だが、悲劇的なことに俺の母親は美しかった。大統領となった男の弟。ただ、大統領の弟と言うだけで無能なその男は、内陸国にあるまじき海軍の將軍になっていた。個人的な欲望のために、権力を振るっていた。

暇と権力を持て余した下衆のする事等は高が知れている。その下衆は、俺を人質に母を愛人に、いや奴隷にしようとした。母は、けな

げにも耐えたのだろうか、その抵抗は3年も持たなかった。俺が6歳に成るのを待たずして、母は壊れた。壊れた母は捨てられて、死んだ。その事を知らされた親父は、激昂と僅かながらの抵抗を残し、ほぼ同時期に殺された。

俺はその事を、一年以上たつまで知らなかった。俺は5歳に成る頃、軍の特殊兵養成のカリキュラムを受けさせられていた。100人いて残るのは2人か3人、そんな拷問を5歳から受けた。できれば、早々に、何も知らずにくたばってしまいたかった。

そうであれば、俺はただの不運な子供で、終われたのに。

6歳の時、両親がすでに殺されていたことを知った俺は、時期を待った。無感情で、心が壊れたかのような演技をしつつ機会を待った。

9歳になるうかと言う頃、当時は自分の年もよくわかっていなかったから、今思えばではあるが。ようやく機会が巡って来た。反体制活動が活発化してきて、親を殺した下衆にも賞金がかかっていた。反政府活動ゲリラが、ちょうど俺たちに訓練という名の拷問を、与えるために来ていたその下衆を、訓練施設を襲った。

俺はとつさに下衆に訓練用のナイフで襲い掛かった。さつきまで、ニヤニヤと、虐められる俺達のすがたを見ていた男は、判断を下すことも出来ず、恐慌に陥った。

冷静になれば刃のついていないナイフには何の意味も無かったのだろうが。混乱した下衆は、ホルスターから銃を抜いた。無能な下衆は、あっさりと銃を奪われ、俺はその両方の鎖骨を打ち抜いた。2口径の銃では、ほかにもいた教官を片付けることはできなかったから、命を奪いはしなかった。下衆の後頭部に銃を突きつけ、教官

どもを睥睨した。

護衛も兼ねていたそいつらは、ひたすらに権力を恐れていたのも、その男がわめき散らす、俺の言うことを聞けと言う言葉に忠実に従った。俺が命じるとおりに、教官どもを部屋から追い出した男は、太った身体を、醜い二重顎を、プルプルと震わせていた。歯と歯を打ち合わせる、キチキチという音がやけに煩く聞こえる。

奴自身が下した、奴自身が求めた、俺達に強いられた訓練。その訓練が、結果的に自分の人生の最後を飾ることになる。本当にありがとう、糞虫以下の存在を、殺虫できる力をクレテ。だから、下衆には、最大級の感謝をしなくちゃならない。だから、感謝を表してやった、行動をもって、憎しみをこめて。

今思い出しても、歴代1位の座は揺るがない。まったく持って無様な命乞いだった。俺が誰かを、何をされていたかを、正確に把握していれば、そんな命乞いは無意味だとも判ったのかも知れない。だが、やつはゲリラが突入するまでの約10分、無様な命乞いを続けた。そんな声を聞かされた時に、怒りや憎しみ、そして無力感と恍惚が浮かんでくる。俺は、下衆の口をふさぎ、切る事もできないナイフで、耳やわき腹をグサグサと刺し続けていた

復讐を果たした俺は、ゲリラにプロパガンダとして活用された。先ほどまで言ったような事を、世界中に向けて告白した。無論取引はした。生活の確保と報酬、そしてさらに厳しい訓練のために、歴戦の猛者を師に付けること。

ゲリラ組織のリーダーは、俺に日本に帰ることを進めた。NPOなどを通じて里親などを探すこともできると言っていた。だが、俺は望まなかった。

今更の様に考えれば、出来ない事も無かったのだろう。だが、9歳にして何人も人間を殺し、世界中にキツイ過去を暴露された人間が、まともな生活に戻れるとは思わなかった、思えなかった。そして、復讐を、一番上のやつにまで復讐をしたかった。

青臭い考え方だったが、もう俺のような人間が、独りもいなくなればいいと思っていた。出来れば、もう少しましな世界になるのではと思っていた。その為の力が欲しくて、その為の戦いをしたかった。その後5年を、俺はゲリラの尖兵として戦った。

師匠、フレデリック・バウマンは、単なる個人の技能としても、作戦指揮官としても、そして指導教官としても一流だった。あんなゲリラ組織に、雇われているのが、おかしいほどの一流の傭兵だった。

俺は、最低限の才能もあつたのだろう。少なくとも地獄を、虐待的な訓練を幼子にして生き抜くだけの素質はあつたのだろう。師匠からも一番弟子と呼ばれた。作戦の一部も任せてもらった。うれしかった。高齢を理由に、この仕事を最後にして隠遁して暮らすといていた師匠を、親父のように思っていた。

5年間、師匠と戦い抜いて、独裁政権は倒すことが出来た。しかし大統領だった独裁者は、多額の資金を持って逃亡した。下衆で無能だった弟とは違い、少しは頭も回つたのだろう。世界的な犯罪者になつたわけだが、仮にも元国家主席、放置も出来ないし、大義名分としても国が裁かなければならない。少なくとも、死亡は確認されなければ、新政権には発言力が足りなくなる。

暫定新政権の頭首になつたゲリラのリーダーは、師匠に依頼をした。元大統領の追跡と確保、出なければ殺害を。

師匠は、ある傭兵集団のリーダーに協力を依頼した。新政権の頭首は、人員の協力も申し出たが、師匠は断った。鍊度が圧倒的に足りていないからだ。すぐに追跡に移らなければならない、いちいち兵を一から鍛えている時間は無かつたし、プロフェッショナルが必要だった。

ラッセル・ジャスパーという男がリーダーを勤める。民間軍事会社という名目の傭兵チーム「マーチング・コックテイル」が、師匠の要請にこたえてメンバーになった。ラッセル以下各種の専門家8人を加えて、師匠は俺を知り合いに預けて、作戦に移るつもりだったらしい。

俺は、死んでもかまわないと思っていた。復讐は、全て終わってはいい。俺の行動は、まだ終わっていない、終わってはならない。そう、執拗に師匠に頼み込んだ。街中での行動などでは、俺の様な子供が居た方が偽装に便利がいいとも説いた。何としても俺も行きたかった。いきなり戦い以外の場所に出されることに恐怖を感じていた。師匠とも離れたくは無かつた。

結果として、師匠は折れた。ラッセルも、試験を受けて合格ならばかまわないと認め、俺はその試験に合格した。潜入と爆発物の設置並びに撤去、近接戦闘と射撃、いずれも師匠から叩き込まれていたことだ。伊達に9年も戦っては居ない。俺を加えて10人は作戦を開始した。

プロの腕をもつてしても、金に飽かせて逃げ惑う男を捕まえるのは用意ではなかつた。中国という国は、国としても人種としてもたちが悪い。裏なのか表なのかも判らない連中を多く抱え込んでいる。もともと華僑に伝手があつた元大統領は何と3年間も逃げ続けた。

この三年間は、俺の人生としては充実していたのかも知れない。仲間はいいやつばかりで、生意気な俺にいろいろなことを仕込んでくれた。語学も歴史もその他の雑多な学問も、無論戦闘に関しても、一層の充実を見た。復讐という判り易い目標もあり、悩むことも少なかった。

一度などは、元大統領の娘を監視するために、学校に潜入したこともある。娘は名前を変えて、スイスの寄宿舎のある学校に入っていた。学校の授業についていくため1ヶ月死に物狂いで勉強した。幸いにも、チームには大学の教壇に立てるような人間も居たので、バテずに遂行することが出来た。まったく、俺には勿体無いほどのいい時期だった。いい時期過ぎた。

17の俺は、若く、能力も経験も一流ではなかった。元大統領の潜伏する屋敷に潜入する時、間違った自信で固まった俺は、潜入要員に志願した。屋内戦闘ならチーム内で一番だと思っていたからだ。師匠とツーマンセルで前衛を組み、2人が後衛に続き、ラッセルらの3チームが屋敷の他方を固めた。

復讐が果たせると意気込んだ俺は、圧着式のセンサーを見落とした。赤外線も振動感知も対処していたが、今時そんな旧式のセンサーを使っているとは思わなかった。センサーから繋がったクレイモア・散弾地雷は見事に、面で師匠と後衛の2人を飲み込んだ。時がゆっくり流れると言う経験は、ただ、目の前で死んでいく師匠を、はつきりと認識させた。叫ぼうにも、空気は何処かへ漏れていくようだった。

散弾にズタズタにされた3人に比べ、俺は軽症だった。眉の辺りを切り肩口に幾つかの玉が入ってはいたが、命に別条は無かった。す

ぐに処置をすれば、3人は助かったのかもしれない。可能性は低かっただろうが、皆無ではなかっただろう。

だが、俺は訓練通りに、爆発音で混乱する屋敷に、飛び込んで行った。男はすぐに見つかった。予定通りの部屋、情報通りの間取り、俺は一人で突入した。

俺がドアを開けて突入した瞬間、元大統領だった男は、自分のこめかみに銃をつけ、引き金を引いた。大口径の銃はきれいに後頭部を吹き飛ばし、痛みを感じるまもなく男は死んだ。親の復讐を果たす前に、師匠の復讐を果たす前に。

呆然として、へたり込んだ俺を見つけたラッセルは、死体の回収と師匠たちの遺体の回収をすばやく行った。俺は一言も発することなく、呆然と男の死体を見続けていた。

怒りが湧き上がった。なぜ勝手に死んだのか。なぜこの男の死に顔は、こんなにも穏やかなのか。師匠たちの遺体はズタズタで、顔の判別もよくつかないほどなのに、この男の顔には目立った傷も無いのか。関係のある人間も、関係の無い人間も、幾人も巻き込みながら、一人で楽に、身勝手に死ぬのか。こんな男のために復讐心を燃やしていたのかと。こんな男を、自ら殺すことも出来ず、そして、仲間を失ったのか。なぜ、師匠が死んだのかと。なぜ俺は生き残ったのかと。

俺が、無理をしたから師匠は死んだ。間違いなく、俺が殺した。今度の仕事が最後、と常々言っていた。家を買って一緒に住むかと言ってくれた。俺の糞の様な自惚れと過信、それが師匠という人間を永遠に失わせた。フレデリック・バウマンは永遠に帰ってこない。俺は二度目の親父を失った。戦友を失い。怒りの、憎しみの矛先た

る人間を失い。親父を失った。自分が今更のように安寧を受けてはいけなと。平和を感受してはいけなと思つた。

師匠は死ぬ前に、俺を養子にしていた。国に戻つた俺たちは、有り体に言つて10年は過ごせるだけの報酬をもらつた。師匠の分の報酬も俺に支払われた。国籍も住居も仕事も用意するといわれた。しかし、俺はその話を断つた。その後3年間、自分を鍛えなおすために馬鹿の様な特訓を繰り返した。砂漠を少ない道具で踏破し。密林や湿原で住み暮らし。高山で体を鍛えた。日本人の血が影響でもしたのか、日本刀を使った近接戦闘法と暗器を使った戦闘。サイレント・キリングとその場に在る物を利用した暗殺技能を修得した。

日本刀を装備した風変わりな傭兵、現代の侍などと呼ばれた俺は、それから死ぬまでの6年間戦場を駆け巡つた。ラッセル達との共闘もあり、俺の名前は知れ渡つた。

アルト・佟・バウマン 俺は、過去も、現在も、戦場を求めている。

死に場所を、亡骸を横たえる場所を求めている。

26歳になつた俺の、今回の任務は、逃亡だつた。撤退といつてもいいが、負け戦に変わりはない。俺が元々居た国のように、ゲリラが反政府活動をしていたが、レアアースが発見されたことで情勢が一変した。元々あるとは言われていたが、実際に発見されたことにより、アメリカが介入した。まったく持つて俺とあの国は相性が悪い。装備を供与された政府軍は、圧倒的な戦力でゲリラ軍を制圧していった。せめて指導者だけでも海外に逃亡させようと、俺たちにお鉢が回つてきたわけだ。

国境線に向けての空域はすでに制空権を確保されている。幸いな

か政府軍といえども錬度は低く、装備はあっても使いこなせていないのが実情なので、夜間飛行や、定点爆撃などは行っていない。何処まで行っても小銃構えての突撃合戦をしている国なので、陸路で脱出する作戦だった。資産は前もって海外の支援者に渡してあった。報酬は先に貰っていたので、後は国境まで移動するだけのはずだった。しかし、その国の独裁者自身が軍を率いてやって来た所から話はおかしくなった。

軍備の増強に気を良くしたのか、自らやってきた独裁者、たった7人と庇護者1人を狩るには馬鹿げているほどの規模の人員を差し向けてきた。取り囲まれ、独裁者の乗る車が近づいてきたのを確認したゲリラ指導者は、すまないと漏らしてスイッチを押した。

Special Atomic Demolition Munition
SADM 特殊核爆破資材 指導者が積み込んでいた背囊に入っていた小型限定核爆弾は、独裁者も指導者も、俺たちも巻き込んで爆発した。広島型原爆のおよそ半分、最も小さい核爆弾ながら、半径400メートルほどの人間を皆殺しにするには十分な威力だった。おそらく自分自身をおとりにした作戦だったのだろう。独裁国家はトップが居なければ烏合の衆に過ぎない。乾坤一擲の、一か八かの作戦だった。巻き添えを食った俺たちは、馬鹿みたいだ。至近で食らったために、跡形も残さず蒸発するはず。そう、消え去るはずだった。

そして今俺はここに居る。何も無い世界。白い世界。広く果ての無い世界。視界一面に広がる白、上下も、時間の感覚も何も判らない。空腹も感じない。体感時間で4日程歩き続けたが、汗をかくことも無く喉も渇かない。熱くもなく寒くも無い。死後の世界なんて信じていなかった。宗教は信じていなかったがあえて無神論者でもなかった。神は居ても居なくても自分には一切関わりが無かったか、い

たぶって遊んでいたとしか思えない。

訳は判らなかつたが、とりあえず精神を健常に保つたためいつも通りの行動をした。いつもの様にトレーニングをした。しかし銃弾に予備はあまり無く。食事も必要としないし、眠くもならないので、ひたすら体を動かし続けた。幾ら動こうとも疲れないのでひたすら動き続けた。正拳を何兆回繰り返したのだろう何通りの蹴りを幾京回繰り返したのだろう。跳んで走ってシャドーを繰り返す。知らずに一度目の狂気が俺を襲った。

人間は、強い。発狂した俺だったが、時間の経過と共に状態を回復したようだ。何度も思うがいつその事死ぬか狂うかしてほしいとさえ願う。年も取ったようには思えないし、髪もつめも伸びず筋肉も増えない。肉体的な鍛錬をあきらめ、以前傭兵の仲間が教えてくれた太極拳・八極拳の套路、太刀の扱いを学ぶ時に触れた無外流の型を試し始めた。型を体に覚えこませ、套路を硬軟織り交ぜてこなし、体が慣れた俺は、禅を始めた。別に悟りを開こうと思つたわけではない。自分で自分自身を敵と想定してひたすら戦い続けた。

ほかの事は考えず、ただひたすら戦う事のみを考えた。考えたくなかつた。考えれなかつた。戦うことに没入した。4度目の発狂を越えたあたりから、変な風を感じるようになった。気配を消す訓練をしていると流れてきて、動くが消える。それを繰り返していた。5度目の発狂を迎えて、目が覚めると。

俺は、森の中に居た。

思い返せば、仲間と師匠。不幸の連鎖（後書き）

雑文お読みくださりありがとうございます。ご意見ご感想いただきましたら滂沱の涙を流し、噴死いたしますのでよろしくおねがいます。

追記・活動報告にも色々書き込んでおりますので、見ていただければ幸いです。

外れた世界に、新しく

「戻ってきたのか？」

周りをぐるりと見渡してみたが、戻ってきたのではないと理解できる。俺が元々居て作戦行動をしていたのは、熱帯雨林だった。今居るのは、アメリカ杉に似た針葉樹の森だ。植物相が、まるで違う。

「違うな、近辺には針葉樹林なんて無かった。それに気温も低い」

手を握り、感触を確かめる。体を順に動かして行き不具合は無いかを確かめる。体には何の問題も無い。いまだに狂気の中に居るのかとも思ったが。

「痛みも感じるし、空腹も覚えている」

頬を叩けば、痛みを感じる。長らく感じていなかった空腹と、周囲に林立する、針葉樹からは、木の臭いと、水蒸気にも似た感触が、濃厚に漂ってくる。

一つ一つ、声に出しながら確認していく。しゃがみ込み下、草を少し千切りとって噛んでみる。青臭さと苦味を、味を感じる。すぐに吐き出し、背囊から紙を出して口を拭く。

「少なくとも現実に居るのは間違いないかな？死んだんじゃないか？たのか？俺は？」

何はともあれ、現在位置を確認しなくてはならない。装備はすべてある。問題なく3日、切り詰めれば7日は行動できる。マップिंग

しながら、移動してみるべきだろう。自分でGPSを持っていないかったのが、悔やまれる。幸い時計には、方位磁針がついているので、北に向かって移動を開始する。

「記憶に無い木だな、アメリカカ杉みたいだが少し違う。全体的に小さすぎるが、人の手が入っている様子は無い、植林されたばかりと言ふ事も無さそうだ」

本当に、現実世界に復帰なのか、疑わしくなってきた。ここに来てから、異常に感覚が鋭敏になっていて、少しうざったい。周りにいる、小動物などの気配が、かなり広範囲にわたって感じ取れる。注意を向けると、半径にして150メートルほどは感じ取れるようだ。

「師匠の言っていた、達人のゾーンてのは、こんな感じなのかな」

まあ、便利だからいいが、調節も覚えないと、街中などでは大変かもしれないな。おいおい訓練していくか？そう思いつつ、歩を進めていく。木に、マーキングをしながら、10キロほど歩いたところで、感覚に大型の獣らしき気配が感知された。

「人、ではないな」

荷物を持ったまま気配を消す。手近な木に登って様子を見ると、狼らしき生き物が、4頭ほど視認出来た。近づいて戦うと、狂犬病などの恐れがある。遠くから倒してしまうことにする。感覚を信じるならば、近くにはこの4頭しかないらしい。

「実際に何かと戦うのは久しぶりだ」と、思いながら手首のバンドから棒手裏剣を出す。狼の延髄に2本ずつ正確に打ち込んでいく。銃を使うと気配を悟られるし、音で他の獣を呼ばないとも限らない。

使い終わった後、回収も出来て経済的だ。すべて刺さったのを確認し、さらに5分待つ。再び、一頭ずつ棒手裏剣を投げつけて、死んでいるのを確認する。

木から降りて棒手裏剣を回収しようとしてある事に気付く。

「狼に、こんなサーベルタイガーみたいな牙は無かったよな？新種？」

冗談めかして口に出すが、そんな話聞いたことも無い。遺伝子組み換えや、

そのほか何かということも、考えられるかもしれない。しかし、実験動物としては、観測装置もなしに放し飼いにしているのはおかしい。

そもそも、漆黒の毛を持ち、20cm以上ある牙を、口からはみ出させた狼。そんな物は、聞いたことも見たこともないし。作り上げるのだって、簡単ではない、どう考えても異常だ。

「食べようかと思ったが。止めておくか」

再び歩き始めると、3キロほどで森を抜けた。森が途切れて100mほど先にかがり火が焚いてある。すでに、薄暗くなっではいるが、周りに何も無いところに、かがり火を焚く意味がわからない。しかし、少なくとも人間がいることはわかった。多少賭けにはなるが、かがり火の下にいる人間に話しかけてみよう。

「おーい、おーい」

森から出て声をかけると、なにやらえらくビックリした表情をして

いる。すぐ近くまで近づいても固まっている。どうしたのだろうか？何か俺が変なのだろうか？しかしやたらと牧歌的な格好をした男だ。今時中世の農夫のような格好をしている。祭りか何かで劇でもやるのか？

「おーい Excuse me Hello ? 好 Ciao
Oi」

反応がないな

「Es uliou se gupleio」

反応があつたが、何語かわからないな。ドイツ語みたいだが違う。

「すまないな、判らない」

とりあえず、真摯に頭を下げしておく。少なくとも敵意がないのは伝わっただろう。

「Wo westen his holisesten und
loz auf」

男は、ため息をつくと手招きをして歩き出した。ついて来いと言う事だろうか、素直に後に続くことにする。300メートルほど先の丘の上に、別の男たちが2人いた。最初にあつた男は、2人に何かを説明して片方の男が俺に向けて言った。

「Loz auf」

どうやらこの男について行けば良い様だ。丘を越えた先には、人ら

しき気配が300ちよつと感じられる。集落でもあるのだろうか？出来れば言葉の通じる相手がほしい。情報がまったく得られない。言いよりの無い違和感が、消えないのも不安だ。自分の体重が、いつもより少し軽く感じる。不安がさらに膨らむ。

思ったとおり、集落があった。しかし古めかしい、ヨーロッパの世の頃の町並みのようだ。古い時代の建物が残っている町でも、街灯などは立てられている。しかし、ここには電気が通っているようには見えない。

レンガ造りに、木を使った屋根、そして、窓は木戸だけで、ガラスは使われていない家々。舗装もされていない砂利道。白人が住むところで、このような土地は珍しい。そもそも、俺が知っている、何処の文化とも様子が異なっている。所々の家のドアには、クロスした翼が掘り込まれている。

集落の中心、他の建物よりも二回りほど大きな建物の前で、男は止まった。

「Stouenna poiket」

待て、とでも言っているのだろうか？手で押し留めるからには、待てばいいのだろう。男はその建物の中に入っていった。すぐに、男は初老の男と共に戻ってきた。少し派手な服を着た初老の男は、宝石ケースのようなものからイヤークフを取り出し耳につけた。

「話が通じますかな？」

男が話していることが急に理解できた。日本語と一瞬思ったが、よく聞くと聞こえる言葉と口の動きが微妙にあっていない。だが意味

は通じているようだ。

「はい、理解できます。突然ですが、害意はありません。ここが何処なのかよくわからずに迷ってしまったようなのですが」

初老の男性も、言葉はわかったようで頷いていた。

「そうでしたか、私はこの村の村長をしています。バドウィックといます。失礼ですが、お名前は？」

「これは失礼いたしました。私は、アルト・柊・バウマンといいます」

「称号名があるところを見ると、貴族の方でしたか？」

急にあわて始めたバドウィックさんは、おかしなことを言った。貴族？今時貴族などが何か関係するのだろうか？

「いいえ、貴族ではありません。称号名と言うのが何かは判りませんが。私は生みの親と育ての親がいて、両方の名前を名乗っているだけです」

「そうでしたか、ところで、森から出てこられたそうですが。大丈夫でしたか？最近、ガルムが出るので、警戒をしていたのですが」

？ガルム？　ガルムって何だろう。

「失礼かもしれませんが、ガルムとは？」

「ガルムを知らないか？ガルムは小型の穢れ物で、牙の生えた大き

な犬のようなものです」

さっきの狼モドキか、ガルム。しかし、やはり聞いたことないな、ガルムなんて。しかも、穢れ物って何だ？

「そのガルムとやらでしたら。先ほど、森の中で倒しました。4頭だけですので、他にも居ればわかりませんが」

「なあ！なんですよ！」

うーむ、年食ってそうな割には、反応がいい人だなバドウィックさん。そんな驚く様なことかね？簡単とはいわないが、たかが狼4頭。それほどたいしたことはしていないだろう。

「あの4頭のガルムには、すでに10人以上が犠牲になっているんですよ。どうやって倒したんですか。本当なんですか」

バドウィックさん矢鱈と詰め寄ってくる。うざったい。

「本当です、何でしたら現場に案内しますので、自分の目でご確認ください」

何だろう、あまりにも久しぶりに人に会うので。対人関係がよくわからなくなってくる。異常なほどに人恋しかったのだろうか？内心では。一面で、ウザイと思いつつも、もう一面で、何かをしてあげたい気持ちにも、なってくる。役に立てたのなら、嬉しいとも思えてくる。

バドウィックさんと、他6名ほどを引き連れて、先ほどの現場へ戻る。今時、松明はないだろう。しかし6人全員が、持っているから

かなり明るい。現場に着くと、屍骸は、まだそこに4体とも残っていた。

「おお、本当に死んでおる。いや、まさかたった一人で4体も」

えらく感心している。他の6人も唸っている。さつき、10人以上やられていると言っていたが、けが人が出ることでぐらいはあるのだろうか。まさか殺されているなんて事はないだろう。

「いやあ、アルトさん。ありがとうございます。これで敵も取れました。心配も無くなって、大安心です。何か御礼できることが、ありますか？」

お礼か、そもそも、まだ何の話も聞いていないし。ここがどこかも判らない。

「そうですか。それでは、少しお話を聞かせていただきたいのと、今晚御宅に留めていただけませんか？出来れば食事も」

「そんなことですか。何日でもどうぞ、とりあえず村に戻りましょう」

何で皆さんガラムとやらの屍骸を持って帰っているのだろう。食うのか？それは食えるのか？晩飯があれば一すくいかな？肉臭そっだし。

しかし、俺が聞きたいことは、今だ何一つ聞けていない。やっぱり、久しぶりすぎて人との交流が下手になったのかな？

外れた世界に、新しく（後書き）

改訂版を出して行っています。

ご感想等頂けましたら嬉しいです。

人に違つては、思い。他人と己

バドウィックさんの御宅で、夕飯をご馳走になっていた。幸いにも、と言つべきなのか、夕飯はガラムではなかった。豆で作ったスープと、クスクスに似た、小さく、まるで米粒のように作られたパスタ。それに、採ったばかりの、根菜のサラダがそえられていた。体感的には、暫く何も食べていなかった上、その前も、主に軍用レーションを食べていた俺には、新鮮な野菜が、何より美味しく感じられた。

料理に、舌鼓を打ちながら話を聞いているわけだが、まったく俺は質問できていない。決して、料理にだけ集中していたわけではないのだが、バドウィックさんと、彼の奥さんのアリシアさん娘さんのサニーさんが質問攻めをしてくる。俺は、こんなにも押しが弱かったのだろうか？それとも、弱くなったのだろうか？もしくはこの一家が異常に押しが強いのか？

ちなみに、先ほどバドウィックさんがつけていた、イヤークフは、今は俺の耳に着けられている。どうやら俺が、装着しても、問題なく使えるようだ。これは、ぜひとも欲しい物だが、こんな物が有るとなると、嫌な予感が離れない。

しかも、自分に、経験がないので、家族の団欒に邪魔しているようで肩身が狭い。しかし、何時までも答えてばかりでは、埒が明かない。

「所で、ここはなんと云う村なんですか？まだ伺っていませんでしたね」

やっと話が切り出せた。がんばれ、がんばるんだ。

「おお、そうでしたな。つい、こちらばかりが質問をしてしまった。森から来られたという事は、リヒテンラーデ公国から来られたのですかな？ここは、アイゼナツハ王国のパルムエイトと言う村です。」

アイゼナツハ？リヒテンラーデ？なぜか名前は、ゲルマン語族系みたいだが、聞いたことも無い。嫌な予感が、どんどん高まっていくのを感じる。まるで、薄くて細い橋の上で、暗闇に浮かんでいるかのように、居心地が悪い。足場と、周囲が、俺には誰もいないと告げてくるようだ。そんな気分を、払拭するように、さらに質問を重ねた。

「失礼ですが、日本という国に聞き覚えは？アメリカは？フランス・インド・オーストラリアこれらは聞いたことがありますか？」

訝しげな顔をしながら、皆さんが一齐に首を横に振った。

「はじめて聞きますな。国の名前ですか？フランと言う町は有りませんが。その他は聞いたこともありません」

あっさりと、絶望的なこと仰ってください。それならばと、さらに質問を続ける。

「このイヤークフ、ですか？耳飾をつけた途端に言葉が通じるようになりましたが。これはいったいなんですか？」

聞きたくなくて流してきたが、さすがにそろそろ限界だ。魔法とか言われたら、さすがにまだ、狂ってるんじゃないかと思う。新しく開発された特別な翻訳機ですよと、言っただけ。そうすれば、いや、もう限界だな。

「いや、お恥ずかしい。古いものではありませんが、意思疎通の呪式をこめてある耳飾です。昔はこのあたりに、ドワーフの集落などがありましたので、彼らとの交流に使っていたものです。最近は使うことも無かったので、まだ使えてよかったですよ」

聞きたくなかった。一般教養として、読まれた事はあるが、そんな世界を信じたくない。実在するなどは、思ってもいなかった。フィクションの世界は、フィクションで終わってくれたほうが良い。ファンタジーなんて、たまった物ではない。

「しかし、アルトさんは御強いんですな。ガルムを4頭もとは、さぞやギルドのランクも高いのでしょうか。C級、いやもしかしてB級ですか？」

ギルド？ランク？さつきから、クエスチョンマークが、乱舞しているな。確かに元の世界では、ギルドといってもいいような、傭兵連絡協会にはしていた。しかし、ランクなんか無かった、あれは単に、名簿に名前を載せていただけだ。

元の世界か、こんな単語を遣わなくちゃならないとは。実は夢でした、と言う風にならないかな。お願いだから。

「すみません。ランクですか？傭兵をしていた事はありますが、ランクなどは無かったんですが。どういったものですか？それにギルドとは？」

「ご存知ではないんですか？傭兵にせよ、冒険者にせよ、大抵はギルドに所属しているはずですが。そうしないと、生活が成り立たないでしょう？例外的に、村や町、大きな商会等に、直接雇われる例も無いことは無いようですが」

ますますファンタジーだな。と言うかRPGだ。知り合いがMMOとか言ってる、インターネットでゲームをしていたが、それについて似たようなことを話していた。何で傭兵として、実際に現実世界で戦っていたのに、電脳世界でまで傭兵をやるのかと、皆で笑い飛ばしたが、人事ではなくなってしまった。

しかも、こっちはリアリティーが余るほどある。こんなことになるのなら、いつそ狂ってしまえるなら良かったのに、鋭敏化した感覚が、狂っていないと太鼓判を押しやがる。今だけは、むしろ邪魔だ。心から。

「そうですか、此方には来たばかりで、言葉が通じなくて困っています。よろしければ、この耳飾を譲っていただきたいのですが。お金は持っていないませんが、働いてかならず払いますので」

何をするにしても、言葉が通じないのでは話にならない。せつかく何ヶ国語も覚えたのに、ここではすっかり無駄になってしまった。耳飾があれば話を通じるならば、何としても手に入れておきたい。

「ガラムから村を守ってくださいました恩人です。もう使うこともありませんでしたし、差し上げますよ。それに、ガラムを綺麗なままで倒してくださいました。ガラムの毛皮は貴重です。それについてもお礼をしなければなりません」

それで、屍骸を持って帰っていたのか。食うわけではなかったんだな。

「それに肉はいい滋養強壮剤になります。みな喜びますよ」

食うんだ・・・滋養強壮って、夜のお供とかですか？奥さんが、顔を赤らめてますが。お元気ですね。

「それは、喜んでいただければ何よりです」

あまり深く追求はしないことにしよう。女性経験が無いわけでは無いが、師匠が結構固い人だったので、俺は傭兵にしてはその手の話は初心だ。付き合うようなことも無かったし、半ば無理やり娼館に連れて行かれたただだからな。

思い返せば、まともな女性と話した経験って実に少ないな。学校に潜入していた時は、なるべく目立たない様にしていたし。なんだか嫌なことに思い当たってしまった。

とりあえず、明後日近くの大きな町まで行く人がいるというので、その人に案内してもらって、町まで行くということで、話も落ち着いていた。護衛も兼ねるので、報酬として、3週間ほどは生活できるだけの金もくれるらしい。ことは、うまく運んでいるのかもしれないが、あくまでも不幸中の幸いで、基本は不幸だ。なんだか、胃が痛くなってくるようだ。

娘さんの、サニーさんが、部屋に案内してくれた。どうやら村長の家なので、客間と言うものがあるらしい。小さな部屋だが、寝るのには問題ないし、シーツは清潔そうだ。よく干してある匂いがある。とりあえず、今日は寝ることにする。思い出せないほど久しぶりの睡眠だ。眠れることがこんなにも幸せだとは、改めて思い知らされた。現実逃避の側面が、あったことも否めないが。

異世界に来てまだ一日だが、一般の方々の生活にはとことん馴染め

ない様だ。あの何も無い空間に居た時の方が、遙かに楽だった様に
思える。基本的に、周りの人間が、一般人ではなかったのも、ただ
ただ疲れる。後は、深い付き合いをする人間も、限られていた所為
だろう。いきなり、人に親切にされると、むしろ戸惑う、疑心暗鬼
とまでは行かないが、疑ってしまふ。そもそも、自分は精神的には、
弱いのではないかと思い、少し自信を失った。

人に違つては、思い。他人と己（後書き）

改訂版、恐らく正月中には、掲載し終わります。
誤字脱字、ご感想等有りましたら、ぜひともお寄せ下さい

食って、寝て、働いて

俺は今、この地域では一番大きな町である、フランに向かう馬車に揺られている。昨日、丸一日かけてハナシを聞いて周った所では、この近隣の国5カ国は、現在10年間の同盟協定と、平和条約を結んでおり、戦争などはしていないらしい。

今から4年ほど前、大飢饉が起こり、戦争どころではなくなつたと言つた話だ。パルムエイトの村は、人数も少なく、すぐ近くに、大きな森もあつたので、被害はそこまで大きくなかつたそうだ。しかし、街道沿いの町や村などでも多くの餓死者を出し、ひどいところは、村が丸々消滅したりもしたらしい。

経済は、ほぼ完全に穀物と貴金属の価格に連動している。株式や保険の概念も無いわけではないが、一般には浸透しておらず理解しているものも少なくなつた。識字率は高くなく、田舎の村では1割、大きな町や首都などでも4割ほどだと言つた。学校などは、国に国立のものがひとつだけ、都会では塾もあるが、学費が高い。教育は、あまり普及していないと言つのが現状のようだ。

銅貨1枚が1ガランという通貨単位になっている。銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨100枚で銀板1枚。銀板10枚で金貨1枚。金貨100枚で金板1枚。

一般的な生活は、ほとんど銅貨と銀貨で事足りる。最低限の店で飯を食つても2ガラン。宿は、安いとこであれば一食ついて10ガランといったところだ。ちなみに、ガラムは1体倒せば、肉と毛皮そして牙で、安くとも銀貨1枚にはなるらしい。なかなかおいしい獲物だ。

此方の世界で少し特異に感じたのは、男女の平等が、ほとんど確立しているところだ。文化的には、地球の中世ヨーロッパに近いが、男尊女卑は、ほぼ撤廃されている。領主や王の中にも女性が大勢いて、当たり前になっている。軍の中の指揮系統にも、女性は珍しくないらしい。リヒテンラーデ公国には、女性だけで構成された軍もあるらしい。王女を旗頭に据えた、聖処女騎士団だとか、そんなものだそうだ。

女性の地位向上は、暴論ではあるが、男性の肉体的なアドバンテージが、決して絶対的ではないという証明が必要になる。文化活動か知的技能、もしくは子供を生むと言うことや、女性である事そのものが、文化的、もしくは宗教などによって、肯定され、価値有る物とされなければならぬ。

旧時代、文明が発展する以前は、むしろ女性の地位は高かった。しかし、古代以降のヨーロッパでは、後天的に、宗教によって、女性の地位は低くなった。これはその他の所でも、殆ど同じと言える。これは、宗教が悪いのではない。ある種の、防衛思想の行き過ぎた形、とも取れるかもしれない。護るべき存在、から、たかが護られている存在へ、見方がシフトしたのだ、と俺は思っている。

さらに、現代において、知的職業や文化的職業にあつたにしても、男女の扱いは均等とはいえない。事実として、多少の不平等は残っている。しかし、この世界においては、その不平等がほとんど無い。理由は、大きく分けて二つ。それは、宗教と知的技能分野において、女性に大きなアドバンテージがあると言う事だ。この世界は、神様が実在するらしい。実際に、歴史上に顕現したことが多数あるようだ。しかも多神教。その中で、主神の座を占め創生神でもあるのが、

女神ナーガス。蛇のねーちゃんみたいな名前だが他の神々とは一線を画するらしい。

このナーガスを始めとした、5柱の神々をあがめるのが、ナディンと呼ばれる信徒たち。精霊信仰なども在るらしいが、主流ではないらしい。しかし、お互いを、排斥しあってもいないようだ。

あくまでも、創生神はナーガス、というのは共通認識。直接神をあがめるか、それより身近な神の使い、世界の調整者である、精霊をあがめるかの違いのようだ。どちらの宗教も、神官などはほとんど女性が占めている。男性もいるが全体の2割程度らしい。肩身が狭い思いをしていることだろう。

もうひとつは、俺が今着けている、耳飾の元にもなっている呪式。呪式そのものは、詳しく調べられていないが、基本的に女性のほうが、適正が高いらしい。話を聞くと、完全に魔法のようだ。才能や適正に差はあるが、努力すれば誰にでも習得可能だと言う話だ。誰でも出来るからこそ、最初から適正の高い女性が、優遇されるのだろう。上記のようなことと、中期の男性主意がちょうど良くぶつかって、バランスを取っているようだ。

これは、後になって聞いたことだが、昔は一部の女性神官が、娼婦のような役割も担っていたらしい。従軍神官として、戦地に赴いた時の重要な役割だったそうだ。死に行く兵士の、癒しだったのかも知れないが、俺には理解が追いつかない。しかし、そういうことも手伝って、娼婦や春売りに対しての風当たりも少なく、一つの職業として認められているようだ。

これが、昨日今日で調べられた事。そのまとめだ。今向かっているフランは、近郊では一番、国の中でも5指に入る町だそうだが、人

口は2万人程度。国全体でも40万人ほどらしい。経済として考えてもそれ以上には増え難いだろう。物々交換ほどではないが、経済的には貧弱と言っている。国家の力が弱いと言っていることもある。村の畑でも、農機具はほとんど木製で、鎌や包丁などが辛うじて鉄製だった。アイゼナツ八王国は、鉄資源には恵まれているらしいが、それでもその程度だ。

これ以上のことを調べるためには、パルムエイトの村では、どうにも出来なかった。少なくとも傭兵として戦うならば、国の事は調査をしておくべきだ。今は頼れる仲間も、使えるコネクションも存在しない。すべて自分でやらなくてはならない。

さらにそれと平行して、生活の糧を得ることも必要になる。地球での蓄えが、使えるわけも無く、バドウィックさんから、謝礼が貰えなかったら、いきなりサイバイバルを始めなくてはならない。やって出来ないことはないのは経験済みだが、出来れば遠慮願いたい。

バドウィックさんの話では、今現在、傭兵としての仕事は、無いのではないかと言うことだった。近隣には戦争をしている国がないからだ。そこで、冒険者ギルドを推薦された。冒険者ギルドは、他のギルドと同時に入れる数少ないギルドで、日銭を稼ぐのには向いているそうだ。

依頼を受けて、それを遂行するのはどのギルドでも一緒だが、冒険者ギルドは、その垣根が広いらしい。穢れ物と呼ばれる凶暴な獣、つまりはモンスターの討伐や、護衛、貴重品の採取や保護、ベビーシッターや家庭教師の依頼などもあるらしい。

そうこうしていると、フランの町が見えてきた。中央に塔が立つ城塞都市だ。スコープのスケールで確認をすると、城壁の高さがおよ

そ12m、城壁が湾曲しているところを見ると、方形の城壁では無いらしい。城壁の上と門には歩哨が立っているが、出入りのチェックなどはしている様に見えない。あくまでも穢れ物に対する対策なのだろう。

そのまま問題なく市内に入り、ギルドの前まで案内してもらった。冒険者ギルドは、大通りの入り口、入って直ぐの所に在った。有事の際の詰め所にもなっているのだろう。周りには、商人ギルドや、少し外れて傭兵ギルドもあるそうだ。

送ってくれた村人とは、案内に対しての礼を言って別れた。本当ならば、道中1回襲われたので、その報酬を貰っても良かったが受け取らなかった。襲ってきたのは、ピッツボーグという名前の鳥に似た穢れ物で、人の目を狙って攻撃して来るそうだ。俺は、あらかじめ拾っておいた小石を、指弾の要領で撃ち出した。10羽ほど倒したところで、諦めたらしい。食べれないことも無いが価値は低いし、美味しくも無いと言う事なので、そのまま捨て置いた。

ギルドの中に入ると、思った以上に清潔で整った場所だった。カウンターが設置され、幾つかの受付に分かれていた。この耳飾は優秀なようで、文字も見れば意味は把握することが出来る。固有名詞はそのままなので理解できない場合もあるが、それほど苦には感じない。総合受付と書いてあるカウンターに、俺は向かった。

「新規の登録をしたいのだが」

小柄な女性が、中にいた。小さ過ぎて、椅子に座っていると、カウンターの前に来るまでは見えないほどだ。気配で存在は判っていたので希望を告げる。

「かしこまりました。他のギルドに登録はされていますでしょうか？」

「いや、していないが」

えらくにこやかに返事をされて少し面食らった。ファーストフードの店員ではないのだから、あそこまでしなくてもいいとは思ったが、そこに文句をつけるようなことではないと思いついた。それでも、尻がむず痒い様な感じは抜けきらない。判つていようと女性に対する耐性は低いままだ。

「軍の兵役経験などを証明するものはございますか？もしくは何らかの戦闘に対する証明などはございせんか？」

「いや、何も持っていない」

「それでしたら、F級からのスタートになります。登録の前に説明を聞きますか？」

「ああ、よろしく願います」

「判りました」

コホンッ、軽く咳払いをすると彼女は説明を始めた。なにやら小動物のような印象を受ける。可愛いのかも知れないが、何処かキビキビした動きと、なぜか、滑稽さのような印象も混ざっている。

「当冒険者ギルドは、お客様からの以来を受け、それをギルドメンバーの方々に斡旋をするのを業務としています。ギルドは依頼の報酬の1割を、残りの9割を依頼を完了したメンバーに支払います。」

特例として、上級のメンバーには、国からの依頼などを要請することもあります。基本的にはメンバーが自分で依頼を選びます。次はランクの説明です。ランクは、選べる依頼の難しさを表しています。自分のランクより2ランク上の依頼までは選べます。始めはともかくD以上でしたら、自分のランクにあつた依頼を選ぶことをお勧めします。ランクの上昇は、遂行した依頼のランクによって変わります。自分と同ランクの依頼を30回、1ランク上なら10回、2ランク上なら2回達成することによってランクが上昇します。Cランク以上になりますと得点がありますのでがんばってください。宿が安くなったり、武器の代金が安くなったりします。ランクはFからA、そして特級が存在します。あなたは、先ほども言いましたがF級からのスタートになります。登録をなさいますか？」

大体、前もって聞いてあつた通りの事なので問題ない。

「よろしく願います。文字が書けないので代筆を頼みたいんですがこの耳飾は、文字は読めるが、字は書ける様にならない。おいおい覚えていくしかないだろう。文字はほとんどアルファベットだが、字体がキリル文字のような字体で、文字が34種類ある。似通った字体も多くて非常にめんどくさい。」

「かしこまりました、お名前は、アルト・ヒイラギ・バウマン。お年は26、使用武器は？何ですかそれ？」

この世界には、太刀はないようだ。はじめて見た様で興味深げにしている。

「ソードでいい、片刃の物だが剣には変わりない。それと無手での組打も出来るな」

「判りました、片手剣でよろしいですね。片手剣と無手組打。以上で登録は終わりました。一回目のカード発行は無料ですが、紛失されますと銀貨一枚かかります。カードはどのギルドでも発行できますが、最後に依頼を遂行したギルドでないと、依頼遂行の履歴が消えてしまう場合もありますので、お気をつけください。それではがんばってくださいね」

依頼は明日からにして、今日は町を見て、宿にとまることにする。3時間ほどかけて町を見て回り。食事を取って、宿で寝た。安全性を配慮して少し高い宿にしたので、明日からは稼がなくてはならない。酒場で聞いたうわさや、この町の警備兵の錬度の低さに一抹の不安を覚えながら、今夜は眠ることになった。

こんな世界で生きていくことを考えると、気分が重くなってくる。

ただ、生きるために生きる

翌日、異世界に来てからは4日目の朝。

4時30分、日の出にはまだ少しだけ時間がある。公転周期や、季節環境にも疑問は残るが、今のところそれらに関する情報は少ない。村で聞いた感じでは、地動説すら一般的では無い様だ。地動説の概念が在るのか無いのかではなく、教育も受けていないので考えたことも無いと言う事らしい。

身体が軽く感じられるが、これが、星としての質量の差なのか、俺の身体の変化なのかわからない。単純に、身体の使い方が、省かれて、省エネになっているのかもしれない。

ベッドと壁の、隙間から這い出る。周囲に感覚を広げるが、動くものは少ないようだ。さすがに、日の出前から動いているものは、少ないのだろう。時代的に準拠できるのならば、明かりの類はまだ貴重品のはずだ。先日は、あまりにも久しぶりだったので、ベッドの中で寝てしまった。しかし、今後戦闘を続けていくために、以前のように生活ペースを作っていくべきだ。異世界ゆえに多少の変更は必要かもしれないが。

服を脱ぎ、体を鍛え始める。ゆっくりとした柔軟、吐納法を組み込み、1時間続ける。全身に汗がびっしり浮かび上がる。しかし呼吸は荒げない。腹筋背筋をゆっくりと300、腕立てとスクワットを200、8種類の武術の型、套路をゆっくりと。終わったところで、昨夜の内に、運び込んでおいた水に布を浸し、体を拭く。本当ならば、素振りや走り込み、実弾射撃もしたいが、街中の道で素振りも出来ないし、変に目をつけられても困る。銃器などもあるので、荷

物からも離れられない。これらについても要考察と言ったところだ。銃器は、師匠の形見のc z 7 5とv z 8 5を持っている。9ミリパラを、通常弾頭・ホローポイント・ピアシングと合計で400ほど持っている。小銃は、俺の戦闘スタイルには合っていないので持っていないかった。偶然、補充したばかりで、かなりの量が背囊には入っているが、少ない。

戦闘するならば、1時間も持たない量でしかない。咄嗟の時に、c z 7 5には装填しているが、基本的には使わない方が良さだろう。この世界では、入手は絶望的だろう。パッキングはしてあるので、劣化の心配が低いのは幸いだが。

「はあ、身一つで何とかするしかないな。せめて安心できる倉庫やセーフハウスがほしい。昨日も、少し変な目で見られたからなあ。野戦服のままという訳には行かないか。昨日、店を除いた感じだとオーダーメイドみたいだし」

服装自体は、かなりバリエーションがあつて。変わった服を着ていても、そこまで問題視はされないだろうと言うのが結論ではあるが、油断は出来ない。

しかし、それ以上に直面している問題がある。下着と風呂だ。アンダーシャツのようなものは、来ている人間がいたので、仕立て屋で注文できた。しかし、パンツが一般的ではない。なぜか、基本的に女性の物という感覚らしい。店で聞いたら変態を見る様な目で見られた。一般男性は、さらしを巻くらしい。何とか実物のボクサーパンツとソックスを見せて、作って貰える事になったが、特別料金を取られた。パンツを手に握って、店先で説明しながら懇願するのは、恥ずかしかった。しかし、さらしは頂けないので、これも必要な恥

だ。と、思うことにする。

風呂は、以前も作戦中は入れないことが多かったから、我慢は出来る。しかし、俺は風呂が好きだ。師匠は、オランダ生まれだったが、ハンガリーに長く住んでいて風呂が大好きだった。俺も連れて行かれたことがあるが、あちらでは温泉が盛んなようだ。ヨーロッパでは、珍しい。その影響を、多分に受けて俺も風呂好きになった。気配を消すにも、石鹸の香りは勿論ご法度だが、体臭を発散させている訳にもいかない。体臭が原因で死亡は、情けなさ過ぎる。そういつたわけで風呂を探したわけだ。

少なくとも、この町フランには、温泉は存在しない。大衆浴場のようなものはあるが、サウナの形式で、浸かれるような風呂は無い。町で一番の高級な宿屋には存在するようだが、宿泊客のみで、しかも紹介がないと泊まれない。昨日は一応、そのサウナに行って汗を流してきた。村などでは、たらいに水を張って流すだけのようである。実は、娼館に泊り込みで行けば、たいてい風呂にも入れるらしいのだが、あまり好ましくは無い。別に怖いとかではないが、なんとなく苦手だ。

いつかは行くだろうけど。

男だし。

やっぱり戦士には、そういうものも必要だし。

俺だって健康な青年だし。……一応。

「何で、自分で自分に言い訳してるんだ？」

師匠も女性には初心だったしなあ。女といる所等は見たこと無かった、女を買っていた様子も無かったし。家族はいないと言っていたから、奥さんなんかも居なかった様だし。尊敬は、無論しているし、今でも最高の親父だとは思っているけど、こんなところは似なくともよかったのに。

ため息を一つついて、朝食を取りに行く。ギルドは、8時から開くようだ、食事を済ませて行けばちょうど良いだろう。この町では、アワーリピーターが採用されている。昔ながらの機械時計のシステムだが、1時間ごとに鐘を鳴らす仕組みだ。朝6時から夜8時まで1時間ごとに鳴っている。教会内ではクウォーターリピーターも採用されているようだ。こちらは15分おきに鐘を鳴らす。

測ってみたがかなり正確なので、時間感覚はそのままでもいいレベルだろう。懐が、かなりさびしいので、早く稼がなくてはならない町を出るにもある程度のたくわえは必要だ。金貨一枚程度はほしい。すべての荷物を持って宿を出る。元々1日だけ泊まるつもりだった。宿もいろいろと泊まり比べてみるつもりだ。少なくとも、大っぴらに異世界から来たとは言えない。危険は残るが、自分で確かめないといけない。本来の俺は、臆病なほど慎重に行動する性格、いや、そう訓練されている。何度も自分に言い聞かせる。自分で、やるほか無いのだと。

ギルドに入り、依頼を探す。俺はF級らしいからDまでは受けることが出来る。ガラムは、C級では弱い方らしいので、D級ならば問題ないだろう。D級の駆除依頼、討伐依頼をメインに探していく。

平原で、ウォルンバットを3体倒すという依頼があった。重複依頼可能となっており、3体倒す毎に1回依頼を完遂したことになるよ

うだ。D級の駆除・討伐依頼で重複可能なのは、現在それだけだった。一度に済ませられるならば、済ましてしまおう。情報を得るにも、ある程度実力を示しておかなければならない。実力主義の世界は厳しい。依頼の板を持ってカウンターへ向かう。

「この依頼を受けたいのだが、ウォルンバットとはどんな穢れ物だ？」

「こちらはD級の依頼になりますが、大丈夫ですか？ウォルンバットはE級としても強いクラスの穢れ物になります」

ランクの精度がどの程度かはわからないが、少なくとも、C級を簡単に倒せたんだから、Eなら問題は無いだろう。

「かまわない、ウォルンバットの情報を教えてくれ」

しぶしぶといった様子で、受付嬢は話し始めた。昨日いた、小さい娘ではなかったが、もう少し感情を、顔に出さない様にすべきだろう。

「ウォルンバットは、3〜4フィールの蛇のような穢れ物です。毒などの特殊な攻撃はありませんが、かなり力が強いです。硬い鱗はなかなか砕けませんし、刃を滑らせます。なかなか手強い穢れ物です。仲間を呼ぶ場合もありますし、元から群で移動していることもあります。一族で縄張りを持つので、1体見つければ、そばにまだいると考えていいでしょう」

「判った、ありがとう」

去り際にもう一つたずねておく

「荷物などを保管したいんだが、どこか管理してくれる場所はないか？」

何だか、あからさまに馬鹿にした視線を、投げかけてくる。何なんだ？俺の言動に、何か落ち度が有ったか？

「ただ預けるだけでしたら、当ギルドでも行っています。しかし、貴重品などに関しての保障はありません。部屋を開放しているだけです。手数料をかけてもいいのなら、教会が預かってくれます。お金なども預けることが出来ますが、その教会でしか払い戻しは出来ません。店などで、個人的に預かりをしている所も無いでは無いでしょうが、判りかねます」

「そうか、判った」

何だか、一寸いやな気分になって、ギルドを出る。依頼用の板に呪式が掛かっているそうで、穢れ物などを倒した際には計測してくれるらしい。便利だが、呪式ってのはどうなっているんだろう。酷く情報が集めにくい。実際に呪式を使える人間に聞くしかないようだ。何にしても、大荷物抱えたままでは、聞き込みも出来ない。銃器や、明らかに時代にそぐわず使えないものは、いったん預けてしまいたい。金庫などに入れておいた方が良さだろうから。まずはその資金も作らないといけない。

やれやれと、ため息をつきながら門に向かう。

「何処に行っても、運が無い」

初仕事、あれ？

城壁の門を抜け、穀倉地帯を1時間ほど歩く。何箇所かにある、木で出来た柵を越えて、平原に出る。体力の確認もかねて、平原に出たところから、走り始める。

走れる、走り続ける事が出来るという事が自信になる。兵士は走れてこそその兵士だ。いかに強力な兵器であっても、兵士が動き回り、活用しなければ意味が無い。俊敏に、そして正確に移動できるか、機動運用できるかが、兵士の本分だ。銃撃や徒手格闘、爆破といった、各種の技能は、あくまでもその延長線にあるべきだ。これが、師匠の持論だった。俺もまったく同じ考えを持っている。

30分ほど走り続けたところで、気配を感じる。近くには水場があり、川の脇で三日月湖が形成されている。その中から気配がある。攻撃的な気配は無い、まだ恐らくこちらに気付いていないのだろう。蛇の仲間と言う事なので、水辺にいる可能性は高いと思われる。ウオルンバットかどうかを確かめに、ゆっくりと風下から進む。

「さてさて、鬼が出るか、蛇が出るか。蛇であってほしいが」

浅瀬を占拠していたのは大きなサンショウウオだった。体長は2m潰れた様な体で、体幅も1mはある。

「どうするかな、周囲に他の気配は無いが。拳銃弾が効くかどうか分からんな。触りたくは無いが、危険は排除しておくべきだろうな」
倒すことに決め、姿をさらしてみる。こちらには気付いているようだが、水場からは離れてこない。仕方なく、こちらからじりじりと

距離をつめていく。

距離が、10 m程になった所で、9 mパラを一発撃ち込んで見る。まったく変化がない、皮膚に弾かれると言うよりは、分厚い皮膚で止まっている様だ。

「無駄か」

銃を、ホルスターに戻し、さらに、間をつめる。

左回りに回りこみ、俺が水場に足を入れると、途端に突進してきた。低く太刀を構え、突っ込んでくる相手の右前腕を切り飛ばす。居合いの形から放たれた勢いをそのままに、腕を飛ばし体捌きで右に回りこむ。上から首筋を狙って一気に引き切る。首筋に刃が入った時、想像よりも遥かに重い手ごたえがした。かなり堅い穢れ物のようだ。しかし、一刀で綺麗に決められたので安心した。後で調べなくてはならないが、穢れ物・モンスターとは言え、直接対峙しても問題はなさそうだ。

「サンシヨウオオカ、少し平べったすぎるが。美味いって言うけどなあ。こんな、毒々しい物を、食う気にはならないな。元の世界であつても、食う気はしないけど」

太刀の刃を確認し、布で拭いを取って鞘に収める。これで、太刀が有効なことは判った。後は素手だが、少なくともぬるぬるなサンシヨウオオカを、殴る趣味は無い。組み打つなんてもつてのほかだが。蛇にしたって、あまり触りたいものではない。

「まあ、生きるためには、調査がいるよな。一々確かめる他無いか」

背囊を背負いなおし、再び走り始める。心拍数、呼吸、疲労、すべて、以前の世界よりも、変動値が少ない。異世界に来たからなのか、あの白い世界での訓練が生きているのか。

出来れば、努力の結果だと思いたい。狂うほど特訓をしたのか、狂わないように訓練を続けたのかは判らないが、無駄ではなかったと思いたい。少なくとも白い世界でのイメージどおりに居合いは出来た。あの感覚は悪くない。あそこまで、物を的確に斬れたのは初めての経験だ。

昼までには、何とか、発見したいと思っていると、岩の上で日に当たっている大蛇を発見した。3匹がとぐるを巻いている姿は、なんだか平和な光景だが、さつさとやらせて貰おう。

「仲間を呼ぶこともあるといっていたな。出来れば呼んでもらおう」
背囊を下ろし、にじり寄っていく。ためしに銃を撃ってみたが、あっさり弾かれた、射角が浅かったのは確かだが、弾かれるとは思わなかった。やはり、穢れ物への効果は、薄かったようだが、こちらには気付いて貰えたようだ。

シャーシャーと威嚇音を出しながら、鎌首をもたげってくる。ちょうど1m程の高さに頭がくる感じた。ちよつど良いと思い、一足飛びに懐に入り込んで、頭部に、発勁を徹す。思惑通り一撃で沈めることが出来た。

続いて、足元に這い寄ってきた1体の胴体を震脚で踏む。反動で、跳ね上がったってきた頭部に、双把を叩き込む。全身に勁が浸透するのを感じた。悪くない。

相手が一体だけになったので、仲間を呼ぶのを期待して暫く避け続ける。

「蛇さん、蛇さん、当たらないよーだ。いやあ、良いねえ、いい訓練になるよ。蛇さんには御礼をしなきゃ。」

きつちりと始末してあげよう。良いお礼だろう。

多数の気配が来るのを感じたので、太刀を抜き打ちに斬って捨てる。頭骨に当たらない様に、横なぎに背骨を斬ったが、刃にも、たいした衝撃は無かった。太刀も、十分に通用する。

気配が、近づいてくる。どうやら、同系統の気配なら感知できるようだ。さっき感じたウォルンバットと、今感じている気配は同種だ。三体目の首を、切り飛ばすと同時に、胸ポケットに入れていた依頼用の板が鳴る。

「ほー、なかなか便利な物だな」

感心しながら、胸を見ていると、増援部隊が到着した。

「思ったよりも多いが。まあいい、ドンドン狩って殺ろうじゃないか」

体が、こんなにスムーズに動いたことは無い。敵を斬る刃先の末端にまで、神経が届いている様だ。敵を蹴る足も、撃ち付ける拳も、確実に一撃で倒せることを実感する。あの白い世界での感覚が、急速に実体に結びついて覚醒していく。

この世界に来てから、色々な事がずれていた。それらが急速にすり

合わされる。俯瞰で全体を見ていながら、皮膚から気配を感じ取れる。最初は戸惑っていた、鋭敏化した感覚も心地いい。笑い出しそうな俺の胸で、時折音が鳴っている。律儀にカウントをしているのだらう。

拳槌を、頭部に打ち込むと同時に、足で牙を蹴り飛ばす。ナイフで口を貫き、地面に釘付けにする。

「これで、4回目。ハア！！楽勝でかなわんな」

蛇たちが乱舞する中を、軽々とよけながら、太刀に拭いをかける。少しずつ、蛇の動きを、足で逸らして行くと、お互いにぶつかり合う。太刀を腰に収めて、バランスを崩している相手に向い、棒手裏剣を両手で投擲する。

「良い、実に、良い。手から離れた手裏剣にも感覚が繋がっている。刺さる瞬間まで知覚出来る。オラア！オラ！オラ！オラ！オラ！オラア！」

楽しい、自分の周囲の空間をすべて掌握したように感じられる。これほど気分が高揚した記憶は、過去に類を見ない。

「これで13回そして、2匹と」

左右から噛み付いてくる蛇を、同時に弾き飛ばす。空中に浮いた瞬間には生命活動は停止している。

「チイツ。もう1匹いればきりが良いんだが。まあ仕方ない」

合計41匹を倒して町に戻る民に歩き出す。背囊を背負い、歩き出

して暫くすると。

途端に落ち込んだ。

「何を恥ずかしいことをのたまっているんだ。俺は」

加速されていたような感覚が消え、正常な状態となった俺は、急速に落ち込んだ。ひざから崩れ落ちていきそうな羞恥心と、変な精神状態に落ち込み、危険を招いたかもしれない事実からの猛省に、その場にへたり込んだ。

「はあ。能力が有効なことは判ったが、何をやっているんだ俺は、あの精神状態もわけがわからないが。それ以上に、悪目立ちをしてはいけないのに、こんなことしたら、下手に目立ってしまう可能性がある。というか目立つ。最も避けなければならぬ事を、何をノリノリでやっているんだ。反省しろ俺」

先ほどとはうって変わって、ため息をつきながらとぼとぼと町に帰る。朝も走れてはいなかったたので、走っては見たが、気分的には、頭の中でドナドナが流れていた。沈み気分には拍車をかけるいい曲だ。ふう。

気分も多少は回復したので、町に入る前にもう一度能力の確認を試みる。

知覚範囲はさほど変わらない。平常時で50m、集中すれば150m程だ。しかし、知覚する内容はあがっている。言葉での説明は難しいが、どんな生物であるかが大体把握できる。大きさや動きなど

が何と無くではあるが判る。特定の人物の察知なども出来るようだ。莫大な時間の訓練は、やはり人間を研磨する。衰えることなく鍛錬が出来たあの時間に感謝すべきかもしれない。

だいぶ気分も良くなった、暗くなる前に町にも帰れたし、さっさと依頼の報酬を貰おう。

気を取り直してギルドに向かう。でもなんだか吹っ切れないので、途中で店により、軽く食事を取りながら、酒を一杯ひっかけた。

別に、ギルドに行つて、変に注目されたいやだなーとか思ったわけではない。楔みたいなものだ。……多分。

仕事の後は、お酒と…

ギルドに入り、カウンター内を見渡す。気配でも薄々判ってはいたが、昨日いた、愛想のいい小さい娘はいないようだ。

「ちつ。あの娘なら騒いだりしないと思ったんだが」

仕方なく、朝もいた娘に声をかける。

「依頼を完了してきた。確認してくれ」

俺が、あっさりと依頼を完遂した事に、少し驚いていたのだろう。しかし、その表情は、さらに変化する。娘の目が、みるみる見開かれていく。暫く待ったが、反応がないので、ため息をついて声をかけてみる。

「どうかしたか？報酬を受け取りたいんだが」

呆けた様に、無言で首をコクコクと縦に振る。こうしてみると中々にかわいらしい。騒いだりもしなかったし、朝に感じたいやな感じも、払拭されたようだ。なにやら、ふつふつと汗を流しながら、業務を遂行している。まったくの無言だが。

「ほお、報酬のお受け渡しと、ランクのし、昇格の手続きがありますので。もう暫くお待ちください。今お持ちんっの、ギルドカードを、お貸しください。手続きに必要になりますので」

無理やりひねり出した棒読みといった感じで、言葉をつなぐ。かわいらしいものだが、この無言の圧力は如何にかならないのだろうか

？脂汗を流す女性というのははじめてみた。

苛めているみたいで、少し傷つく。最も女性との接点は少ない。その上、あの白い世界に行く前2年ほどは、触れてもない。知り合いが言っていた、思春期の異性に対するモヤモヤ、とはこんな物だろうか？経験が無くて判らない。

「お待たせいたしました。1回の報酬が120ガラン、13回分になりますので、1560ガランになります。それと、ランクアップの際の褒賞もございまして、FからEへの褒賞が50ガラン、EからDへの褒賞が100ガラン支払われます。合計で1710ガラン。銀貨17枚と銅貨10枚になります。ご確認ください」

まさか、ランクアップで、ボーナスがあるとは。少し驚いたが、ただけるものは貰っておこう。こういったサービスは中々うれしい言葉も、だんだん詰まらなくなっている。落ち着いてきたのだろう。

「それでは情報を更新したので、カードをお返しします」

必要なことをしゃべり終わると、また呆けたモードに戻ったようだ。落ち着いてなかったようだ、そつとしておこう。戻ってきたカードを見てみると、右上の空白だったところに、Xのような形をしたマークが追加されていた。D級ということだそうだが、一般的に使われている文字ではないようだ。何の意匠なのかは判らないが。

懐も暖かくなつたし、教会に行つて荷物やお金を預けることについて聞いてみよう。まだ4時頃だ、時間に余裕はある。

最初に見えた、城壁内の中央の塔が、教会だった。石で組み、青っぽい色の漆喰を塗られた塔は、独特の雰囲気がある。

青い漆喰か、何か混ぜてるんだろうか。アイゼナツ八王国は、山国で海には面していないのらしいから、貝の漆喰ということもないんだろうが。異世界だし、穢れ物なんて物までいるから判らないな。

教会の中に入ると、一階は、事務所のようになっていた。2階部分が礼拝施設らしい。カウンターで話を聞いたところ、荷物は地下室で保管、鍵もかけて管理するらしい。隣の建物が、騎士団の詰め所なので安全性も高いと言う。預かり料は大きさによって変わるようなので、背中の中を見せると、1日2ガランと言われた。十分に許容範囲だがすべてを預けるわけにも行かない。説明に礼をいい、教会を出る。

金庫を買おうと思っていたが、今後移動することを考えると邪魔になる。肩掛けか、小型の背囊のようなものがあれば、それを購入しよう。宿やギルドに着替えなどを預けて良く時用の鞆もほしい。今もっている背囊は、鍵が掛かるし、防弾防刃繊維の背囊に、さらに炭素繊維を組み込んだ物だ。防水防燃で、ボディシエルも兼用している。この中に入れて預ければ問題は無いだろう。

かばん屋という様な洒落た物は無かったが、小物屋で、布袋が買えた。背囊は、昨日行った服屋で、特別に作ってもらう。さすがに強化繊維などは無かったが、帆布のような丈夫な布で、体に合う様作ってもらう。多めに金を払い、その場で作ってもらうことが出来た。作りながら注文がつけれるので、この方法の方が便利だ。

昨日止まった宿とは別の宿に部屋を取った。早速荷物を分ける。着替えの類はすべて布袋にまとめる。元々少ないので袋にはかなり余裕がある。充電用の小型のソーラーパネルもこちらに入れて置く。

続いて、常に持ち歩くものを選ぶ。c z 7 5・換えのマガジン2つ・サバイバルナイフ・鋼線・カーボンザイル・A I Dパック・水筒・酒用のスキットル・オイル・電気式ライター・引き伸ばし型の鍋・折りたたみ式の五徳・その他サバイバルキット・レーション・ドライフルーツ・塩・以上を、新しく作った背囊に移す。

残った荷物を確認して、銃や機械類は油紙に包み、布で包んで鍵をかける。ナンバーロックと南京錠、二重にかけて確認する。布袋だけを部屋に残し教会へ向かう。教会で荷物を預ける。金は結局持ったままだ。さらに量が増えれば別だが、今はそこまで邪魔にならない。

「これで、一安心かな。身も軽くなったし、酒場に行くか」

ギルドの近くの酒場に行く。冒険者や傭兵がたむろする場所だ。情報も集めやすいだろう。酒場に入ると、自分がイメージしていたものに近い。丸いテーブルに椅子、カウンター、西部劇のサルーンのような。カウンターの端のほうに座り、酒を頼む。

「何か、軽く飲める物と、摘める物をくれ」

マスターが、金属カップに酒を注いでくれる。やはりガラス製ではない。真鍮か銅かと思ったら、錫だった。まあ、酒の味が良くなるとは言っけど、中毒性もあるんだが、錫。つまみは松の実のようなナッツだ。

「ありがとう、これなんて酒？」

「ロートハイド、軽めの酒だよ」

思ったより、丁寧に答えてくれる。無視されるかと思っただが、話に乗ってくれるなら、マスターから話を聞くのも良いな。酒に口をつける。やや甘い、フルーツのような芳香と合っていて美味しい。度数も高くなさそうだ、一息に飲み干す。

「美味しい酒だな、この辺りで造ってるのか？」

カップを差し出すと、同じものを注いでくれる。

「いや、もつと南のほう、王都よりも、さらに南で造ってる酒だ。こっちは中々飲めんのだが、たまたま仕入れたんだ」

「じゃあ店では普通に買えないのか。後で1瓶売って貰えないか？」

とりあえず、少しだけ変わった取引を持ちかける。受け答えを何度かすれば、おのずと引き出せる情報も違ってくる。

「かまわんよ。つまみもいるか？」

「ああ、それで頼む。ありがとう。それじゃあ、他の酒も試してみたいから、お勧めをくれないか？」

酒を飲み干し、前におく。マスターは少し考えて、少しにこりを持った酒を注ぐ。口にすると、鋭い酸味と香りが口に広がる。

「癖はある。だが、いい酒だな、気に入った。いい酒だ」

自分が推薦した酒を認められて、気を良くした様だ。職業意識もあり、趣味にもしている人間なのだろう。情報を引き出すのは難しいかもしれない。筋の通った人間は難しい。一度気を許せば、それも

頼もしさに変わるが、利用には向かない。

「この店には、冒険者や傭兵がよく来るのか？最近は何の羽振りはどうだ？」

「冒険者連中は変わらないね。傭兵は、戦がなければあがったりでそれで」

マスターは、にやりと笑う。

「何の情報が聞きたいんだい？」

諜報、情報、勉強法

言葉に思わず苦笑する。

「やつぱり、下手だったかな。自分でも、判ってはいるんだけど、今までは頼りになる人がいたからね」

以前は、交渉事は、ラッセルが殆どやってくれた。俺に任されていたのは、恫喝や脅迫、後は拷問くらいなものだ。それも、頼りなさがな見た目との、ギャップを利用して、アクセントになっていただけだった。軽口をたたきながら、情報を引き出していく、あの腕は真似出来ない。

「いやいや。中々だったよ、少なくとも、ここいらに、たむろって居る奴には、出来なかったことだ。必要なのは、経験かな。もう一寸落ち着かなきゃね」

そう言って、酒を注ぎなおしてくれる。やはり、熟練とは得がたい。

「恩に着ますよ。それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらいましょう」

銀貨二枚を取り出しカウンターに置く。

「おやおや、豪勢だね。私は、裏には繋がってないよ、真つ当な商売だね」

「裏は要らないよ。少なくとも、今はね、聞きたいのは、表の深い所。国、それと、呪式に関してだね。呪式のほうは、出来たら良いですよ」

「そうだな。とりあえず、何処の国から来たのかは知らないが。この国は、通っただけかね？それとも住み着くつもりかい？」

「まだ判らないなあ。そう言った事を決めるのに、情報を集めている最中なんですね。少なくとも、あと1週間は、この町に居るつもりだけだ」

「あんまり、勧められないね。今の国王は、良い王だ。それほど、才走った方ではないかも知れないが、人の忠告を受け入れることが出来るお方だ。そして、一昨年までは、宰相が生きていた。ヴェスター宰相と言ったんだが、見識、能力共に一級品、国王とは友人で、お互いに助け合っただけだ。ところが、王子、こちらが問題だね」

「何か、問題でもあるのか？最悪、兄弟やらその他の王族から、後継者を擁立できないのかね？」

マスターは、軽く首を振る。

「今の王の子供は彼一人。そして、王族と言っても、そのほかの王位継承権を持つものは、皆高齢だ。唯一の救いは、その王子の子供は、評判が良いって事くらいかな。しかし、憎まれっ子は世にはばかるとも言うしね。その次の世代まで、国が保てるかどうか。私は、低いと読んでいるね。今の王は高齢で、何時身罷られてもおかしくない。あと6年もすれば、同盟も解消される。そんな時に、国が弱っていたら？行動は一つだ。寄って集って切り分けるだろうね。後は美味しくって奴さ」

「そりゃあ、大変だな。だがね、それは深い話じゃないよ。浅くも無いが、深くも無い。チョット事情通なら知ってるってレベルでしょう。それとも料金が足りないのかな？」

目が、目だけが笑っている。まったく、俺の周りには、教育者が多い。ありがたい事だ。もちろん皮肉で言っている。

「いや料金は十分さ、釣りを出しても良いほどにね。さて、息子は馬鹿だが、孫は秀逸、能力もあり成長もする、しかも人格にも問題が無い。お前さんならどうするね。」

「息子を飛ばして孫を後継者にするな。教育も若いうちのほうが良いし。」

「その通り。まあ正論だ、血統には問題ない、孫可愛さも手伝ってね。それは実現しそうだったが、未だ成されていない。王子だって、バカなりに王族だ、何か察して妨害しているんじゃないかって話だ。それに、子供たちを暗殺しようとしているって話もある。ここまで来ると、完全に裏の話だ、私には判りかねるがね。噂は、流れてる」

「能力の無い自惚れで、しかも外道か、気持ち良い位のダメ人間だね」

聞くだけで、気分が落ち込むような、話だ。自分に、火の粉が掛からない限りは、どうでも良い話ではあるが。とりあえず、ため息を一つ、ついてみせる。

「そうさ、お先は真つ暗つて事だ。そろそろ人が多くなる、今日はこの辺りまでで良いかね？」

確かに、カウンターにも、客が何人か座り始めた。

「ああ、興味深い話、とても興味深い話だった。また聞きに来ても

良いかな？」

「頂いた御代にはまだ足りないからね。最近は、情緒ある冒険者が、減って久しい、歓迎するよ。酒はまだ飲んでいくんだろ」

カップに先ほどの酒が注がれる。

「ああ、美味しい酒を、上手に飲ませてくれる店は得難いね。滞在を延ばしたくなるよ」

「そりゃ歓迎だ、王様も、酒を飲んでいる間位は、生きていてくれるさ」

「それでは、王様の健康に乾杯」

カップを軽く掲げる。マスターは、新しく入ってきた客の対応に移った。暫くは、酒を楽しみつつ、客の話に耳を傾ける。

2時間ほど、酒を楽しんでいたが、興味を引く話は聞こえない。荒くれ物が多い、女性も多く居るが、下品な話でゲラゲラと笑っている。仲間で、乳繰り合っている奴らまで居る。公共の場所では、遠慮願いたいものだ。あまりお堅いのは、性に合わないことも確かだが、せめてもの慎ましさは、持ち合わせていただきたい。今日は、娼館にも行くこうかと思っていたのに、やる気がそがれる。

別に、破廉恥なことがしたいわけじゃない。情報収集の一環だ。怪しまれてはいけないので、致す事は致すが、それはあくまでも危機回避的な行動であり、本来の目的ではない事を明言しておく。

とりあえず、今日のところは宿に帰ろう。

「勘定してくれないか」

マスターが、酒瓶をもってやって来る。

「これが、さっき言った酒だ。勘定は、20ガランだな。チヨツト負けておくよ」

「そりゃ悪いですね」

「なに、たった一日でD級に昇格した新鋭にご祝儀だよ」

やはり話が回ったか、しかし、早耳と言うことは分かった。遅かれ早かれ噂にはなるだろうし、仕方がないだろう。

「2日ですよ、昨日登録したんですから。あんまり目立ちたくはないんですがね」

マスターは、少し苦笑している。

「今日くらいの時間なら、相手が出来ると思うよ。もっと話すならチヨツト早めに来るといい」

「分かりました。ありがとう」

手を振って、店を出る。何処まで正確な話なのかは、検証しなくてはならないだろう。それでも、糸口が出来たことには変わりない。今日の所はこれで満足すべきだろう。

宿に帰り、買って来た酒を飲む。

仮に、今日聞いた話が、すべて真実だとした場合。国内にとどまり続けるのは危険だろう。他国の情報も、獲得しつつ国内の情報も得なければ。傭兵としての仕事は出来るかもしれないが、冒険者として生活できるなら、無理に手は出したくない。

自分に対する噂は気になるが、どうしようもない事だと諦めて寝る。

今日の、情緒不安定だった自分を殴り飛ばしたい。もう一度反省してから眠りに付く。

高脅威目標を補足

翌日、トレーニングを済ませ朝一番にギルドに向かう。

人が増える前に依頼を始めて、なるべく噂になるのを避けるためだ。しかし、俺の意に反して、開いた直後にも拘らず、ギルドのスタッフは、やたらと騒がしくしている。

「どうかしたのか？何か焦っているようだが」

初日に会った受付嬢が、比較的冷静に話してくれる。やはり中々肝が据わった人物のようだ、子供のような見た目だが、人は見かけによらない。昨日の受付嬢などは、おろおろしながら、何かを探すような動作を繰り返している、パニック中のようだ。

「パルプが現われました。それも2体も」

「パルプとは？」

紙の材料でもあるまいが。

「パルプをご存じないんですか！比較的よく現われる、B級の穢れ物です。強さは、C級の上と言った所ですが、非常に厄介な特性を持っています。そのため、B級の中でも、被害者の数はトップクラス。村などが全滅する場合も多々あります」

やはり、穢れ物か。しかも、人に対して高脅威と来ている。

「厄介な特性とは？」

「傷を、付けられないんです。少しでも血が出ると、その血から毒気を出します。比較的早く、分解はされるのですが、広がる速度は圧倒的で、決して逃げられません。武器での攻撃や、呪式での攻撃が、一切出来ません。B級以上のものが素手で倒すか、死を覚悟して倒すしか方法がありません。移動速度が遅いのは唯一の救いですが、フランに近づいてこられたら成す術がありません」

やれやれ、いきなり面倒な話が持ち上がっている。危険を放置するのは愚の骨頂だ、逃げる手もあるが、まだまだ情報も集めたいし、見捨てるのも心苦しい。

「誰か対処できそうな奴は居ないのか？」

受付嬢は、首を横に振る。

「いつもでしたら、対処してくださる方が居るのです。先ほど、その方に連絡を取りに行ったのですが」

「居ない、もしくは理由があって対処できないと」

やれやれだね。展望は暗いねえ。

「はい。先日、遺跡調査中に、洞窟の崩落に巻き込まれ、一命は取り留めましたが、全治4ヶ月。とても今戦える状態ではありません。超長距離攻撃が出来る方でしたので、以前もパルプを倒していたのですが、今回は」

「どのくらい離れば、安全なんだ？」

「最低でも500フィール。出来れば、700フィールは距離を稼ぎたい所です。それ以下では、風向きによっては危険だと言う話です。もつとも、出血量や、個体差もあるようですから断言は出来ませんが」

「そうか、一応聞くが、これはB級の依頼になるのか？2体と言うことは、依頼二回分ということかな？」

「はい、そうなります。報酬は、一体につき銀貨60枚、6000ガランとなります」

2体で、銀貨が120枚、所持金を合計すると130枚程、十分なたくわえと言えるだろう。問題は、倒せるかだが。こればかりは試してみるしかないな。それと、幾つか条件をつけるべきだろう。

「俺は、D級だから、その依頼を受けることは出来るな」

さすがにこの発言には、この娘も驚いたらしい。目を見開くと、より幼い印象を受ける。もしかしたら、本当に幼いのかも知れない。

「はい。可能です。ですが、危険です」

「危険は承知している。それに、駄目もとでやって見るのも良いだろう。だが、幾つか条件がある。俺が成功した場合、その情報を一切他人に漏らさないこと、出来ればパルプが現われたと言う情報も流さないでほしい。これが条件だ、のめるか？」

出来るのなら、ではあるが。

「それはかまいません。本来、メンバーの情報は、他言無用ですし、

パルプに関しても、一般に広まれば恐慌が起きます。D級以上で、能力が高い人間には、依頼の話もしますが、他のメンバーにも秘密になっていきます」

まあ、その辺りには、色々と問題もありそうだが。今はおいておこう。

「それでは、この依頼を受けよう。仮に倒した場合、その屍骸はどうすれば良い？」

「私が一緒に参ります。戦闘には参加しませんが、確認しなくてはなりません。パルプを倒された場合、私が呪式で凝固膜を作って固定します。あなたが倒された場合は、報告に戻って対策を考えなければなりません」

「そうか、良い対応だな。それで安心した。一時とはいえチームを組むんだ、名前を覚えてくれないか？」

「アリシアと申します。アルトさん、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく頼む、アリシアさん」

パルプが現われたという場所には、馬を使っても2時間ほど掛かる。馬に乗るのは久しぶりだったので、少し心配だったが、アリシアの乗る馬が、安定した走りで先導してくれたので、俺の馬も、安心して走ってくれた。アリシアが、目的地が近いというので、もう少し細かくパルプについて尋ねる。

「パルプに付いて、もう少し詳しく教えてくれ。特に、内臓の位置などが知りたい。心臓の位置が分かれば助かる」

「パルプは、大型の熊の様な穢れ物です。大きさは立った状態で4フィール。内臓はよく分かりませんが、心臓の位置は普通の熊と変わりません。左前足の付け根、やや中央よりです。長く鋭い爪と、圧倒的な力を持っています。スピードは速くありませんが、頑丈さも一級品です。生半可な打撃では、身じろぎもしませんよ」

「心臓の位置が分かれば問題ない。目や口からは毒気は出ないのか？」

「それは、問題ありません。血にのみ、毒はあります」

それならば、勁が徹れば勝機はある。少なくとも、一時的に無力化することは出来るだろう。そのまま、のどに何かを詰めてしまっても良いし、やり方はある。

「まっすぐ走って後5分ほどで見えてくると思っています。私は少し後ろから追います。御武運を」

「わかった。ありがとう。声をかけるからそしたら来てくれ。少し時間が掛かると思う」

アリシアは、馬の走りを緩める。徐々に離れながらついてくる。

視界に黒い影が映る。まだ遠く輪郭しか見えないが、横の木と比べてもかなり大きいとわかる。スコープでも確認したが、2体居る、一体はおよそ4メートル、それよりも一回り小さい固体と共に歩いている。熊の形をした生き物が、二足歩行で歩いている光景は、どこかコミカルですらある。

馬から下りて、ゆっくりと近づくと、一度に相手をするのは、危険が大きい。感覚を信じるならば、負けることはないと思う。しかし、無用の危険は、冒すものでもない。本来ならばこうして、戦っているのすら、出すぎた行動なのだ。

風下から匍匐前進で、50mの距離まで近づくと、2体の距離が近づき始める。一か八か、小石を4つ拾い、放物線軌道でパルプの背後の木に投げる。石が木に当たると同時に姿を現す。望んだとおり、パルプが2手に分かれる。ある程度の知能があると、こういった小手段の先に手に掛かってくれる。

こちらに向かってくる、パルプの背後に回りこむ。スピードが遅いのは、ありがたい、ゆつたりとパルプに勁を徹す。全身の血液を震わせた後、心臓に直接力を徹す。まだ死んではいないが、意識を刈り取ることに成功した。止めを刺すのは後に回し、もう一体の対処に向かう。

同じ手順で、心臓に勁を徹す。倒れたパルプの首に馬乗りになる。首を絞めることも考えたが、気付いて暴れ、血を流されてはかなわない。脳に波状的に勁を送り込む事にする。

頭部を、何度も何度も、一定のペースで、叩き続ける拷問、いや、尋問法がある。脳は、何度も頭蓋骨に叩きつけられ、段々と壊れていく、徐々にパンチドラムカー症状が出て、加速度的に死へ向かう。拷問中に、幻覚を見ることがも有るといふ。意識の壁を壊された者は、自分の知っていることを、話してしまう。尋問、むしろ処刑を兼ねている、と言って良いやり方だ。

俺の場合は、勁の力を加えてさらに効果的にしてある。意識は既に無いから、眠るように死んでいくことが出来る。3分ほどかけて、

確実に脳を破壊する。もう一体も同様に、脳を破壊する。15分ほど待って、もう一度脈を確認し、アリシアを呼ぶ。

「終わったぞ、呪式を掛けるのなら頼む。凝固膜で包むんだろ」

アリシアは、俺が待っている間に近くまで来ていた。呼ぶから待っているといったのに。しかし、もう確実にとどめは挿した。危険は無い。

「ありがとうございます。これで町に危険が及ぶこともありません。町民に成り代わり礼を言います」

「役に立てたのなら幸運だね。それよりも、何かするなら速いほうがいい。問題ないとは思うが、頭蓋骨の内部では内出血を起こしている可能性がある。何か悪影響が有ってはいけない」

アリシアはうなずくと、手をかざし、小声で何かを呟きだす。恐らくこれが呪式なのだろうが。声も小さく何をしているのかはよくわからない。パルプは、みるみる青いゲルで固められていく。

「さすがに、これを運ぶことは出来ないぞ。どうするんだ」

作業が終わったらしく、アリシアが振り向く。

「もう大丈夫ですので、後で人を寄越します。パルプの処理には、時間も掛かりますから、後はこちらで」

「そうか、ではこれで依頼終了だな。2件B級を完遂したから、俺はC級に上がるんだよな」

「いえ、貴方がなるのは、C級ではありません」

「おや、何か問題でもあったか？」

「違います。貴方がなるのはB級です。当フラン冒険者ギルド支部長アリシア・ミューゼルの名において認めます」

うれしい誤算だが、まさか支部長だったとは、肝も据わっている訳だ。

「支部長だったのか、その年で、支部長と言うのは。やはり、相当優秀なんだろうな」

「年ですか、私はもう43ですが」

え？

「43！どう見ても、10代後半、いや前半と言っても変じゃないのに。43！見た目の差が大きすぎだろ。世界中の女性が泣いて羨むわ」

支部長と言うことより、年齢のほうに驚いた。俺は人からは童顔などと呼ばれて、強そうとは思われないし、体もやせて見える。26になっても、私服を着ていると学生と間違われたり、20くらいと言われるが、桁が違う。

「ありがとございます。私の祖母はエルフでして、私は成長が遅いようなのです。先祖がえりみたいな物ですね。ですが、もう結婚して子供も居ますよ」

昨日の受付嬢に続いて、今度は俺が呆けた顔になる番だった。かわいらしい娘だと思っていたのに、まさか年上の子持ちとは、異世界は、難しい。俺は、町に帰る馬の背中で、呆けた顔で空を見上げるしかなかった。

矜持と敵、誰かにとっての。

酒場の扉を開けて中に入る。

「もう飲めるかな？チヨット、早かったか」

まだ、空に日は高い、普通に働いている人間は、こんな時間からのみには来ないだろう。だが、何と無く、開いているんじゃないかと思っただのだ。

「英雄の来訪を断る店があるかね？B級到達の、最速記録に祝杯かね？」

話が広がらないように、口止めを頼んでいたのに、1時間も経たない内に、あっさり知られている。

ギルド職員の口が軽いのか、マスターの耳がすごいのか。少なくとも、マスターは複数のコネを持ち、それらを、管理していると言うことが、推測できる。

「口止めたのに、耳が早いね」

マスターは、にやりと笑うと、酒をカップについて出してくる。

「私の情報精度の確認だろう。朝の段階で、情報が入ってないなら二流だし、今の段階で把握していないなら、それはもう情報に関わる者ではない。私は及第点が頂けたかね？口止めなどもしていたよ。うだが、あれではあまり効果がない。ただでさえ君は、話題になりかけているのだから。この、なりかけと言うのが、一番美味しい情報なのさ。皆知りたがり、先に情報を仕入れ優越感に浸りたがる」

ご教授感謝、とでも言う所ですかね。

「いえいえ、昨日の話の続きをしに来ただけですよ。懐もあつたかくなりましたしね」

「あの報酬ではちと安いがな。まあアリシアお嬢さんにしても、あれ以上は出しようがなかったのだらう。」

不思議なことを、言い出す。別に、アリシアさんが、個人で支払うわけでもあるまいに。

「どういうことですか？ギルドが、そんなに困窮しているようには、見えませんでしたか」

「そうだな、どう説明したものか」

自分にも、酒を注ぎながらマスターは考えるそぶりを見せる。

「ギルドの報酬費用は、ギルドが直接払っているわけではない。ギルドに依頼に来た人間が、払っているわけだ。これは、大きく分けると2つに分かれる。国と一般の二つだ。雑務や採取、護衛などは、一般人が依頼するのが殆どだ。ところが、駆除や討伐は、国が費用を払っていることも多い。そのために、その費用を出す国は、一定の審査をする必要がある」

「ようは、治安維持費用ということですよ。まあ、国家の資産ですから、それを管理する機関があるのは、当たり前でしょう」

逆に、無い方がおかしいと言える。

「そうだ。そのための組織、名前は国庫管理局なんだが、そのトップに居るのは、国務尚書という役職だ。この、尚書が問題でな。昨日の話に出てきた王子、これがその国務尚書なんだ。どのくらいの金額が動いているのかは、定かではないが、相当の金額が横領されている。一部のギルドの支部長と結託してやっている様なんだが」

しかし、それは考えて見れば、そう言ったシステムを構築できる、と言う事でもある。もしくは、やってもせいぜい横領、と見るべきなのか。しかし、なんにせよ。

「アリシアさんは、そういうの、嫌いそうですからね。反目していると言う所ですか」

あの人は、仕事に矜持と美学を持つ人だろう。そのくらいの事は、見れば感じる。

「反目も出来ていないのが現状だな。あちらは全て無視しているし、訴状も全て握り潰されている状態だ。そういった理由があつて、このフランのギルド支部予備費は、ほぼ無いのさ。こういった緊急の際には、予備費から報酬を出すんだ、一々承認を待つてはいられないからな。お嬢さんも頑張つて、いろいろな所から、捻出していたようだ。どう考えても、B級の依頼2件分の費用を丸々は出せなかつたんだろう。Bランクの平均報酬は金貨一枚。パルプは比較的安い、それでも銀貨80枚つてとこだらうな」

「咄嗟の事ですしね。何ならもう少し安い値段でもかまわなかつたんですが。そういうこともあつて、B級に上がったんですかね。ねえ、アリシアさん」

扉を開けて、アリシアが入ってきた。報酬が、すぐには用意でき無
いと言う事なので、こちらで待たせてもらっていたのだ。扉の所ま
できていたのは、気配で判っていた。

「申し訳ございません。騙す様な心算は無かったです。結果的
にはそうなります。ですが、これ以上の額は、今はどうしても」

深々と頭を下げる。年齢を知っていても、何だか少女に頭を下げさ
せているようで、胸が痛む。

「気にしないでください。ランクもおまけして貰いましたし、十分
な金額です。なんでしたら、分割払いでもかまいませんよ。焦りは
しません」

そもそも、仕事と言うものを、誇りに思っている人間だ。今回のよ
うに、結果的ではあれ、値切って仕事をさせる。そんなことになっ
て、一番歯がゆい思い、辛い思いをしているのは、アリシアさんだ
ろう。

彼女は、プロフェッショナルだ。今回は、状況がそれを、仕事を完
全にはしなかったが。俺は気にしていない、あるものの中で、精一
杯の努力をするというのも、プロの行動の一つだ。

「いえ、そう言う訳にはいきません。金額を増やすことは難しいで
すが、何か私どもで便宜を図れることがありましたら、何でも仰っ
てください」

マスターの顔を見て話しかける。

「そういえば、お名前を聞いていませんでした。私も自己紹介はし

「はい。失礼ですがお教え願えますか。私は、アルト・柊・バウマンと言います」

マスターは、少し笑って、頭を下げながら答えた。

「これは失礼を致しました。しがない酒場を営んでおります。ウィルキンズと申します。今後も良しなに」

「こちらこそ良しなに。所でウィルキンズさん、この国では、呪式は一般的には広まっていない。これは、指導者がいないことに問題があると思うのですが、違いますか？」

「そうですね。呪式は学問です、それなりの教育を受けていないと習得は大変難しい。そういったことも含めて、指導者不足だと思います」

ウィルキンズさんも、意を汲んでくれたらしい。ツーカーで、話が通じる人間は心地良い。アリシアさんの方を向いて言葉を続ける。

「それではアリシアさん。今日、パルプに対して呪式を使っていたね。ああいった場に、赴くことができると言うことは、ある程度の戦闘力があるからでしょう。そして、恐らくそれは呪式、違いますか」

「はい。私も昔は冒険者でしたから、ランクはC級どまりでしたが、ウィルキンズさんが、言葉を続ける。

「いやいや、先代の支部長に、見込まれてあとを継いだから、途中で引退してしまっただけで。総合的に、各種の呪式を使いこなす有

力な呪式師だった。あのままなら、B級に上がるのも近かっただろうに。それ以上に、冒険者のマスコットのようない扱いも受けていたが

「いやですよ。昔のことなんですから、もう年ですよ」

赤くなつて怒る様は、どう見ても女学生だ。これはマスコットと言うのもわかる。

「まあ、貴方がかわいらしいのは事実だしな。年上に言う事ではないかも知れないが、俺も、見た目では年下によく見られるし、貴方ほどではないが」

「そういえば、26でしたね。体も細いですし、どうやってあんな力を出しているんですか？呪式も使っていないようすし、何か強化武器でもお持ちなんですか？」

勁の概念なんて、説明がつきにくい。それに、自分の力を、必要以上にはさらすことも無いだろう。

「着やせしてるだけです。特別な武装もありませんし、呪式も知りません。それが本題なのですが、呪式を教えてくださいませんか？もちろん御礼もします。さわりだけでも教えていただければ、嬉しいのですが」

アリシアさんは、暫く考えた後、ウィルキンズさんに話しかけていた。ここは、聞かないのが礼儀だろう。5分ほど話していたが、話は付いたようで、こちらに振り向いて言った。

「わかりました、明日からお教えする事にします。お礼などは要り

ませんよ。今日は、明日からの調整や、パルプの管理などもありますので、失礼させていただきます」

「ありがとうございます。明日どうしたらいいですか？」

「明日、ギルドまでお越しください。始まる前、7時ごろにギルドのドアを叩いてください。中で、お教えする事にしましょう。それでは失礼いたしますね」

アリシアさんが、店を出て行った。酒場にはあまり似つかわしくない人だ。

「マスコットですか、理解は出来ませんが。あれで43は詐欺に近いですね」

「私の知り合いには、他にもエルフがいるが、あんな事は無いからね。あれは、彼女だけの特性だと思うよ。本人は、エルフの血による影響と言っているが」

まあ、何処にコンプレックスが有るかは、人それぞれだ。

「私もそう説明されましたね。まあ、何を言っても始まりませんが。それでは、今日は何を聞きましょうか」

何を、教えて下さいますか？

「そうだね、昨日とは違う、お勧めの酒があるんだが、試すかね？」

「ぜひお願いします。美味しい酒と楽しい話、いつもこうなら泣けてくるんですがね」

「人生を嘆くよりは、楽しむべき、そう言う事だね。まずは、乾杯を」

「乾杯」

杯を二人で軽く掲げる。今日も話を暫く楽しむとしよう。ウィルキンスさんとアリシアさん、二人のプロフェッショナルと、繋がりが持てたのだ。少しぐらい報酬が増えるより、よほど良いと言える。

「ところで、ウィルキンスさんは御幾つですか？」

「秘密、でございます」

丁寧な、頭を下げられた。

幕間劇 ガタ漫 二人のショートショート1（前書き）

改訂版ですが、変えようが無いので、このまま掲載。

一寸考えたのですが、他の所で改訂版についてこの二人に語っていただくかと思いません。

幕間劇 ガタ漫 二人のショートショート1

作品中では、出番の出しようのない二人の会話・・・

ラ「ラッセルです」

バ「バウマンです」

ラ「作者は、早速話に詰まったみたいだね。虎の子に取っておいた設定小話を、早々に出してきたよ。ストック切れが、早い早い。昔のバルサー並み」

バ「まあ、上でも言ってるように、劇中では、もう台詞も有りそうに無いしな。俺もお前も死んでいるし。回想で出られれば御の字って所だろ」

と言うわけで、早々に退場した師匠コンビに語って頂きます。

バ「そもそも当初は、俺たちが主役だったんだよな。原案では、アルトはチヨイ役で、漢臭い話を想定してたんだよな」

ラ「ああ、許可とってないから、名前は出さないが、コンビの傭兵の話に触発されて書き始めたからな。もっと黒い陰謀劇に、異世界で巻き込まれる中年コンビって話だった」

バ「誰が読むんだそんな話」

ラ「だろう、だから作者も早々に話を変えたんだよ。あるとは初期設定だと、元々異世界に住んでる住人で、俺たちから技能を叩き込

まれた結果、王になるって話だった。王子って設定だったし、ただし、裏で操ってるのは俺たちって言う話だった。俺たちは、混乱に絶望して壊れた中年二人って設定だしな」

バ「なおさら誰が読むんだ？初っ端から設定が破綻しとる」

ラ「だから、それは廃棄されたんだよ。1晩でプロット立てて、愕然としたらしいぞ、作者が」

バ「俺たちの、キャラクター自体、他からの転用だしな。新鮮味も少なかったんだろ。元々は、作者が、友達とやってたTRPGのプレイキャラだったし」

ラ「お前は、名前もキャラも原型が丸分かりだしな。」

バ「作者が、ハジーザス・JESSUSとかハ拳児」大好きでな。外見も殆どそのまんまだな。傭兵・師匠・父親代わり・引退を望むってところが共通点だな。CVは、秋元羊介だそうだ。こっちは師匠つながりだな」

ラ「まあ、趣味の塊だからな、キャラ成立までの道のりが。俺の場合、変な戦艦を作ることに定評があるイギリス海軍の艦船名からだ。アドミラル型・ラッセル。元々提督の名前なんだから、提督の名前が原案で良いと思うんだがな」

バ「お前の死に方は、その戦艦の沈み方から引っ張ったらしいぞ。機雷で沈んだらしいから、別名が小型特殊核地雷のSADMで吹っ飛んだらしい」

ラ「雷しかあってねえよ。しかも本名称じゃねえし」

バ「本当にどうでも良い設定だが、俺とお前は、元は同じ傭兵団所
属で、団名は「デザートラビッツ」だったそうだ。これもジーザス
のネタだな」

ラ「俺が作ったチームの「マーチング・コックテイル」は、北欧
神話の行進の酒からそのままだな。ちなみに、俺のファミリーネー
ムは、中々決まらなくてこのマーチングから、マーチ・ジャスパ
ーで取っただけらしい」

バ「銀河英雄伝説か、しかも外伝。どうでもいい所のネタで悩み
すぎだな。おかげで、スタートダッシュで息切れてる」

ラ「だな、今からもう一度プロット立て直しだそうだ」

バ「大体しゃべったかな。細かいネタは、ほかにも山のようにある
が。もしかしたら、他の所で使うかも知れんからな」

ラ「ああ、Mkのメンバーの話とか、お前の家族話とかな。どつち
に転んでも鬱展開だし。なんせ、俺たちメインのほうで、時間賭け
て作ってて、プロットも、設定資料も、本文も、書き溜めてたしな
いつか手直しして公開する予定らしいぞ。出来ればだが」

バ「今の投稿も、満足に出来てないのか？取らぬ狸の皮算用が、
暴走中だな。そもそも、どう転んでもハッピーエンドにならないか
ら投げたのに、まとめることなんか出来るのか」

ラ「暗い設定がすきなのに、ハッピーエンド重視だからな。今回の
投稿にも、タグにハッピーエンドって入れたかったけど、怖いから
まだ入れてないって言った」

バ「入れられる日が来ると良いがな。それでは、この辺りでお別れだ」

ラ「また出るよー」

どやかましい……でも、また出したいとは思っています。思い入れは有るけど、なんかこの2人に関しては、ハッピーエンドの概念を、勘違いしてた。おっかしいナー。

ラ「おかしいのはお前の脳内じゃ」

改めて、どやかましい……

幕間劇 ガタ漫 二人のショートショート1 (後書き)

ご意見、御感想お待ちしております。

教育。アリシア先生の個人レッスン

「おはようございます」

朝早くに、ギルドの門を叩く。まだ、職員も来ていないようだ。建物内には、1人しか気配を感じない。

「おはようございます、よく御越し下さいました」

アリシアさんが迎えてくれる。決して自分は、少女趣味でもなければ熟女趣味ではない、しかし、この人はカテゴライズが難しい。しかし、やはり年上なりの包容力でもあるのか、女性が苦手な俺でもあまり堅くならず接することが出来る。会議室と書かれた場所に通され、お茶を出される。

「それでは、はじめます。まずお尋ねしますが、呪式に対して何か知っていますか？」

「いえ、何も知りませんね。名前だけです」

現実問題何も知らない。町で聞いたりもしたが、明確な答えは何も出てこなかった。何かに使われていると言つような情報は有ったが、使用法や実体についてはさっぱりだ。

「そうですね、それでは呪式の成立からお話します。まずは、魔法と言つ物があつたのです。魔法は、A級や一部のB級の穢れ物、もしくはS級のような、高位の存在が使う技能です。これは、意志の力で、事象を無理やり捻じ曲げる力として、非常に大きな力が要ります。しかも適性による差が大きく、エルフ等の意思が強い種族で

も、使えるのは1000人に一人、人間では、万人に一人と言う具合でした。しかも、大きな力は使い難い、と言う難しい技能でした。そこで、誰もが使えるように魔法を模したものを、それが呪式です。この開発により、多少の適性差はあるものの誰にでも扱える技術になりました」

穢れ物の中にも、不思議な力を使うものもいるということか。気をつけていかないと、困るかもしれない。

「その割には、一般的に呪式を扱っている様子は、ありませんよね。今まで見たのは、依頼の板と、アリシアさんの物だけです。生活などに対しての使用は、行われないのでですか？」

アリシアさんは、俺の質問に、答えを返すことなく。話を続ける。

アリシアさんは、手のひらを上に向け、顔の前に置くと、手に光を集め始めた。真っ白は光で熱などは感じない。何も言葉を発したりはせず、特別な行動も無かった。

「これは、蛍光といいます。創造系の呪式の中で、最も簡単な呪式です。空気中に、蛍の発光物質と同じ性質のものを、作り出します。創造系は、名前の通り何かを作り出す系統です。発動手順としては、発動する位置を設定、呪式を展開、そして発動となります。最初に覚えるべきは、この創造系の呪式でしょう」

アリシアさんが、手のひらに浮かんでいた光球を消す。

「それは、つまり蛍の発光成分、その解析と理解が行われている、と言つことですか？」

「少し、違います。物質の名前は定められていますし、発光すると
言う特徴も分かっています。ですが、言ってしまうえば、それだけで
す。なぜ光るのか、そして、蛍光で使われている物質が、本当に同
じものなのかは、分かっています」

「つまり、何と無くでしか出来ていない。同時に、何と無くでも出
来てしまう。そう言う事ですか？」

コクリと頷く。

それは、便利でもあるし、同時に問題にもなるな。しかし、いまは、
何らかの対抗手段が必要だ。話を続けるように、目線で促してみる。

アリシアさんは、続いて、手のひらにカップを置き、ふわふわと浮
かせて見せる。

「今度は、操作系です。こちらには、個別の名称はありません。例
外的に、ドワーフの鍛冶師などが使う錬金がありますが、今はおぼ
えておく必要は無いでしょう。基本的には物を動かします。発動す
る手順は、対象物の性質を認識、操作の動き、または変化を想定、
操作呪式を展開、そして発動と言う手順になります。呪式自体は簡
単なのですが、性質の認識や、動きの想定が、難かしいです。その
代わり、汎用性は高く、知識さえあれば、治療などに応用すること
も出来ますし、体の動きの、補助も出来ます」

カップの動きが変わり、俺の目の前を通り過ぎてソーサーの上に戻
る。アリシアさんは、カップを手で取ると一口飲んで言葉を続ける。

「この、創造と操作が呪式の基本となります。今のように、無詠唱
でも使えますが、確実を期すならば、そして威力の向上を望むなら

ば、詠唱をした方がよろしいですね。ここまでは理解いただけましたか？」

「はい、ここまでではわかりました。しかし、ギルドの依頼用の板、あれは、そのどちらにも属していないように思うのですが、応用と云うことですか？」

「そうですね、これは、私たち人間ではめったに出来るものがありますが、付加と言う独立した系統の呪式と、通信の呪式の複合です。先ほども申しましたが、創造と操作は基本です。最も重要では有りますが、実際の使用では、殆どが何かとの複合呪式となります。貴方は、戦士ですから、判りやすく言うと、火の玉を創造し、相手にぶつける様に、操作すると言った具合です。創造であれ、操作であれ、発動地点を自分から離れた距離に設定するのは、非常に難しいですし、無駄も多くなります。もちろん、努力と才能によっては可能では有りますが」

たしかに、火の玉を生み出しても、相手が自分から向ってくるような場合で無いと意味が無い。自分から火の玉に当る奴は、めったにいないだろう。

「その、人間には出来ない者が多いと言うのが、適性と言う事でしょうか？」

「そうですね。適性は、単純に何かに向いているとかではなく、使える呪式の限界や、意識展開の容量、使いやすい系統、また意識展開の速度などがあります。種族や性別などによっても、それらは変化します。先ほど言った付加については、ほぼドワーフの専売特許のような系統ですね。人間では、無駄とは言いませんが、見込みは薄いです」

「何に適性が向いているか、それは判別できるんですか？」

「出来ません。こればかりは、やって見るしか有りませんね。意識展開の容量だけは、量ることが出来ます。ですが、あまりお勧めはしませんね。あまり意味も有りませんし。実際にやってみれば、おのずと結果に現われますので」

「話だけを聞くと、そんなに難しいようには感じられませんが、なぜ一般に広まっていないのでしょうか？先ほども聞きましたが、生活などには便利でしょう。指導者不足などの問題も、必要があれば、それなりに解消されて行くものでしょう。基本の創造だけでも、有ると無いとでは、かなり変ると思いますが」

アリシアさんは、ため息を一つつく。

「確かに便利にはなるでしょう。しかし、今の話を聞いて、すぐに理解できるような人は少ないのですよ。そして、国は呪式を一般人が持つのを恐れています。実は、個人的に呪式を人に教えると言うのは、法に背いています」

「それでは、アリシアさんには迷惑を掛けていますね。まことに申し訳ない。しかし、その一方で冒険者の中には、呪式を活用しているものも、多くはありませんが存在します。それは、仲間内で教えあっているか。もしくは、裏側で広がっている。そういうことですよね」

「その通りです、中途半端に規制を掛けた所為で、本当に必要なところには回らず、かえって悪いことに、暴力に使われているのが現状です。もちろん、冒険者の中にも元騎士や、国立学院に行ってい

た人もいますが、多くが裏に経路を持っているのも事実です」

俺の謝罪に対して触れなかったのは、気にしていないという意思表示と、他言しない様との意思表示だろう。しかし、国の発展よりも安全性を取ってはいるが、それが徹底していないため、逆効果とは国としての力はやはり低いんだろう。神が実存する以上、王権神授もいよいよ改変は出来ないだろうし、国として、王家としての背景がやはり弱いようだ。

「まあ、国家論議はこの位にして、実際には、どうすれば発動するんですか？」

「そうですね、失礼しました。それではこちらをご覧ください」

アリシアさんが、文箱から数枚の紙を取り出す。

「これらが基本の呪式です。この紙に書いてある模様は、正確には呪式発動式・基天円環図といます。簡単に、呪式陣や呪式図、と普通は言いますが。現在、公式に認められている分で142種類あります。この紙に書いてあるのがそうですが、これを、寸分の狂い無く覚えて下さい。まずはそこからです」

「覚えると言うのは、自分でも描けるようになればいいんでしょうか？」

「紙に描けるかどうかは、重要ではありません。ですがもしも描ける様であれば、付加が出来るかもしれません。しかしながら、普通の呪式は、頭の中で思い描くだけなので、頭の中で再現できれば結構です。これは宿題ですね。出来るだけ、早く覚えてきて下さると助かります」

「分かりました。先生」

「ハイ、それでは、今日の授業はここまでです。予習復習を忘れなように」

少し、茶化してみたが、しっかりと乗ってきてくれた。これでアリシアさんが、学校などで、高等な教育を受けた経験があることが分かる。お嬢さんとも呼ばれていたし、貴族や何かの特権階級の出自なのだろうか。

「最後に先生、公式にはと言うことでしたが、非公式も存在すると言う事ですよ？そして、先生もそれをお持ちではありませんか？」

アリシアさんは、見た目にふさわしくなく、ニヤリと笑う。少女のような見た目に反して、寒気すら誘うような、凄みのある笑みだ。

「それは、秘密です」

この日は、それで別れ、ひたすら新たに取った宿の中で、呪式図の模写を繰り返していた。

教育。アリシア先生の個人レッスン（後書き）

御意見御感想、お待ちしております。

そのほか誤字脱字等も、お待ちしております。

よろしく。

身だしなみと教師

模写と、催眠暗示をフルに活用して、全体の8割は一晩で覚えることが出来た。全て覚えたら続きを教える、と言われたが、まだ覚え切れていない。しかし、小細工を施しても、人間の精神力、集中力には限界がある。まだまだ続けることは出来るが、効率を考えて息抜きをすることにしよう。少し聞きたいこともあるし、ウィルキンズさんの所に行く事にする。

「おや、勉強中じゃないのかな。怖い女先生に言いつけてしまうよ」扉を開けると、いきなりこんなことを言われた。冗談なのは分かるが、アリシアさんは、女先生という感じではない。

「私が習っているのは、怖い女先生というよりも、可愛い少女先生ですがね。まあ息抜きぐらいは許して下さい。聞きたいこともありましたしね」

「本人には、とても言えんがな。で、聞きたい事とは？祝式は、先生に教わっているんだらう」

「ええ、聞きたいのは別の事ですよ。私は、噂になっっていますか？」聞きたいのはこの事だ、予定外に短期間で動きすぎた。出来る限り情報は制限しているが、あまり意味が無いのは判っている。パルプの件はともかく、その前の一気に昇格したのは、噂になっいても仕方が無い。

そろそろ、一般にも噂が回っていてもおかしくない。この社会形態での噂は、ロコミが主流なので、他の町などには伝わりにくい。その代わり、同じ町では、恐ろしく早く広がる。

「そうだな、後3日と言った所かな。噂の内容は、変な服を着て、変な武器を持った優男が、異様に大きな背囊をしょって現われた。優男の癖にえらく強いらしい。と言った所だな。気にするなら、武器はともかく、服は替えた方がいいな」

服か、とつさのときの動きやすさを、第一にしてきたが。考えなくてはならぬ時期だな。

「やはりそうでしたか。それでは、腕がよくて、口の堅い仕立て屋をご存知ですか？貴方が、着ておられる服を作った人が、理想ですが」

ウィルキンズさんの服は、ぱつと見分かりにくいのが、裾や袖口に細工がしてある。勿論仕立て自体も一級だ。

「そんな事なら構わないよ。紹介状を書いてあげよう。いや、必要ないかな。もう少し待っているといいよ。どうせ飲みに来るから」

「それでは、私もお酒を楽しみながら待つとしましょう。お勧めの品を楽しみにしていますよ」

にこやかに話を聞きながら、1時間程酒を楽しんでいると、ウィルキンズさんが、入ってきた客に声をかけた。

「ライオネル、彼が今噂の男だ。君に服を仕立ててほしいそうだよ」

60代後半、と言った所だろうか。きつちりと、後ろに流した白髪、鋭い目つき、と堅そうな印象があるが、彼の着ている服は柔らかな印象を与えている。すらっとしたジャケットは、体にフィットしているが、雨降り袖が遊びを与えている。高級ではないが、一流といった物を、嫌味無く着こなしている。

「はじめまして、アルト・柊・バウマンと申します」

席を立ち、軽く礼をしながら言う。

「こちらこそはじめまして。ライオネルと申します。フランを救って下さった英雄に合えるとは、光栄ですな。ですが、なぜ私のようなものに、仕立てを頼むのですかな？私はもう半隠居している身ですよ」

丁寧に断る形で来たか、きついな。基本的に、目上の人間には、あまり強く出れないのが自分の弱みだ。しかし、完全に断っているわけでもない、何とかできるか？

「ウィルキンスさんの服を見ましたので。ただ丁寧な仕事と言う訳でなく、存在感は有りますが、威圧感はない、いい服ですよ。本来私のような若輩には似つかわしくないのですが。この服の袖口を見まして、ぜひともほしくなったのですよ」

「お褒め頂き光栄です。ですが、それはウィルキンスさんの人徳と
言うものです。私の服の所為では有りませんよ」

なにやら、頑なだな。

「いえいえ、今貴方が着ておられる服を見まして、ますます貴方に

作って頂きたくまりました」

ウィルキンズさんが、何だか楽しそうな顔をしている。明らかに二人には何かの理解があるようだ。視線をウィルキンズさん向けると、何とか答えてくれた。

「ライオネル。もう許してやってくれ、お前も私も助けられただろう。若い者をからかうのは、あまりいい趣味ではないよ。お前も、興味を持っていてはないかね」

やはり、か。

「分かった、分かった。この年になると楽しみも少なくてな、元から断る気はなかったんだが、ウィルが態々勧めてくるものだからな」
一転、にこやかに笑いながら、酒を注いだカップを掲げてくる。俺もカップを掲げ、礼を返す。

「まったく持って、私の周りの人たちは、私を鍛える事を余生の楽しみにしてください。せめて、その意思の10分の1でも、汲んで精進したいものです」

全ての先達は、教育者と言う側面を持っているのかもしれない。だが、私の周りの人間は、やはり皆、少しずつ捻くれている。

「まあそう怒るな。どうせ慣れてるんだろう。緊急時にも対処できる普段着を、2着ほどで良いか。細工は何をする」

「ありがとうございます、それと近々旅に出ると思いますので、マントと帽子もお願いできますか？細工は、今来ている服と同じよう

なものに」

「分かった、すぐ欲しいんだろ。今から工房に行こう。そうだな、あり物を加工するから、2日だ。ウィルの紹介だし恩も有る、特急でやってやるよ」

ウィルキンスさんのほうに向いて頭を下げる。彼も、にこやかに返礼を返してくれる。

「ウィル、今日のところは失礼するよ」

「それでは、また今度来ます」

カウンターに、銀貨を一枚置いて店を出る。

「またの御越しを」

呪式と母 嘘と呪式

服などの各種装備、資金など、準備は着実に整い始めている。移動するための準備だが、本来であれば早々に町を移り、静かに情報を集め今後の予定を立てたいものだ。だが、それはもう少し先になりそうだ。

元の世界に、返りたいとは思わない。あの世界は、須らく、くそつたれていた。あの世界は、まるで俺を敵視していたようだったし、その中の数少ない希望は、すでに吹き飛んでいる。

そう考えれば、今の方が遥かにましだ。以前いた世界での仲間には比べられないが、此方で出会った人たちも、十分に大事な存在になっている。

3日間かけて、142の呪式図を完全に覚えた。頭の中で何度も確認し、紙の図とも刷り合わせ、紙にも描いて確かめた。昨日の段階でも覚えてはいたが、1日置いて確かめた。これで確実なはずだ。

ライオネルさんの工房に服を取りに行き、宿で着替えてからギルドに向かう。黒を基調としたジャケットと、デニム地のようなパンツを合わせ、シャツもややくすんだ様な赤茶色だ。個人的には好きな色の配色だが、淡い色を好んで着ているこの町の人間の中では浮いている。目立たない方がいいのだが、それでも迷彩の野戦服よりはましだろう。

ギルドに入ると、相変わらず総合受付のところにアリシアさんがいる。

「どうも、三日ぶりですね。お時間は有りますか、アリシアさん」

「もう覚えてきたんですか？それではお昼の時間ですし、外で何か買ってきましようか。お昼はもう済ましてしまいました？」

「いえ、まだですよ。それならば、私が何か買ってきましようか？何かご希望はありますか？」

「そうですね。それでしたら、角の店のランチボックスがお勧めです。量もありますので、男の方にも人気ですよ」

「では、それを2つ買ってきます。前回の会議室でよかったですか？」

「いえ、私も一緒に行きますよ。たまには若い男性とも歩かないと、老けてしまいますから。少々お待ちになって下さい」

老けたアリシアさんって想像ができない。無理にイメージしていると、他の職員に一声かけて、アリシアさんが出てきた。

「お待たせしました。その服も、よくお似合いですね。ライオネルさんの服は、本当に服が似合う人にしか、作ってもらえませんか。よくお似合いですよ」

「前の服は、単なる戦闘服ですよ。ですが、この服は私も気に入っています。目立たない方が、良かったのかも知れませんが。それでも良い服は身に馴染みますね」

件の店で飯を買い、ギルドに戻ろうとすると、アリシアさんに止められた。

「ギルドは、もう半休を取りましたので、私の家で練習しましょう。誰もいませんから、遠慮なくどうぞ」

「そうですね、それではお邪魔します」

外見は、冷静を装うが、大きな衝撃を受ける。これはどういうことだろう。女性の部屋に誘われるなんて、26年の人生で一度も無かったぞ。女性の部屋に、ダイナミックエントリーをした事はあるが、いや、違うそういう事ではない。かわいらしい女性に部屋に誘われる。どういうことだ。アリシアさんは、かわいらしいと言う年ではないのかも知れないが、少なくとも見た目は、かわいらしい。

とっさのことに、異様に頭が混乱している。せつかく覚えたものも吹っ飛んでいきそうだ。こんなに混乱したことは無い。いきなり効力射撃的になっても、もう少しは冷静でいられる。どうしたら良い、どうしたら。

どうしたら良いーーー。

よくよく考えたら、先生の家にお邪魔するだけの話だ。見た目に惑わされた。しかし、今回はアリシアさんだからいいが、もう少し女性に対して免疫付けないと、いつか大きなミスをしてしまいそうだ。

「ここが家です。気になさらず入って下さい」

やはりさっきの葛藤も見抜かれている。非常に情けない。

「それではお邪魔します」

二人で食事を済ませ、呪式の話に入る。

「それでは、呪式についての続きです。呪式図をいったん覚えてしまえますと、後は、偏に想像力です。いかに正確に、そして多くのイメージを、短時間で構築するか。それだけの問題になります」

彼女は、数枚の平皿を持ってくる。

「この皿が、呪式図だとしましょう。頭の中で想像する時のイメージは、しっかりとした呪式図を重ねていくところから始めます。一番下に、根源の呪式図、続いて創造、そして光。この順番で、イメージを構築して下さい」

重ねられた皿を元に、イメージを構築する。軽く頷くと、彼女は話を続ける。

「さらに、貴方が持つ光のイメージを、出来るだけ多く与えて下さい、こういった原理で、こういった過程で、何から、何に対して、何時、何処で、そういったことを思いつき限り。呪式図を重ねていって下さい。整然と、順序良く、近いイメージは近くに、そうでないものは遠くに、一定の法則を持ってイメージを構築して下さい」

光、熱、電光、雷光、朝日、太陽、稲妻、閃光弾、サーチライト・・・

数々のイメージを自分なりに並べていく。

「光を発生させる場所を指定し、発動の呪式図を重ねて下さい。そして、発動させるイメージと共に唱えて下さい。 - 光 - と」

自分の頭上、天井近くで発動するイメージと共に唱える。

光

途端、閃光弾が破裂したかのような爆光が辺りを包む。一瞬で消えたが、熱も何も感じない。ただ光だけが顕現したようだ。

「驚きました、初めてでいきなり発動したのもそうですが、よほど多くのイメージを構築したのでしょうか。貴方の意識展開容量は非常に大きいと言えるでしょう。こういった単純な呪式の場合、いかに多くのイメージを積み重ねられるかによって、効果が変わります」

何だか、大きな疲れを感じる。肉体的な疲れではなく、脳が直接疲労を感じているようだ。

「なれないうちは、意識構築には疲労が伴います。こればかりは慣れるしかありません。慣れてくれば、少ない疲労でできるようになります。後は、イメージの並べ方などで、強弱の調整ができます。それでも出来ない様な調整ですと、疲労は大きくなりますし、発動確率は下がりますが、まったく逆のイメージを加えることによって、弱めることが出来ます。光に対して闇のイメージや、火に対して水のイメージですね」

椅子に座って、息をついている俺の前に、アリシアさんが本を出してくる。

「これは、主だった呪式の構成を書いてある本です。発動が出来る

ところまで行ってしまえば、後は他のものが何かを言うことは、かえって悪い結果を招くことになりかねません。後は、自分なりの構成を見つけ出すしかないんです」

本を受け取る。めくってみると明らかに手書きのものだった。しかも、インクの跡は、青々として新しい。

「拙い物ではありますが、私が知る限りの構成を書いてあります。後は貴方が、それを自分用に構築し直して行って下さい。自分にあつた祝式は自分でしか作れません。情けない話ですが、これ以上の指導は、私には出来ません」

頭を下げるアリシアさん。この人は、俺に合つてからというものの、何度も頭を下けている。俺は、立ち上がり居住まいを正すと、アリシアさんに向かって、頭を下げた。

「ご指導ありがとうございました。ご教授に報えるように精進いたします。ですが、また聞きたい事が出来た時は、よろしく願います」

アリシアさんが笑って言う。

「不肖の師ではありませんが、私に答えられることでしたら、いつでもどうぞ。貴方の、ますますの成長を祈ります」

「それと」と、アリシアさんは顔つきを鋭くして言った。

「祝式は、良くも悪くも騙す技術です。誤魔化す、と言つても良いでしょう。自分の意識を、こんなことも出来ると騙し、他人を騙し、世界すら相手に騙します。嫌な言い方ですが、右手で握手をしながら

ら、左手には毒と短刀、それが本質です。祝式に長く関わるほどに、その不自然さが理解できるでしょう。それを、あらかじめ理解しておいてください。それは、貴方本来の性質とは、反するものかも知れませんか。」

思わぬ言葉に、無意識に表情が作られる。大丈夫だ、顔に笑みを浮かべながら舌を出す。そんなことは常にやっている。そうしなければ生きてこられなかった。そんな純真等、とうに捨てなければ生きてはいない。

「ありがとうございます」

顔は笑みを浮かべていたが、それでも、アリシアさんにはそんな嘘はつきたくない。それでも、俺の顔は勝手に形を作る。それを分かっているのだろう。アリシアさんの目は、悲しそうな、同時に優しげな目になっていた。

その後は、夕飯まで、アリシアさんにいろいろな祝式の発動を見せてもらい。夕飯をご馳走になって宿に戻る。

母の食事などは食べた記憶が無い。でも、こういった食事だったのなら、それはなんてすばらしいのだろう。

もう、記憶もおぼろげな、母の顔。泣いている姿しか、思い出せない。

それでも、俺を産んで、守ってくれた母の事を、いつか笑顔を思い出せればいいと思う。

若くして死んだ母の印象が、アリシアさんと重なる。

母も、優しかったのだろう。

母も、強かったのだろう。

厳しかったのだろうか。まじめだったのか。どじな所はあったのか。

何も分からない。今更、知ることも出来ない。

それでも、そうであったなら、そうだったなら。

俺は、とても嬉しい。

俺は、とても穏やかな気持ちで、眠りに付くことができた。

修行の本質 根源の思考

薄く琥珀色付いた、酒の入った杯を傾ける。酒が、のどを通り抜ける感触を味わいながら、俺はこう言った。

「この辺りで、修行しても周囲に影響が無く、人が近づかない様なところ無いですかね？」

アリシアさんの御宅に赴いてから、早5日。宿の中で、ひたすら意識内で呪式を、構築し発動、構築し発動を繰り返していた。原子構造や、科学的物質特性を知っている俺は、創造や構築するのは得意なようだ。

しかし、操作に関しては、あまり訓練できていないのが現状だ。一般の人の前で、呪式の訓練をする訳にもいかないのも、室内で、それも隠れて出来る範囲での訓練しか出来ていない。本当なら屋外でするのが好ましいのだが、何度か試してみたものの、人がかなり出歩いているのだ。

穢れ物にあっても倒せばいいのだが、人はそうは行かない。150m以内に入ってくれば感知できるが、大掛かりな呪式の訓練は出来ない。そこで、ウィルキンズさんに修行場所を尋ねてみたのだ。

ウィルキンズさんは、少し考えて答えた。

「フランから南に伸びる街道は知っているか？王都に伸びている街道なんだが、そのまま行くと山にぶつかる。山のふもとで、街道は右に折れているんだが、そこを左に向かって森を抜けると、7里ほ

ど歩いたところで、大きく開けた場所がある。洞窟があつて、その中には水も沸いているし、人はまず来ない。そこが良いんじゃないかな。馬を使つても丸1日は掛かるが。どうかね？」

思つたとおり、希望通りという奴だ。

「いいですね。そこにしましょう。早速明日にでも用意をして行つて見るとします」

「それでは、修行の成功を祈つてこれを送ろう」

2本の酒瓶が、目の前に置かれる。元々酒も頼むつもりだったので、ありがたく頂くことにする。

「ありがとうございます。それでは明日から暫く留守にします」

「ああ、気をつけて行ってきなさい」

翌日、アリシアさんにも挨拶をして、ライオネルさんの工房に向かう。邪魔になる服を預かってもらうのと、この前頼んでいたマントと帽子を、受け取りに来たのだ。

「おお、よく来たな。言われていた物は出来ているぞ。それと服を預かるんだつたな」

「はい。よろしくお願いします」

「で、何日ぐらい掛かるんだ？」

「そうですね、行き返りだけでも2日は掛かりますので、10日ほ

「どうですかね」

「そうか、気を付けて行つて来い。お前さんが帰ってくるまでに、今着ている、野戦服だったか？それと同じ仕立てのものを、色を変えて作つておいてやるよ。珍しい仕立てだから腕がなるよ」

「何かから何までお世話になります」

そう言つて、頭を下げると、これも趣味だと豪快に笑われた。ライオネルさんの工房を後にし、市場で頼んでおいた、保存食を受け取り、馬を借りる。教会に、背囊を受け取りに行き、町を出る。

実にいい天気だ。空は蒼く、澄んでいて、雲が疎らに流れてくる。日差しは、やや熱く感じるが、風は心地よい温度を保っている。こんなに良い天気だ、馬を無理に駆り立てても意味は無い。今日中に到着できればいいので、ゆつたりと進む。

だが、穀倉地帯を抜けて、人影が疎らになると、馬を下りる。背囊を背負い馬の口を取る。さすがに食料品が大量にあつたので、自分1人では運びきれない。しかし、せっかくの修行なので、持久走もしたい。馬を引きながら、走り始める。

走りながらも、意識下では呪式を展開する。目立たぬように、目の前に風を起こす呪式を展開する。

頭は痛みを覚え、呼吸は急速に乱れる。今、人が俺を見れば、酷い形相をしているだろう。あぶら汗を流し、神経がチリチリとこげるような感覚を、全身で味わう。

曲がり角を逆に行き、道とも言えない獣道を進む。その獣道すらも

外れ、山の稜線の外周を駆け抜ける。獣道に入ってから3時間、およそ27kmの距離を踏破した。いきなり視界が開け円く開けた場所に出る。

中心の石柱から、半径500mほどが中心に向かい傾斜している。草は生えているが、木は小さいものしか生えていない、クレーターではないかと思う。中心の石柱も、衝突の反発で出来たものだろう。山から、水が湧き出ているのを確認し、その近くに馬をつなぐ。紐を長くして多少は動けるようにしておき、シートを敷いてターフを張る、その中に荷物を入れて、ピンを抜いた閃光弾を挟んでおく。こうしておけば、何者かが動かしたとしても反応する。風如きでは動かないし、何かの時の警報代わりだ。

荷物などをまとめ、修行を始める。すでに、日は落ちかけ暗くなっている。しかも、ここまでの訓練で、すでに疲労は蓄積し、意識の方も悲鳴を上げている。しかし、そこを乗り越えてこそその訓練だ、限界を見極めてこそその修行だ、そして、限界を壊してこその特訓と言える。

走れ。

走れ。

痛みが襲おうと、肉体が悲鳴を上げようと。

構築しろ。

発動させろ。

限界まで構築、すばやく発動。

展開し、構築し、発動する。

脳が泣き叫ぶ、意識が咆哮する。

血を流せ、涙を搾り出せ。

肉体の吐く泣き言を聞くな。

神経が作る痛みを感じるな。

最大を、最小を。

遠くを、近くを。

感じて尚も走り、呪式を放て、腕を振れ、刀を抜き放て。

脳が意識を放り出しても、気力でそれを取り戻せ。

俺は、天才ではない。決して多くの才を与えられたわけではない。肉体に力は付きにくく、とっさの閃きも無い。武器を扱う才能も、体力も、知力も、生まれ持って人に勝る物など持つてはいない。そんな俺が、一級線の人材と張り合ってきたのは、張り合えて来たのは、偏に訓練によるものだ。

常軌を逸した訓練、常に肉体の損壊と、精神の崩壊の間に立ち、それでも訓練を繰り返す。気絶するまで体を鍛え、時間を忘れて訓練をする。気を失うまで苛め抜き、気を取り戻せばまた続ける。そんな、一種マゾヒスティックな行動を取れるからこそ、俺は地獄を生き抜けた。

今度の世界でも俺は変わらない、俺を構築する根源は変わらない。俺は、自分と自分の仲間しか信じない。自分たちが得た技能しか信じない。金も、他人も、権力も、神も仏も、ありとあらゆるものを信じない。俺の根源は、不信と世界に対する反逆で出来上がっている。

今日も俺は鍛え上げる、磨き上げる、限界まで自分を構築する。

俺は、僅かな塩水だけを摂取しながら、26時間訓練を続け、ついに意識を手放した。3時間後、目を覚まし、起きた瞬間から訓練を再開する。今度は9時間ほどで、気絶した。4時間ほど気絶して、また訓練を再開する。今度は、僅か3時間で限界が来た。ここを、基点と認め食事と休憩を取る。

食事と睡眠を取ってから、座禅に入る、先ほどの訓練をシミュレートし直し、呪式の構成を練り上げていく。反省を終わり、再び肉体と精神を苛め抜く。

訓練・休憩・反省を、都合三回繰り返し12日間の訓練を終えた。

少女と追手 母と娘

12日間の修行を終えた、予定よりも長く掛かったが、最後のセツトでは、最長59時間動き続けていた。呪式の負担もかなり軽減できたので、それが大きかったようだ。それでも、かなりの疲労が蓄積している、帰ってから暫くは、療養に努めなくてはならない。ゆつくりと歩いて帰るとしよう。

馬を引きながら、街道までもう少しのところまで歩く。今回の修行で身に着けた技を使い、より広範囲の気配を感じる。元々持っていた気配を読む能力を、通信の呪式で拡散させたものだ。情報精度は、やや落ちるものの、半径500mをカバーできる。これが今回の修行での、一番の成果かもしれない。

そのほかにも、様々な事が分かった。例えば、創造系の呪式、物質の想像には、かなりの制約が掛かることがわかった。俺だけなのか、他人もそうなのかは分からないが、物質の創造は液体と気体だけ。固体は、創造できない。ゲル状のものなどは出来たが、完全な固体化は無理だった。

同時に、密度や硬度、さらには比重など、重いほど長時間の存在は不可能。むしろ、光や炎の方が長く持つ。

さらに、出した水、自分の理解するH₂Oの液体は、冷気にも変化せず、熱にも変化しない。つまり、氷にも水蒸気にもならなかった。グラスにも入って形も変えるし、飲むことも出来る、しかし、形状以外の変化はしなかった。

反面、炎や音、光などは、むしろ物質の様な特徴を持つことが分か

った。炎同士をぶつけると、核になるものもないのに、弾け消えた。このあたりの、減少はわからないが、むしろ現象が物質へ、物質が概念へと近くなっていると言っことだろうか。更なる研究と確認が必要だ。

ともあれ、森から出てくるのを、人に見られなくなかったから、気配を読んでみた訳だが、反応があった。それも、殺気と、敵意を、撒き散らしている。しかも気配から見ると、誰かを追いかけている。

とつさに、馬を手近な木に繋ぎ、背囊を置いて走り出す。近づいていくと、言い争う声が聞こえる。その瞬間、追われていた人物の乗っていた馬は、横倒しに倒された。乗っていた人は、馬から落ちて気を失ったようだ。落ちた人物に、追っ手が迫っている。

先手必勝。まだ此方に気付いていない、馬に乗った二人組みに、指弾を撃つ。続いて、馬から落ちた二人の右肩と股関節を、棒手裏剣が貫く。

「仮に理由があつたとしても、女性相手に男二人で襲い掛かるのは感心しない。理由があるなら、後で聞いてやる。だから、今は眠っておけ」

聞く余裕は無いとは思うが、一応声をかけてから、二人を気絶させる。ロープで二人を縛ると、棒手裏剣を抜く。間接を貫かれても、痛みは大きいが、死ぬことは無い、もつとも、障害が残る可能性は高いが。続いて倒れている女性のほうに向かう。息を確かめ、瞳孔を確認していると、女性が目を覚ました。

「来るな、バカヤロー」

いきなり起き抜けに剣を振ってくる。

「さて、俺は助けてやったんだ。お前を追っていた相手は、あつちで伸びている」

「やられない。やられないわよー」

どうやら、シヨックで一時的に混乱しているらしい。背後に回りこみ、両手を押さえ密着して足の動きも封じる。

「落ち着け、君は今安全だ。落ち着け」

「うによー。うにいおー」

もはや、意味ある言葉すら出せていない、瞳孔に反応は無かったので、脳の問題は少ないと思うが。どうしようもないので、延髄に一撃叩き込んでもう一度気絶させた。

改めて、足裏を何度か押し込んで、バベンスキー反応を見る。異常なし。指の震えなし、瞳孔も異常なし。耳の横で、大きな音を立てると反応する。これも問題なし。

ただ、気絶しているだけだが、放って置くわけにもいかない。しかし、彼女の馬は死んでいるし、二人組みの馬は逃げてしまった。仕方が無いので3人を引きずって、自分の馬のところまで戻る。

二人の男は、縛ったまま馬にくくりつける。血を多少出しているのに、馬が嫌がっていたが仕方が無い。女性の方は、俺が抱いて歩いていく。休息を取る筈だったのになぜこんな事に。幸いにも女性小柄なので、あまり重くは無いが、また面倒ごとに巻き込まれそうで

困る。

誰かが目を覚ますだろうと思ったが、道中誰も目を覚まさなかった。おかげで、門兵に呼び止められ、事情を説明しなければいけなかった。今後の対処もあるので、門兵にアリシアさんを呼びに言ってもらおう。B級の冒険者と言うのが効いたのか、丁重にもてなされる。怪我した2人は、縛ったまま治療し、女性は別の部屋でまだ寝ている。こちらも医者が見た限りでは問題ないそうだ。

20分ほどしてアリシアさんが来た。

「申し訳ありません、お手数をかけまして」

「いえ、大丈夫ですよ。これも業務の一環ですから。それよりも修行の結果はどうでしたか？」

「おかげさまで、少しはマシになりました」

「それはおめでとございます。それで、その男たちと、女性と言うのは？」

「ああ、すいません。男達はそのこの医務室で、女性は仮眠室で寝ています。チョット強く当て過ぎまして。医者の言う事では、問題は無いそうなのですが」

まずは、男たちを見てもらう。

「少なくとも、近辺で手配されている盗賊や、犯罪者ではないようです。捜査は、騎士隊に任せるよりも、ギルドでした方がいいでしょう。幸いB級以上の人間には、捜査を取り仕切る権利がありま

す。目が覚めたら取調べを始めましょう。手伝って下さいね」

「自分の、まいた種ですからね」

続いて、女性の部屋に向かう。部屋のドアを開けて、顔を見た途端アリシアさんが叫んだ

「メイリン!!」

寝ている女性に駆け寄り、おたおたとしている。

「アリシアさん、お知り合いですか？一応私が調べた範囲でも、医者が調べた範囲でも、異常はありません。寝ているだけです。恐れした後、混乱して剣を振り回していましたので、私が気絶させました」いきなりアリシアさんが、胸倉をつかんでくる。

「気絶させたですって。メイに何をしているんですか。殴ったんですか、殴ったんですたら、許しませんよ」

「いえ、軽く当身を入れただけです。医者」

「当身、やっぱり殴ったんですか」

話を途中で遮られる。

「いえ、医者のお話でも今眠っているのは疲労からだそうです。実際に運んでいる際、1回覚醒しかけたのですが、そのまま眠ってしまいました」

「うー。でも殴ったんですね。殴ったんじゃないんですか。違うんですか」

こんなに混乱したアリシアさんは、始めてみた。パルプが出てきた時でも、冷静だったのに。

「すみません。確かに事実ですが、あの、その、どういったご関係で？」

「メイは、私の娘です」

目が点になる。助けておいて良かったと言う感情と、多少手間でも気絶させなければ良かったと言う感情が、ない交ぜになる。と言うか、見た目はまるで姉妹だ、アリシアさんが妹だが。

「申し訳ありません。あの混乱のまま剣を振れば、最悪この娘も怪我をし兼ねなかつたので」

「まあ、しょうがありません。それに助けていただいたのですし。取り乱して申し訳ありません。お見苦しいところを見せました」

「いえ、気絶させたのは事実ですから、それに関しては謝ります。しかし、娘さんを助けることが出来てよかつたです」

アリシアさんは、居住まいを正すと頭を深々と下げた。

「改めて御礼を言います。娘を助けて頂き真にありがとございました」

すると、母の声に気が付いたのか、メイリンさんが目を覚ました。

「あれー？何でママが？んー？ここはあ？」

「メイリン！大丈夫？何処か痛い所は無い？何か変なところは？」

メイリンさんは、状況把握がまだ出来ていないようで、ぼんやりしている。もしかしたら元々寝起きが悪いのかもしれないが。

「えーと。んー、なんか寝過ぎたみたい。んー、のどが渴いた」

近くにあった水差しから、コップについで水を渡す。

「あ、どうも。えーと、何だったっけ、追い駆けられてて、馬から落ちて、それで」

やっと意識が覚醒してきたらしい。

「そこにいるアルトさんが助けて下さったのよ。メイ、貴方一体何をしていたの？王都で、学院に行ってた筈でしょう」

ここで完全に目が覚めたらしい。目を見開くと、アリシアさんにし
がみついた。

「ママ、大変なの。フレデリック様とミリア様が。お二人が」

そのまま、しがみ付いて泣き出してしまった。

俺はアリシアさんと顔を見合わせた。

急転、国家問題

泣いているメイリンさんを、アリシアさんと、共に家へ連れ帰る。門兵の詰め所を出る前に、二人の男には、もう一度打撃を与えておく。これで、後半日は起きない筈だ。

家に帰ったメイリンさんは、ようやく落ち着いたのか、ぽつぽつと話し始めた。

「北西の国、ジギスムントの王はまだ独身です。その王とミリア様の婚姻が、王子の手によって進められています。それによって、フレデリック様とミリア様を引き離し、フレデリック様を害する計画があるようです」

アリシアさんが、話を聞いて、歯をギリギリと鳴らしている。すこく怖い。

「あの、ブワアカ王子が、何をトチ狂っているんじゃない。結果的に国をつぶすぞ。百歩譲って、フレデリック様を害すのは分かるが、国の後継をどうするつもりなんじゃあー」

人格が変わってる…おかしい、母の様だと思った、俺の感想は的外れ？

「ジギスムント王の妹を娶るようです。しかもこのフランシーネをジギスムントにわたす計画まであるようです。あの、脳タリンの考えることですから、ジギスムントと同盟を組んで、他国の侵略を始めかねません」

「そりゃ、絵に描いたような愚王だな」

国民は大変だ。封建社会においてトップが、行動力が有る馬鹿というのが一番たちが悪い。

はっきり言えば、平時において国王に、実務的な能力は必要ない。能力のある人間を登用し、彼らをまとめればいい。最悪でも、彼らに任せておけば国の運営自体は出来る。横領や搾取などが起こる場合は増えるが、そういった人間こそ国が無くてはどうにもならない。国家の寄生虫が、同時に最低限国を守ってくれる。宿主を倒す時は、他の寄生先が見つかった時だけだ。

有事の際は、また別も能力が王には必要だが。そのあたりは、一まとめに言えることではない。

「まだ王ではありません。単なるバカ王子です」

「あー、ごめん。絵に描いたようなダメ権力者だ。もしくは、傾国の阿呆だ」

地団太を踏んでいたアリシアさんが、こつちを向く。俺に向けた視線を、いったんそらすと、話を続けさせるように言った。

「それでメイちゃん。そんな大事な時にどうしてフランへ？ここはギルドは私が管理してるからまともだけど、騎士団は王子の腰巾着よ。実力行使をするにしても、戦力にはなれないわ」

なかなか、馬鹿は馬鹿なりに権力工作はしているようだ。極端な話、こついった国ならば、軍事力を握っておくのが手っ取り早い。後継

者の件でも何らかの工作をしているようだし、そこまでの馬鹿ではないと、評価を変えておこう。

「それなんだけど、単独で王宮に忍び込めるような凄腕が、知り合いにいない？王は、病気だって発表されてるけど、実は王子が王宮に拘禁してるの。証拠がつかめたのよ。救出できれば事態は変わるわ。今は、ミリア様とフレデリック様が、派手に動いて注意をそちらに向けてるの、でも、長くは持たないわ」

前言撤回、救いようの無い馬鹿だ。そんなアキレス腱を自分で作るとは、まだ、殺していたならば、そこまで評価を下げなかったが。どちらにしても性格的には外道だ。能力的にも、これで無いことが実証された。あれ？アリシアさんが俺を見て微笑んでる。可愛らしいのに、何だか怖い。

「メイちゃん。いい人が居るわ。」

とつさに目をそらす。大丈夫、視線はあつてない。大丈夫。

「そちらのアルトさんは、僅か3日でF級からB級に上がった人よ。今回も貴方を助けてもらったし。人格の方も私が保証するわ。剣も、無手組打も呪式も使えるわ、ご希望通りの超一級のお方よ。そういえば、メイちゃんまだ助けてもらったお礼をしていないわよ。ちゃんと、お礼をしなさい」

大丈夫じゃなかった。さらに、いやな予感的中した。しかし、アリシアさんに頼まれると、否とは言えない様に思う。何とか、違う方向に話を持っていかないと。

「いやいや、私はそんな、大した者でh」

「ありがとうございます」

大声で話を切られた。そんな御辞儀をされても、困るのですが。

「この度は危ないところを助けて頂き、真にありがとうございます。そして、お願いですので、どうか力を貸して下さい。私に出来る事でしたら何でも致します。ですから、どうか力を貸して下さい」

仕方が無い、どうせ傭兵が本職の俺だ。それならば、せめて知っている人間の役に立った方がいい。それに、話を知ってしまった以上無関係を貰くにも限界があるだろう。高目に売れるうちに、売って置いた方が良い。

「分かった。依頼を受けよう」

「本当ですか」

「ああ、貴方のお母様には、大変世話になったしな。アリシアさんからの推薦を貰ったんだ、そうそう楽には断れない」

断ったところで、何をか言われることも無いだろうが。それだけに断って関係を壊すのも嫌に思える。自分でも、不思議ではあるが。

「私からも礼を言います。どうもありがとうございました」

「まだ、依頼を受けると言っただけです。依頼を遂行できた訳ではありません。礼には早いですよ」

「それでは、メイリンさん。王都に向かえばいいのか？聞く所では

急ぎの様だ、なるべく早く出発しよう。明日の朝一番に出発する。いいか？」

「はい、お願いします。それと、私のことはメイと呼んで下さい」

「そうか、メイ・・・ちゃん。俺のことはアルトと呼んでくれ。アリシアさん、例の二人の事は任せます」

「はい、それに関してはお任せを。メイのことをよろしくお願いします」

「はい、それでは準備もありますので、今晩は失礼します。メイちゃん、明日の1番の鐘の時刻に、南の門で待ち合わせよう。馬の用意を頼んでおいてもいいか？」

「ハイ、分かりました。それと、メイで結構です。どうか呼び捨てして下さい」

「それでは、今日はこれで失礼する」

顔をやや赤くしながら、振り切るように外へ出た。あんな少女を呼び捨てにするというのは、どうも、難しい。女学生と言っつのは、どうも接点が無かっただけに難しい。姦しいのは、大いに苦手だと再認識した。

ライオネルさんのところに行き。服を受け取る。風呂に入りに行つて、身綺麗にしてから、ウィルキンズさんの店に向かう。

「ウィルキンズさん、あまり時間が無いんだが、幾つか聞きたい」

「何だね？」

「王が、王子に拘禁されているらしい。メイリンさんが、持ってきた情報だ。王が生きている可能性を、どの程度と読む。ジギスムントとの件を考慮して言ってくれ。それと、王都に関する情報が欲しい」

「ジギスムントの話は、うわさ程度しか聞いていなかった、王の拘禁も同様だ。それでもなお、言うならば、確率は低いな。王子は、大ばか者の外道だが、悪知恵だけは回る。弱みを、そのままにはしていないだろう。王都の部隊は殆ど動かないだろう、少なくとも一番大きな戦力である騎士は動かない。あそこの総大将は、王に、と言うよりは、国家に忠誠を誓っている。王子が何を言っても動きはしないはずだ。問題は、王子の私兵・王宮警備隊と王都の傭兵ギルドの連中だ。警備隊だけで500人、実働だけでも400は行くだろう。傭兵も足して、全体で600は動かしてくるだろうな」

「烏合の衆が、何人いても問題ではない。問題は、王子に従うB級以上のランクの奴がいるかどうかだ」

「はつきりと分かっている限りで3名、もう1人くらいなら、都合を付けるかも知れん。だが、A級は、付かないと断言できる。そんなところだな」

「そのあたりなら何とかなるか。問題は、王が死んでいた場合だな。まあ、雇われたからには、やり抜くのが傭兵の仕事、玄人の仕事ですよ」

ウィルキンスさんが、にこやかに笑う。

「ああ、仕事終わらせたら、また来なさい。歓迎するよ」
頭を下げて礼を言う。

「ありがとうございました」

翌朝、俺は、メイちゃんと、王都に向けて出発した。

急転、国家問題（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

改定してから、どうなんだろう…と思ひまして、日夜震えております。

ぜひぜひ、ご感想など、さらにはご指摘など、頂けます様。

よろしく願ひいたします。

王都での出会い、そして計画

「まずは、方針を決めなくてはならないな。メイちゃん、君が助けたいといっていた二人。彼らには会えるのか？」

そもそも、敵対勢力の規模を、軽く聞きかじりただけ、見方の戦力や、理念も探らないで依頼を受けるなんて、お話にもならない。そもそも報酬も決めてはいない。自分でも、御笑い種としか言えない様な事をしている。

「はい、連絡は取れるようにしています。と言うか派手に動いてるので、あちらの動きはいやでも知れるでしょう」

「そうか、それはそれで問題だが、今はどうしようもないな。それから君に聞いておきたいのだが。集められる情報から推測すると、王は3ヶ月前から公には出ていない。それは間違いないな？」

「はい、夏の建国際を境に、病状が悪化したと言う理由で。ですが、ミリア様は、2ヶ月ほど前にドア越しですがお話なされたようです。ですので、それが最後の確認ですね」

2ヶ月か、しかしドア越しとは、かえって怪しいな。脅して言わせたか、もしくは祝式で何か出来ないのだろうか。教わった物の中には、そういったものは無かったが、音を出す祝式はあった。応用で出来ないことも無いだろう。

「そうか、それでは君には言うておく。王はすでに殺されている可能性が高い。最悪このタイミングで情報が漏れているのは、畏の可能性も有る。王子は、他人の言葉は受け入れないそうだが、周囲の

人間が独自に動くことは否定できない。それは、分かっているか？」
思い至らなかつたわけでは無いのだろう。暗い顔はしているが、驚いてはいない。

「言うまでも無いが、王が生きていて、なおかつ王を奪還できてこそその起死回生だ。王が死んでいた場合、実力行使に踏み切るしかない。最悪の場合、王子が、王の死の原因をフレデリックとやらに押し付けることも考えられる。その辺りのことも含めて、フレデリックとミリアの二人には、会って話さなければならぬ」

そのほかの場合は、多くの地を見る可能性、最悪国が割れ、壊滅する。

「はい、わかっています」

気丈な娘だ、さすがはアリシアさんの娘。ならばこそ、全力で行動しよう。

「それでは、行こうか、休憩はここで終わりだ、残り23里、一気に駆けるぞ。夜にはつけるはずだ」

現在地は、フランから約140kmの村だ。宿場町としては中々の規模を誇る。ここまで来た馬は潰れてしまった。駆足ですつとは知らせていたためだ。これ以上酷使すると死んでしまう。中間種の馬は、サラブレッドなどの軽種に比べれば丈夫だが、それでも限界がある。ここで馬を替え、残りの道程も一気に走りぬく。現状、時間が何よりも欲しい。

朝の6時に出発して、夜の10時には着ける計算になる。こんな強

行軍は、女性にはきついだらうが、メイちゃんは、馬術は得意との事で、問題なく付いてくる。

予定より早く、九時過ぎには王都についた。替えた馬が予想よりもよく走ってくれたのだ。門はすでに閉まっていたが、フランのギルドより緊急の連絡と言うことで開けて貰った。朝、アリシアさんに文書を頼んでおいたのだ。これで問題なく都に入れる。

「さて、予定よりも早いですが、到着した。早速方針を決めよう。だが、その前に、すまないがメイちゃんあそこの店で、食事でもしていてくれ。俺は、情報をチョット集めてくる」

「分かりました。ですが急いで下さい」

「ああ、分かっている」

メイちゃんを店に送り、ウィルキンズさんが教えてくれた店に向かう。

そこは、酷く高級そうなバーで、裏の家業に通じているようには決して見えない。中に入り、一番の年配のバーテンダーに話しかける。

「フランの町から来たんだが、ウィルの所と同じ酒はあるか？」

「辛い方かい？それとも甘いの？」

「辛い方に決まっている。グラスではなく、錫のカップで頼む」

老バーテンダーが、酒を注いでくれる。注がれたカップを、右に半回転、続いて左に一回転、さらに左に一回転。ゆっくりと、右手で

酒を干す。美味しい、のどから、声が絞り出されそうになる。美味しい。

「ウィルの紹介は久しぶりだな。もう隠居したのかと思っていたよ」

「元気で、うまい酒を飲ませてくれますよ。勿論、面白い話も聞かせてくれます」

「そうかい。では、どんな話が面白いのかな」

「勿論、無駄に年を食った王子様の話さ」

老バーテンダーと、にやりと笑い合う。

「あのバカ王子も、落ちるところまで落ちたな、まさか国を売るとは」

「やっぱりその話は、確定なのか？」

話は広まり、さらには裏まで透けている。情報は流れた時点で広まることを防げない。時間が無い。

「ああ、もう調印もしちまったらしい。秘密裏にだがな。ジギスメントの王は、変態だが少なくとも、政治に関してはそこそこだ。うちの国のバカ王子とは比べ物にならん。ペろりと食われておしまいさ」

「ジギスメントは、この国を欲しがっている。だが、それはどの程度だ？全部か？国力差を考えれば、半分も取れば大成功だろう」

「だから、侵略が本来の目的ではないのさ。婚姻で王家をまとめて

しまっ腹だろうな。そのために、ミリア様が欲しいのさ」

「やはりそこか、誇大妄想癖のある人間はすごいね。どうやったらそんなに都合よく考えられるのか、教えてもらいたいよ」

「まっただね」

「それでは」

カウンターに、銀貨を2枚置き店を出る。

予想通りは予想通りでも、最低の方向だ。これで王が生きている可能性はまた減った。くだらないバックボーンを見つけてしまった様だ。強気にもなるだろう。

メイちゃんの待っている、店に戻る。食事を取りながら話をする。

「多少ながら、情報の裏づけが取れた、悪い方向でだが。で、何時ごろ2人には会えそうなんだ？」

「先ほど連絡を出しましたので、ここで待っていれば連絡が来ます」

「そうか」

食事を食べていると、突然メイちゃんがぶつぶつと呟き出した。通信の呪式を受けているんだろうが、傍から見れば危ない人だ。彼女は、呪式には慣れていないのだろうか？無意識に声が出ているようだが、こっも怪しいと問題だ。俺も気をつけよう。

「連絡が来ました。付いてきて下さい」

メイちゃんの後を付いて行く。暫く歩き、大通りの中心にある商業ギルドに入っていく。入る前に周囲を感知する、特別な気配は感じない、尾行も注意していたので問題は無い。

中に入ると、金髪碧眼の見目麗しい2人組みがいた。

「君が、アリシアの推薦を受けたものか。本当に使えるのか」

男のほうに声を掛けられた。なにやら敵意があるな。しかし、こちらとしても、年下の男になめられるのも面白くない。まずは、立場をはっきりしなければ、元々権力を持っている人間は、凶に乗ることが多い。

「そうだな、少なくとも恩の有るアリシアさんの期待は裏切らない。だから、メイリンには危害は加えさせない。メイリンに頼まれるなら、お前らにも力は貸してやる。だが、現状お前らに力を貸す者は少ないと言つことを忘れるな。隣の部屋に潜ませている奴や、天井にいる奴らが仮に5倍いても、俺には触れられもしいと言つことも覚えておけ。首魁を守るものが、たった5名とは。今の立場を、確認しておけ」

ため息を交えて、言い放つ。控えているものは、不意を撃てば何とかが戦えことも無いのだろう。実戦経験も無いわけではなさそうだが、一線級には程遠い。俺の相手など出来るはずも無い。

「申し訳ありません。兄に代わって謝罪します」

娘の方が、謝ってきた。こちらがミアという姫なんだろう。派手さが無いので、類まれなる美姫と言つほどではないが、十分に美し

く穏やかなやさしさを感じさせる女性だ。

「構わない。だが、開口一番に発するのは、俺に対する言葉ではない。命を懸けてフランにまで赴いたメイリンに対しての謝辞だ。俺に謝る前に、メイリンに感謝すべきだ。そこを履き違えるな。傭兵は使うものだ、だが友人には友誼をもって接しろ」

さすがに自分を恥じたのだろう。男の態度が極端に軟化した。

「メイリン。すまなかつた、そしてありがとう。アリシアを信じお前を信じている。今回は、危険な役目を押し付けてしまった」

「いえ、滅相ありません。アルトさんは、母が太鼓判を押ししてくれた方です。必ずや、フレデリック様のお力になると信じています」
すぐに反応する辺り、根から善人だろう。それに素直だ、俺には願うべくも無かつたことだ。命をかけてくれる友人がいるのは、素直に羨ましい。

「すまないな。俺も言葉が過ぎた。アルト・佟・バウマンと言う。今回は、君たちの依頼を受けよう。さつきも言ったが、アリシアさんには、世話になつている。彼女を悲しませる様な事はしない。そこについては信用して欲しい」

「こちらこそ失礼した。私は、フレデリック・ノル・アイゼナツハ。依頼を受けてくれて感謝します」

「私は、ミリアリア・エル・アイゼナツハです。アルトさん、お力を貸して下さつてありがとうございます。そしてメイ、ありがとう、何もかも貴方のおかげね。貴方と友人であることを、神に感謝しま

す

「いえ、ミリア様。貴方のお役に立てるのならば、これほど嬉しい事はありません」

「メイ、いつも言っているでしょう。様なんてつけないで欲しいの」

「いえ、そう言う訳にも」

なにやら姦しくなつて来た。話を戻そう。

「親友二人組みの話は、また後にしよう。取り合えず、方針を決めなくてはならないな。その前に、フレデリック殿、少人数で話したい、あまり多くに話すことではないのでな。可能か？」

「はい、と言いますが、他の者は独自に動いていますので。ここでは私とミリア、それにメイだけです。それとフレッドと呼んで下さい」

フレデリック・・・師匠と同じ名前か。

「フレッドか、いい名前だな。それでは、他の奴らは外して貰ってくれ。大丈夫だ、半径100フィールに敵意があるものはいない」

「分かるのですか」

笑って返す。

「アリシアさんのお墨付きをなめるなよ」

机の上に王城の見取り図を広げて話し合う。

「まず、あまりよくない話からだ。すでにジギスムントと、各条約を調印してしまっただけならいいと言うのは知っているな？」

皆が頷く。

「そこで、問題が二つ増える。一つは、王がすでに殺されている可能性が増える事。もう一つは、仮に王を奪い返してもジギスムントと険悪な関係になるということだ。最悪は、そのまま戦争だが、このままでも、戦争まで行く可能性が高い。条約の一方的な破棄という大義名分を与えるし、国内が混乱することは、アイゼナツハの国力低下、戦力低下に繋がる。ジギスムントでなくても、周辺国は落とし易いと取るだろう」

「王が、お爺様がすでに殺されていた場合、直接父を倒すしかありません。ジギスムントとの事は、その後のことですね。少なくとも、王位を取ってからでなくては、対処の仕方がありません」

確かにそのとおりだ。そもそも問題は、王が直接的に政を行えていないゆえに起きたことだ。強権を発動できる指導者がいる。それならば、むしろ。

「2つ選択肢がある。確率の少ない王を救出に行くか。もしくは、王子を倒すかだ。俺は、後者を押すね。まだ、王が存命ならば、それで助けることも出来る。どうする、自分の親を殺せるか？」

「あれを、親と見たことはありません。恥とすら思いますが、しかし、王宮の中でも最も警護が厚いところですよ。どうやって倒すのですか」

「俺ひとりで行くならば、何の問題も無いが、暗殺では意味が無い。フレッド、お前が直接行かなければ意味が無い。そこで、だ」

一堂をぐるりと見回し

「正面から行く」

「無茶です。現在の私たちには、80名ほどしか」

「誰が、正々堂々戦つと言った。お前たち二人が、会いに行けばいい。恥でも何でも、子供は子供だ。会いたいといえば無碍にも出らんだろう。俺は隠れて付いていつてやる。武器も俺が持つていく。奴と会つたところで俺も姿を現すから、宣言をかまして斬つて来ればいい」

「そんなことが出来るんですか」

3人とも、呆けた顔をしている。

「言つただろう。アリシアさんの太鼓判をなめるなつて。分かりやすく言えば、俺は3日でギルドのランクをFからBにした。そのくらいの力はあるのさ。今は呪式も使えるしな」

最悪でも、二人を抱えて逃げるくらいのことには造作も無い。化け物がいなければだが、そんなものがいれば、もっと早くに決着がついていただろう。

「分かりました。それで、決行は何時なんですか」

「出来れば明日の朝だが、他の賛同者たちに話はつけられるか？ 本
当に信用できる者だけだぞ」

「分かりました。今から他のものを集めます」

30分後、新たに3人の若者と1人の老人が現われた。説明はフレ
ッドに任せ、俺は城内の見取り図を暗記している。

「ふざけるな。お前だけにそんな危険なことをさせられるか。俺も
行く」

机を叩きつけて、赤毛の男が憤っている。中々気が強そうだ。

「大体、あんな奴が信用できるのか。ひよろひよろの優男じゃない
か」

「アリシアとメイリンの推薦だ。これ以上確かな者はないだろう」

「だが、それでも。実際に出来るのかそんなことが」

やれやれ、心配なのはわかるが。困ったものだ。しょうがないから
安心させてやるとしよう。

「その赤毛の君。名前はなんていうんだ？」

「お前なんか、なぜ言わねばならん」

フレッドが、見かねたように言ってくれた。

「彼は、バイエルラインだ。ずっと私の護衛をしてくれている。何

度も助けられているし、間違いなく歴戦の猛者だ」

「そうか、それではバイエルライン君。ちょっとしたゲームをしよう。俺がまけたら、俺を殺すなり煮るなり好きにきなさい」

「ゲームだと」

「そうだ。君は、俺を眼で追い続ける、3つ数えた時に、俺の居場所を指し示すことが出来たら君の勝ちだ。簡単だろう」

シンプルで、しかも決着が早い。

「面白い。やってやる、俺をなめるなよ」

「それでは始めよう。1」

歩法を使い、彼の足元に滑り込む。足に触れそうになった瞬間に、体を右に流す。

「2」

ジャンプして天井を使い、彼の首筋を触る。再び跳ぶが、今度は彼の左側に降り立つ。

「3」

こちらを振り向こうとする彼の、さらに背後を取る。首に、指を当てて言う。

「何処を向いているんだい。君の後ろだ」

あまりの驚愕からだろうが、その場にへたり込んだ。

「まだやるかい？何ならもう少し付き合おうよ」

バイエルラインは、静かに首を横に振る。

「まあ、反応も悪くはないし、こういった力も戦い方では無効にも出来る。そんなに気を落とすことも無いさ。俺の方が長く修行したと言っただけだ」

一同、啞然とする中で、ご老人だけが、にこやかに微笑んでいる。

「それでは、先ほどの案を採用と言うことで問題はありませんな。しかし、一人相手なら、速度で先ほどのようなことも出来るでしょう。ですが、多人数ならどうですか？」

なるほど、評価の厳しい爺さんだね。

「ならば、こんなのはどうかね」

腕が霞み、肩、胴体、足、そして顔と、全てが霞んでいく。

「如何かな、ご老人。速さで消えているわけではない。ご満足いただけたかな？なんなら、さらにここに速度も足そうか？」

「いやはや、冗談をまともに返されても困るのお。まあこれで心配は無いじゃろ。」

皆が一様に頷く。

「それでは、明朝、決行致します。各自それぞれの奮闘を期待します」

「「「「「「「「「「」

フレッドの声に皆が応えた。バイエルラインを除いて。

あいつは床でまだへたっていた。

王都での出会い、そして計画（後書き）

一寸長めでした。

読みやすい長さとかが微妙に分かりません。

そのあたりのこともご指摘いただけたら幸いです。

莫迦来襲(前書き)

おらつと読み流して下さい

莫迦来襲

翌朝。 と言つか深夜。

「師匠、俺を弟子にして下さい。師匠、お願いします」

明日に備えて眠っていた俺は、侵入者の気配で目が覚めた。バイエルラインだと言うのはわかっていて、昨日の恨みからの行動かと思っただが、敵意や害意が無いので、暫く待っている、先ほどのようなことを言いやがった。うわぁ、涙まで流してる。

「お前は、時間や機会というものを考えないのか。明日に備えて休んでるんだが。あと、師匠って呼ぶな」

「申し訳ありません。師匠。ですが、師匠が有名になったら他にも弟子入り志願が来ると思いました、急いできました」

予想に反してバカだ。頭を床にこすり付けている、土下座って世界が変わっても有効なんだな。

「とりあえず、誰が来ても断る。俺は誰かに教えるような器じゃない」

「そんなことは仰らずに、師匠」

「だから、師匠って呼ぶな」

フレッドやミリアも起きてきた様だ。扉の向こうから、フレッドと

ミリアとメイちゃんが覗いている。

「フレッド、お前からも言っちゃってくれないか」

「無理です」

即答された。

「いや、無理ですって。お前の配下なんだから。命令してくれよ、無理だって」

「ですが無理です。言うことを聞く人間ではありませんから。私の配下であっても、仮に私が王でも無理です。自分の決めたことは曲げませんから、バイエルラインは」

とことん面倒な奴だ。どうしたものかな。

「おい、バイエルライン」

顔を上げて嬉しそうにしている。犬みたいな特性なのか？でも自分勝手みたいだしな、よく分からん。

「はい、師匠」

「だから、師匠と呼ぶな。弟子の件だが、試験をして決める。合格できたら、弟子にしてやる。ダメなら諦める」

「ダメです。弟子にしてください」

人の議歩案がまったく分かってない。大丈夫なのかこいつ？なんか

不安になってきたな、ストーカー被害とかつてのは、こういう人間がするののか？

「認めない。試験を受けないのなら、単純に姿を消すぞ。機会を与えてやってるんだ、それで我慢しろ」

何で俺が説得をせねばならんだ。間違ってる。

「ええー」

「えー、じゃ無い。これ以上は認めん」

「では、今すぐ試験を」

「時間掛かるから、今度だ。まあ、こいつは置いておいて。フレッド、ミリア、お前たちも起きてしまったんだ。チョット付き合え」

背囊を持ち上げて、部屋を出る。二人を引き連れて、一番大きな倉庫へ行く。

「明日、と言うかもう今日だが。王宮に行くにあたって、武器は俺が預かっておくが丸腰では危険だ。そこで、一見武器ではない武器を貸してやる。チョット練習が必要なので、今から渡すぞ」

俺は、cz75をミリアに、vz85をフレッドに渡す。マガジンはまだ抜いてある。

「それは銃と言う武器だ、銃弾、つまりは小型の金属の塊を、高速で飛ばすことが出来る。人間に対しては、非常に殺傷能力の強い武器だ。注意するように、今はまだ銃弾を入れていないので、問題な

いが、銃弾を入れた後は、気をつけなければ自分で自分を傷付ける事になるぞ」

まずは、ミリアのcz75にマガジンをこめる。後ろから抱き込むようにして、銃を構える。なにやら赤くなっているが、今は気にしない。

「いま、銃弾を入れた、そうしたら安全装置がある。この安全装置を解除する。そして、銃の先端を相手に向けて、引き金を引く」

バスツ　二人とも、目を見張っている。だが、浮つく感じはない、とっさに、冷静に考えることが出来る人間は、強い。

「もう一度だ、銃の上の突起、その窪みと突起が重なるところを、撃ちたい所と重なるんだ。そして、引き金を引く」

バスツ　今度は、きちんと、把握して打っている、俺は手を添えているだけだ。

「どうだ分かったか。実際には、この消音装置、つまり音を小さくする装置ははずしていく。かなり大きな音がするから気をつける。これで相手を倒すのが目的では無い。知らない攻撃には相手も驚く、その隙を突くんのだ」

続いて、フレッドにも同じように教える。撃ち方は、単射だ。

「よし、二人だけで撃ってみる、あまり練習できるだけの銃弾は無い、丁寧に覚えていけ」

二人が、それぞれマガジンが空になるまで撃つ。

「よし、そこまでだ、フレッドの銃は30発、ミアの銃は15発撃てる。自分が撃った銃弾の数を覚えておけ、無くなったら、勿論弾は出ないぞ」

「アルトさん、貴方は何処でこのようなものを」

当然来ると思っていた質問だ。だが、それに答えるわけには行かない。

「秘密だ」

銃をいったん回収する、この後メンテナンスをして置く必要がある。

「まあ、俺の立場が悪くなりかねないものを貸してやってるんだ。感謝して使ってくれ。あと2時間は寝れる。寝ておいたほうがいいぞ」

二人が頭を下げているのは分かっているが、振り向かず部屋に戻る。

明日が、あいつらにとっての正念場だ。

部屋に帰ると、バイエルラインがいた。どうやら試験を待っているようだ。ケツを蹴り上げて、部屋から叩き出す。

バカが扉を叩いている。

煩いよ。

ミリアの視点(前書き)

姫様の目から見た一連のお話。

ミリアの視点

私は、ミリアリア・エル・アイゼナツハと申します。僭越ではあります、国家を治める王家の人間です。

ですが、あの男、恥ずかしい話ですが、私と兄の父に当たるあの男は、国で唯一の王子という立場でありながら、国のことを何も考えられません。

あるのは自分のためだけの欲です。国も、民も、そして私たち家族ですらも、なんとも思っていないかのような振る舞いをします。

ヴェスター宰相閣下は、早くからその危険性に気付いておられました。早くから、王位継承者から外し、兄を第一位王位継承者にするように、王であるお爺様に進言されていきました。

しかし、お爺様は、とても優しい人でしたし、自分の息子を信じたかったのでしよう。その決定を先延ばしにしてみました。

しかし、宰相閣下がお亡くなりになり、お爺様の体調も悪化して、国政への影響が少なくなっただけから、あの男は、我が物顔で好き勝手な行動をしました。

私たちも、何とかしようとしたのですが、非才の身では、たいしたことは出来ず、ついにあの男が、国家を売るような行為をすることを、止める事は出来ませんでした。

それでも、せめて囚われていると言うお爺様を、助け出すことが出

来れば、あの男を処断することも出来たでしょうに。

その計画を実行に移すことも出来ず、王都では、援助を得ることも難しく、日に日に集められてくる情報は、悲観的な報ばかりでした。

そんな中、私の親友であり、妹のようにも思っているメイリンが、フランの町のお母上に援助を頼むと言い出したのです。

フランの母であるアリシア様とは、私も何度も会ったことがありませんし、兄は、昔あこがれていた時期もあつたようです。独自のコネクションを持つ彼女なら、何か良い手建てがあるかも知れないと言う事でした。

私たちは動けませんので、メイリンがいくしかありませんでしたが、私たちは、見張られています。王都の中なら、まいて身を潜めることも出来ますが、都を出てしまえば、方法はありません。彼女を危険にさらせるわけも無く、私たちは反対しました。

しかし、彼女の意志は固く、また私たちも、計画がなんら進展しないことから、彼女の計画に乗ることにしたのです。私たちは、せめてもと、王都内で派手に動き注意をこちらに向けさせました。それでも、彼女は危険だったのです。

心配をしておりましたが、3日後彼女から、助っ人を連れて戻ってきたと連絡がありました。しかし、それはたった一人だということで、私と兄は落胆していました。

そんな兄と私の前に、メイリンと共に現われたのは、どこか穏やかそうな青年でした。珍しい黒い髪と黒い瞳、背もあまり高くない、体つきもあまり強そうには、見えませんでした。呪式が専門なのか

とも思いましたが、腰には変わった剣を挿しています。

弱そうな青年の姿に、兄は気分を落としたのでしょう。青年へ、愚弄するとも言える態度を取りました。すると青年は、見た目からは想像も出来ないほどの迫力で、兄を叱咤しました。

「そうだな、少なくとも恩の有るアリシアさんの期待は裏切らない。だから、メイリンには危害は加えさせない。メイリンに頼まれるなら、お前らにも力は貸してやる。だが、現状お前らに力を貸す者は少ないと言っことを忘れるな。隣の部屋に潜ませている奴や、天井にいる奴らが仮に5倍いても、俺には触れられもしないと言っことも覚えておけ。首魁を守るものが、たった5名とは。今の立場を、確認しておけ」

私の謝罪に対し、彼はさらに言葉を続けました。

「構わない。だが、開口一番に発するのは、俺に対する言葉ではない。命を懸けてフランにまで赴いたメイリンに対しての謝辞だ。俺に謝る前に、メイリンに感謝すべきだ。そこを履き違えるな。傭兵は使うものだ、だが友人には友誼をもって接しろ」

私達は、あれほど心配していたメイリンに、まだ謝辞も述べていなかったのです。これには、兄も私も深く反省しました。メイリンのことは、親友と置いていました。その彼女の善意に対して、私達は、まだ何も返していなかったのです。彼の言葉はその事を思い出させてくれました。

私と兄は、まずメイリンに謝り、感謝を伝えました。そして、その青年に対しても。

青年は、私たちの行動を許してくれました。アルト・ヒイラギ・バウマンと名乗る青年は、私たちに対して、大人として叱ってくれた、そして許してくれた、数少ない人間でした。

しかも、隠れていた人間を見抜き、さらにはその人数まで言い当てたのです。これだけでも彼が、並の人間ではないと分かります。その後で、100フィール以内には、敵対者がいないと断言までしました。武術の達者が、隣の部屋や天井裏の気配を察知したと言う話は聞きますが、100フィール以内のことが判るなんて聞いたことがありません。

アルトさんは、その後理路整然と問題を整理し、あの男を直接叩くと言う方針を出しました。私たちも、このまま進展しないよりはと考えその計画に乗ったのです。ところが、計画変更のために集まった仲間の中から、バイエルラインが反対を申し出ました。

話の流れで、バイエルラインと軽い勝負をすることになったのですが、そのルールは、圧倒的にアルトさんに不利でした。3数える間、アルトさんを見失わない、バイエルラインは、まさしく武術の達者です。私たちの仲間では、一番の腕利きと言えるでしょう。そのバイエルラインを相手に、そのルールは無理だと思いました。

ところが、バイエルラインは負けました。傍で見ている私にも、アルトさんがどう動いたのかは、一切判りませんでした。後で兄にも聞いたのですが、兄も見えなかったようです。負けたバイエルラインは呆然としていました。私や兄も啞然としていましたが、唯一、私たちの恩師でもある、リヒテンシュタイン翁が、声を掛けられました。

その後あったことは、今でも信じられません。アルトさんが、緩や

かに動き出したかと思うと、体が、どんどんと透けていったのです。呪式を使うことも無く、ただ身体の動きだけで姿を隠す。そんな事が本当に出来るとは、思ってもいませんでした。

跡で話を聞く機会があったのですが、アルトさんは、八工の動きの応用、と仰っていました。私には何のことが判りかねますが、すばらしい方が、来て下さったと、皆で大いに安心しました。

その後、反対者もいなくなり、明日決行となった作戦ですが、私は緊張して寝れませんでした。そうしていると、アルトさんの部屋の方から声が聞こえます。様子を、気になって見に行くと、兄とメイリンも来ていました。

部屋の中では、バイエルラインが、弟子にして欲しいと泣きついています。アルトさんは、嫌そうですが、バイエルラインは聞いていません。兄も私も、バイエルラインの性格は知っているので、困っているアルトさんに、助け舟を出すことも出来ませんでした。

何とか話が済んだようですが、アルトさんは、私と兄に付いて来る様に言いました。アルトさんの話では、明日のために、特別な武器を貸してくださるそうなので、その説明と練習をするようです。

黒い曲がった棒を渡されました。何なのか分からなかったのですが、銃というそうです。確かに、これなら持っただけでも見咎められはしないでしょう。

銃は撃つものらしいのですが、その説明を聞いていると、いきなり背後から抱きしめられました。男性に抱きしめられた事等無かったので、赤くなつてあわてていたのですが、あくまでも、説明の為の様でアルトさんは淡々と、説明してきます。

銃が発射された衝撃で、少し冷静になれました。同時に銃には驚きました。こんなに小型で、呪式も使わずこんな威力を出せる武器なんて知りません。こんなすごいものを持っているなんて、アルトさんは何者でしょうか。少し、考えていると、気が抜けているとでも思われたのか、喋るのが耳元に近くなりました。これは反則です。こんなの反則ですよ。

やっと、私への説明が終わりました。今度は兄が同じように説明を受けています。やはり、優しく後ろから抱きしめていて、さっきは私があるをされていたと思うと、顔が真っ赤になりました。

その後、13回銃を撃って、練習は終わりました。兄も不思議に思ったのでしよう。アルトさんに銃のことを聞いていました。ですが、アルトさんは、

「秘密だ」

と教えてくれませんでした。

眠れと言われましたが、先ほどのことを考えると眠れそうにありません。せめて横にはなろうと、ベッドに潜り込んだ所、服にしみこんだ、アルトさんの匂いが感じられるようで、余計寝られませんでした。

どうでしょう？

破城の剣 破情の槌

結果は、あつけないほど簡単に付いた。

「私は、貴方が父とは認めたくない。だが、貴方が王子であるのは事実だ。そして王をないがしろにし、自らを持って国を売り、民を惑わせ、一部の者の専横を招いた。これは、貴方から受けた復讐でも、ましてや、身内としての恥を雪ぐ行為でもない。天意によつただ」

フレッドは、王子に剣を突きつけている。堂々とした態度だが、内心はどの様に思っているのか。もはや、謁見の間には、俺たちと王子しか動く者はいない。他の者は俺が縛り上げ気絶させた。

大扉は塞いである。まさか、謁見をする場所の扉が、門を掛けられる様になっているとは、どれだけ人を信用していないか、その現われとも言える。嫌な話だ。

「最後に聞く。王は、お爺様はまだ存命か。どちらにせよ、お前は此処で討たれる。王家に連なるものとして、せめて最後に見苦しいまねはするな」

王子は、この国の悪因は、腐っても王族としての矜持は持っていたのだろうか？最後に静かに笑う。否と、王はもう生きてはいないとフレッドも、それはすぐに理解できたのだろう。

「そうか、せめて死んで誤って来て来い。神の御前では、お爺様と再会できることでしょう」

フレッドは、剣を心臓につきたてた。剣と遺体を玉座に残し、そのままその場に崩れ落ちた。ミアも、目元を押さえ隠し切れない嗚咽を漏らしている。出来れば、このまま悲しみに浸らせてやりたい。だが、それをする為の砂時計の砂は、今同僚のダイヤモンドの粒よりも重く価値がある。

「フレッド、ミア。王も王子も既に死んだ。お前たちの王族としての仕事は涙を流すことか。お前たちが、王と王子を救えなかったことを、悔やむのならば、せめてその死を利用しろ。国家と民のため、お前たちの祖父と父の死を活用しろ。そうでなくては、彼らも無駄に死に、お前も無駄に殺したことになる。せめてと思うなら、せめてもと思うなら、無駄にしない為に動け。それが一番の供養にもなる」

年若い2人に、この言い様は酷だろう。わかってはいるが、それでもこのままでもいられない。フレッドに父を殺させ、その姿をミアに見せたのは、俺が出した案だ。此処で無責任と言える訳も無い。

「わかっています。即座に声明を発表し、王位を継がなくてはいいけません」

「その通りだ。呪式を使用し、まずは王城内に伝達しろ。その後は王都だ、ジギスメントとの事もある。余裕は無いぞ」

深く頷くフレッド。強い、強いな。

俺は、羨ましいのかも知れない。少なくとも俺は、師匠が死んだ時、敵が目の前でいなくなった時、冷静に何かを出来たりはしなかった。

つつい苦笑が顔に出る。死ぬ様な目に合おうと、世界が変わろうと、狂ってはいても、俺の世界はあそこで何かが壊れた。恐らくは小さな、それでも決定的な何かが壊れた。だけど、もしかしたらもつと前に、壊れていたのかもしれない。狂っていただけではなく、圧倒的に壊れていたのかもしれない。だが、それはいまさら言っても仕方が無い事だ。

「アルトさん。大丈夫ですか」

よほど顔に出ていたのだろうか。ミアに心配されてしまった。情けないことだ。本当に、情けないことだ。

「なんでもない。そう大した事じゃない。大丈夫さ」

フレッドが祝式を展開し、王城内に声を伝える。同時にミアは、外で待機している仲間にも成功を伝える。外で待機している連中は、外でも同じように、状況を伝える。

「我らが、アイゼナツハに住む者たちよ。突然の事だが聞いてほしい。私は、フレデリック・ノル・アイゼナツハ。王族として、皆に伝える事が有る。悲しむべき事に、われらの王はもういない。私の父にして王子たる人間が、国父を実の父である王を殺めたのだ。私はこの事実を知り、父を討った。王はもういない、王子ももういない。私は、今ここに王位を継承する」

「我が名は、フレデリック、第16代アイゼナツハ国国王」

「フレデリック・ウルト・アイゼナツハ」

堂々とした宣誓だ。あれが生まれ持つての王族と言うことなのだろうか。

フレッドが、静かにこちらを向く。

「国王ですか。父を殺し祖父を守れなかった男が。国王とは、国王とは・・・」

「何が悪い。お前は、既に何かを成した男だ。王の証は、王の資格とは何だ。それは、何だと言うんだ。そんな事が分かるのは、お前が王として、全てを治め、平穩の上で死に行く時だけだ。今のお前は、既に事を成したのだ。それで良いじゃないか」

多分、俺はこいつが羨ましい。いや、間違いなく羨ましい。フレッドは、復讐をなし、祖父の敵を討ち、父を最悪の結果を生む前に救ったのだろう。

俺には出来なかった。無情なほど、全ては通り抜けていった。

まともな家族も、まともな生活も、まともな友も。

新たに掴めたかも知れない家族も、新たに掴めたかも知れない生活も、新たに掴めたかも知れない友を。

考えることを諦めていた向こうの世界。

考えたくもなかった前の世界。

こちらに来てから思い知らされる。

俺がいかに、不幸だったかを。

俺がいかに、諦めていたかを。

父を、母を、師匠を、ラッセルを、仲間達を。

もとより少ない身内を、俺の家族たちを殺したのは、俺の不運からかも知れないと。

そんな事は感じなくなかった。

そんな事は思い知りなくなかった。

ただ機械の様に、何かをしていればよかった。

こちらの世界に来てから、世界は俺に優しくかった。

人たちは優しく。俺を助けてくれて、頼ってくれた。

だから俺は、一からやり直せると思った。

手に入れられる、手にすることが出来る、そう思った。

希望を持ってしまった。希望を思い出してしまった。

だからこそ、前の世界の絶望を思い知った。

俺が、俺なんかが、こんな良い人間に何を言っているのか。

俺如きが、誰かを助けるなんて、手が貸せるなんて。

破城の剣 破情の槌（後書き）

此処からは、改変度が上がっていきますので、少なからず時間が掛かります。

気長にお待ち下さいませ。何とか今月中には、何とか今月中にはあ

――

終わる世界 回る世界

「また、ここか」

白い世界。また、ここに戻ってきた。

遠く広がる何も無い世界。荒涼とした、俺に対する罰なのか、それとも癒しなのか。罰なら生ぬるく、癒しならば、皮肉に過ぎる。

「何なんだろうな。またここに戻ってきたのか。終わるのならば終わってしまえば」

楽なのに

「違うな」

何かがいる。ここには何も無かったのに。聞いた事のある声が聞こえる。

「何だ」

いない筈なのに、誰も、何もいない筈なのに。

「師匠？」

まさか、居る筈が無い。彼はもういない。

「まさか、師匠」

「俺を見忘れたか、この馬鹿弟子が」

嗚呼、バウマン師匠が、そこに居た。

嗚呼、幻覚だ、幻聴だ。それでもなお、会いたかった。見たかった。声を聞きたかった。でも。

「久しぶりだな、BOY。夢枕に立ってやろうと思ったのに、お前は夢を見ないからな。話せるようになるまで、死ぬほど待ったぞ。もう、死んでいるがな」

分からない、何もわからない。夢枕？夢の中なのかここは。何で師匠が？懐かしい。俺が殺してしまった。俺が。俺の所為で。嗚呼、何が言いたいんだろう。言いたい事は山ほどあったのに。考えが纏まってくれない。

師匠のつまらない洒落が、嬉しすぎて、もう何でも良い。

「師匠。俺の所為で、俺の所為で、師匠を殺してしまいました」

「この、馬鹿弟子が」

ゴインツと、師匠に拳骨で殴られた。嗚呼、この痛みだ。

懐かしい。嬉しい。

「この、馬鹿弟子が、誰がお前の所為で死んだだと。おれは、お前なんぞに殺されるような、ちゃんな男なのか。ふざけるな。傭兵が死ぬのはその傭兵の責任だ。これは、一番初にお前に教えたことだ

ぞ。傭兵は、傭兵として生きる限り、自分の死以外に責任を持たない。だから俺の死は、俺の責任だ」

「ですが、師匠。あの時は俺が、俺が、畏を作動させました。しかもそのまま、師匠を助けずに」

バウマン師匠が、情けなそうに苦笑する。

「やはりお前は、傭兵としての才能は無かったな。だから、辞めさせようとしてたんだが。すまんなあ、俺が先に死んでしまった」

俺が、戦士としての才能が無いことは判っている。射撃も、狙撃も、今は別かもしれないが、格闘も、破壊工作も、その他各種技能に老いて俺より強い者は腐るほど居た。

「確かに、俺は才能が無いです。いろいろな分野で勝てない人間はいくらでも居ました」

師匠が、とことん呆れた様のため息をついている。

「そうじゃない、そうじゃないんだよ。傭兵がそんなとんがった特性持つててどうする。ラッセルの所のは異端なんだよ、あくまでチームとして機能してる所なんて、そうは無いんだよ。むしろ、全体的に高いお前の方が向いてるんだ。俺が言ってるのは、精神面の話だよ。お前は、精神的に傭兵を生業には出来ない。それは分かっていたんだ」

師匠は、座り込んで頭をかく。

「お前は、基本的に気が優しいし、命を重く見すぎる。命が実際に

思いか軽いかではない、他人の命は軽く見ておかないと、人を殺すことを生業には出来ない。本来ならば、殺していくうちに、敵や目標の命はどんどん軽くなる。しかし、お前はあまりにも早くに、全てを諦めてしまった。いつかは破綻することが分かっていたから、復讐が終わった後は、一緒に引退しようと思っていた。俺には、家族なんていなかったから。偽者ではあるかもしれないが、お前と家族を作っけていきたかったんだがな」

師匠は、俺にも座るように手で指示を出す。

「お前、案の定分かりやすく壊れやがったな。実を言つとな、今までもお前の夢の中には何度も来てるんだ。ただし、お前は普段夢見ないみたいで、俺が来た時は、お前が狂ってて、まともな話は出来なかつたんだ。師匠をこんなに待たせるとは、まったく師匠不幸な弟子だ。俺の思う、逆へ逆へと行きやがる、そんな全てに敵対するような生き方をして欲しくなかつたんだぞ」

「師匠・・・」

「俺はなあ、お前にも言つてなかつたが。本当なら、当の昔に軍人なんか辞めるつもりだった。傭兵なんかになる気も無かつた。俺のことを言つても仕方ないが、俺は、昔教導員だった。それも、本来は存在しない部隊のな、お前なら言つてる意味も分かるだろ」

つまりは、特殊部隊。それも、イリーガルセクションもしくは、内に対しての対処部隊か。正確なことは知らないが聞いたことは有る。ゆっくりと頷くと、師匠も答える。

「それで、俺の名前が何処からか漏れてな。後はお定まりさ、両親を人質に取られ、言われた通りに情報を流した。それでも両親は殺

されて、俺は国に責任を取らされた。表向きには存在しないセクシヨンだったからな、命だけは助けてもらったんだろう。いつそ殺してくればよかったのにな。その後は傭兵として渡り歩いて、お前を弟子に取った。最初は、チョットの間子守をする、そんな物だと思ってたがな。暇つぶしみたいな物さ」

酷い話だろ、と目で師匠は笑う。

「だから、お前をどうして良いかよく分からなかった。子供の扱いなんかは、知らなかったし、お前は普通の子供でもないと思ってたからな。そうしたらだ、何とまあ、普通の子供だった。予想を遥かに超えて、俺が思い描いてた、普通の子供って奴だったのさ、お前は。困惑したねえ、まったく。こんな戦場に居させちゃまずいと思った、新政府樹立が成功して、あの馬鹿な大統領を倒したら、お前も俺も、こんな世界から、足を洗っておくべきだと思ったのさ。失敗したがな」

「そうだ、それである時、師匠たちとあいつを追い詰めて、仕様は死んで、俺もあいつを、倒せなかった」

「ああ、失敗したなあ。あんなに未練が残った時なんか無いぜ。ただな、それは死んだことに対してじゃ無い。希望が多すぎたんだ。お前と生活して、お前が学校に行つて、俺は家で待つてて、みたいな生活がな。夢みたいじゃないか、お前に俺を親父って呼ばせてよ、料理したり、お前の学校での話を聞いたりさ。チョット恥ずかしいけど、俺が親父からしてもらったことを、お前にも出来たらいいと思ってた。キャッチボールしたり、一緒に風呂入ったり、旅行なんてのもいいな。そんなことばかりが未練だった」

馬鹿みたいだろ、と自嘲するように笑う。師匠の目が温かい。もっ

と早く気付いていれば、もっと、もっと何かが出来たのに。

ああ、この人はこんなにも俺のことを思ってくれていたのに。俺も親父と呼びたかったのに。一緒に暮らしたかったのに。家族になりたかったのに。

「未練だったぜ。ああ、悲しかった。だがな、お前がその後、普通の生活を送ってくれば、俺はそれで満足できた。なあ、アルト。お前は、俺の分も幸せに成らなきゃならなかったんだぜ。それが、あんな詰らん生活と、詰らん死に方しやがって。よつぽど嘆いたわ、この馬鹿弟子が。なあ、もう良いじゃねえか、楽に生きるよ、楽しく生きてくれよ。幸いその世界には、しがらみも何にも無いだろ、幸せになれよ。そうでなきゃ、俺は何時までも未練だよ」

「でも俺は、俺は、何人も不幸にした、親も、師匠も、ラッセル達も。そんな俺が幸せになんて」

パスツ 師匠が俺の頭に手を置いていた、昔から、俺が何か出来た時、出来なかった時、師匠は、頭をなでるでもなく、手を頭にのせて来た。恥ずかしがりやな、師匠の精一杯だったのかもしれないが、俺はうれしかった。嗚呼、涙が流れる。嬉しいのに、堪らない。

「俺は、お前から見て不幸に見えたか？お前のご両親や、ラッセル達の事までは、判らねえ。だが、俺はお前と居て幸せだったぞ。そうじゃなきゃ、一緒に暮らしたい何て、言うと思うか？小恥ずかしい。自信を持ってよ、お前は、お前の親が命を賭けて守って、ラッセルたちの仲間で、俺の弟子で、それで、俺の息子だ。俺の自慢の息子は、そんなに情けない奴なのか？なあ、MY BOY」

「ふざけるな、俺は、アルト・ヒイラギ・バウマンは、親父の、そ

して両親の立派な息子だ。俺をなめるなよクソ親父。俺だって、俺だって、貴方と一緒に生きて居たかった。親父と家族として生活したかった」

貴方と、仲間と暮らしていきたくかった。生きていきたくかった。

「すまなかつたよ、俺が死んだ責任は俺に有る、お前を悲しませたのも俺だ。だがな、だからこそ、お前はあそこで幸せになってくれ。死んでいたって、家族は家族さ、俺はあっちで、お前のご両親と、孫の誕生でも楽しみにしてるさ」

「ああ、あっちの父さんと母さんにもよろしくな、親父。でも、孫は気が早いよ」

「気長に待つさ、こっちは死んでるんだからな。元気にやれよ、息子よ」

「ああ、親父。またな」

「ゆっくり来いよ、焦りはしない、しわくちやの爺になって来い。笑ってやる」

「ああ、大分待たせるよ。その時は、豊富な人生経験を語ってやる」

「楽しみだな」

「ああ、楽しみだ」

本当に楽しみだ、生きることが楽しみだ。

ガタ漫 二人のショートショート・その2

再び登場のお二人です。どうぞー。

ラ「ラッセルです」

バ「バウマンです」

ラバ「二人合わせて、ラバウル小唄です」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ラ「気を取り直して、こんにちは、師匠コンビです。今回は、バウマンが本編に登場したので、記念復活です」

バ「行って参りました夢の中。まさか本編に登場できるとは、うれしいですねー。いやー、よかった」

ラ「でもよ、お前の語ってる過去が、この間言ってた裏設定と矛盾しない？オランダにイリーガルセクションなんてあったか？」

バ「フィクションだから、まあなんでも良いんだがな。一応王立保安局には、黒いうわさもあるぞ。軍隊と言うよりは、警察のセクションだが。設定が変わったのは、あれだ、プロットの練り直しだが、既に5回もやってるから。都合よく改変されただけだな。もしくは、あの設定は、あくまでも俺とお前の話として割り切ったかだ」

ラ「適当だな、おい。まあ、どうせ俺たちの話し書くなら、かなり書き換えなきゃならんだろうし、いいか」

バ「うむ、とりあえず、この話をまとめないと、どうにもならないしな」

ラ「まあ、これでだ。精神的な葛藤は、一段落。後は、目指せ戦記物か？ 作者は、隆慶一郎の影響大きいから、個人の持つ力の大きさとかの描写がしたいんじゃないか？ 戦記だと、その辺りが曖昧にならないか？」

バ「作者自身は、今何とか恋愛のパートを入れたいらしいぞ。何でも考え付くキャラクターが、基本的に40オーバー。おっさんか爺ばかりという現状らしく、何とか打破したいらしい」

ラ「だから相変わらず、何処に向かいたいんだよ。俺たちの話だって、あまりにも華が無くて暗い、と言う理由でボツだったんだぞ。同じ道を行ってどうする」

バ「だから悩んでるんだろう。ヤン・ウェンリーみたいに、いきなり美人の副官が来て、自分のことが好き、とは行かないんだよ。俺だって欲しいよ、フレデリカみたいな嫁さん」

ラ「作者は、ハーレム否定派だしなあ」

バ「ハーレム否定と言うよりは、最終的に誰かに決めるのが、嫌いらしいぞ。全員愛して、全員の生活を確保して、全員に子供を作るのなら良いらしい。手を着けておいて、最終的には、1人に集約する形が嫌いだそうだ」

ラ「何処の皇帝陛下だよ。何処の15歳だよ。良いじゃねーか、ミリアかメイとくっ付けよ。妥当だろ」

バ「その辺も、作者考えたんだけどなあー。どうも興が乗らないんだって、年齢差的に」

ラ「年齢差だと、アルトは26だろ、白い世界の所を考えなければ、あの二人何歳だ？」

バ「メイが17でミリアが18、ちなみにフレッドは21でバイエルラインは20だ。こんな所で、紹介する物でもないとは思うが」

ラ「8歳差と9歳差か、作者としては完全アウトだろうが、アルトとつき合わせるなら、関係ないんじゃない？別に」

バ「何と無くダメらしいぞ。と言うわけで、今23から28の女性を考えてるらしい。アルトの弱い所って、基本的には精神面と女性関係だろ。作者の思惑を外れて、肉体的には成長し過ぎたんで、精神面のパラメーターを下げたらしい。その補助に入れるような女性が欲しいらしいぞ。作者には、妹に萌える要素は無いからな。年下であってもお姉さんキャラが大好きだ」

ラ「要らんわ、そんな告白。てことは、またプロットの打ち直しだよ、何度変える気だ」

バ「当初はとは、既にだいぶ変わったからな。もう作者も諦めたんじゃないか？実際の所」

ラ「どうにもならんな。まあ、しょうがないか。それでは最後にお便りのコーナー」

バ「お便り？そんな物は来てないぞ」

ラ「ラジオだって、一回目はヤラセが殆どだろうが。良いんだよ、こつ言つ事やってると、感想やメッセージが頂けるかも知れん」

バ「あざといな」

ラ「あざとくて結構。それでは行くぞ、お便りのコーナー」

バ「それでは、一通目・広島県T・Nさんからのお便り」

・アルトは、娼館に興味津々だった様ですが、結局行ったんですか？つていうか娼館つて、どんな所なんですか・

ラバ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラ「もうチョット、当たり障りの無い文章は考えられんのか」

バ「行つてます」

ラ「おい」

バ「ウイルキンスさんの所で、酒を飲んだ後、1回だけ行きました。ただし情報はあまり集まらなかつたようです。情報を集めると言う事からも判るとおり、娼館とは、お姉さんとお話をする所です。お話が基本です」

ラ「そうです、お話をしに行く所です」

バ「息子の息子が、何をお姉さんとお話したかは知りませんが、時間が無くなってしまいましたので、今日はここまで」

ラ「それでは、また」

バ「またのお越しを」

ラ「俺は本編に出る機会あるの？」

無いんじゃない？

ラ「と言うのが、改訂前の流れだ」

バ「そうだな、言った通りの高年齢層キャラクターばかりになったな」

ラ「うむ、平均年齢を出した所」

バ「なにが、楽しゅうてそんなこと」

ラ「うむ、まあ出した所。なんと驚愕の43歳」

バ「おっさんの集団だな」

ラ「アルトなどの若年組みを除けると、なんと50超え」

バ「ライトノベルとしてアリなのか？で、改訂後はその辺も変わるのか？」

ラ「むしろ高年齢キャラが増える予定。さらに」

バ「さらに」

ラ「そう、さらに」

バ「言わないんだろ」

ラ「秘密」

まだまだ続くよー。

行く覚悟 見る覚悟（前書き）

大幅改稿第一弾。

え？24話目にしてやっと？

行く覚悟 見る覚悟

「目が覚めたのか」

親父、ありがとう。ゆっくりと走ることは無いかもしれない、迷うこともあると思う、それでも何とかやってみるよ。向こうに行った時、ほめて欲しいから。だから、もうチョット見て置いて欲しい。

「んっ」

うかつだった、何かがいる。ドキリとして周囲を見渡す。

すると、ベッドの両サイドに、メイリンとミリアが居る。ため息をついて、身体を起こす。二人は、俺の看病をしてくれていたようだ。額にはもうぬるくなっているが、水にぬらした布が置いてある。

「ありがとう」

二人はよく眠っているようで、目を覚ます気配はない。このまま、寝ていて貰おう。ベッドからすり抜けると、予備として置いてあったであろう、毛布を二人の肩にかける。

「お休み」

部屋を抜け出し、フレッドの気配のあるほうへ歩く。まだ起きている様だ、外はもう既に、月が高く掛かっている。ドアをノックし、部屋へ入る。

「アルトさん、もう起きて大丈夫なんですか」

「ああ、すまなかつたな。チヨット変な事になつた」

「心配しましたよ。体は大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だ。すまないな、心配をかけて。そのことに関しては、後で二人が起きてから、説明するつもりだ。それより、そっちは順調なのか？」

フレッドの顔は暗い。

「王位には着けました。元々、あの父が、王位を継ぐことには反発が多かつたから。内政に関しては、父に加担した人間は今洗い出しています。むしろ大掃除が出来て良い位と言つた所です。ただし」

「そう問題は、内政よりも。」

「問題は外政。ジギスメントか、幾らなんでも、直ぐに戦争を仕掛けてくる、ということは無いだらう。そもそも俺はどのくらい寝ていた？」

「およそ1日です。いや、今は夜だから1日半になりますか」

「寝ていた時間と考えれば長いが、国家の政策が転変する、と言つては短いな。」

「それでは、なんら進展はしていないな。急使を送つたぐらいか。お前の読みでは、どうなると読む？戦争か？外交ですむか？外交の場合どの程度の譲歩なら飲む？」

落とし所というものが肝心だ。今回の場合、国としての落ち度は、双方にあるとは言えど、こちらの分が悪い。

「それが問題です。他国の支援は、この場合期待できません。向こうとしては、戦争も辞さないでしょうね。実際に戦になれば、負ける公算のほうが大きいと思います。完全な敗北は無いでしょうが、相当のものを奪われるでしょう。その後は、じりじりと飲み込まれて終わります」

「現状、国外の勢力を呼び込むのは、下の下の策だな。仮に、善意の王がいたとしても、国家として借りを作るのは不味い。そのあたりは、積極的に排除するように動かなくては」

「ええ、そうしなければ」

外から、二人の気配がこちらに近づいてくる。どうやら起きて来た様だ。

「お兄様、アルトさんが、ベッドから消えました」

フレッドが笑って答える。

「大丈夫だ、ここに居られる」

「ああ、アルトさん、体は大丈夫なのですか？どうしてあんな事にちょうど良いのかも知れない。ここで明かしてしまえば、それはそれで良いのかも知れない。俺は選んだのだから、生きると。楽しく幸せに生きると約束したのだから。」

「皆に、聞いて欲しいことがある。荒唐無稽な話だ、信じるか信じないかは、君たちに任す。だが、他の者には話さないで欲しい、聞いてもらえるか？」

皆が一様に頷く。彼らなら、俺を狂人とは見ないだろう。

「まず、どう言ったら良いのか……そう、俺は、この世界の人間ではない。他の世界、この世界ではない所、そこから来た人間だ」

皆が、それぞれ息を呑む。

「フレッド、ミア、俺がお前達に貸した銃、あんなものがここで作れると思うか？この時計はどうだ？俺の背囊の中には、もっといろいろなものがある。それらは、この世界では作れないものだ。証拠というなら、それが証拠だな」

二人は顔を見合わせて、メイリンは啞然としている。

「俺は、ずっと戦っていた。以前の世界では、全てが、ほんの一握りの人間、親父と、両親と仲間以外は、全て俺に敵対していた。俺は、攻撃して、攻撃して、戦いを続けた。覚えきれないほど戦っていた」

顔には、自嘲の念が浮かび、眉がひそめられていた。自分でも判る人に話すのも、俺にとって大きな覚悟が必要なのだ。

「きっかけは、俺の当時住んでいた国だった。記憶も定かではないが、当時、まだ幼い俺を連れて、両親はその国に移り住んでいた。そこで革命が起こり、父も母も囚われて、国から出れなくなった。そして、革命後その国を牛耳った一族の男。分かりやすく言うと王

弟でも言うつのかな、その男に母が汚された。俺が、まだ3歳になるかならずかの頃だ」

話しているだけで、胃が煮える。思い出して、腹が煮え返る。

「3年経たず母は死に、父は殺された。俺は、死に目に会えなかったな。当時、俺は既に、軍事訓練、暗殺者養成、兵士育成、どう言っても構わないが、要は幼児虐待だな。そんな生活をしていて、今思っても死ななかつたのが不思議だな、そんな神を怨む様な日々だったよ」

そうだ、俺は神なんか信じていない。だが、いないなら逆に驚くほどだ、こんなめぐり合わせは、悪ふざけとしか思えない。ため息をついて、周りを見る。そうだろう、声も出ない。そんな話だ。

「そして、そう、両親が死んで、俺は復讐を決意した。あの外道、あの下衆を殺すためなら、何でもすると誓った。待つ時間は長かったよ、嗚呼、長かった、凡そ3年、それだけ待った。俺が、9歳の頃だ、反政府勢力と言えば良いのか革命軍と言えばよいのか。つまるところは、その下衆に取っての対抗勢力だ、それが、俺達の居た施設を攻撃した。機会だと思ったよ、だから行動した」

最初の復讐を、果たしたときだ。達成感、あつたのだろうか。感情は、憎しみに塗りつぶされて、覚えていない。ただ、憎しみがあつた、そう記憶しているだけだ。

「これも、成功した。まあ、今俺が生きているんだから、当然だな。俺は、下衆を殺した、惨たらしく、陰惨に、徹底的に殺した。そう、一応の復讐はなされた、直接的に俺の家族を殺したのはそいつだった。だが、それだけじゃあない、そう、下衆は他にも多く居た」

あの一族は、腐っていた。殺しても、殺しても、雲霞の如く下衆が沸き出た。

「俺は、その対抗勢力に協力した。馬鹿馬鹿しい話だ、まだ9歳、子供のとる行動じゃあない。だが、一つだけ良い事があった、たった一つ、良い出会いがあった。俺の師匠で、俺の親父だ」

血は繋がってはいないが、親父は親父だ。

「親父は一流の傭兵で、俺に戦い方を叩き込んでくれた。一々語ることもないが、よく殺した、それによく壊した。そんな日々でも俺が生きていられたのは、師匠が、親父が俺を教育してくれたからだ。殺して、壊した結果、俺達は国を取り返した。まあ、俺には祖国なんてものは無いが、その組織としては取り返した」

あの時は、喜ばしかった。事実を知る、それまでだったが。

「しかし、首魁は逃げ延びていた。俺と親父は、奴を追い、その中で仲間を得た。しかし、仲間も、親父も、俺が罠を作動させてしまつて。俺の代わりに死んだ。そして、その敵も取れなかった。首魁は勝手に死んで、俺の復讐は取り残された。」

「後は、死ぬために生きていたようなものだ。無茶な修行と戦闘相次ぐ戦場に戦場。そして、ついには残った仲間とともに、吹き飛ばされて、死んだはずだった。ところがだ、変な世界にいったんだ。そこで飛ばされたのは、変な世界だったよ、何も無いんだ。周りには、物も人も何もかも、時間や空腹さえも無かった。何度か狂つたみたいだが、不意にまた飛ばされた。何の因果か、死なずに今は此処にいる。俺のいた世界ではない此処に」

本当に、ふざけた因果だ。

「この世界に来てから、不思議といろんな人に親切にされた。バドウィックさん、アリシアさん、ウィルキンズさんにライオネルさん、世話になってしまった。幸せかもしれないと思ったんだ。そう、こんな生活も良いかなと、そう思った」

楽しかった。それだけで、俺には珍しい感情だ。

「だから、気付いてしまった。気付いちまったんだ。自分が、いかに不幸だったか、いかに切り捨ててきたか、いかに自分が間違っていたのか」

座っていた椅子に、深くもたれかかる。質の良い椅子は、俺の体重を支え音も鳴らさない。不思議と落ち着いた気分だ、こんな話を話すこともないし、もしかしたら、話すことによって自分の中でも、整理されたのかもしれない。

「先ごろ倒れたのは、そういった感情が一気に噴出したからだ。耐え切れなかったんだろうな、一度に来たから。もう自分でも自覚したし、大丈夫だと思うよ」

「大丈夫なんて、そんな、軽く言わないでください」

「そうです、助けて貰って置いてなんですが。もっと人を信用して下さい」

ミリアとメイリンが、口々に言う、涙を流しながら、女に叱られるのは、初めてだ。気圧されて、背筋が伸びる。

「信用などは、別としても。なぜ、このような危険な事に加担したのですか？貴方の腕ならば、何処に行つても、何処の国でも食べていくのは簡単でしょう。冒険者としてではなくとも、もっと幸せな所を目指せただけです。なぜ、もっと幸せになろうとしなかったのですか？貴方は幸せになるべきです。なぜ、私達に力を貸してくれたのですか？」

フレッドも、目を潤ませて詰め寄つて来る。言葉の最後の方は、だんだんと涙声だ。不思議と、当の本人である俺が落ち着いている。聞き直つたのだろうか？妙に冷静だ。

「そんなことを、言われてもな。この間までは、特に。そう、別段何とも思つてなかったわけ。助けたのは、まあ成り行きと、後はまあ、頼まれたからか？」

自分でも良く分からん、主に成り行きだと思つた。

「貴方が、何であれ、たとえ外の世界から来た方であろうが、たとえ神であれ、そんな事は、貴方が恩人であるという事には、何のかわりもありません。私も、兄も、メイリンもそんな事で、貴方に何等かを思う人間ではありません」

ミアアが言い、後の二人が首を強く振っている。その目からは、何の悪意も猜疑心も感じない。俺は、もっと他人を信れる様になるべきだろう。ここが、俺の岐路なのかもしれない。

「フレッド、お前に聞きたい。お前は今困っているか？」

困惑したかの様に、沈黙がその場に漂う。しかし、俺の言わんとす

る所が判ったのだろう。ゆっくりと、目を閉じて考え込んでいる。

「どうした、フレッド、いや、フレドリック・ウルト・アイゼナツ八、お前は宣言したのだろう、国を背負って立つのだろう。ならば答える、お前は困っているか、力が必要か、助けが必要か？」

ミリアは、静かに俺を見てくる。メイリンは、フレッドを心配そうに見つめている。フレッドは、上を向き、唇をかんでいる。

先ほど、彼は俺にはもつと楽な生き方を、もつと手軽に幸せになる生き方を、なぜ選ばないのかと聞いていた。本当は、大丈夫だから幸せを望めと言いたいのだろう。だが、俺はそれでは幸せにはなれない、と感じている。だから、言え、たった一言で良い。

言え。

「困っている。力が、助けが必要だ」

「そうだ、覚悟を決める。俺も、今覚悟を決めた。俺は、俺の周りの人間を幸せにするために、その為に生きる」

これは宣誓だ。宣言にして、俺の覚悟の表れだ。

「俺は、俺の持つ全てを駆使して、俺と俺の周りの者の幸せを創る。おれ自身のため、俺の周りの者のため。俺は、昔護られるべきもので、今まで護る者も無かった。だが、今からは、俺が護る者だ。俺と俺の周りの者、その護り手だ。覚悟は良いか、フレドリック」

「貴方が、私たちを助けてくれるなら、力を貸してくれるなら、私たちも、貴方を支えよう。私たちは、それぞれがそれぞれの助けに

なる、それぞれがそれぞれの支えになる」

求めた場所と仲間は、今まさに此処にある。

此処に、俺の居場所と、俺の仲間を作る。

「それではフレデリック王よ、最初の契約だ、俺のことはアルトと呼べ、俺もお前をフレッドと呼ぶ、友誼と信義によって、俺たちに遠慮は不要だ」

兄としての立場というのが、味わえるかもしれない。これは中々楽しみだ。

行く覚悟 見る覚悟（後書き）

今日は、これで精一杯。

明日も一話あげれるように頑張ります。

見守るやさしい目（前書き）

完全に進路が改訂前とは変わるのか？と思いきや変わらないと言ってお話。

見守るやさしい目

石造りの城を歩く。ヒヤリとした空気、やや湿気を含んだ風は、きちんと設計通りに城内を巡る。

天井は、そう高くは無い。しかし、部屋よりも廊下のほうが、はるかに天井が高くなっていることが分かる。緩やかなアーチを描く天井、壁際に飾られる、剣や盾、そして全身鎧。幾つかはただの飾り、そして幾つかは。

フレッド達は、もう寝ている。明らかに目の下に隈を作り、歯がゆさに身をよじっていたフレッドを、俺は無理にでもと言って眠らせた。国を良くする前にアレでは、あいつが死んでしまう。バイエルラインを呼んできて、フレッドと。そしてメイちゃんとミリアには、同じ部屋で寝てもらっている。今俺がいるところから、1000mも離れていない場所に、皆で固まってもらっている。

廊下を歩き、資料室と書かれた部屋へ入る。ノックもせずに、気配を消して。

「ご報告は済みましたか？」

部屋の中には、女性と爺さんが居た。

ビクリと身をすくめる女性とは裏腹に、爺さんはまさに悠然とした態度を崩さない。

「気が付いた様じゃの、良かった良かった」

「ええ、おかげ様で。夢を見ている間、みんなの護衛もしてくれていた様で、どうもありがとうございます」

女性は、さつきからずっと爺さんに目線を送っている。しかし、爺さんは完全にその視線を無視して、おれとの話を続ける。

「それで、こんな夜中に何の用かね？」

「さつきも言った様に礼ですよ、お礼。後はまあ、少しばかり、お話をしようかと思ひまして。あと、その彼女は間諜には向いてるかもしれませんが、護衛としては二級線です。向いてる所だけに、特化しておいた方が良い」

薄い茶色に、やや赤味があった瞳を持つ女性が、俺をにらんでくる。だが、正体がばれた上に、俺を此処まで案内してしまった事には変わらない。何も言えないのだろう、ただにらんでくる。

「ですが、間諜として報告は済ませたのでしょう？だから、わざと放置して、聞かせたのですから。私に対しての疑惑は、多少は晴れましたか？リヒテンシュタイン翁」

「ほっほっほう。まあ、お前さんが、此処に来れた時点で故意にこの娘を見逃したのは明白じゃな。この娘は、わしの部下等ではなく、預かっておるだけじゃからのお。助かったわい」

「城の外に行くなら、また別でしたがね。悪意や害意も感じませんでしたが、それは、まあ良いとして。フレッドの陣営の精神的な支柱は貴方ですよねえ。国学院の学長、中央の賢人、バルヴェルホルン・リヒテンシュタイン閣下」

「名前が一つ抜けておる。あの王子の教育係、と言うのがのお。今回のことも、教育者としての意地みたいなものが主じゃよ。短い期間ではあったが、アレの教育に携わっておきながら、その後の状況を止めれんかった。わずかばかりの責任を取ろうとしただけじゃよ」

「師の務めですか」

「言ったじゃろ、意地じゃよ」

弟子と師匠か、バイエルラインの事も、しっかりと考えてやらねばならないだろうな。少なからず思い入れがある関係、弟子と師匠、立場は変わるかもしれないが、双方が考えなければならぬ関係だ。

「それと、わしももう少し信用して欲しいのお、フレッドが懐いた時点で疑ってはおらんよ。あの子は、人を見る目だけは神がかつておるからのお。他にも良い所はあるが、アレだけは誰にもまねできん」

「それは、光栄だが。俺はそんな良い人間じゃない。報告聞いたのなら分かるだろう」

先ほどの、フレッド達に話した内容も、全て伝え聞いているはずだ。

「聞いてなお、いや聞けばなおと言う所じゃの。照れんでも良い、誰しも若いときは恥ずかしいものじゃて」

優しげに笑う爺さんの目には、何かが浮かんでいる。奥深く、またその多さに、おれではうかがい知る事ができないほど、何かが。見透かされているのは、恥ずかしく思い、またどこか嬉しかったりも

する。俺は、どうも年寄りに弱い。

「まあ良い、それよりもリヒテンシュタイン翁」

「固いのお、学長、もしくは爺さんとも呼んでくれんか」

「では、爺さん。フレッドは、外政に意識が向いているようだが、実際には」

おれ自身も、あいつに同意した。いやむしろ意識をそちらに向けたが、そこに関して、俺の考え方は違う。

「うむ、外政は現状相手の出方待ちじゃな。今は内部の整理と改革が急務じゃ。しかし、お前さんはどの辺りまで知っている？」

どの辺りまでと言われてもな。

「何も、いくらか想像はしているが、確定している事は無いと言っても良いな」

「それでは、色々と話しておこうかの」

「そうして頂ければありがたい、が」

俺は、未だに壁際で控えている女性を見る。

「彼女には、フレッド達を見ておいて貰って下さい。護衛と言つよりは牽制として。バイエルラインも、彼女には気付いていたようですから、居てもらえれば良いです」

「そうじゃの」

爺さんが目配せすると、俺の方を敵でも見たかのようににらんで、女性は出て行った。能力的にはその方が適所なんだから、しょうがないだろうに。

「まずは、国の成り立ちじゃが。此処がジギスムントとの軋轢の原因にもなっており。歴史的には今から、300年ほど前じゃの、この一帯には帝国があったんじゃ。今のアイゼナツハとジギスムント、さらに西方の一部を支配していた帝国の名前は、ジギスムントと言った」

「隣国と同じ名前ですね」

「うむ、彼の国は、その正統を名乗っており。一応当時の皇帝の一族が、今の王族じゃから、名乗っておりと言うのもどうかとは思いますが、まあ一寸訳があつての」

「いったん瓦解した後、正統を理由に成り上がった。そして、瓦解した理由は、アイゼナツハが分裂したからですか」

「まあ、そうじゃの。それが向こうの見解じゃ」

「ほお、それではこちらの見解は？」

国によって歴史認識が違うのは当然だ、プロパガンダとしては勿論、単純に文献などの差などの場合があるが。今回は前者だろうな、と言つか殆どの場合が前者だ。

「そんなには変わらんがね。要は帝国の瓦解と、わが国の成立がど

こちらが早いか、と言う所だな。あちらは、わが国の初代国王、ヨアヒムバルト・ウルト・アイゼナツハが帝国に対する反逆者にして瓦解の原因と言い。わが国の見解では、既に瓦解した国の民を、安んじるために国を作ったと伝えている。わしも研究したが、この時代の帝国は、乱れに乱れていた上に、その後の戦火で資料が無くなっておつての、よくわからんのじゃよ」

つまり今更言つても水掛け論、証拠も根拠も口伝のみ、もしくは改変済みということか。

「ジギスムントのほうか、元の帝国の主城があつた上、中枢であつた事は間違いない。だが、あちらに残つておる資料は、既に都合よく変わつておるじゃろつ。いまさら、どうにもならん」

歴史に対しては、真摯な爺さんなんだろう。あえて歴史を改変する相手を、憎んですらいるようだ、それ以上に悲しんでいるのだろう。もう、真実が見えないかもしれない歴史の裏を。

「向こうとしては、元の大国を再興。いや、反逆者に切り取られた国を元に戻すだけ、それが、名目か。厄介だな、何であれ、大義名分があるのは強い」

「そうじゃの。同時に、そういつた歴史が、前王までの、貴族の台頭も招いておつた。さっきも言ったが、初代王は散り散りになった民草を、纏めるために国を作った。その時、既に民を手中にしていた、貴族達のまとめ役としての。その所為で、貴族、特に国家の成立に寄与した、八大家と言われる貴族の権能は大きい。お互いが、牽制しあつておるから、いやしておつたから、マシじゃつたがの」

「王子の所為でまとまつた？」

静かに頷く。つまり、今までとは状況が変わっていると言う事か。

「そうじゃ、確かに貴奴は、貴族の権能を削った。じゃが、同時に奴らをまとめおった。内心はともかく、現在は歩調を合わせておるかえって、対処が難しいかも知れぬ」

「唯一の救いは、貴族軍が今は無い事じゃの」と、良いながらため息をつく。確かに、直接的な暴力を持った勢力が纏まれば、それだけで国が割れる。

「やはり、軍制の改革は急務か。骨だな」

以前、軍の情報を聞いた時に、思いついた事をまとめてみるか。

「何せ、王子の時の締め付けは、文書化されて正式に決められたものではない。早いうちに、正式に法制度化せんと、勢いで流されそうじゃの」

「より反発しないか？」

「しょうがなかる。国が潰れるよりは、幾分かマシじゃ」

前途は多難だな。

「なんにせよ、爺さん。俺は、覚悟を決めた。そんな奴らの思惑は、吹っ飛ばして、笑って暮らせるようにしよう。爺さんも、楽しい老後を過ごしたいだろ」

「そうじゃの。老骨に鞭を打つとしようかの」

互いの顔を見て笑いあう。年長者の腕を見せなければなるまい。

「さあ、とりあえず、この数日が山場だ。気張って行こう、爺さん」

見守るやさしい目（後書き）

感想やご意見等ください。お願いします。

そろそろ反応がないと心が枯れて行く、干からびていく。
モチベーションを維持するためにも是非。

悪い所や誤字脱字も大歓迎

会議その一（二はまだ未定）（前書き）

一寸長めです。

会議その一（二はまだ未定）

翌日、早朝から人を集めて、会議を始めた。とりあえずは、方策を決めるため、今回の義挙に参加した人間の、幹部だけで開催している。

「さて、昨日も話したが、まだジギスムント側からの動きはない。親書は送っておいたが、返事には早くても三日はかかるじゃろ。それまでに、できる事をおこつてはないか。」

議長を務める爺さんが話を切り出す。昨日、いや、もう今日既に、爺さんとは軽く話しをしておいた。俺は手を上げて、発言権を申請する。

「うむ、アルトから話があるようじゃの、では」

全員を見回すと、みなが頷くので話をする。

「さて、発言をさせていただく。今回の義挙で思ったが、兵士の錬度、構成、命令系統が、ダメだ。話を聞いただけでも、騎士団、近衛、各自警団等が入り混じり、命令系統がはつきりしない。自警団はともかくとして、騎士団と近衛は、一括して国王が管理すべきだ。統括者が居ない軍隊なんぞは、何の役にも立たないぞ。唯一見込みがあるのは、貴族が私の軍兵を持っていないことだな。そこだけは評価できる。そこで一応今居る、およそ1000人の騎士と近衛を、まとめて編成しなす。概容はこれだ」

俺は、既に紙に書き起こして置いた文章を出す。

常備軍としての騎士軍を編成する。

騎士軍・常に武装し常備軍として研鑽を積む。

階級制度を一新、新規の体制下においては、階級の上下は、家柄等の一切の影響を受けない。そして階級の上下による命令は絶対である。

階級

騎士総将

騎士将

騎士団長

騎士隊長

騎士

騎士総将は総合作戦指揮、騎士団を総監する。騎士総長は、任意に副将を3名まで置く事が出来る。副将と、騎士将は兼責出来ない。副将の内1名を、兵站管理者として任命する。

指揮下に騎士将が6名 それぞれの騎士将に、騎士団長が2名から3名付く。騎士将は、任意に、1名を副官に任命する。騎士団長と副官職は兼責出来ない。

騎士団長の配下には、6名から7名の騎士隊長が付く騎士団長は、任意に副官を1名任命する。騎士隊長と副官は兼責出来ない。

騎士隊長は、自身も含めて10名で騎士隊を編成。隊員の中から副

官を一名任命する。これを最小の作戦単位とする。

騎士隊は、1名の騎士隊長と、9名の騎士で構成されこれを原則とする。

騎士隊の中から、引退者もしくは、昇進、異動するものがある騎士隊は、該当者が移動する3ヶ月以前より訓練生を置く。訓練生を置き、一時的に11名で隊を構成する。訓練生は、先任者が脱退した時点を持って騎士となる。

引退した騎士は、引退前の階級を有し予備役になる。予備役の期間は10年。騎士総将が退役し、戦時召集された場合、現役の騎士総将の軍師、もしくは副将として就任する。その他の階級のものに関しては、随時差配する。

以上が騎士軍構成。総数はおよそ1000人。地方都市の警備の監督も彼らが行う。小さな村などは、青年団などで自警隊を組織しこれも騎士が監督する。

「これが、平時の編成だ。はっきり言えば、この国では国力の関係上、1000人規模の常備軍が限界だ。ちなみに、現在騎士や近衛に属している者にも試験は行わず。縁故などで入っている者も居るようだからな。何かここまで出質問は？」

バイエルラインが手を上げる。

「師匠、その階級は、どうやって決めるんですか？やっぱりそこも試験で？」

「師匠ではないが答えよう。騎士総長を、国王に決めてもらう。こ

れは今後も、常に国王の権利として存在する。その後、騎士将までは、騎士総将が任命。騎士団長は、騎士将が任命する。そこから下は試験で決める。そういうった具合だな」

本当は、下から決めていく方が好ましいのだが、現状そうは言っていられない。一番上のクラスはともかく、現場で動く人間は、きちんとしたから選んだ方が良いのだが。

「分かりました師匠」

「師匠ではないと言っている。まあ、それは良い。次からは、実際の国家間戦争などが起こった際、戦時についての編成だ」

王を、軍元帥に任命。

騎士総将を、総大将に任命、大将とする。

騎士総将付随の副将を中將に任命。兵站管理者も同様。

騎士将各位を少將に任命。師団を指揮する。副官は大佐に任命される。

騎士団長を中佐に任命。大隊を指揮する。副官は少佐に任命される。

騎士隊長を大尉に任命。中隊を指揮する。副官は中尉に、それ以外の隊員は少尉に任命される。

各少尉の下に一般から徴募された兵士10名を配置小隊となす。

小隊11名

中隊90名

大隊600名〜700名

師団1400名〜2000名

予備役も含め、総軍1万名から1万3000名

「というのが、戦時の編成だな。このほかに、規模に準じて、まあ最大数では、3000人規模の兵站部隊も配置する。こちらのまとは、騎士総将の副将の兵站管理者が、兵站部隊総指揮として任命される。最大で1万6000、これ以上だと国が傾く。国家の存亡というのなら5000。その位なら搾り出すことは出来るだろうが、その後30年国に悪影響を残すと思え。以上だ、何か質問は」
フレッドが聞いてくる。

「それらの策を行うとして、どれほどの時間が掛かるでしょう」

「騎士総将さえさっさと決めれば、選別して編成までに1ヶ月。一通りの訓練をするならもう2ヶ月、そんな所だな」

「それでは貴方を、騎士総将に」

「ダメだ」

俺はフレッドの言葉を切る。

「それはダメだ、少なくとも、軍の大將には求心力、人格的な統率力が必要だ。何処の馬の骨かも分からない若造が、やれるものではない。士気が下がってしまう。士気の低い軍隊なんて、何の役にも立たない。仮にほんくらでも良いから、国民の人気を集める様な者を使うべきだ」

「それでは貴方はどうするのです。少なくとも指揮官として動くんでしょう」

「どうするべきか？教導はするつもりだったが。ある程度フリーで動ける人間がいたほうが良い場合もある。せめて、ある程度動ける人間が、後2人は欲しい。」

「今のところ、保留だ。騎士将クラスか、騎士総将の副官クラスに入っていれば楽なんだが、自由に動ける人間がいたほうがいい場合もある。騎士総将を決めてから考える。誰か心当たりは居ないか？」

皆が考え込む。いや、爺さんは、何かを思いついているのだろう、静かに微笑んでいる。

「今回の骨子として、一般の兵士に渡す武器や防具なども、一括して国が管理するというのがある。今まで見たいに、貴族経由でやっていたら、何時まで経っても、横領と癒着がなくなる。だから、貴族に対して強く出れる、と言う条件にも合ってなければならぬ」

自分で言っているにしても、難しい人材だな。封建社会にいるのか？そんな人材。

「シュトラウスはどうじゃね」

「「「おお」「」」

皆が一様に手を叩いた。

有名なのか？

ヴェルギエール・シュトラウス、御年58歳、勇戦の猛将と言つよりは、鉄壁の智将、長い戦乱期において、幾度と無く国を防衛。ヴェスター宰相の友人であり、彼の死後表には出てきていない。国の重鎮、国家の将と言つよりは、ヴェスター宰相の守りであった。同じく友人であった先代の王が、何度と無く後進の指導を頼んだが、これを固辞、現在に至る。將軍任命中に、数度軍制改革を説くものの、受け入れられず。

「すごい人じゃないか。何でそんなのが在野で燻ってるんだ、ちゃんと国で困っておけよ」

「まあ以前は、かなり貴族の権利があつたからな、疎まれていたんじゃないよ。軍制改革についても、まあそのあたりのことで頓挫してな。あの馬鹿王子が小心者で、貴族の権利を剥奪していたのが、今は幸いじゃな。それに」

それに？

「色々と有名な一族なのです」

言葉の尻をミリアが続ける。

「有名。どう言う事だ。歴史のある名家などでは無さそうだな、貴族と敵対していたと言う事は、成り上がりということか？」

「いや、八大家ほどではないが、シュトラウス家はかなりの家じゃよ。あくまでも、この国としてはじゃがな。そもそも、国が出来てから300年足らず。この国が出来てからの家ならば、歴史ある家等ではないの」

「まあ、爺さんの歴史解釈は置いておいて。じゃあ、何が問題で有名なんだ、その家は」

「恋愛です」

「はあ？恋愛。」

「なんと言うか、愛に生きる一族での。特に先々代などは、逸話が歌曲になっておるほどでの。大衆的には人気があるんじゃないが」

「家柄や思惑、政略結婚や婚約などを乗り越えて、愛に生きるもので面子をつぶされた家が多くいるのです。しかも、代々優秀なものが多く、しかも、私心を持たずに国に尽くすと」

「つまり、あまりにも完璧がそろってる上に、打算で動かないから籠絡も出来ない。忠誠心はある上に民の人気も高い。しかも、面子はつぶすし、予定は崩すし、そういうことで疎まれていると」

静かに頷く。どうやら、有名な話のようだ。メイリンなどは、羨ましそうに目をきらめかせている。隣でバイエルラインが、やたらと

身体を揺すっているが何なんだ？こういった話が苦手なのか？

「さらに言えば、さっきの歌曲にもなった先々代。こやつは、王族の姫、つまりは先王の姉君にあたる方を、降嫁しての。本来の婚約者じゃったのが、さっきも言った、貴族派閥の頭首の家、リユーベック家の先々代。その後の嫌がらせは、今でも語り継がれるほどじやったらしいぞい」

なにやら、いきなり下世話な話でため息しか出ないな。

「まったく、何処に行っても、腐れた貴族ってのは、かなわんな。それはまあ、この際は置いとこう。爺さん、何か伝手はあるか、そのシュトラウス将軍に。いや、騎士総将候補筆頭に」

あごを撫で撫で、爺さんが答える。

「無い訳ではないのう。だが、どうやって口説く、王がやってもダメだったのじゃぞ。頼りのヴェスター宰相は、すでに神の御前じゃ、わしは、知ってはおるが、そこまで親しくしておった訳ではないしの」

「フレッド、どう思う？口説き落とせそうか？」

フレッドも他の者も考え込む。見込みは薄いのか。

「私も、シュトラウス将軍とは会った事があるが、優しそうな人だったからな、そんな風に、先王の頼みも断っていたとは知らなかった。とりあえず、話して見るしかないのではないかな？」

「いや、そんな弱気では、最初になめられたらお終いだ。少なくとも」

も、初撃を決めない事には話にならん。爺さん、シュトラウス將軍の改革案つてのは、どんな物だったか知ってるか。それと、先王はどうやって頼んでた」

「改革案は、貴族軍の廃止、それと階級の徹底じゃ。お前さんの案に近いの、もう少し階級が雑じゃったが、それは多分妥協案じゃろ。王が、どうやって頼んでたかなんぞは、知らんわい」

こつちの世界での、マキャベリかグスタフ2世みたいな人物か、そんな人間がいたのはついてるな。俺の知識を、丸々こちらには適用できない。こちらでの、軍事の達者が必要だ。

「俺のもかなりの妥協案だぞ、本当だったら、兵站や編成、編制に関して、階級や教導に関しても、言いたい事は山ほどあるんだ。とりあえず話を聞いて見るしかないかな。それじゃあ、爺さん、俺と爺さんとフレッドで、シュトラウス將軍のところに出向こう。先触れを出すべきかな？居ないと不味いしな」

「彼奴は、基本的に家から出ないらしいから、いきなり行っても、大丈夫だろうが。王に行幸を願うと言うわけか。彼奴を王宮に呼んだ方が、よいと思うぞ」

そう言うと言う事は、先王も王宮に呼びつけていたのか。

「ダメだな。古来より、軍を差配する者の気位は、王侯よりも高い。そこを酌んでやれないようでは、勇將は居つかないよ。それに、愛に生きる一族なんだろ、こちらも情熱を持って行こう」

「よし、略式ではあるが、私の王就任後、初の行幸は、シュトラウスの所で決めよう。行くのは3人で良いのか。リヒテンシュタイン

には此方でこなして貰いたい事が多いが」

フレッドは、今回の事を決定したようだが、リヒテンシュタインの爺さんの立場がどうなるかだな。

「フレッド、爺さんは、今後国での立場はどうなる？宰相にでもするのか。その辺りの所で、爺さんが要るかどうかが決まるぞ」

「リヒテンシュタインは、儀典長だ。それ以上は周りが納得せんだらう。現職の、宰相も要ることだし」

「納得はさせるんだよ。現職がここに呼ばれていないと言うことは、そいつはほんくらって事だろ。爺さんは、生きてるうちに使え。早い所、弟子でも育てておいて貰わないと、お前が将来困るぞ。後進や助役のいない機構は、1回崩れ出したら怖いぞ。あつという間に腐ってお終いだ」

「アルト、そんなに年寄りを、こき使うものではないよ」

「やかましい。爺さんはきっちりと、後進の壁になって、弟子を育てて、弟子の成長を見守って、弟子が一人前になったら休めば良いんだよ。人間が一人前になるには、時間が掛かるんだから、あと30年くらいは現役で居る。そうしたら、休もうが死のうが爺さんの勝手だ。あと30年しかないんだぞ、その短い時間を楽しめよ爺さん」

爺さんは、呵々大笑して、腰を曲げている。

「クアーハツハア。成程、たった30年か、そんなに短いのなら急がねばのお」

「フレッド、どうするよ。爺さんはどうやってこき使った。なあ王様」

「王様と言つのは止めて下さい。では、リヒテンシュタインは宰相として、国家の重責を担え、国家を支えて後進を育てる。そして、30年などと短いことは言わずに長生きしろ。経験豊富な良臣は、何人居ても困らない」

「話はまとまった。国王陛下と、宰相閣下と、哀れな一平民の俺で行くぞ。だが、フレッド冗談くらいは流せ。少なくとも他人が多い所では、きちんと臣下の礼を取るぞ、俺は」

フレッドは、まだ何か言いたそうだったが、俺と爺さんは、そのまま扉に向おうとした。すると、背後から声がかかった。

「師匠、チョット待ってくれ俺も連れて行ってくれ」

いきなり、バイエルラインが、申し出てきた。相変わらず、師匠と呼んでいる。めげない奴と言うか猪突猛進な奴だ。

「何でだ、護衛なら必要ないぞ」

「弟子は、師匠について行くものだ。違うか、師匠」

こいつの場合は、憑くという感じかも知れんが。

「お前は間違いを犯している。俺はお前の師匠じゃないし、お前は俺の弟子じゃない。試験を言ったろうが」

「それなら今すぐ試験をしてくれ、師匠」

どうしたものだろうか、まだ考えてなかった。現状では、弟子と言
うか副官みたいな者はほしかったが、こいつは副官には向かないし
なあ。弟子か、まあ物は試しだな。

「分かったバイエルライン。それでは、その暖炉にある薪を、1
本取ってくれ。それから、今からやる事をよく見ておけ」

俺は、受け取った薪を軽く投げる。落ちてきた薪に、ゆったりとし
た単把をこめる。薪は跳んで行くことも無く、暫く手に吸い付いた
かのように動かず、その後重力に負けて落下した。

その場の全員が、訝しげにしている。俺は、バイエルラインに、薪
を確かめさせる。

「この薪、よく見てみる」

床に落ちている薪を、手に取ったバイエルラインの顔が、驚愕にゆ
がむ。

「グサグサに、薪が、グサグサになっている。手でも握り潰せるく
らいだ」

「俺の手から生み出した力を、全て薪の内部に留めた、その結果が
それだ。これは、俺の武の中で、まさに象徴的な技法だ。シュトラ
ウス将軍の所から帰ったら、試験をしてやる。お前の持っている技
の中で、これこそがおまえ自身を表す、と言う技があるだろう。帰
ったら、それを見せてみる。それが試験だ」

「いやー、アルト、思っていたの、10倍は強い。超人かのお」
爺さんが、面白そうに答える。

「何を言ってるんですかね、ご老人。俺は凡人だよ、凡人。才能なんて無いさ、ただ、阿呆みたいな修行をしたただけだ、それだけなんだよ。チョット特殊な環境で、訓練できただけの凡人さ」

「ふうむ。そんなもんかのお。まあ、武はわしの専門ではないし。では行くかね、王よ」

「ああ、シュトラウスを、口説きに行くぞ」

会議その一（二はまだ未定）（後書き）

御意見御感想、お待ちしています。

誤字脱字などもあつたら報告していただけたらうれしいです。

本当は自分で見つけなければならぬのでしようが、難しいのでお願いします。

昨日更新できなかったので、何とか今日中に行きました。明日は…
できるのかな？

戦いのための戦い 戦わないための戦い

ヴェルギエール・シュトラウス、彼の家に向かう馬車の中で、フレッドはもう一度尋ねてきた。

「アルト、やはり貴方が、総将をするわけにはいかないのか？」

俺は、瞑っていた目を開き、爺さんの方を見る。

「なあ、爺さん」

「何じゃね？」

「今回の、ジギスムントへの親書。内容はなんて書いた？」

爺さんは笑っている。ようやく気付いたのかとでも言いたそうだ。すまないね、出来の悪い弟子で、本当に俺の周りには教師が多い。

「特別、何も書いてはおらんよ。王が代ったとだけ、書いておいた」

おれは、フレッドの方に向きなおした。

「これが答えだな。俺は、大戦略、国家戦略に関しては、素人だ。能力も経験も無い、この経験と言うのは大きい。全てにおいて能力が勝っていても、経験の差で負ける、と言うことは多い。この、経験豊富な爺さんの推薦だ。それだけで、任せるに足る人物と言うことさ。この爺さんは、人を食った教師だが、その分能力があるからな」

フレッドも、気が付いた様だ。

「ジギスマントとの件は、知らぬ存ぜぬを通すと言う事か？」

「まあ、現状はそれで時間稼ぎだな。その場合怖いのは、ミリアだけでも、と婚約の件を出してくることだが。如何したものかね」

なあ爺さん、とばかりに爺さんを見るが、また静かに笑っている。答えを、軽々には出してくれないようだ。

「ミリアに、婚約者でもいれば話は違うんだが。どうかなあ、体調が優れない、と言うことにでもするか？この辺りかなあ」

爺さんの顔は、変わらない。ちょっと違うと言うことが。

「あ、単純に、喪にふくすで良いじゃねえか。爺さん、この国では、大体どの位の期間で喪が明けるんだ」

「そうじゃの。半年から2年くらいかの。状況などによっても違うが、1年くらいが相場かのう」

「それじゃ、その辺だな。ついでに、教会辺りに取り入ってもらえれば、言うことなしだな。実際の問題として、教会ってどうなの？国への影響は？」

「教会は、基本的には中立です」

「建前としては、じゃな。実際には、金払えば手伝ってやる、て所かのお。あいつら金にがめつくての。ただし、お前さんが思うほど、他国に関しては影響が無いの。教会同士の争いも無い代わりに、教

会のまとめ役と言う者も、今は存在せんからの。あれは、神が直接任命するものじゃから」

めんどくさい話だな。まあ、健全な宗教が残ってるのは幸いだろう。腐れた宗教は、お話にならん。百害あつて十利位しかない。この十利つてのが曲者だ、百害あつて一利無しなら、そんな物は即座に破棄できる。しかし、誰かに対して利があると、それは難しい。その利が、目に見えやすい物なら尚更である。

「まあ、しがらみは少ない方が良いが、教会の、一般人に対する影響力は大きいしな。少なくとも、少しの間は行って貰うか、名目だけでも」

「まあ、その辺りは爺さんに頼む」と言っている内に、シユトラウスの家が見えてきた。元とはいえ、一国の将軍が、住んでいる様には見えない家だった。館ではない、家だ。

消してみすばらしいと言う事ではないが、可愛らしい。そう、表すならば可愛らしいだろう。こまごまとした、花が植えられた花壇。全体的に白でまとめられた壁と、赤っぽい色の屋根。曲線を多用して造られた壁面には、緑の蔓で作ったリースが飾られている。

「中々可愛らしいお宅だな」

「ですね」

「まあ、ここは別宅じゃしの。奥さんの趣味じゃろ」

「まあ良い。爺さん、挨拶の方を頼む」

「うむ」

トントントン

扉を叩くと、中から女性が出てきた。40代だろうか、物静かな感じをつける女性だ。

「やあ、シンシア嬢、お久しぶり。ヴェルギエールは在宅しておるかね」

「まあ、先生、こんな所まで態々どうも。ハイ、あの人は、何処へ行くという事ありませんわ。それから先生、私は、もう50を過ぎましたので、その呼び方は、恥ずかしいですわ」

「ふおつふおつ、学園のアイドルは、何時まで経ってもアイドルじやよ。同じく、教え子も何時まで経っても教え子じや。まあ良い、今日は、ちと用事があつての、あがらせて貰えるかの」

「ええ、どうぞこちらに、今主人を呼んできますので」

三人並んで、客間らしき部屋へ入る。

「爺さん、学長だったのは知ってるが。シュトラウスご夫妻も教え子だったのか？先に言っておいてくれないか、先生」

「お前さんのような、可愛い生徒ならぜひ欲しいが。爺さんのほうが良いのう。もう10年近くも、教壇には立っておらん。さつさとこの老人を、楽隠居させて欲しいもんじや、私塾を開こうと思っておるのに、そんな些細な夢が、一向に叶わん」

「いや、私塾はさつさと開いてもらった方が良いな。と言うか、国家的な教育制度改革をやるつ。10年では足りないかもしれないが、30年後には大きな成果が出る」

フレッドが驚いたように、遮ってくる。

「教育制度改革は結構だが、これから直ぐにでも、戦争になるかもしれないという時に出来るのか」

「戦争にはしない。させない為に今日ここにも来た」

俺は、後ろを振り返りつつ、続ける。

「戦争を起こさない為の戦いなら、戦って頂けますか？シュトラウス将軍」

「可能だと思っているのかね」

将軍と言うよりは、教授。教育者と言った初老の男が立っていた。

「それを、話し合いに来たんですよ。将軍」

シュトラウス将軍は、白銀の長髪を後ろに流し、丁寧に整えられた口ひげを持つ男だった。長身ではあるが、細身の体つきで、軍を率いる人間とパツと見ではわからない。優しそうな教授と言った印象を受けるが、その目は鋭い。

「まずは、久方ぶりにお目にかかります、フレデリック新王陛下。このような所への行幸、光栄の至りでございます」

フレッドも返礼を返す。

「久しぶりですね、シュトラウス將軍。今日は、貴方をお願いしたいことがあつてきました」

「お願いですか」

ゆつたりと息を吐き、フレッドの眼を見据えて言う。

「命令ではないのですか」

「私のような若輩者が、貴方の様な歴戦の英雄に、命令などは出来ません。いえ、する日も来るかもしれませんが、それは今ではありません」

フレッドは、その鋭い眼光を真正面から受け止めて応えた。

シュトラウスは、爺さんと目配せをすると、失礼と一言良い、自分もソファーに座った。

「それで、私如きに、お願いとは何でしょうか」

「貴方のやろうとされていた、軍制改革を再開して下さい。私達は全面支援します。細かい話は、ここにいるアルトと話して決めれば良いと思っています」

「君がアルト殿か。先ほどの、戦争を起こさない為の戦いと言い、軍制改革と言い、君は何者だ」

「アリシアさんご推薦の冒険者、現在の立場は助言者兼護衛、そんな所でしょうか。貴方の質問に答えるには、あまりにも多くの時間が掛かる。説明するのは構いませんが、今はちよっと時間がありますので」

俺としても、苦笑するしかない。一体どんな説明をすればいいのか判らない。フレッドたちは、なぜか受け入れてくれたが、自分としても、人に離して信じてもらえるとは思わないのだ。それでも言うて置かなくてはならない事はある。

「自分でも、妖しげな事を言っているが、これだけは言わせて頂きたい。俺は、自分が世話になった人は裏切らない、俺はアリシアさんに世話になった、そのアリシアさんの娘のメイリンと、彼女の友人であるフレッドとミアも裏切らない。そこだけは、言うておきたいと思う」

「そうか、それならば良い。それに、ここに先生がいるということ、先生も君を認めていると言うことだ」

爺さんが静かに頷く。

「チヨット経験が足りないがの」

シュトラウスは、さも嬉しそうに笑う。

「先達にとって、後進とは常に若輩です。経験が足りないだけならば、経験を積みばいいのですからな」

「うむ、経験を積みば、お前さんの娘の婿にちよつとよいぞ」

急にシユトラウスが顔色を変える。

「娘は何処にも嫁ぎませんし、婿も要りません。私の娘に、見合いを斡旋するのは止めて下さい」

「いい加減に諦めたらどうじゃ。娘はいつかは嫁ぐものじゃぞ、もう24ではないか、お前の教育の所為で、騎士道一本槍のような娘に育ってしまったのじゃぞ」

話が急に国家の大事から、親ばかお父さんになってしまった。話には聞いていたが、実物は始めてみる。大変だなあ娘さん、何にしてもこのままでは始まらないので、話を戻す。

「娘さんはどうか知りませんが、私も結婚するつもりはありませんし、話を戻しましょう。と言いますか、巻き込まんでくれ、爺さん」

「おお、すまんの」

「將軍、話を戻しまして、貴方の書いた計画書、読ませて頂きました。ですが、あれはかなりの妥協案ですよね、今ならば、邪魔な貴族軍は無く。貴族の力も抑えられています。さらに王も代り、改革の節目としては最適です。そこで貴方の計画案を、さらに推し進めて実行に移したいのです」

俺は、城の資料室で見つけてきた、以前將軍が提出した改革案の写しを、テーブルの上に置いた。俺から見ても良くできた物で、しかも、周りに対する配慮も忘れていない。実際に10年前に改革が行われていたら、先の戦とやらも、十分に余力を残して勝っていた可能性もある。

「確かに、状況としては、いいだろう。だがそれが、どうやったら戦争をしないための戦いとなるのかね。今現在、ジギスムントとの状況が、悪いことくらい、私でも知っている」

「貴方に軍制改革を任せ、貴方を軍のトップ、私は、騎士総将と呼んでいます。それにすると、戦争を起こさないための戦いは、別物です。将来的には、それも大きな力となります、しかし、現在のジギスムントとの事は、外交のみによってかたをつけるべきです」

「それではなぜ、外交で問題を解決してからではないのかね。そちらの方が急務だろう」

「一つは、王、フレッドの名声を高めるためです。軍制改革は進めますが、その申し出はあくまでも、王が行ったとします。英断をする者と言うのは、高い評価を得やすいものですからね」

フレッドが、何か言いたげに体を起こすが、手で制する。

「二つに、ジギスムントに対する牽制です、こちらは、軍備を増強する事も厭わないと言う事実を、外交のカードとして使いたいのです。ですが、実際に人員を増やしては、無駄にあちらを刺激するでしょう。ですから、軍制の改革なのです。人員を増やすことなく、装備とシステムで他国を圧倒する。戦うのに不利と思わせ、抑止力とする」

反応は無い、まだ待っている

「最後に、貴方のもつコネクションがほしい。これが一番大きな理由です。貴方が長年培った人脈、出来れば若い者の人脈が欲しいのです。貴族からは、あまり好まれていなかったかもしれませんが、

実働の現場での人気は、非常に高かったと聞いています。その人脈と人気が欲しいのです」

俺は、話し終えた。暫くは静寂がその場を包む。

今、ここでの返事は、貰えそうに無い。今は、考える時間を取るべきだろう。

「これは、俺が、フレッドに提出した改革案、その原文です。せめて、これだけでも読んでみてほしい」

- 待て -

立ち去ろうとした俺を、シュトラウスは呼び止めた。

「本当に、抑止力などが、戦わないための力になるのだろうか。お互いに牽制しあい、余計に争いを生むのではないか。」

それに、と言葉を飲み込んだ。確かに貴族の力は弱まっただろう。今なら改革も進めることができるのかもしれない。だが、軋轢は必ず生まれる。それによって傷つく者も出る。最悪、国自体が崩れ、多くの人間を不幸にする。

「軋轢争い動乱、いろいろな問題は生まれるでしょうね」

「ならば」

「しかし、それでも回避できる可能性は、上がるかもしれない。そこに賭けることも無く、戦に進む道を歩みたくはない。掬えるかも知れない可能性を、無くしたくは無い。ただ、それだけだ」

「戦なんて物は、権力者の玩具だ。それを理解した上で、それを言うのか。それを管理しようと言うのが、傲慢だとは思わんのか、虚しいとは思わんのか」

「だからこそですよ、將軍。その被害が一般人に向わないのなら、私は何でもしましょう。暗殺謀殺、罠にかけ殺し、毒をもって潰し、誰かを囚にするかも知れない、人質を取るかもしれない。それでも、私はかまわない」

フレッドが息を呑み、爺さんは何も言わない。將軍は俺の眼を只管に見てくるだけ、俺がさらに言葉を続けようとした時、フレッドが割って入ってくる。

「貴方にそんな事はさせません。正面から皆を平和にします。皆が楽しく住める国にしたいのです。得に貴方は、幸せに成らなくてはならないと言ったでしょう」

そう、願わくば、そうなってほしい。

「無理だな、それは無理だフレッド。お前は俺を必要だと言った。俺は全霊を込めてそれを助け護ると誓った。俺もお前も、そして貴族も軍人も、そこに居る爺さんも、シュトラウス將軍も、戦う人間だ。戦う義務がある、貴族に指導者、王族何らかの国家の恩恵を受ける者。彼らは戦う義務がある」

権利を受けたのだから、既に報酬は前払いされている。

「軍人も貴族も王族も、そして政治を司る者も、全て何も生み出さない。農民や商人職人、その他の一般の民の生活の上に立つ寄生虫

だ。貴族や王族は税金で、軍人も同じだ。だから死ぬ事も仕事のうちだ。殺されるのも義務のうちだ。それが分からないような人間ならば、自分で何かを生み出して働けば良い。そうしないのなら、義務を背負うべきだ」

実際には、出来ていない者が大多数だろう。思ってもいない者が多いだろう。だが、知ろうが知るまいが、義務は肩に乗っている。

「ならば、その義務を負う者だけで戦うんだ。それを俺は厭わない。戦争の前の戦争を。戦争を起こさないための戦を俺は厭わない」

俺は行動を躊躇わない。シュトラウス将軍に視線を向ける。

「これは、巻き込まれた者の復讐です。私は26歳です。まだ26年しか生きていない若造です。ですが、私は23年と言つ月日を、戦場で過ごしました」

俺の心の奥底にたゆたう泥濘が、俄かに沸騰する。静かに静かに煮え立って行く。

「何人殺したのでしょうか？」

「何人が死んでいったのでしょうか？」

「何時まで続けなければならぬのでしょうか？」

「私はもう飽きたのです。その虚しさに比べれば、私の戦争への復讐は、無体な国家に対する復讐は、愚かな為政者への復讐は、私にとって意味を持つ。そう、はるかに価値がある」

「私は、私は此処に来てはじめて叫ぶのです。そうあれかしと。そうであつてはいけないのかと。私は平穩を願いたいのです」

周りを囲む皆が、顔をゆがめている。情けない話だ、何処まで行つても悲しい話だ。私はまたしても愚痴を言つてしまった。黒い気持ちを垂れ流してしまった。

「つまらない愚痴を言いました」

俺たちは、彼の家を去り城へ戻つた。

戦いのための戦い 戦わないための戦い（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

敵と敵 内の敵

「アルト。その、その、なぜ貴方ばかりが、非難の矢面に立つような事をしようとするのですか？私も、私達もそれぞれが出来るはずです。貴方ばかりが、つらい事をしなくてはならないなんて事は無い。無いはずですよ」

城に戻る途中、馬車の中でフレッドは声を荒げた。俺は、言うべきかと爺さんに問いかける。だが、爺さんは目線を返してきただけで、何も言おうとしない。俺はため息をついて、馬車を止めさせた。御者を残し、脇の小路に爺さんと連れ立って歩き出す。フレッドは後をゆっくりと着いてきた。

静かな小路は、左右に畑が続き、農夫が子供達と畑を耕している。その妻だろうか、女性が大きく手を振っている。穏やかな田園の風景、遠くから見れば幸せと平穏を絵に描いた様な世界だ。だが、そこに真実が見えてこない時もある。

「フレッド。平和な景色だな。どう思う？」

「この景色を護らなければと思います」

確かに、平和な良い景色だ。フレッドにとっては、まさに決意を新たに、とでも言う所だろう。だが、言わなくてはならない。

「誰かが、憎まれ役をかってでなければ、彼らに戦禍が訪れる事もある。単純に餓え、下手をすればあの親と子が合い争うことにもなりかねない。なぜだと思う？なぜそんな事が起きると思う？」

「貴族ですか？」

顔には苦渋のしわが浮かぶ。フレッドは賢い、理解はできるだろう。だが、同時に自分の非力さにも気付くのだろう。俺も、いや誰であれ、どうしようもない出来事を直視した時、そこで感じるのは無力感だ。

「自分でも信じていない事を、人に投げかけても、騙せはしないぞ。いや、人は誤魔化せるかもしれない、騙せる時もある。だが、自分は騙せない」

言葉が詰まり、顔を赤くして俯く。周りの木々を揺らす風が、別世界のように俺たちを隔てている。僅かな距離にいる農夫達と、自分たちがいかに違う場所にいるのかと。

「貴族が立ち上がる時、その多くは利益で動く。だが、国民が動く時は何だ？彼らは何で動く、何を望む」

「愛国心」

横で、泰然自若と佇む爺さんが怨めしい。

「だから、生贄が必要なのだ。貴族にも、糞みたいな貴族にもその矛先を向けてもらう。だが、どんな場合でも、成功の中にあっても怨みやねたみはどこかに向く。その時の矛先が必要になる。俺がそれになれば、都合が良い」

「それは、終局的に貴方を敵にになってしまう事になりませんか」

そこで、初めて爺さんが口を開く。

「国家に敵も見方も無いのじゃよ。敵をも利用し、同胞に足を引っ張られ、敵の敵が敵であったり、その敵はやはり敵であったりするならば、その場で有用かどうか、それしか判断の基準が無いのじゃ。終局などと言つものもない。足を踏み固めて、道を歩き出した時から、投了も終点も無いのじゃよ。じゃから、死ぬまで頑張ると言う事だけじゃ」

「子供の目標みたいじゃがお」と爺さんが笑う。

「ガキだろうが餓鬼だろうが、変わらない世界だから、構わんさ」

最近この爺さんと笑いあふ事が多い。周囲に年寄りが多過ぎるのは気になるが、自分としては嫌いではない。

「フレッド。俺は覚悟している。爺さんも。そして今後、お前に従う人間や、お前が護るべき人間は増えていく。だからお前も覚悟しろ、最悪の場合を考える癖を付ける。時には切り捨てる覚悟がいる。それは必要になる」

情けない話であるのは、間違いない。それでも、それがつまらない現実なのだろう。

「私は認めない。理想を持ってそれを、その道を行けないのなら、王である価値などありません。だから、切り捨てる選択は一番最後です。それを選ばないための努力を最優先します」

言い切れるのが幸せか、それとも不幸なのか。

理想を追いきれなかった時、どうなるのか。何に絶望するのか。

自身にか？

他人にか？

それとも世界にか？

だが、その道を歩むと言うのなら、何も言わずに居よう。

いつか、言葉を変えなければならぬ時が来るかも知れない。曲げるべき時も来るだろう。だが、折れないように見守っていこう。

問題は、俺が先に折れてしまいはしないか、と言うのが心配だが。まあ、そこは自分で頑張ろう。

「ならばそうしろ」

俺は、先ほどの農夫達を指差した。仕事が一段楽しんだのだろう、皆でお茶を飲んでいる農夫の家族達は、幸せそうだ。

「彼らを護り、災禍から護れ。割らず、危険を感じさせず、また不安を抱かせることなく、あの平穏な光景を護りぬけ」

いつか、あの光景を羨望をむけることなく、穏やかに見れる日が来るのだろうか。嫉妬とも違うどこか後ろ暗い気持ちと、黒い衝動を感じなく来る日が来るのだろうか。その時は、俺は幸福を感じているのだろうか。その日が来て欲しい、その日々を酷く待ち遠しい。

「アルト、大層な者を護る事にしたのぉ。わしもお前さんも大変じやの」

爺さんの笑いは快活だ、俺はどこか笑いきれない感情を隠して笑みを作る。

「応」

爺さんには、ばれているだろうが、フレッドの気持ちを大事にした。情けない話だ、本当に情けない。俺はまだ振り切ってはいないのだ。過去の俺は、未だに足元の陰から手を伸ばす。何時までも伸ばして来る。

「爺さん、楽しく生きよう。望みはその位だ」

「そうじゃな、嫁でも見つけるか。その歳なら結婚も考えんと。趣味はどんな娘じゃね？教え子には美人がいつぱいおるぞい」

「爺さん、それはよけいだよ」

「後で後悔するぞい」

空気が途端に軽くなったが、同時にしまりも無くなった。

よく分からないまま馬車に戻り、城へと帰る。

城に戻ると、城の中がざわついている。ちなみに、俺や爺さんは面倒な事も多いので、城へは裏口を利用して出入りする事が多い。ところがフレッドは王なので、面倒であっても正門から、皆に傳かれながら入城する。フレッドは、後々廃止していくつもりのようにだが、現状はそんな細々した所まで手が回らないので放置している。

「おお、新王陛下。この度はお目にかかれまして、まさしく恐悦。申し訳なくもご挨拶が遅れてしまいました。どうかお許し下さいますよう」

深々と礼をする男がいた。

年の頃は、30代も後半というところか。細身の体つき、どちらかと言えば長めの髪はオカツパとでも言うのだろうか、一直線に整えられており、無駄に光っている。美男子といえばそうなのかも知れないが、華美な衣装と芝居のような動きが、軽薄さを。そして、やたらと動く目とまくし立てるような早口が、小心さを表している様に見える。

前の方で、フレッドにしきりに話し掛ける男は放置して、爺さんと話していた。フレッドから視線がきてはいたが、そちらも放置しておいた。

「誰だ？あれ」

「先だつて話に出てきたリユーベック家の倅、いや、今の当主じゃよ」

「例の恋愛争奪で負けて嫌がらせしてた所か。爺さんのご意見は？」
とりあえず、問題の多そうな家なので、一応聞いておいた。

「まあ、彼奴はただのお飾りじゃからして、たいした問題にはならん。問題は先代かの。言うておつたように、貴族派のまとめ役じゃ」

「当主じゃないのか？」

「うむ、あの王子のお妃様があそこの家のお出で。まあ、それをする代わりに、野心の多かった先代を引退させて、まだ子供の彼奴を当主にしたのじゃが」

「裏からでも、十分な影響力を残したと。そして奴は傀儡という所か。確かに、幾らでも代りは居そうだな」

「まあ、そう言う事じゃの。黒幕をやっておるエルンハルト・リユーベックの誤算といえば、その妃になったエルエネイア様の事ぐらいただたんじやろう」

フレッドとミリアの母親にあたる人か、見てはいない訳だが、もう亡くなっているのか？

「誤算とは？」

「うむ、子供を生んで、性格が逆転と言っても良いほどに変わって

の。ただ只管子煩惱な母親になった。おかげで、お二人も良い子に育ったわい。政治方にも興味を完全になくされての、むしろ嫌いになっておったようじゃて」

「そうか、良い母親だな。ぜひお会いしたかった」

「そうじゃの、良いお方じゃった。多少過保護であったことは否めんがの」

二人が、真面目で能力の面でも問題無く充実しているのに、どこか抜けているのはその辺りが原因かな。まあ、十分な親の愛が受けれたならそれで十分だろう。

そのまま、30分程も経つただろうか。ようやくその男は去って行った。去り際にまで芝居のように、大きな声で愛国を唱えて行ったが、何処までも嘘くさい。まるで色紙の様な男だ、薄っぺらで、周りだけは派手で、使い道も少ない。

「助け舟くらい出して下さいよ」

フレッドは非難の目を向けるが、どうしようもない。

「無茶を言つなよ」

「無理じゃな」

さらりとあしらう俺と爺さんに、フレッドがため息を吐く。まあ頑張れ。

とぼとぼと歩くフレッドと、その後ろに続く爺さんに先んじて、部

屋の扉を開ける。

「まだまだだな」

扉を開け、声を掛けた瞬間に、上からバイエルラインが飛んできた。扉の上の飾り窓から、廊下を歩く俺たちの位置を確認し、急襲してきたのだ。

短めのグレイブを構え、天井を蹴って加速をつけたバイエルラインは、俺の肩口に切っ先を向けた。俺が、横に動き避けると、床で反転足元を薙いで来る。さらに跳躍してかわす、足元で急停止した切っ先が、股間を目掛けて突き上げられる。

「だが、甘い」

グレイブの柄の根元を踏みつける。動きを止めたバイエルラインが、柄から手を放し後ろに跳躍、同時に俺も同方向へと跳ぶ。抜き打ちに、腰の剣で切ってくるバイエルライン。だが、距離がまだ遠い。こちらも、刀を抜こうと腰に手をかけたその瞬間。

口からふくみ針が飛ぶ。味な事をしてくる、射線上には爺さん達がいる。避けずに刀で打ち落とす。既に手がなくなったのだから。そのままがむしやらに、切り込んでくる。

「中々良かった」

が、中々止まりだな。手首を打って剣を落とさせ、顎に当身を入れる。両腕の肩口を打って痺れさせ、足を踏んで動きを止める。

「確かに中々良かった。まだ手はあるか」

「ありません」

悔しそうに、応える。

「そうか、それでは、合格だ」

頸動脈に指を添え気絶させる。最後の言葉は聞こえたようで、満面の笑みで気絶した。

「誰か呼んでやって、いや、俺が運ぼう」

そのまま、寝室まで運んでやる事にした。

フレッドは、何が起こったのかと、未だ呆然と見ていた。

敵と敵 内の敵（後書き）

一寸難産。

結構変わりました。どんなもんでしょうか？

次は、もう少し早く行くと思います。

御意見御感想、誤字脱字など何でもお待ちしています。

ぜひぜひ、お願いします。

セシリエル

俺は、達人に憧れていた。超人的な、圧倒的な、そんな力を、個人で持つ者に憧れていた。

幸いにも、俺の家は、代々続く武門の名家で、望めば様々な達人に会うことができた。彼らに、教えを請う事も出来た。才能もあつたらしく、18の時には一端の戦士だった。

しかし、そうやって合っていった人たちも、俺が望むような達人ではなかった。確かに、現状では勝てないような人も居た。それでももう少しで届くとか、幾つかの策を持つてすれば、勝てるような人たちだった。

違う。俺が望むのは違う。もっと強く、圧倒的な、そんな技能、そんな力。

だが、何時しか俺は諦めていた。そんな御伽噺の様な人間は居ないのだと。

それでも、武への興味を捨てきれなかった俺は、親の推薦もあり、国立の学院へ入学した。授業の片手間、冒険者ギルドにも出入りし、ランクもこの歳としては高くC級まで上げた。仲の良い友人も出来たし、フレデリック殿下とも知り合え、何と恐れ多くも、友人になることが出来た。今では、何とか友人のように付き合えるが、最初はずっと緊張していた。今でも、様は着けてしまっ、あまり、そのような言い方は、好かれてはいないようだが、仕方ない。

学院へ入ってから三年目、気になる娘が出来た。貴族ではないのに、

この学院へ入れるのだ、何かしらの力か才能はあるのだろう。それでも、そうであっても、守りたいと思った、守っていきたくらいと思っただ。明確な、目的をもてなかった俺の武、その目標が見えたように思った。何者からも、彼女を守れる力を欲した。

その後、俺は何とか、その娘と仲良くなることが出来た。あくまでも友人として、または、学院の先輩として。フレッド様にも紹介した、その時、たまたま居たミア様と、親友と言えるような間柄になってしまったのには驚いた。メイリンの親を、見知ってはいたらしいが。少し嫉妬すら感じたものだ。それほど仲がよいのだ、ミア様とメイリンは。

その後、フレッド様は、実の父によって命を狙われ、ミア様にも危機が迫った。俺は勿論、メイリンも友人として、そしてこの国に生きる人間として、二人を助けた。その馬鹿王子の事は、国民なら誰でも知っている。

二人を助け、活動を続けていた俺たちだったが、限界は直ぐに訪れた。

いかに王族であり、支援者も居たとは言っても、相手は実質の国家支配者。活動は行き詰まり、起死回生の行動が求められた。そのため、助っ人を頼むため、メイリンが故郷へ赴くと言うことになった。

彼女の母親は、以前は有名な冒険者で、現在はギルドの支部長をしているそうだ。コネクションも持っていて、フレッド様やミアの信頼も厚かった。

出来ることならば、この俺が護衛についていきたくしたが、俺は

かなりマークされていて、余計に彼女に危険が迫ることになりかねなかった。せめてもと、王都で引き付けられる限りの人員を、引き付けはしたが、心配だった。ありがちな言い方かもしれないが、胃が溶けて消えるかと思った。

無事に彼女が帰ってきたと、連絡があり、即座に向かった。はやる気持ちで彼女の方を見ると、見知らぬ男の横でにこやかに笑っている。

誰だ、あの男は、あんな弱そうな男が助っ人か。

その男の言う作戦は、到底許せるものではなかった。たった一人でフレッド様ミリア様の二人を守り、誰にも見つからずに王城の中を進む、そんな事が出来るはずがない。それこそ、昔俺が憧れた達人でなければ。

そんな事は信じられない、そんな事はあるはずが無い、人間には無理な話だ。

そう思い、その男を睨み付けていると、男はゲームをしようと言い出した。そのゲームが馬鹿にしている。こんな狭い部屋で、俺にあといつを見失うなどと。見失う何処ろの話じゃない、俺が取り押さえてやる。

男が消えた。声だけが聞こえてくる。一、二と。その声が聞こえた方を向くだけで、俺の目にはその姿は映っていない。三、後ろから声が聞こえた。首筋に当たる感覚、驚愕で動かない頭、まだやるかと聞かれ、ただ首を横に振ることしか出来なかった。

あんな人間が実在したのか、桁が違う。到底手が届かない。遙かか

なたを進んでいる。あんな人間に、俺も成りたい。守れる力を手に入れたい。

そのまま、矢も盾もたまらず走り出した。何が言いたいのか、何が聞きたいのか、何をしようとしているのか。部屋の前に到着してもわからなかった。何が、何が、何が俺の望みなんだろう。扉を開けて声に出た言葉は、俺をかえって安心させた。

師匠、俺を弟子にして下さい。師匠、お願いします。

頼み込むと、師匠は試験をしてくれるといつてくれた。なんていい師匠だろう。

師匠は当たり前のように、作戦を成功させた。師匠なら、勿論簡単なことだ。

ところが、師匠は、作戦が成功した後、倒れたらしい。様子を見たかったが、皆から止められた。俺にも少なからず、任された仕事もあり、どうしようもなかった。

その後、師匠は回復したが、フレッド様に呼び出され、注意を受けた。

「バイエルライン、お前は、アルトの弟子になりたいそうだな」

「はい」

「今回、彼が倒れた事情などは、一応俺たちは聞いた。だが、それは、とても大きな彼の過去に起因する。彼自身、自分が不安定だと言っていた、それでも、弟子になる気持ちには変わらないのか？」

「関係ありません。私は、あんな凄い事が出来る人間を、師匠を、尊敬します。憧れています、その気持ちは、曲がる事はありません」

「そうか、だが、彼とて万能ではないし、弱い部分も有る。ほかの人間よりは強いかもしれない、それでも彼は、弱いと知っているかもしれない。そのことだけは、忘れてはいけないと思う。私も、彼にはいつい、頼りそうになってしまいうからな」

「はい」

回復した師匠は、会議にも出席された。会議では、個人の強さではなく、政治と軍制改革にまで言及された。こんな、多岐にわたる知識と技能を、持ち合わせた人間を、俺は知らない。ますます、尊敬の念を深めた。

同時に、メイリンが師匠に惚れてしまったら、どうしようと思った。話に聞けば、やはり道中襲われたメイリンを、師匠が颯爽と助けたらしい。惚れてもおかしくは無い、師匠はどう思っているのだろう。話の流れで、シュトラウス將軍を、師匠とフレッド様自らが、召致におもむくらしい。自分も一緒に行く、といったら断られた、なぜだ、弟子は師匠と共に居るべきだ。

そういうと、試験がまだだと言われた。ならば、直ぐに試験をして欲しいと願うと、師匠は、薪を一本手に取った。

師匠が、軽く投げた薪に、ゆったりとした動きで、手を当てる。何事かと思って見ていると、薪を確かめてみると言われた。

ありえない。動きには注視していた。力が加わるような動きは無かった。薪も、その場で落ちたはずだ。どうやったらこんな、繊維の一本一本が、ズタズタに裂かれるような、握り潰せるほどに、グサグサにしてしまえるのか。

- 俺の手から生み出した力を、全て薪の内部に留めた、その結果がそれだ。これは、俺の武の中で、まさに象徴的な技法だ。シュトラウス將軍の所から帰ったら、試験をしてやる。お前の持っている技の中で、これこそがおまえ自身を表す、と言う技があるだろう。帰ったら、それを見せてみる。それが試験だ。-

師匠たちが、部屋を出て行く。俺は、ただただ呆然と、その薪を見つめていた。

俺は考えた、どうしたら認めてもらえるかと。

俺の武、その象徴、わからない。

ただただ、強くなりたかった頃。

守りたいと思っただ頃。

そのどれもが、力を鍛え、技を磨いた。

だが、それだけだった。

まさか、こんな所で、それが大きな障害となるとは。

どうしたら。

どうしたら。

遅くとも今日中には帰ってくるだろう。それまでに、何かの答えを見つけないではならない。師匠は、何をもってして、俺を認めてくれるのだろうか。

どうすれば、真に弟子と認めてくれるのだろうか。

今時10代で結婚する人は稀少って言うかワケありだよな。違うの？後ツイで
「走って来い」

気絶から目覚めたバイエルラインに、最初の修行課題を与えた。

「はい、何処まででしょうか」

「フランだ」

「……」

無言ではあるが、嫌そうな雰囲気、返ってくる

「聞こえなかったのか。フランだ。フランまで走って行って帰って
来い」

「フランまでは、片道57里ほどあるのですが」

「ああ、祝式は使わず、3日で戻って来い」

「無理ですよ、殺す気ですか」

「簡単だろ、1刻5里走れば大体23刻、二日で無いだけ感謝しろ」
なんて優しいんだ、俺は。

「そんなキツイ話は聞いたことがありませんが」

「俺は経験してる。大丈夫だ、死ななかった」

「ですが」

まだ、何か言うことがあるのか…しょうがない、説明してやるか。

俺は、書き物をいったん止めると、机に、新しい紙を一枚置いた。

「一寸説明してやる、聞け」

「ハイ、師匠」

居住いを正すバイエルライン、こう言う所はまじめだな。

「いいか、一般的な、兵士。軍に入って、基礎的な訓練を受けた、一般兵、その力を、仮に10とするぞ。無意味な数字だが、あくまでも、例えとして聞け」

俺は、紙に人型を書き、10と入れる。

「この10の奴に、圧倒的な差をつけて勝つ為には、どのくらいの力があると思う？」

「圧倒的となれば、30くらいですか？」

俺は、静かに首を振る。

「12から13って所だな。それだけの差があれば、圧勝できる」

不思議そうだな、まあ、俺も以前は、そう思っていたからな、そうだろう。

「納得行かない、と言う顔をしているな。まあ、分からなくも無い。そうだな、仮に、一騎当千といえる人間がいるとしよう。要するに、1人で、千人の10の力を持った相手を倒せる人間だ」

バイエルラインが頷く。

「では、その人間には、1000の力が必要か？答えは否だ」

「ですが、たとえば、100の力を持つ相手を、倒すには、100を超える力が要りますよね」

俺は、ゆっくり頷く。確かに、だが。

「それが盲点だ。強者を倒すのと、数をこなすのでは、まったく別の力が要る。それらは、併用させることも、両立させることも出来るが、考え方としては、真逆だ」

ここで、俺はいったん言葉を切る。そして、紙に、100と入れた人型を書く。

「さっきと同じ質問だが、この100と書いた人間を倒すには、いくらの力が要る？」

「先ほどと同じ比率なら、120から130ですか？」

「違うな、ほんの少しでも上回れば良い。だから、答えは101から102と言う所だ」

酷く単純だからこそ、中々気付かない。気付いたとしても、実際に、

それを、現実に応用するのは難しい。だが、この考え方を持っているかどうかで、大きく効果は変化する。

「強者を1人倒すなら、一瞬で、全力を出して、相手を上回れば良い。それこそ、それは一瞬で良い。しかし、数をこなす為には、少ない力を、断続的に出し続け、その力で、効果を発揮するようにしなくてはならない。言ってしまうえば、力の配分と、時間効率の差だな。これは、とても難しい。だからこそ、単騎で、魔王を倒す勇者はいても、単騎で、敵陣を切り開く英雄は中々いない。ある種のコツが必要になる、そして」

「そして？」

「此処まで言っても、まだ分からんのか。つまり、瞬間的な能力よりも、断続的な能力を上げさせたいから、基礎体力以上に、長時間の効率的な運動と、集中力の維持を、覚えると言っているんだ。だから、効率的な運動のために、走って来い。コツをつかめ。それをつかめば、今のお前でも、十分に英雄になれる。今のお前の力でも、コツをつかめば、一般兵の100人くらいは片付けられる」

「はっ、はい」

「この国で生まれ、育ち、家柄を持つ。そんな、お前の方が、英雄に、旗頭に向いている。さっさと、成長しろ」

「旗頭ですか」

「なんだ？不満なのか？そういえば、こいつは、どちらかと言えば、強者に打ち勝つ勇者の方が好みのような。しかし、今必要なのは英雄だ。」

「良いから行って来い、命令だ。それから、アリシアさんに書状を届けてきてくれ。ついでに、挨拶もして来い。メイちゃんとも友達なんだから、知り合っておいても損は無いだろう」

「はい、喜んで行ってまいります」

急に態度が変わったな？何か心境が変化する様な事でも言ったのかな？

確か、出した名前は、アリシアさんとメイちゃん。他には、何も言
つて無いが……

ああ、メイちゃんが好きなのか、こいつ。まあ、アリシアさん狙い
も、考えられなくは無いが、まあ無いだろう。

「バイエルライン、お前、メイちゃんが好きなのか？」

顔が赤くなった、さらには、目が物凄い勢いで、上下に動いている。
分かり易いな、こいつ。感情を、表情に出さない訓練や、動揺を隠
す訓練も必要だな。嘘もつけない様では、道のりは遠そうだが。

「なっあ、な、なあ、な、何を言っているんでしゅか。ししゅう」

噛むのか。緊張から来る、どもりもあるな。フェイント等も、教え
るつもりだったが、難しいかな。

「まあ、それは良いか。個人的に頑張れ。フ란の酒場のウィルキ
ンズさんが、昔から良く知ってるみたいだから、話でも聞いて来た
らどうだ？」

「なあ、何を聞いて、くつ、来るんでしゅか」

「だから、メイちゃんの好みとか。好きな物とか。俺はそう言う事良く分らんからな。俺に相談しても無駄だぞ。一応言っておく」

なにやら、えらく逡巡している、言いたいこともあるのか？

「何だ、何か言いたいことでもあるのか？あるなら早めに聞いておけよ。後一刻も経たない内に出立してもらっぞ」

「その、師匠は、何でメイリンを、愛称で呼ぶんですか」

何でそんなことを聞くんだ？

「特に理由は無いな、年下の娘を呼び捨てるのも、何と無くおかしかったからだ。後は、アリシアさんには世話になったし、彼女の娘さんだからな。何と無くの妥協点が、そこだったただけだな」

「出来れば、気になるので止めていただけないかと」

「別にかまわんが、それなら何と呼べば良い？メイか？」

「あの、メイリンさんとかではどうでしょう？」

「面倒だな、まあ良い。また考えておこう。それより、用意をして来い。今書状書いてるから、その間にな。帰ったら稽古をつけてやるから」

「はい」

なんだか、複雑そうな顔をして、部屋を出て行った。問題でもあるのか？

軽い気持ちで送り出したバイエルラインだが、思ったよりも早く、2日後の深夜には帰ってきた。仕事を果たし、確かに返書も持ってきたバイエルラインだったが。

それ以上に、深刻な報も持って帰っていた。

急転・直撃・ややわき道

「面倒な事になった」

明朝、居並ぶ面々に、開口一番俺は言った。爺さんは、既に情報を手に入れているようで、深く頷いている。フレッドにも話してあるし、バイエルラインは直接報を持ってきた本人だ。一応それぞれ、事態は把握している。それでもなお、言わずにおれなかったほどの面倒な事態だ。

「確かに面倒じゃ、しかし、凶報だけでは無いぞい」

爺さんが扉を指差し、席を立つ。開かれた扉からは、シュトラウス将軍が入ってきた。

「さて、来たからには国防の将として、此処に座るんじやろう」

爺さんは、空けてあったフレッドの隣の席、爺さんの前の席を指し示す。将軍は、フレッドに向き膝を突き、深く頭を下げると、制約を述べた。

「非才なる我が身では有りますが、国家の壁として、民草の安寧の護り手として、私を使って下さいますか。フレデリック新王陛下」

「貴方の力で、国民の平穏と、国家の平和が護られると私は信じています。どうか、力を貸してください。貴方を使うのではありません。どちらを利用するのでもありません。お互いがお互いに支えあえる国家を、ともに進める国家を作り護って行きましょう」

「民と国家がともに笑えるように」

「皆がそれぞれ幸せになれる様に」

皆が立ち上がり、会話を見つめていた。シュトラウス将軍も制約を交わした。それは自身と国家に対するものであるが、同時にフレッドも制約を交わした。それは、ただ只管に己に対しての制約なのだろう。

正直、眩しく思えてしまう。

「若い者は良いのぉー。わしもやっておいたら良かったかの？」

爺さんが、一気に場を和ましてくれる。年の功とはよく言うが、これは単純に人徳なのかもしれない。

「先生、私はもう60間近ですよ。若くは無いですよ」

「孫も居らん内は、若造じゃわい」

なぜこちらに視線を向ける、爺さん。将軍が睨んでいるので止めてほしい、会ってもいない娘との事で、なぜ睨まれねばならん。

「とりあえず、話を進めましょう」

「そうじゃの、その話は今度ゆっくりと」

しませんよ、結婚しませんし、娘さんにも手なんて出しませんから。だから睨むのは止めて、お願いだから。結婚なんて考えた事もないから、大丈夫だから。俺は咳払いをして話を続ける。

「既に知っていると思うので、話を纏めるが。マウゼル伯爵が独立を宣言した。しかも、多数の傭兵を雇い中々の兵力を有してしまっている。そして、此処が問題だが、マウゼル伯爵領は」

「ジギスムントとの国境線にあり、その範囲も広い」

俺の言葉にフレッドが続く。既に知っていても、皆の顔には苦渋の表情が浮かぶ。

「もつと言えば、あそこにそんな傭兵を雇うような余裕は、無いはずなんじゃ。元々人口が少なく、他国との、まあジギスムントとのじゃが。防衛目的で、存在する領土じゃったしの」

「理由は、王位継承順位を無視した国家には加担しないと言うが、そもそも、これも無理な理屈だ。フレデリック王の継承は、誰が見ても正当だ。此処に、辺境伯が口を挟むような問題でもない」

爺さん、シュトラウス将軍が後を繋ぐ。

「どうも、調べてみたら、今回のジギスムントとの婚約話。仲介したのがそのマウゼルのようだ。此処数ヶ月、王都と自領を絶え間なく往復している」

残っていた資料をめくりながら答える。

「最初に話を出したのが何処か、までは分からなかったが」

「この分じゃと、ジギスムントから持ち掛けられておったのかのう。結局話が不安定になって、ジギスムントに泣き付いたのか。そもそ

もこういつた計画じゃったのか。そこまでは分からの」

確かに、地方貴族が、それも地盤の薄い貴族が持ちかけるような話ではないな。最初からジギスムントに通じていた。子飼いになっていたと見て間違いないだろう。

「鎮圧だけなら、王都に残る全軍をもってすれば十分に可能だ。可能なのは間違いないが、被害も大きそうだな」

「しかも、厄介な事にだ。アリシアさんからの手紙で分かった事だが。隣のベーネミュンデ伯爵家が私兵を動かす気配がある」

アリシアさんからの手紙は、他にも厄介ごとが満載だが、まずは1つ。

「功績を立てて出世、ではないの。此处での有効性をもって貴族軍を再び作り上げるつもりじゃな。ベーネミュンデ家は、8大家の中でもリユーベック家と近い。経済的な支援がリユーベックからも出ているじゃろ」

「さらに厄介事その2だ。ジギスムントが兵を動かしてる。大軍を動かせば、刺激するだけだ」

「そんなもん動かす暇があったら、返書を出してこんかい」

爺さんがむくれている。確かに、親書を出してから既に4日目。アイゼナツ八王都とジギスムントの王都デュプリスは、距離が近い。早馬を使えば、3日で往復できる。普通なら、既に先触れが来ているはずだ。

「向こうとしても、出来る限り出かた待ちという所かな」

「いや、あの国も一枚岩ではないからな。揉めていると言う可能性も高い」

シュトラウス将軍が新たな情報を出してくる。

「揉めているとは？」

「あの国は商人の力が強い。それが、強さの源にもなっているが、同時に合議制の話し合いは早さにかける。経済的な強さと引き換えであるのは間違いないから、良い悪いとは言い難い所ではあるが」

不思議に思い聞き返す・

「だが、旧帝国の後継を僭称していると言う事は、王権が強いのではないのか？もしくは貴族などの特権階級が、それなりの権威を持っているのでは」

「あの国では、貴族すなわち商人だ。国を再興する時に、わが国は武人を主とした領主を纏め成立した。反して、あの国は商人を纏め上げ国家とした。その成立の違いによる差は大きい」

「おかげでわが国は、経済的には弱いほう。反面武力は強かったんじゃないが」

「近年は、ギルドの活性化により、他国への人材流出が深刻です」

シュトラウス将軍、爺さん、フレッドが続けてため息をこぼす。

「悔やんでも仕方が無いだろう。なんにせよ、今の問題はマウゼルをどうするかだ」

俺は意見を求めるように、周囲を見渡す。

「中規模の軍団を派遣。マウゼルを落とす」

シュトラウス将軍が意見を出し、爺さんが続ける。

「ダメじゃ、錬度の低い王都の軍では中途半端な派遣は被害を増やすばかりじゃ」

「傭兵もしくは冒険者を雇うのはどうじゃね」

爺さんが続き。フレッドが返す。

「宰相、冗談で混ぜっ返すのはよして下さい。国家の威信が問われます。さらには時間も足りません」

「貴族は頼れない、雇う事もできない、軍も動かせない」

なるほど、話せば話すほど手詰まりだ。

「結局、誰にも頼らず精鋭が行くしかない」

「しかも、傭兵を倒すのではなく、首魁だけを倒す。それをせねばならぬ訳じゃな。一晚にして英雄が誕生するわけじゃ。見合いが幹旋しやすいの、アルトや」

えらく気に入ったんだなその会話。爺さん、それはもう良いんだ。

それに。

「爺さん、残念だが、今回の英雄はバイエルラインだ。手柄は、全てこいつの物にする。見合いの斡旋なら、こいつにしてくれ」

「そいつは、もう居るから詰まらん」と言いつつ、笑っている。バイエルラインは赤くなっているが、他の面々は不思議そうだ。唯一フレッドだけは聞いているのだろう。ため息をついていた。苦勞する立場だな、王とか関係なく。

「最後に、アリシアさんから来た情報に補足がある。いわく、彼女が知る限り最低の傭兵があちらに付いているらしい」

恥ずかしい二つ名が付いているな。自分なら耐えられんが。

「魔法使いロツソと言っらしいが。誰か知っているか」

周囲に戦慄の空気が走る。

ほお、それほどの男なのか、この恥ずかしい名前の男は。

急転・直撃・ややわき道（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

読んで下さってありがとうございます。

妹の葛藤 兄の気持ち

「魔法使い、ふざけた二つ名だが、そんなに有名なのか？」

どんなに考えても、呆れる以外に選択肢が無いふざけた名前なんだが。そう考えながら、意見を漏らすと、バイエルラインがオズオズと声を掛けてきた。

「師匠、そのですね、魔法使いは二つ名等ではありません。あくまで能力を示したもので、二つ名はほかにあります」

「一応、それも書いてあった。現代では数少ない魔法使い、能力的にも精神的にも最低とな。アリシアさんにしては、直接的な言葉だから、不思議に思っていたんだ。そんなに強力な魔法なのか？」

呪式と違い、魔法は個人差がありすぎる上、能力的にも高くないと聞いていたが。例外もあると言う事だろうか。

「ロツソのあだ名は山ほどありますが。有名なのは、不死身と変態です。噂に聞く限りであっても、この表現は正しいようです」

最悪な組み合わせだな。知らず知らずに顔が歪む、どう考えてもお近づきになりたくない。出来れば、知らない土地で勝手に消えて欲しい。知識としても仕入れたくない。

「嘆きのロツソ・人の形をした化け物・うごめく変態・エロウリアより死なない・変態と悪魔の忌み子・敵に回せば身が滅ぶ、味方にまわせば心が病む。そんな嫌な話しか聞かない男です」

聞いていくだけで、吐き気をもよおす様な名前ばかりだ。ただでさえ、冒険者や傭兵が多く、力量に差があるこの世界で、それだけ嫌な名前がつくとは。

「神様が本当にいるのなら、今すぐそいつに神罰を落としてくれ。頼むから。人生ではじめて神に祈るから。それと、エロウリアって何だ？」

周囲にいる人間が、全てげっそりとした顔をしている。既にこの時点で、俺たちに与えた被害は生半可なものではない。行動は厭わなしいとは言ったけど、これは聞くからに嫌だな。

「ロウリアと言うのがおつての。水の中などに住んでおる生き物じやが、頭をちよん切っても頭が生えてくると言う生き物じやよ。その、大型化して穢れ物扱いになっておるのがエロウリアじゃ。C級じゃったかの」

うず虫フナリアみたいなのか、さらにやる気がそがれる情報だな。

「気持ち悪くなってきたな。それで、そいつの魔法は何なんだ。まさか、頭ちよん切っても生えて来るとでも言うのか」

期待を含めて冗談まじりに聞いてみる。実際にそんなのだったらどうやって殺したら良いのか分からん。ところが返ってきた返事は非情だった。

「腕は生えてきたそうです。高位の穢れ物などが使う再生の魔法が恒常的に掛かっているのでは、と言うのが通説です」

「最悪、縛ったまま餓死するまで放置するか。他に思いつかん。焼

く、溶かす、他に何かあるかな。呪式で酸性の液体でも作るか？」
その発言に、部屋がざわめく。意を決したように、フレッドが聞いてくる。

「視認出きる量の液体が生成できるのか」

「出来る」と軽く言うと、皆が再びざわつく。バイエルラインにいたっては、なぜか涙を流している。

「固体の生成はできないぞ。後気体は操作し辛いし、まだまだだなあ」

修行も止まっている、できれば、バイエルラインの修行も含めてまとめて時間を取りたいが、現状では不可能だ。

「あの、師匠。液体生成が出来るのってすごいんですが」

「そうなのか？でも蛍光とかは初歩なんだろ」

周りが、俺を取り残してざわざわ言っている。

「呪式使えるのに知らないんでしょうか？」

「教えたのがアリシアさんだからじゃないですか」

「ママも抜けてる所がありますから」

「あーアリシア嬢なら仕方が無いの」

「先生、確かに分からない話ではないですが、蛍光を基礎と言いますかね」

「だから、普通じゃないんですよ」

「流石です師匠」

「それにしたって非常識です」

「蛍光なんて、私いまだに出来ませんよ」

「確かに、液体生成としては初歩じゃな」

「先生問題がすり替わっています」

「すごいです師匠」

「一応頼もしい話だから良いんじゃないか」

「でも、私の今までって何だったんだろうって気になりませんか？」

「気を落とさないでメイ、貴方は十分に優秀よ」

酷く取り残されている気がする。少し寂しい。

会議も終わったようで、代表としてメイリンが発言を求めてきた。今まで拳手なんて、誰もしていないんだが。

「ハイ、メイリンさん」

「ママが、いえお母さんがどう説明したのかは分かりませんが。蛍光は難しい呪式です。さらに言うなら、炎や雷、光等現象自体を操らない呪式。物質生成の呪式は、非常に高度です。液体まで生成できれば、一流を超えて特級とも言つべき腕です」

まあ、出来るのなら構わないんだけどな。

「じゃあ、普通は呪式で明かりを灯すときはどうするんだ？それに、ギルドの札なんかは物質に呪式がかかっていたが」

「普通呪式で明かりを灯しませんし、そうであっても使うのは単純な光です。制御が難しく、長い間光を灯すのに向いていませんから、普通はたいまつを使います。ギルドの札は、ドワーフ等の秘術で、物質に呪式図を刻み込んだ物で、直接物質を生成しているわけでは

ありません」

「そうなのか」

「そうなんです」

「そうか」と、呟くと。

「何でそんなに、普通なんですか。すごい事なんですよ」

と叱られた。そんな事を言われても困る。自分としては、アリシアさんのようにゲル状の物質を作れないのは才能がないと思っていたんだから。

「アリシアさんは、半固形の物も出していたぞ。パルプ倒した時」

そういえばゲル状って、固体なのか液体なのか微妙な線だな。

「お母さんは特別です。エルフの血が濃いから出来るのであって、普通の人間には出来ません」

「そうか」と再び言うと、メイリンがなにやら怒っている。何をそんなに興奮するような事があるのだろうか。そう思っていると、バイエルラインが耳元でささやいてきた。

「メイリンは、アリシアさんが凄過ぎて、よく比べられていたんですよ。その事がやはり気になっているようで、後から出てきて、あっさりアリシアさんに匹敵した師匠には思う所もあるのでしょ」

そんな事があったのか。まあ、人の考え方は人それぞれだしな。コ

ンプレックスも多種多様だ。

なんにせよ、話が大きくそれている。話を戻そう。

「素晴らしい人に師事できた事を、光栄に思おう。ともあれ、今の問題は、マウゼルとロッソだ、こちらに対する対策をもう少し考えよう」

メイリンは言いたい事がまだあるようだが、一応押さえて席に戻る。その他の面々もそれぞれ席に座るが、ミリアはメイリンの横で、彼女になにやら声を掛けている。

「そうじゃの。いやあ、前も言ったがお前さん、わしの思っているよりはるかに強いのお。ロッソにも楽勝かも知れんの」

「そんな、化け物みたいな奴、戦ったことが無いから分からんよ。なんにせよ、俺とバイエルラインで直接叩く。俺がロッソと周辺の敵を片付けるから、マウゼルとやらはお前が押さえる」

シュトラウス将軍が、地図を指し示す。マウゼル領周辺の地図と、館の周辺地図だ。縮尺が大きく、細かな事はわからない上、等高線等も書かれていないので不安だが。それでも無いよりは、数段マシだ。

「此処が領主の館、伯爵の本邸だ。他に人を配する様な所は無いから、間違いなく此処にいるだろう。しかし、元々が防衛のために造られた所だ。人員数はともかくとして、壁の厚さや置かれている装備は十分な脅威になる」

前面には川、東側には山が迫り、西側には広く整った土地がある。

建物自体も大きく、有事にはかなりの数の兵員が収容できそうだ。領土防衛と考えると、少し微妙な所もあるが、定点防御として考えれば、かなりの物だ。

「固いな」

「長年、難攻不落の土地だったからな。私も此処で指揮をとった事がある。護り易く、攻め難い」

「だが、それは兵を持って攻めるとしたら、だ」

今回は違う、潜入し標的だけを撃つ。

「町まで入ってしまったえばこちらの物だ。白昼堂々進入する。現在の館は多くの傭兵達でひしめいている筈だ、見知らぬ者がいても看過されにくい」

「君一人ならそうだろう、だが、彼に出来るのかね」

将軍がバイエルラインを顎で指す。バイエルラインとしては、不満そうな顔つきだ、だが自分でも難しい事が判っているのだろう。不安そうに俺を見てくる目が泳いでいる。あえて視線を返さずに、將軍に向き合つ。

「問題はありません。あいつを舐めないで頂きたい。最低限、英雄になれる能力がある、そう見たから弟子にしたのですから」

尻尾があれば、振り千切らんばかりに喜んでいるバイエルラインには、やはり視線を送らない。どうも、直線的な好意は苦手だ。

「ともかく、俺に問題は無い。あいつにも問題は無い。だからフレッド、何も問題は無い。安心して待てば良い」

フレッドはあまりにも早く、俺やバイエルラインに出番が回ってきた事を。つまりは人を殺させる事に、深く傷付いている。人の気持ち判りすぎるといっても辛い事だな。

「バイエルライン、今回用意する物は判っているな」

「はいっ」

「ならばそこに、細くて丈夫な紐を大量に加えておけ」

バイエルラインは、不思議そうな顔をしている。

「紐ですか」

「そうだ、なるべく殺さず無力化する。大めに用意しておけ」

殺しを望まないのなら、最低限で抑えてやるさ。

フレッドに笑みを向けると、照れくさそうに笑みを返してきた。

少し俺も気恥ずかしい。だが、兄の気分とはこんな物なのかもしれない。

妹の葛藤 兄の気持ち（後書き）

最近感想が立て続けに頂けて、嬉しい限りです。
誤字を教えて下さる方もいて、本当に励みになります。
頑張って書くことと言う気持ちが湧いてきますね。

それでは、今回も私の文章を読んで頂き真にありがとうございます。
どうか今後もよろしく

マウゼルの町で（前書き）

やっと出来ました。でもちょっと納得がいかない。

マウゼルの町で

バイエルラインと馬を駆り、マウゼル領へと急ぐ。

「町に入る時はどうします？突破しますか」

妙に気分が高揚しているらしいバイエルラインが気になるが、過ぎるようなら注意すれば良いだろう。一応質問には答えておこう。呪式の通信は、手に何も持つ必要が無く、音声もクリアーだ。馬上においても問題なく運用できる。

「いや、状況で変更する予定だ。一応、冒険者としての依頼も用意してある。だが、傭兵を募集しているらしいから、それで入れるようならそつちだな」

情報が少なすぎて、作戦の立てようも無い。情報の流れる速度が遅すぎる、偶然にも、バイエルラインをアリシアさんの元に走らせていたから、迅速に対応できたが。

偶然に頼るわけには行かない、少なくとも、諜報をメインに行う部署が今後必要だろう。その辺りは、シュトラウス将軍に期待しておこう、今の自分にはそれをなす人脈が無い。

「そんな、適当なんですか？」

「適当ではなく、臨機応変と言っておけよ。しかたないだろ、情報が無い状態で作戦の立てようも無いんだ」

邸内に入ってからの作戦はあるが。町自体に対する作戦は無い。

「まあ、町には最悪夜になれば入る事は出来る。そこまで心配しなくて良い」

あの広さの町を、高々傭兵雇ったぐらいで完全に管理できるものでもない。少なくとも、経験のある兵が600人規模で必要だ、傭兵は戦闘技能職ではあるが。軍律からは外れる事が多い、話を聞く限りのこの世界の傭兵はそう見て良い。

明文化しているかどうかは国によるようだが、傭兵の略奪や強姦、その他の行為に関しても暗黙的に許可されている場合が多い。その影響は、無論徴用兵や騎士にも及び、軍の規律は俺の感覚からすればかなり悪い。

良くも悪くも、中世、もしくはそれ以前の軍で止まっている。爺さんに話を聞く限り、戦術的な天才は多くいたが、軍制と兵站にまで考えが及び、なおかつそれを実行できた者は此処400年ほどいらないらしい。あくまでの爺さんの言ではあるが、他に信用すべき情報も無いのでそうなのだろう。

「やれやれだ」

思わずもれたため息混じりの感想は、未だ解いていない通信の呪式にのってバイエルラインにも聞こえたようだ。

「なにか、なにか問題でも」

「いや、軍の意識改革が必要だと思ってな。傭兵も今後は使わないようにして、軍の規律も徹底しないと、無用の悪意と憎悪を招くだけだ」

長年の慣習だから、生半な事ではないがなあ。最近ため息も増えた、昔はあまり考える事も無かったが、最近は心労も多い。フレッドのことは言えないな、胃の心配を俺もするべきかもしれない。

「先は長いな」

「とりあえず、後半刻もせずに町には到着します」

「そうだな、出来ることからやっつけていこう」

ふう。ラッセルも、よく胃が痛いと言っていたが、もう少し気遣ってやればよかった。以前の戦友、時々上官を思い出して、少し気が和んできた。

「門が見え始める前から速度を落とすぞ。お前の判断で知らせて来い。幸いここまでは、人も通っていないから駆け通して来たが、流石に目立つのは不味い」

「はい、師匠」

「それと、偽名も決めておけ。俺はラギにするが、お前はどつする？」

「ベイルでお願いします」

「わかった、お互いにそれで呼び合っぞ」

「ハイ、師匠」

分かってるのか？こいつ。

暫く走ると、バイエルラインから通信が入って俺達は速度を緩める。町がだんだん見えてくるが、フ란の町との大きな違いはない。

全体的に城壁が高く、白っぽい石を使っていたフランに比べて、城壁の石は黒っぽい。流石に厚さは、ここからは見えないが、シュトラウス將軍から得た情報によると、フフィールはあるらしい。戦争後に被害箇所を多くを改築したので、老朽化の心配も少ないそうだ。

フランと同じく、町には教会の青っぽい塔も見える。これ以上は、中に入って見なければ分からない。

「行くか」

「はい、師匠」

お前は、そればかりだな。

門には番兵が10人ほどいるが、お互いに話しており、士気は高くない。やはり、貴族軍が存在しないので、傭兵をかき集めはしたが、烏合の衆にとどまっているようだ。集団的な行動が取れる軍ではない。

「オイ、お前ら」

ゆったりと門に近づくと、その中で恐らく隊長格である男が声をかけてきた。

「お前らも、雇われか」

「ああ、こちらに寄る依頼もあったしな。ついでに一稼ぎしようか
と思ったんだが、調子はどうなんだ？」

周りの男達も、そろって笑う。どこか馬鹿にしたような雰囲気にも
ツとなるが、今は顔に出さない。バイエルラインは苦労しているよ
うだが、まあ、仲間を馬鹿にされて怒る役というのも悪くはない。

「上々さ。それにしても、依頼ついではマメな奴だな」

「よっぽど困ってんのか？」と周囲からさらにヤジが飛ぶ。

まあ、馬鹿にしてもらって油断してくれるのならやり易い。

「まあ、依頼はついでき、世話になった人に頼まれてな。その依頼
の話なんだが、ローエルイ亭って飯屋知ってるか？手紙を預かって
いるんだが」

「知ってるか？」と男達がささやきあう。一人がなにかに気が付い
た様子で、「マリツカの店だ」と言った。他の男達も「ああ、あそ
こか」と認め合う。

「お前の言う所は、マリツカの店だと思うが、それならば門を抜け
て直ぐの道を、右に入った所だ。ケバイ紫の看板だから直ぐにわか
るぜ。あんなゲテモノ屋に何の用事だ」

「俺に言われても困る。フランに住んでる、酒場の親父から、これ
を渡すように頼まれただけだ」

俺は、布袋に包まれた手紙を指に挟んで振った。ヒラヒラと舞う包

みを見て、男は興味をなくした様だ。「さつさと、入りな」と門を開けた。

「傭兵として働くなら、ギルドに行きな。そこで、受け付けてるよ」
中々気が付く男のようだが、能力的にはダメだな。こんなに簡単に通しては、門番の役には立っていない。直ぐに傭兵をやめて、田舎で畑を耕す事を勧めよう。聞きはせんだろうが。

あの男が言った店は直ぐにわかった。言われた通りのケバイ店構えで、どう見ても周りから浮いた雰囲気を作り出している。言うなれば、一般の市場のご真ん中に、ストリップ劇場があるといった感じだろうか。どう見ても、一見さんお断りの空気をもし出している。

「すごい店っすね」

「そうだな」

二人して、思わず店を見上げてしまった。何時までも、ポーっとしているわけにもいかないので、店の戸を叩く。どうやら、営業時間ではないようで、扉には「まだよ」と書かれた札が下がっていた。中に気配はあるのだが、反応はない。もう一度扉を叩く、やや強めに叩くと、今度は中から誰か動き出す気配があった。

「はあい、ごめんなさい。奥にいたから」と人が出てきた。

頭を下げて、手紙を渡す。

「失礼しました。こちらは、フランのヴェル様からの手紙です。□

「エルイ亭様宛、こちらで間違いないですね」

「そーよー。ああ、ちょうど良いわ、お茶を入れようとしてたの、ついでに飲んで行って。美味しいお茶菓子貰ったのよ」

「それでは、お言葉に甘えてお邪魔します。私はラギ、こちらはベイルと言います」

「ラギさんにベイルさんね。どうぞ中へ。私は、マリツカって言うのよ。よろしくね」

マリツカさんが、手を出してきたので、握手と思い手を出すと、力強く握り返された。手に痛みを感じるほど握られる経験は、久しぶりで微妙な気分だ。

中に入ると、席を用意され、そこに座った。マリツカさんは「ちょっと待っててね」と言い、台所らしき場所へと入っていった。横にいるバイエルラインに、一言声を掛ける。半分以上は自分自身に向けて言っているのだが。

「落ち着け、平常心だ。冷静に対処しろ」

「しっ、しかし、師匠」

「世の中には、説明のつかん事もある。状況に柔軟に対応しろ」

マリツカさんは、筋骨逞しい背の低い髭面のドワーフだった。俺はドワーフに会った事が無いが、もしかしたらドワーフには性別差が無く、皆あんな姿なのか。それとも、素直にオカマのドワーフなのか。

「まさか、ドワーフの女性って皆あんな感じって事は無いよな」

「あれは、ドワーフのオカマさんです」

「やはりそうか」

二人で、奥に聞こえないように小声で話す。良かった、ドワーフの里に行ったら、皆あだったらどうしようかと思った。しかし、オカマなら髭は剃れば良いのでは？髭面と、ファンシーエプロンはどう考えても似合わない。世の中は、謎に満ちていると言う事が。

「お待たせしたわねえ。これ、私が作ったんだけど、とっても美味しいのよ。ぜひ食べて頂戴ね」

出されたお茶からは、生姜に似た香りがする。飲んでみても感じは近しく、疲れた身体に心地よい。添えられた茶菓子は、クッキーと言ふよりはラスクに近い感じのものだ、とても甘い、こちらも疲れた身体には美味しく感じる。

「美味しいですね。疲れも癒されるような感じがします」

精神的な疲労度は、跳ね上がったが。そう内心想ったが、顔には出さない。

「美味しいですね、師匠」

バイエルラインはどうやら甘党のようで、ラスクを何枚も食べている。俺は、甘いものがそう得意ではないので、小皿に取られた2枚だけで十分だった。と言うか、2枚で限界だ。

「あら、気に入っていただけただけで嬉しいわ。なんだったら、お土産に持って帰る?」

「良いんですか?」

「ええ、良いわよ。後で包んでおいてあげる。でも、仕事が済んでからね」

「そうだな、何事も仕事が済んでからだな。まずは、改めて自己紹介と行くか。」

「そうですね。もう、手紙は読んで頂けましたか?」

「ええ、大変だけど、出来る限りは手助けするわ」

「では改めて自己紹介を、私は、アルト・ヒイラギ・バウマンと申します。こちらは、バイエルライン、私の弟子です。貴方の助勢に感謝します」

「手紙は読ませてもらったわ、悪いんだけど。燃やしてもらえない? 私は、ドワーフなのに呪式使えないから」

「そう言うと、手紙をこちらに渡してくる。偽装の手紙の方は残したままで、本命の手紙だけをだ。受け取ると、内部からゆっくりと燃やす。ブスブスと音を立てて、手紙は完全な灰になった。そのまま、暖炉の中にまいて置いた。」

「ありがとう。さて、説明は読ませてもらったわ。マウゼル伯爵は、今は、ずっと屋敷に籠りきり。出てくる事はないわ。ジギスムント

の動きにもよるでしょうけど、暫くは動かないでしょうね」

ジギスメントに、亡命でもしようとするれば、移動を狙えたのだが。やはりしないだろうな、領地を捨てては、ジギスメントからの利用価値さえ無くなる。出来るだけ時間を引き延ばし、国力を低下させるのが目的、と言う所だろう。

「ならば、館に忍び込むしかないですね」

「そうね」

「大体、何人ほど集まって来ていますか。特に館に詰めている人数が知りたいですね」

「そう多くはないだろうが、館にばかり人数を集めているなら、また策も変わってくる。」

「館にはそう多く詰めていないわ。100に満たない数よ、全体でも300と少し、そんな所ね」

「門などを見た所では、錬度も低そうですが」

マリツカさんは、肩をすくめて笑う。鼻で笑うと言うよりも、情けないと言う感じのようだ。馬鹿にするよりも、むしろ同情すら覚えているのだろう。

「とりあえず、集めれるだけ集めた、そういった感じね。酷い話で、前日にギルドに登録した者から、どこぞの山賊みたいなものまで来ているわ。酷い話よね、治安が悪くなって最悪よ」

そんなものか、ならば心配は少ないな。

「傭兵たちは、それほど問題にならないでしょう。ロツソに関しての情報はありませんか」

「それが分からないの。マウゼルに付いているのは確認済み、姿も確認したわ。でも、ずっとマウゼルに付いている訳でもないみたいなの。街中にも、見たという話は聞かないわ。傭兵達も不思議に思っているみたいよ」

「かえって面倒ですね。最初から分かれば、まだ対処もあるのに」
変態の思考なんぞ、読みたくも無いが、対処ができないのは痛い。
しかし、結果として、マウゼルを生け捕りにしなくてはいけないのは変わらない。

「でも、傭兵の士気は低いわ。しかも、臆病風にふかれたマウゼルが、傭兵の士気をあげる為報酬を前払いしたから」

馬鹿だな、報酬は後で入るから、命も懸けるのに。前払いしては、そのまま逃げる者もいるだろう、少なくとも、形勢が不利になればさっさと逃げるはずだ。馬鹿のおかげで助かったな。

「馬鹿ですね」

「馬鹿よね」

「馬鹿だな」

しかし、馬鹿のおかげで国が倒れてはかなわない。

「それじゃあ、その馬鹿捕まえに行くか」

「はい」

しかし、誰も傭兵の扱い方教えてやらなかったのか？人材の払底は怖いな。

マウゼルの町で（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

在りし日に酒を酌み交わし

その後、もう少し話を詰めて、マリツカさんの店を後にした。

治安が悪くなったとはいえ、人口が一気に増えたのは確かなのだろう。大通りには屋台が立ち並び、路地を覗けば、日もまだ高いと言うのに春を売る女達が見える。中には、女装した少年や、男装の麗人の姿も見える。冒険者ほどではないが、女性の傭兵も低くは無い、そちらの需要もあるのだろう。

「ベイル、とりあえず宿を確認しよう。さっき聞いた話だと、傭兵の多くは既に宿舎に入らされているようだ。宿の部屋は空いているだろう」

少し歩き回るが、戦時需要の物売りや春売りなどが部屋を確保しているようで、中々部屋は見つからなかった。しかたなく、さらに中心に向くと、目的の館マウゼル邸の近くに、少し高級な宿があった。どうやら値段で避けられていたようで、まだ部屋があったのでここに決める。二人部屋を取り、中で荷物を降ろす。

指で合図を送り、近くに寄らせると、小声で話しかける。

「作戦は、明日正午にギルドで受付を済ませ、その後館に侵入。速やかにマウゼルを捕らえ、外へ脱出。その際、発光呪式で、後詰に来るはずの部隊に信号を送る。発光順は、成功なら赤赤紫、失敗なら赤赤白。確認」

「作戦内容確認しました。明日まではどうします」

「何もしない。下手に顔を覚えられても厄介だ。此処で時間をつぶす。食事も下の食堂で済ませよう」

「それだけですか？」

「ついでに、口伝になってしまおうが。お前に教授してやろう。弟子に取ってから纏まった時間も無かったしな」

出切れば、同時に体も動かせればよかったが、仕方が無い。流石に、弟子に取っておきながら、走り込みしかさせていないのは、悪かったと思っている。口に出しはしないが。

「ありがとうございます！」

無駄に返事が大きい。ただでさえ、傭兵風情が町で一番高級な宿に止まっているんだ。気は使い過ぎても、過ぎる事はない。

「大きな声を出すな。馬鹿弟子」

俺とは大分に違うな。どう扱って良いのか、実際の所良く分からん。

「以前も言ったが、体の動かし方には、2種類ある。瞬発と持続、瞬発に関しては、体の問題もあるが脳の抑制の問題が大きい。これは後でまた説明するが、人間の体には、最低限体を壊さない様に、って何をやっている」

俺は、目の前で巻物に、必死に言葉を書いていくバイエルラインを睨んだ。

「はい、一言一句漏らさぬように」

「馬鹿弟子、口伝と言ったろうが。書き記してどうする。耳で聞いて覚える！この馬鹿者。そんなものは破棄だ、破棄」

「あ」じゃない、この馬鹿者。今後体を動かしながら教えていくんだから、変な癖を覚えるんじゃない。

「続けるぞ。人間は最大の力を発揮すると、高確率で組織が壊れる。これを防ぐために、脳にはある種の抑制、制御がかかっている。これを外す事により、本来は3割から4割しか発揮できない全力を、7割から8割発揮する事が出来る。しかし、これは次の課題だ。時間もかかるし、手間もいる。後に回して、まずは持続だ」

少なくとも、知っておいてから、訓練した方が進みが速い。イメージと理解は、訓練を次の段階へと進ませる。

「今回の本題になる持続だが、要は緊張を含まない脱力した状態、そして無駄を排し流れる様に力を伝達させる動き。この二つだな、そこで大事なのは、構えと脱力、圏と円だ」

「構えに脱力、圏に円ですか」

「そう難しく考える事はない。正しく構えれば、正しく脱力出来る。その構えから、正しく動けば円の動きになる。円の動きは、圏を作り出す。全ては、ひとつの線の上だ、拳であろうが刀槍であろうが、その根幹は全て同じだ。なんにでも応用が出来る」

まあ、それは大分先の話になるが、難しいと言う先入観を与えるまでもあるまい。むしろ、肉体的には十分に出来上がっているのだから

ら、精神面と理の問題だ。

「両腕が大きな円を描く様に、両足と頭頂がへそを中心とした円の円周上に在る様に。腕はゆったりと肩からなだらかな曲線を、膝は緩やかに曲げ、両足の間にある空間を意識する。背に力を入れず、背筋ではなく胸で体を支える感覚。へそから真直ぐ上ってきた力が、喉元で釣り合う様に。逆にへそから真直ぐに降りた力は両足の中心、その空間で支えられる様に」

やはり体が出来ている。対応が早く、体幹の位置の把握がすばやい。しかし、やはりまだ固く、体の位置が直線的だ。

「もう少し力を抜け、脇は絞めつつも腕はゆったりと余裕を持って。それと胸を張りすぎだ、深く呼吸し深く吐け、吐き切った所から呼吸が楽になったところで止める。その形が基本と言う事を覚えておけ」

構えをグルリと見てから手直しをする。少しずつ位置を直し、再び深呼吸させる。

「深く吐き、深く吸え。呼吸ごとにゆったりと構えを交互に。一歩ずつゆったりとだ。あせらず形を確認するように歩け。始めは半刻で良い、それ以上は持ちはしない」

慣れなければ、早々長く持つものではない。恐らく今のバイエルラインでも1刻は持つ、だがそれでは明日に疲れを残しかねない。ゆったりとした動きは、想像以上に体に応えるものだ。しかし、故障を起こしにくく、変な癖が付き難い、非常に良い訓練と言える。

その後、半刻その動きを続けさせ、柔軟を終えてから風呂に入り

行った。この宿は、流石に町の中で一番高級なようで、風呂の用意があった。とはいえ、そう大きくないバスタブに、順番に1人ずつ入っていただけだが、それでも、無いよりははるかにまだ。しかし、薪の関係なのかやや温い、できればもっと熱い風呂にっかりたいが、あまり贅沢も言えない。

城には大きな浴場が在って、俺はとても気に入っている。本来は王家の者が使う風呂らしいのだが、あまり関係なく俺やバイエルライオンも入っている。メイリンも、初めて入った時には感動したそうだが、かなり深いのでくつろぐと言う感じにはなりにくい。今度、防水の椅子でも探して来ようかと思っている。

ともあれ、風呂でさっぱりした俺たちは、下の食堂で遅めの食事を取り、酒とつまみを用意してもらって、部屋で飲みだした。流石に、まだまだ寝るには早い。

「バイエルライン、お前には話してなかったな」

「何をですか？」

「成り行き、俺がなぜ今此処に居るか。そういった話だ。かなり飛んだ話になる、信じなくても良いが、フレッド達に話しておいて、弟子に話しておかないのもどうかと思うんでな。話しておくよ」

「俺が師匠の話信じないなんて事はありません」

「そうか、それじゃあ」

俺は、以前フレッド達にした話を繰り返した。親の事、師匠の事、前の世界の事、俺がフレッド達を護ろうと思った事についても話し

ておいた。バイエルラインは口を一切はさむこと無く、黙って聞いていた。俺もバイエルラインも、時折自分で酒を注ぎ、1瓶が無くなる頃俺は話し終えた。

「そう言った事があつたわけだな。弟子を取つたのは計算外と言うか、予想だにしていなかったが」

本当に、思つても居なかつた事だ。なつてみれば、別におかしなことも無く、この状況を好んではいるのだが。

「そうだったんですか。すごい話ですね」

普通に信じるんだな。フレッド達もそうだったが、異世界からの来訪つて普通なのか？まあ、神が実在してる世界だから無いとも言いきれないが、帰る気なんて無かつたから、まったく調べてもいなかったな。今後調べる気も無いが。

「では、師匠がそんなに強くなつたのも、その師匠の師匠のおかげなんですか？傭兵だったんですよね。師匠も、その師匠の師匠も」

早口言葉みたいだが、確かに師匠の師匠だな。

「バウマンと言う人だったよ。俺の家名にもなっているだろう。俺の師匠で親父だ、名前はフレデリックと言つた。中々、奇遇と言つても良い名前だな」

強さか。教えてくれたのは、戦い方と考え方そればかりだったな。それでも今の俺を作り上げたのは師匠だ。

「今の俺の直接的な強さなら、師匠の死後鍛えた方が大きいな。だ

が、生き方考え方、そんな事は全部師匠が教えてくれた。彼が居るから今の俺がある、そう考えれば、お前の行ったことは間違っていない」

これは、これだけは、間違えよりの無い事実だ。

「それを俺にも教えてくれるんですか」

「いや、それは教えない」

「何ですか！」

まあ、言い方が悪かったな。

「師匠が俺に教えた事を、そのまま教えても意味は少ない。お前には、俺が師匠の教えを元に作り直した物を教える。お前も、お前に弟子が出来たら、お前が作り直したものを教えたら良い」

かならず、間違いなく技やその精神は変化していく。変わらなければ、取り残されて意味がだんだんと無くなって来る。

「俺は、バウマン師匠にはなれない。お前も、俺にはなれない。俺はお前の進歩の手助けをする、そこからお前の形を作る。それは、俺とお前が共に行って初めて出来ることだ。だから、俺の教えを受けたからと言って、お前が俺になれるわけではない」

もう既に、俺からバウマン師匠の色は抜けかけている。それは寂しく思う事でもあり、誇りに思う事でもある。「どうだ、俺は此処まで練り上げたぞ」と。そう思う所でもある。しかし。

「だが、お前は俺に良く似ている。呪式については分からないが、武についてなら、俺の所までは引っ張りあげてやる」

「似ているのですか」

この世界に来て本当によかった。思ってもいなかった、護る相手、弟子に弟や妹のような存在まで出来た。俺を、ガキ扱いしてくる大人もいる。そんな環境は面映く、また楽しい。何よりも嬉しい。

「俺が、バウマン師匠に弟子入りする時、最初は断られた。そうだろう、まだ子供だ、面倒を見る気にはならないだろう」

最初は、何を言っているんだと馬鹿にされたものだ。

「それでも何とか認めて欲しくてな。それ以上に力が欲しかったんだ、だから何とか教えを受けたかった」

今考えれば、意地になっていたのだろう。

「普通の試験では飽き足らず、俺も不意をついて襲ったのさ。もっとも、俺は2週間で30回ほど襲ったがな」

「あそこで、お前が奇襲をかけてきたときは驚いたよ。俺の時よりはるかに高度な奇襲だったぞ」

そう言って、酒をのどに流し込み笑う。バイエルラインも気恥ずかしそうに笑っている。

こんな時間を護れるならば、色々な問題など、なんとも軽い事だ。

先に、こんなにも嬉しい時間が待っているならば、諸々の問題など、笑って乗り越えてやる。

「寝ろ。明日に疲れを残してもいけない。続きは、作戦を終えての祝杯にしよう」

「はい、師匠」

今は、ただ穏やかに眠ろう。

たとえ、明日は血風が舞い雷火が散ろうとも。

在りし日に酒を酌み交わし（後書き）

御意見御感想お待ちしています

追記 次回とその次の回は ガッツリバトル予定。上手く書けないのはわかっている。

ガタ漫 二人のショートショート3新作(前書き)

大分間違えていた事に気が付き、即座に改変。

ガタ漫 二人のショートショート3新作

ラ「ラッセル」

バ「バウマンの」

ラバ「ラバウル小唄。ショートショート」

ラ「ショートと言いつつ、補足説明ですよの段」

バ「今までだって、ガタ漫とか良いながら別に笑わせるような事はしてないから良いんじゃないの」

ラ「何はともあれ、改訂後初の書き下ろしラバウル、ちょっとだけ真面目に状況説明のお話」

バ「内容は2つ、ひとつは呪式に関して。もう1つは、感想に質問があったので、ネタバレにならない範囲で説明でもしようか、と言う話」

ラ「まずは呪式から」

バ「アルトが、液体まで生成できるのが、すごいと言う話が出ていました。それよりも、光や炎などの現象を生み出すほうが難しくないか？と言うところの説明なのですが」

ラ「簡単に言えば、この世界では物理学と言う物が発展していません。と言うか、物質を構成する因子と言う物、原子や分子と言う物の存在が知られていません」

バ「逆に、現象の説明に関しては、神様がしていますので、そこら
は一般的に受け入れられているわけです。そのあたりの知識量が、
物質の生成が難しくなっている所ですね」

ラ「まあ、神や精霊が実在する世界だからな。そのあたりの領分に
含まれる事は、神様だからで済むんだろう」

バ「でも物質は、温度を上げれば液体化したり気体になったりする
よな。その辺りはどう解釈されてるんだ」

ラ「実は、呪式で生成された物質は、全て温度が決まっています、1
9 に設定された状態で出現するんだ。だから、19 の段階での
状態で出現する」

バ「中途半端な数字だな。科学的な裏づけがあるとも思えない温度
なんだが」

ラ「アルトのいる世界、一応地球と同じような天体なんだが、そこ
の平均気温に準じている」

バ「あれ？地球だと平均気温は15度のプラスマイナス1度以内だ
よな。異様に高くないか、平均気温が」

ラ「うむー。実は精霊の影響で、寒い地域が少ないわけだ。さらに、
地球よりも恒星との距離がほんの少し近い、その所為で全体的に温
かいわけだな。機械化なんかが進んで、温室効果ガスの量が増えた
ら、地球よりもはるかに深刻になる世界だな」

バ「だから、呪式世界で釣り合いが取れていると言う面もあるのか

な。神様辺りが、調節していると言う事なのでは？」

ラ「まあ、アルトは文明的な生活を送ってきたわけではないので」

バ「ああ、いるよな。ヨーロッパの文化と機械の香りが無いと生きられない人間って」

ラ「旅行は、ヨーロッパかアメリカ。アジアだったら大都市、とか台湾、香港、シンガポール。インドなんかは絶対無理で、アフリカや中東などは思いも付かない人種か。確かにアルトは真反対だな」

バ「あいつは、これがなくなったら困るとか言う物はないだろ。武器位の物か？」

ラ「そんな物だろ」

バ「まあ、そういった具合で、知識量に基本的には順ずるのが、呪式的能力です。才能だけの大魔導師とか言う者はありえませぬ。エルフヤドワーフ、高位の呪式使いは、感覚的に物質の特性を知っていて、それを知識で補強しています」

ラ「大抵の熟達した呪式使いは、同時に他の分野でも熟達している場合が殆どだな。歴史、医学、薬学、哲学等様々ではあるが。」

バ「ちなみに、神学はこの世界には存在しません。神の实在が証明されているのに、態々それを研究する必要は無いからです」

ラ「神学なんぞは、権力者と宗教者の箔付けのために、神の实在を証明するための学問。そう穿って考えても大して問題は無いしな。そもそも、人間が研究しなくたって、神に聞けば分かるんだからな

あ
」

バ「まあ、そうだよな」

みもふたも無い言い方だな。

ラ「続きまして、今度はちゃんとしたお便りのコーナー」

バ「ヤラセじゃないよ」

騎士軍の名称を平時と戦時で変える理由がよくわかりません。

ラ「こう言った質問が来ました」

バ「感想にも返信したけど、まあ、ネタバレになりかねない話だからね」

ラ「それでも出来る限り説明しましょう」

バ「要は体面ですかね」

ラ「既得権削ったんだから、名前ぐらいは残してやるつ。と言つのが平時の階級」

バ「非常事態に、名誉なんか気にしてられないわい、と言つのが戦時の階級」

ラ「それと、かつこよさげな名前を残しておいて、常時募集をかけると言う意味もあるな。一般兵は徴兵するが、指揮階級は流石に、教育が必要なので」

バ「この世界では、やはり騎士の名前は憧れなのですよ。一言で言ってしまうえば、出世する唯一の方法とでも言おうか」

ラ「騎士からなら、貴族への取立てもあるからな」

バ「報酬も安定しているし」

ラ「貴族の子女の間では、勇敢な騎士の人気は高いので、逆玉になれる事もあるし」

バ「そういった意味で、以前の騎士の階級に似た名前も残しているわけだ」

ラ「後に色々問題にもなるかな」

ラバ「そう言った所で、本日はお開き」

また来週のお楽しみ。

ラ「来週？」

バ「来週の予定は未定だろ」

うむ。どうしよう。

マウゼル領の戦い（前編）（前書き）

一応バトル回前編。

本番は後編。

マウゼル領の戦い（前編）

「やたらと、杜撰ですね。こんなに簡単に内に入れても良いのでしょうか」

バイエルラインの心配はもっともだ。ギルドで昼に登録した所、そのまま邸内にいる、上役に挨拶して来いといわれたわけだが。中に入る時になんら確認もせず、こうして大荷物を持ったまま、武器も携帯したままで邸内に入っている。

中に入り、場所の確認をしてから、道具を持って侵入するはずだったが、何事も無く中に入れてしまった。

「嬉しい誤算とみるべきか。はたまた、その上役とやらの自信の表れか」

「どつちだろうな」と笑いながら、廊下を歩いていく。歩哨らしき者もいない。気配を確認したが、邸内にいる人間が異様に少ない、使用人などを除けば、50もいない様子だ。

「聞いたとおり、いや聞いた以上だな。しかし、好機だとも思っておこう」

人数削減なのかもしれないが、通路に矢印で進路が記されているのは、気が抜ける。恐らく、この先にいる3つの気配のうち1人が上役なのだろう。マウゼルがそこにいる気配なら話は早いのだが、口ツツは何処にいるのだろう。

「まあ、構わんか。相手によっては、お前に任せるから、そのつも

りでいるよ。これも修行だ」

自分に振られるとは思っていなかったのか、バイエルラインが驚いている。

「えっと？自分はマウゼルの確保では？」

「相手が、お前でも勝てそうな奴ならお前に任せる。仮に任せても危なくなったら俺が始末してやる。実践での経験は、何物にも変えがたい訓練だ」

「まあ、がんばれ」と肩を叩くが。「はあ」となにやら腑に落ちていない様子だ。

「何だ？不服か」

「いえ、ですが師匠の戦いが見れるかと思っていたので」

「ロツソが出たなら見れるんじゃないか？それにこれから幾らでも機会はあるさ。その為にもお前が、早く付いて来れるようにならないとな」

「はい！師匠」

「機嫌を直したところで、そろそろだ」

角を曲がると、廊下の中ほどに、扉とそれを護るように、鎧を着た兵士が一人立っている。たった一人か、分かってはいたが、少ないな。ここの司令官は、よほど自信があるのか、もしくはただの馬鹿か。

「今日入った、挨拶に来たんだが此処で良いのか」

そう言つて、兵に話しかける。そいつは、無言で脇に避け、扉を指し示す。

「どうも、ご丁寧」

軽く皮肉を言つて、中に入る。恐らく立て籠もるためなのだろう、扉は厚くて重い。中に、鉄板等が入っている事は無さそうだが、十分な強度だろう。王城のときも思ったが、この世界では、基本的に重要な扉は頑丈で中から門がかかるのだろうか？城門等ならともかく、中に入られた後に守りを固めても意味は無いと思うが。

「さつき登録しました。私はラギこつちはベイルです」

俺もバイエルラインも、肩にかけた荷物を下ろしながら、正面に座る、悪趣味な赤と金を多用した服を着込んだ痩身の男がマウゼルだろうか？そして恐らく、斜め向かいの席についている男が司令官だろう。

マウゼルらしき男が、言葉を発しようとした瞬間。マウゼルの顔を知っているバイエルラインから、合図があつた。やはり、この男がマウゼルか。

そう思うや否や、棒手裏剣を投げ打つ。

「私があ！ぐあああ」

悲鳴を上げるマウゼルを気にもせず、司令官らしき男が、こちらに

突っ込んでくる。確かに中々だが、十分バイエルラインでも勝てるだろう。俺は速やかに、マウゼルの確保に向う。

バイエルラインのグレイブと、男の持つ長剣が火花を散らす。本来室内戦には向かない長柄物だが、此処は十分な天井の高さと広さがある、特に問題にはなっていない。

「どういつつもりだ」

武器を交差させながら、男が息も荒く尋ねる。どうやら単純な力では、バイエルラインに敵わない様だ、体重をかけて押されると苦しうに顔をしかめている。

「当然、反乱を防ぎに来たただけだ。本来なら師匠一人でも、十分な所だが、修行代わりに俺も来たんだ。だが、お前では修行になりそうに無いな」

中途半端な挑発ではあるが、男には効果十分だった様だ。さらに鼻息を荒くし顔を赤くしている。

「何だと貴様！この、ロツソ様の1の下僕マルティンをなめるなあ」

「お前を下僕にして喜んでるのなら、ロツソとやらも高が知れているな。師匠には到底敵わん、今の内に鳴いて知らせてやれ、さっさとお逃げ下さいとなあ」

中々良いぞ、バイエルライン。少なくとも主導権は、握っている。これならば、手を貸す必要は無いな。そう思いながら、マウゼルを縛り上げていく。なんとも情けない事に、肩口に刺さった棒手裏剣の痛みで、あっさりと気絶している。

縛ったマウゼルを引きずり、扉の前まで行く。厚い扉と壁に遮られ、何があつたのか全然分かつていない兵は、そのままそこに立っていた。あつさりと、一発で気絶した男を部屋に連れ込み、同様に縛り上げる。多少腕が立ちそうだったので、両鎖骨も折って置く事にした、これで縄からは抜けられない。

「あつけなかつたな」

バイエルラインのほうを見ると、終始圧倒している。昨日教えた、円の動きと脱力も、そこそこ形になっているようだ。やはり吸収は早いな、これは結構早く物になりそうだ。

「バイエルライン、余裕はあるから、ゆっくり戦っても良いぞ」

そう言いながら、周囲の気配を慎重に探る。特に変化はない、おかしいなロツソは何処にいる？

マルティンは、突きを主体とした攻撃を仕掛けてくる。どうやら、足技も含めたスタイルらしく、足技が来る度に、バイエルラインは少しバランスを崩す。それを好機と見たマルティンは、突きを囿に、足技でバイエルラインの手を蹴ってくる。

しかし、それは迂闊だったとしか言えない。とっさにグレイブから手を放したバイエルラインは、腰の剣を抜き打つ。

マルティンの膝から下は千切れ飛び、部屋に絶叫が響く。それでもなお、果敢に攻撃を仕掛けてくるマルティンの腕を、未だに空中に留まっていたグレイブを掴み直したバイエルラインが叩く。

腕はあらゆる方向に曲がり、更なる絶叫が部屋に響く。弾き飛ばされた長剣は、不幸にも寝かされていたマウゼルの尻に当る。刺さりはしなかったが、少し切れたようで、マウゼルが目覚めます。

部屋に響く絶叫と、身動きの取れない自分に、混乱したのだろう。

「なあ、なあ、なあ、な」

美味しく喋れずに、只管なにかを言おうとしては、詰まっている。どうせ寝てもらうが、今後の尋問などのために、恐怖を叩き込んでおこう。

「こんにちは、マウゼル卿。お元気かな？」

「だ、だ、だれ」

「誰か？そうお尋ねならば、お答えせねばなるまい。フレデリック新王陛下の命で、貴方を捕まえに来た者だ。一々名前までは言う必要があるのかな？」

「な、な、な」

「何故か？そう聞かれているならば、応えは簡単だ」

俺は、やや薄くなっているマウゼルの金髪を鷲掴み、顔を寄せてこう言った。

「直ぐ死ぬ貴方が、今更なにかを知る必要はあるまい」

目線に殺気を乗せると、マウゼルは泡を吹いて気絶した。舌をかん

で死なない様に、猿轡代わりに、服を切って噛ませて置く。未だにマルティンの絶叫は続いているが、既に背景効果としての役割も果たした。

「バイエルライン」

「はい、師匠」

「お前が、治癒呪式を使えば、そいつは助かりそうか？」

生かして置いてもあまり意味は無いかもしれないが、何か話が聞ける可能性はあるかもしれない。だが、可能性としては低そうだな。

「無理でしょう。俺の呪式では、治癒は出来ません」

「そうか」

それならば仕方が無いな。いつそ、一息に殺してやるか？

いや、そこまでしてやる義理も無いな。

「行くぞ、マウゼルはお前が担げ。気が付いたら、殴って気絶させて構わん。だが、殺すなよ」

俺は自分の持ってきた背囊を担ぎ、バイエルラインがマウゼルを担ぐ。結局用意した紐は、あまり使わなかった。邪魔になるので、置いていく。

「このまま、走って抜けるぞ。中庭に出たところで、発光呪式を行え、順番は分かっているな」

「はい、赤赤紫ですね」

「そうだ」

確認を済ませると、未だに床で呻く男に目を向ける。

「どうする？」

「俺の命は、とうにロツソ様に渡している。お前達に如何こうする事はできない。させない。それに」

「それに？」

「ロツソ様が、お前達を始末してくれる。あの方らしく・・・っく。美し、美しく、かつ華麗にお前達を、殺して下さるだろう」

失血の所為だろう。青い顔を通り越して土気色になりながら、吐く言葉は、まさに呪いのそれだ。

「おま、え、たちが、こ、ろされる、の、をたのし、みに、し」

死んだか。

最後まで毒を吐くその精神にだけは、敬意を払っても良いかもしれない。しかし、お前はあくまでも敵だった。俺が戦えば、殺さずに捕らえる事も可能だったが、それを望みもしまい。

たった一人が死んだことに、不思議なほどの感慨を覚える。これは弱くなったのか、それともこれが正常なのか。どちらにせよ、俺は

これからも殺すし、壊す。それ自体は変わる事はない。

「行くぞバイエルライン」

「はい」

ふと、思いついて振り返る。

「中々の奴だった。だが、わざと隙を見せて攻撃を誘うのは、失敗した時の被害が大きい。今後は、そこまで考えて戦え。しかし、あいつを倒せたのは上等だ。よくやった」

「はい、師匠」

褒められた事が嬉しいのだろう、顔を綻ばせている。人を殺す事による、精神的な問題は無いようだ。動きからして、以前に経験もあったようだし、現代地球の若造とは違うのだろう。少し心配していたが、良かったとも言える。

しかし、人を殺す事に慣れすぎてもいけない。少なくとも自分の弟子を、そんな事にはしたくないと思う。なるべく、フォローに回れるように考えていこう。

「行くぞ、駆け抜ける」

扉を開けると、一気に走り出す。中庭まで気配が少ないのは確認済み、しかし皆無ではない。

室内を駆ける俺たちに、疑問の声を上げるまもなく、俺の勁の一撃が男達を昏倒させていく。女性に関しては、胸に勁を通すのは躊躇

われた為、全て首筋に手刀を叩き込む。

戦場に生きる男が死んでも、それは自業自得と言う感じがするが。流石に女性に関してはそこまで割り切れない。これも女性差別なのだろうが、感覚的な物なので、いかんともしがたい。

中庭に抜けた。

バイエルラインが速やかに、発光呪式を展開、空に三条の光が走る。

町の外に隠れている部隊がこちらに到着するまで、およそ半刻。それまで、マウゼルを抱えて、逃げ回るか隠れるか。そう思っただけだが、その余裕はなくなつたようだ。

「バイエルライン。悪いが戦いをお前に見せるわけにはいかなかった」

さつきまで、ほぼ完全に隠されていた気配が膨らむ。気配を消すならともかく、一般人と変わらない域まで抑えて偽装するとは。流石に背中汗が浮かぶ。此処まで大きな存在感になれば、無論バイエルラインにも分かっている。毛穴が開くような緊張の中に居ることだろう。

「ロツソが」

中庭に面した二階の窓の影に声を掛ける。

「他に誰が居るって言うんだい？」

「遅いお出ましたな」

「美容のための、お昼寝の最中だったのさ」

「それは悪かった、そのまま寝てくれても良いぞ」

冗談交じりに返すが、既に気配だけでバイエルラインの顔色は真っ青だ。此処までの殺気を放ちながら、引くはずがない。

「魅力的なお話だけど…遠慮するよ。僕の奴隷が減っちゃったからね。代わりに君を奴隷にしてあげるよ」

「遠慮しておく」

「だめだよ、決めるのは僕さ」

「それでは、お相手しよう」

霧のように立ち込めていた殺気が、さらに液体のように濃くなった。

マウゼル領の戦い（前編）（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

御意見御感想、さらには誤字脱字の報告など、なんでもお待ちしております。
います。

ぜひぜひ、お願いします。

マウゼル領の戦い（後編）（前書き）

今回、かなりきつい戦闘シーンがあります。

グロイ描写と変態が出てくるので、お気を付けください。

マウゼル領の戦い（後編）

「バイエルライン。さっきの部屋だ、さっきの部屋に入って門かけて籠っておけ。後で迎えに行く」

「ですが、し、師匠」

「急げ！」

半ば怒鳴るようにしてバイエルラインを、先ほどの部屋へ向うように命令する。マウゼルを抱えたまま、バイエルラインが駆け出すのを確認して、落ち着いてくるのを感じる。

守るべき者が居ると言うのは、たしかに力にもなる。だが、同時に精神的にプレッシャーがかかる場合もある。バイエルラインが居る状況に、自分も知らず知らず影響されていたのだろう。やっと頭が、戦闘用になってきた。

「態々、待っててくれるとは紳士だな」

「なあに、仲の良い師弟は、後で仲の良い奴隷同士にしてあげるよ。どうだい、師弟の垣根を越えた交流が出来ると思わないかい？」

「師弟の垣根の中で、十分な交流は取れているから遠慮するよ」

未だに、2階の窓から声をかけてくるロツソとの会話は、どう転んでも不愉快な方向に行くようだ。

「さっさと降りてこないか？それとも魔法使いと言うだけあって、

そこから攻撃してくるのかい？」

「君が僕の美しい姿を見て、気絶しない様に時間をあげていたのさ」

「それはどうも、あまりの醜さに目が潰れないか心配だね」

「そんな軽口も、僕の姿を見るまでさ」

そう言つて飛び降りてきた、ロツソの姿は、異様だった。

まず、その武器が異様だ。3m近い金属の棒、太く長く、そしていかにも重量がありそうな、鉄塊と言つにふさわしい武器。並の人間は、持てる筈もない。

だが、その武器を使う本人の姿はそれに輪をかけて異様、いや、異質にして異常だった。

顔は確かに美しい、女性かとも思うような整った顔、端正な顔には来いブラウンの髪が映え、やわらかさと気品を醸し出す。整つて、小さく纏まった顔、そこだけ見れば、何処かの王子か貴族の令息。女性からは、いや、男性からもため息が出るような美貌だろう。だがその顔の位置が問題だ。

肩口までの高さは、2mを超す。太い腕、あまりにも大きな大胸筋、筋肉の塊と言つた上半身には何も身につけず。その鉄条を重ねたかのような筋肉を火の元に晒している。太く無骨な指、樽の様な脚、体中が盛り上がっている様な印象すら受ける。

まるで、子供が二つの人形の、体と頭を戯れにくつつけたかのような姿。どう考えても、嫌がらせか、悪い冗談のようにしか見えない。

「魔法使いかそぐわれないな、筋肉の塊、とでも改称したらどうだ？
よほどお前に合っているぞ」

俺は完全に皮肉のつもりで言ったのだが、ロツソはそうは受け取ら
なかつたらしい。

「そうだねえ。僕のこの美しい筋肉からすれば、それも良いかもし
れない。でも、どちらかと言えば、美の化身とかの方が良くないか
い？」

「そうだな、馬鹿にしか分からない芸術とかはどうだ？つまり、そ
れを美しいと言ったお前自体が馬鹿、そういう意味だが」

なんだろう、気持ちの悪い光景。グロテスクとも言えるような光景
は、今まで、それは飽きるほど見てきたが。単なる人間を見て気持
ち悪くなったのは初めてだ。

「ふふん、そんな意地悪な事を言っていると、奴隷にしてからの扱い
が悪いよ。それとも、虐められるのが好きなのかな？だったら僕と
の相性は抜群さ、僕は虐めるの超上手いよ」

もう、ただ言葉を交わすのも億劫になった。ただ只管に、嫌悪感し
か沸いてこない。何も喋らず、刀を抜いた。

「せっかちさんだね。そんなに、僕のこの棒を喰らいたいのかい？
良い趣味してるよおー」

そう言つて、棒を構えながらロツソが突撃してくる。周囲の空気も、
何もかも巻き込む様な、怒涛の突貫。だがその進撃は、俺が作り出

した、シャボン玉のような物に止められた。

パチンツと、空中に浮かんだ泡が弾け、中から来い林檎のような香りがあふれ出す。

「んー、今更僕を喜ばせようとしても無駄だよ。でも良い香りだねえ」

「いや、お前があまりにも臭そうなんだな。前もって、臭いを消そうかと思っただが、まだ臭いな」

そう言いながら、荷物から抜いておいた防毒マスクを顔につける。目まで覆えるタイプの奴だ。臭いと言う言葉に反応したのか、ロッソは小刻みに震えていた。

「だがそれでもまだ臭いな、それに醜いから直視するのはきつい。これで顔を隠すしよう。あー臭かった」

「僕が臭いだってえー！君、死んでしまukai。死んでしまいなよおおー！」

そう言って、再び、こちらに向ってこようとするロッソの前に、もう一度、シャボン玉が浮く。

「こんなものお」

そう言いながら、ロッソは手でそれを潰す。すると今度は、刺激臭を伴った、本当に酷い臭いが新たに漂う。ロッソは、右半身にその液体をべっとりと浴びた。

「く、臭い、臭い、臭い臭い臭い臭い、くうううさああああいいいい！」

「おや、自分で自分の臭いに気が付いたのか、それは重畳」

「ふざけるなあ！き、君はもう、ただでは殺してあげないよう」

そう言っただけを指差すロツソの前に、三度シャボン玉が姿を現す。

「またこれかあ、馬鹿の一つ覚えだ」

そう言っただけ、持っている棒で、シャボン玉を叩き潰す。

その瞬間、爆音が中庭に響いた。

硝酸メチルとニトログリセリンの混合液。およそ1kgの質量を持ったその液体は、叩き付けられた棒の衝撃に反応し、爆発。衝撃波と、爆音そして熱量を周囲に振りまいた。

不意の爆発に、気を取られたロツソの懐に、一気に飛び込む。同時に縦に旋廻、俺の刀がロツソの太い腕を断つ。そのままの勢いを残し、首筋へ一閃。流石に、これは弾かれたが、ついでとばかりにわき腹を薙ぐ。そのまま、追撃が来ないうちに攻撃圏から離脱。

「腕が落ちたよ、大丈夫かい？」

ロツソは落ちた腕を拾うと、切り口に付けた。すると流れる血が見る間に止まり、瞬時に腕が繋がった様だ。

「それが噂のお前の力か。治癒と言うよりは、再生といった感じだ

な」

「ふ、ふふっ、ふひゃ、ふひゃひゃひゃ、あはっ」

腕をつなげたロツソは、いきなり笑い出す。痙攣するかのようには、うロツソの姿は、不気味と言う以外言いようがない。

「やるじゃないか、君は絶対奴隷にして、お尻から犯しまくって。そして、早く殺して下さいが、口癖になるほど心を壊してあげるよ。此処まで僕を怒らせた君を、僕が一生愛してあげよう」

「そんな愛は、いらぬよ。変態同士で乳練り合ってる」

思わず、背中に寒気が走った。此処まで悪意に彩られた人間は、見たことがない。下衆は数多く居た、外道も、変態も見てきた。だが、こいつの物は一味違う。先ほどかいた汗が、背中で凍りつくような感覚。吐き気と、頭痛に近い感覚を抑え、ロツソへ向う。

低く入った、俺の頭の上をロツソの棒が薙ぐ。そのまま横を走り抜けつつ、太ももの肉をそぐように切り落とす。落ちた肉を、ロツソが拾う前に蹴り飛ばす。

その瞬間、俺の頭ほどもあるロツソの拳が、俺の肩すれすれに振り下ろされる。化勁を使ってそらしたが、それでもなお肩の骨が砕けそうな衝撃が、体に走る。痛みをこらえ、ロツソの首を狙って、刃を走らせる。体を曲げたロツソの肩を斬ったが、その所為で隙を作ってしまった。脚を払うように、ロツソの棒が狙う。間一髪跳んでかわす、更なる追撃が来る前に、ロツソの胸を蹴って距離をとる。

「化け物か、その凶体でその速さ。しかも、斬ってもそのまま攻撃

してきやがる」

「神の化身さあ」

ロツソの周囲に、3つのシャボン玉を浮かせる。中身は、先ほどの混合液。作り上げた瞬間に棒手裏剣を投げ打ち、破裂、いや爆裂させる。

その爆発の中に紛れさせ、さらに頭上から、液体を降らせる。作り出した液体は王水、濃塩酸と濃硝酸を3対1の比率で混ぜ合わせた液体、殆どの金属を溶かす強酸性の液体。無論、人体に対しても強力な溶解作用を発揮する。

ロツソの皮膚が焼け爛れる音が響く中、悲鳴のする方向へ、棒手裏剣を続けて投擲。ブスブスと、肉に刺さるのを感じる。しかし、体表面をさんに焼きながらも、ロツソは攻撃してくる。

「この美しいロツソ様に、こんな事をするなんて。お仕置き2倍が確定だよ」

度重なる爆撃と、ロツソの重撃によって、足元の状態が悪い。ただただ、力で押してくるロツソの、竜巻のような棒の旋廻に、付け入る隙がない。普通はこんな攻撃をすれば、スタミナが尽きるか、肉体に限界が来る。しかし、そんなそぶりは毛ほども見せず、ロツソの攻撃は続く。

中庭に生える木を盾にするも、まったく攻撃の速度が落ちる事はない。ロツソの攻撃は、黒い暴風となってやむ事を知らない。

しかし、単調な攻撃で、よける事は容易く。おかげで、呪式の連発

で負荷のかかった脳を休めることができた。

その時、音を聞きつけて、中庭に何人かの兵士が現われる。

「貴様ら、何をしている。あの暴れている男を止めないか！」

あまりの迫力に、混乱している兵士達に、わざと命令をする。本来であれば、聞くはずの無い命令ではあるが、一瞬考え込んでしまい、致命的な隙を作る。

「すまんな」

ぶん殴りつつ、兵士の持っていた槍を二本奪うと、ロツソに向けて投げつける。その後を追う様に疾走、槍を叩き落した棒の軌道が変わった隙に、一気に懐に飛び込む。右腕を、手首から先を斬り飛ばす。さらに、返す刀で左手を肘から斬りおとす。遠心力を与えられていた棒は、両の手の先と共に、吹っ飛んでいく。

得物を失ったロツソに、さらに攻撃を仕掛ける。首筋に突くように切り付けるが、残っている腕を盾にされてかわされる。さらに腹を、半ばまでも断つが、厚い筋肉と、熟練した技巧を持って防御され、断ち切る事はできなかった。

腹に、刀が締め付けられ、一瞬動きが鈍る。その隙に、膝を合わせられた。とっさに刀を引き抜きながら、後ろに跳んだものの、完全に威力を殺す事はできなかった。胃液が口元まで上がって来るのを感じる。

「やるじゃないか、だがね」

そう言うと、斬りおとした腕や、切裂いた腹が、見る見る回復する。まったく持って、化け物としか言い様が無い。

「無駄なのさ。さあ、僕の奴隷におなりよ…って、何だこれは！」

復活した、腹の周りや、腕に黒い斑紋が見える。

「なぜだ、なぜ、なぜだああ。僕の、僕の美しい肉体にこんな斑があ」

ロツソの、体に浮かぶ斑は、どんどん色濃く、そしてその範囲を広げていった。

「ロツソ、お前、癌というものを知っているか」

「がん？がん？がんん？それがこの斑だとも言うのかあ！」

「その通りだ。癌、腫瘍、肉腫、言い方はともかく、お前は病気になったのさ」

「病気だとお！そんな物には、今までなったこともないぞ」

初めての経験、そして自分が美しいと言う肉体が、黒い斑で覆われた所為だろうか。端正な顔は醜く歪み、先ほどまでとは話し方も変わっている。

「お前が最初にかぶった液体、さらには、呼吸している空気、そして俺の刀や棒手裏剣には、毒が塗ってあった。それも、単なる毒ではない。その病気を誘発させる毒だ」

発がん性物質、そして発がん性因子。ベンゾフラン、アセトアルデヒド、テトラクロロエチレン、シスプラチン、硫酸ジメチル、エピクロロヒドリン、そして、王水による火傷、爆炎による火傷。それらの因子は、爆発的な細胞分裂の中で、結果を表す。

「その結果が、急激な癌の成長。動けば動くだけ、回復すれば回復するだけ、お前の死は早まる」

体中に高濃度で撒かれ、爆炎で暖められて気化し、斬りつけられる度、刺される度に体内に侵入した。皮膚に、肺に、内臓に、血管に、それらは一気に牙をむいた。

「苦しむよりは楽に死にたいだろう。首を一撃で落としてやろう」

この世界で、そこまで進行し、全体に転移した癌を治す術はないだろう。苦しんで多臓器不全で死ぬのが落ちだ。

呆然と、へたり込むロツソに、止めを刺そうと近づいた時。

ロツソに匹敵する存在感が生まれた。

危険を察知し、速やかに後方へ跳ぶ。さっきまで俺が居た空間を、3本の矢が通り抜ける。

「おや、避けましたか。気配は消していたんですがね」

「よく言う、アレだけ殺気を撒き散らせば、並みの奴なら気を失うぞ」

そこに立っていたのは、見た目年齢が分からない男だった。20代

とも30代とも取れる。痩せた体に、獵師のような服を着込み、片目にはモノクルの様な物を掛けている。やわらかそうな物腰をしているが、青い目が、鉾物のように冷たい。

「ロツソさん、そんな物、ロベロ老師なら直ぐに治してくれるでしょう。心配は要りませんから、今日の所はいったん引きましょう」

「お前を帰すと思っているのか」

せつかく、此処まで追い詰めたのだ。今更、もって帰られては困る。

「まあまあ、此処は痛み分けと言った所で」

そう言いながら、男の右手がゆっくりと上がる。あまりにも自然な動作だったので、とっさに反応が出来なかった。

しかし、その男の目の色が、一瞬変わる。鉾物のような青から、揺らめく赤に。

先ほどの物を遥かに超える、寒気が走る。とっさに、開いている窓から、邸内に飛び込む。飛び込み際に、ロツソに向けて投擲出来る限りの棒手裏剣を擲って置いた、運が良ければ、脳を破壊できる。室内に入り、さらにドアを突き破り、廊下に出て、走る。走る。走る。

その時、後ろから。

ゴウッ！

と言う音が聞こえた。数瞬遅れて、背後から急激な熱波が迫る。髪

の毛が、チリチリと音を立てるほどの、熱風が通り抜けた後には、静寂が待っていた。

来た道を取って返し、熱でむせ返るような部屋を抜け、中庭に戻る。

そこには、炭化した兵達の死体と、燃え盛る木。

そして、首の無いロッソの死体があった。

俺は、言葉も無く、立ち竦むだけだった。

周囲は、熱で焦げ付くようなのに、俺のかく汗は、冷たかった。

マウゼル領の戦い（後編）（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

また誤字脱字などもありましたら教えていただければ嬉しいです。

今回は、ちょっときついお話でしたが、読んで頂いてありがとうございます。
ございました。

設定資料・色々(前書き)

長らく間が開きました。

しかも復帰第一弾が設定資料…ダメかね？

本編の続きもこの後で載せます。

今回乗せているのは、もうあまり本編には関わらない所や裏設定などですね。かかわってくるところは濁しています。宗教については、今後にも多少関係があります。

設定資料・色々

まずは言葉

言語 大陸ごとでは、ほぼ共通。方言などは存在する。亜人などは独自の言語を持つ。現在主人公のいる大陸の人族共通言語は、エルトラム語

文字 キリル文字のような字体 種類は34種 筆記体のように書くのではなくブロック体で書く。

文法 ラテン語などに近い。単語、名詞には、性があり、それによって文章の変化も起こる。主人公は、ヨーロッパ言語を多く習得しているので、慣れるのは早いはず。

続いて単位あれこれ

お金 ガランが単位。銅貨一枚が1ガラン。後はそれぞれ100倍で銀貨、10倍で銀板、10倍で金貨、100倍で金板。銀板や金板は、大きな取引なので使うので、一般にはあまり流通していない。1ガランが感覚的には300円ほど。

距離 ヤード・インチ法に近い。1インチがリル、ヤードがフィール。マイルなどは使われなくて、3.9kで1里となる。

重さ 10gで1パト、10kgで1ルパト、1tで1トパト。でも、樽幾つとか、人何人分とかの重さのほうが通りがいい。

時間 ほとんど地球其のまま。実は一日が、24時間と2分ほどなので、地球とは6分ほど差がある。8年に1度1年が1日少なくなる。時間は、町では鐘で知らせているが、鐘を鳴らす時間は町によって様々、2時間だったり1時間だったり、城や教会などでは15分おきにも鳴らしている場合が多い。

さらにランクあれこれ

ランクは、何処でもEからA。穢れ物のランクに限ってGからS。とりあえ

ず穢れ物のランクを紹介。()内はイメージ

G なら一般人でも何とか倒せる(軍鶏とか)

F だと戦闘経験がないと厳しいレベル(野犬とか)

E で専門職ならば、つまり戦いを経験した事がある兵士などなら何とか1人で戦えないことも無いといったレベル。確実に期すならば2人はほしい。(猪とか)

D は、専門職が3人から4人ほど総がかりでかかるか、一級の腕が必要。(虎とか)

C になると、軍の部隊を動かすレベル。指揮官をつけて2〜3分隊は必要つまり10から30人でかかるレベル。個人で倒せれば、かなりの腕前、一流の仲間入りという感じ。(C級内で差がある)ぎる)

B 級以上の穢れ物は、なかなか遭遇できない。B級とC級の壁は厚く、C級は玉石混合のような状態。おかげで種類だけなら一番多い

のがC級になっている。(数だけならGやFのほうが圧倒的に多い)

B級 あほの様に強い。中隊規模の軍隊しかも、各兵種をそろえた混成部隊で150人から250人掛かり。もしくは特殊な武器を持った一流がチームを組んで倒す。多くの倍が特殊能力などを持つので、対処方などが必要。

A級 どうにもこうにも対処できない。超一流が伝説級の武器携えてチームで当たらなければならぬレベル。これを倒せば勇者扱い。天災といっても過言ではない。その分めつたに居ない。名前持ちの物もいる、たまに自我を持ったりして、S級になる奴なんかも居る。A級とS級にそこまでの差は無いが、神の加護とか思考能力の問題で、戦ったらだいたいS級が勝つ。

S級 特別クラス。実は穢れ物の分類ではない。自我を持ち人との共存を望んだA級や、神に使役されていた神獣、神の祝福を得た存在など。基本的には、人間に敵対しない。ただし不用意にテリトリーに入ったりするとやられたりもする。A級が暴れた時などは、S級に退治を依頼したりする。出てきただけで、誰も勝てないので抑止力になっている側面がある。神もその辺を望んでいたようで、S級のやつらも理解している。

墮天 なぜが存在した、狂ったS級やS級並の力を手に入れてしまった穢れ

物など、抑圧なしに力を使うので、S級でもなかなか手に負えない。過去に4回顕れているが、1回はS級が総かかりで、後は、神様が出てきてぺちつと倒してる。

同じC級D級でも、かなり強さには差がある。ガルドはいい例。いろいろな要素が関係してくる。傭兵や冒険者のギルドランクもC級

が壁、Cになれるかどうかで一人前かどうかが決まる感じ。

ちなみに、ガラムはC級。強さだけなら、Dの真ん中くらいだけど、頭が良くてつかまりにくい。毒がある。毛皮や牙、肉に価値がある。集団で動く習性がある、などといったことによりC級に入っている。

穢れ物かどうかの判断は、人間を襲うかどうか。家畜やペットではない野生

動物が、一度でも人間を襲えば、見事に穢れ物認定。家畜の事故で人が死ん

だりしても認定されることは無い

最後に 神様・宗教

女神・創生神・主神と三つ揃いのナーガス様。ナーガスをメインに総勢5柱の神がいる。信徒は自らのことをナデインと呼ぶ。宗教は基本的に、1つしかないので、何々教会とか何々教とはいわない。精霊信仰は、めったに出て来れない神様よりも、いつも世界の管理をしている精霊たちに、感謝し崇め様と言う姿勢なので、宗教上反発はしない。むしろ敬虔な信者ほど、直接崇めるのも恐れ多いと、精霊信仰に傾倒していく傾向がある。神様は、いろいろな場面で顕現しているので、実在を疑うものはいない。無神論者なんてナンセンス。ただし、一度どこかで顕現すると、しばらく出て来れない。しかも、前回ナーガス様が出たから今度は他の神様、といったことも出来ない。神が顕現するためには、特定の条件がある。他の4柱は徐々に出ていきます。5年ほど前に、1回顕現しているので、後しばらくは出て来れない。でも声を聞ける方々はいます。存在しないという事ではなく実体化できないということ。

戦いと限界（前書き）

本編復帰です。

何とか短めのペースで続きを頑張ります。

戦いと限界

事が終わり、辺りは静けさを包まれていた。

しかし、それも一瞬の事で、その直後には後詰の兵達が、門を開けて町になだれ込んだ。あまりにも簡単に、門が開いたのには訳がある。

邸内で戦っていた時の、爆音等を聞きつけて、町にいた傭兵達の一部が確認しに来たのだ。そこで彼らが見た物は、焼け焦げた死体と首の無いロツソの体。化け物とすら言えるロツソの事を知っていた連中は、それを見て一目散に逃げ出した。

既に、前金を受け取っていた事もあるのだろうが、その逃げっぷりには感心すら覚える。折り良く、外には兵が迫ってきていたので、強奪や虐殺なども起きず、兵は平和裏に町に入る事ができた。

兵を率いる指揮官は二人。その両名ともが、シュトラウス將軍のお墨付き、現状いる人材の中で一級品と言う評価の人間だった。

隊長を務める男は、シュルツ・コーエンハイム。シュトラウス將軍いわく、御伽噺に出てくる騎士の写し身。儀に忠実、仁に誠実、智を携え、胸には勇気の炎、絵に描いた様な騎士道一本槍の武人。

しかし、同時に少し一本調子と言おうか、真面目すぎるくらいがある。本人もそれを分かっている様で、他人の話にもよく耳を傾けると言う有能な人材だ。

今回副官を務めている女性は、それを補う為にも一緒になっている。キュリアという名前のその女性は、軍属の女性には珍しく呪式が使えない。珍しい体質、呪式拒否と言う枷を背負っている。

しかし、それを補って余りあるほどの情報管理と人員整備、そして知恵を持っていると評価されている。元冒険者の経験と、ハンデを克服するための訓練で、叩き上げの一級線となった彼女は、目つき鋭いクールビューティーと言うのがよく似合う。

色々と差異の目立つ二人だが、一つだけ面白い共通点がある。武器が変わっているのだ。

シュルツの武器は、地球で言う所のコーカサスサーベル。鏢のない片刃の重さのあるサーベルで、基本片手で扱う武装になる。寒冷地で、金属鎧の無い戦いを目処に創られた為、生身の相手に向けた武装と言える。

そして、彼は盾を用いることなく、ゴツイ手甲を使っている。騎士と言うにはいささか変わった武装と言わざるを得ない。

キュリアが使っているのは、一対の錐剣 スティレット 刃を持たず、先端だけに鋭さを集約した刺突武器。鎧や鎖帷子を持った相手に止めを刺すための、慈悲の剣。片方の鏢は長く、太く、剣身と平行に作られている。あれは、ソードブレイカーとしての役割も兼ねているのだろう。

やや変わった二人ではあるが、聞いていた分の仕事は十分にしてくれた。門を開けて中を確認した後は、兵員を3部隊に分けて行動した。1つは邸内の探索、これはキュリアが指揮を執った。1つは町内の巡回。そして、シュルツは残りを率いて逃亡した傭兵達の後を

追った。

これは、正式に傭兵ギルドに登録した傭兵に関しては、そのまま負けた後でもギルドに残っていれば、犯罪行為のない限りその場で釈放になる。

しかし、あまりにも手広く傭兵を集めた所為で、ルールを知らない者があまりにも多く、多数の逃亡者が出たのだ。まともな傭兵を守るためにも、そういった連中には、相応の罰を与えなければならぬ。

捕まえたマウゼルはバイエルラインとキュリアに任せ、俺は単身、マリツカさんの店にいた。

「あっさり終わったわね」

マリツカさんは、丁寧に入れたお茶を出してくれた。独特のハーブティーのような香りが部屋に広がる。俺はそう言った事に詳しくは無いが、これがマリツカさんの気遣いであると言っ事は分かる。

「ですが、自分の弱さを痛感しました」

「だからあの子は一緒じゃないの？」

バイエルラインには、気絶したままのマウゼルを見張らせている。奴等が奪還紙に来た時の為にと言っておいたが、そんな事は起きないだろう。

「弟子の前で位、意地を張りたいですからね」

そう言うと、マリツカさんにはこやかに笑う。その笑みは何かを修めた人間の様な、大きな背骨を持つ、おおらかな笑みだった。

「今日は穏やかな目ね、そっちの方が好きだけど。こんなオカマさんに何の御用かしらね？」

すこし、おちよくる様な言葉遣いも、今は心地よい。いや、悪意には感じないからだろう。これはこの人が持つ特有の物だ。

「私は、同性愛者はあまり好きになれません。しかし、それ以上にオカマさんを嫌いにはなれないのですよ」

この思い出を、良い思い出と言って良いのか悪いのか。それは分からないけれど、少なくとも俺を支えてくれた一つであるのは間違いない。

あの幼年期の拷問、訓練所の中での事。当然のように居た子供を痛ぶり、辱めようとする連中。そんな中で、ただでさえ狙われそうな東洋人の俺が、最後まで性的な虐待の被害にあわなかったのは、その他の多くの子供達が虐待にあわなかったのは、あいつが居たからだ。

名前も知らない、既に顔貌さえ細かくは覚えていない。俺よりも、1つか2つ年かさだったあいつは、そういった情欲を一手に引き受けてくれた。自分は体は男でも、お姉さんだから、皆を守るからと。

10歳程でしかなかったあいつが、なぜそこまで出来たのかはわからない。なぜ、そこまで守ってくれたのかもわからない。だが、あのお姉さんのおかげで俺たちは助かった。始めは気持ち悪いとか。変だとか言っていた俺たちを、なぜそこまで守ってくれたのだろう

か。

俺たちを守って、歯を食いしばって耐えながらも、人を傷付けたくないと泣いていた。誰もが感情を麻痺させる地獄の中で、ただ1人皆の為に泣いていた。

今どうしているのかは知らない。あるとき不意に姿を消したから。当時の俺は、別段考えていなかった。しかし、今になって思う。

色々な偶然が、俺の人生を狂わせた。

色々な奇跡が、俺の命を救ってくれた。俺の魂を永らえさせてくれた。

「大切な思い出、そう言った所かしら？」

「そうですね」

上手く伝えられないから、俺には言葉にする方法がないから、今は黙って頷いておこう。

マリツカさんは、それ以上追及することもなく、俺にお茶のおかわりを入れてくれた。

しばらくは静かな時間が流れる。俺は黙ってお茶を飲み、マリツカさんはクツキーを摘む。一種独特ではあるが、とても穏やかな空間だ。

しかし、落ち着きに此処に来たわけではない。

「まずお聞きしたいのですが、マリツカさんはドワーフですよね。そしてドワーフの多くは、鍛冶等の職人としての腕を持つ。そうですよね？」

「そうね、私は残念ながら呪式が使えないから、そっちの道は諦めたけど。多くのドワーフたちは、その腕に誇りを持っているわ」

「今回の戦い、自分の弱さを痛感しました。そして武器の弱さにもです」

目の前に刀を持って、ゆつくりと引き抜く。光を反射していく刀身が、ある所で一際大きく光を放つ。だがそれは、けして美しい光ではなかった。

「歯切れ。よく折れなかったわね」

「それが刀の特性ですからね。折れず曲がらず、その切れ味はかみそりのように鋭い。ですが」

「その、刀だったかしら。それはもう使えないわね」

「ええ」

その通りだ。歯切れは、刀身の半ばまで行っている、細かい刃こぼれならば何とかなるが、此処まで割れてはもう無理だ。

元々が新々刀、それも偽作であるのは分かっていた。銘は山浦真雄と切ってはあるが、真っ赤な偽物だ。それでも、そこその品ではあった。

しかし、今後もロツソのような奴や、あの時現われた男などと戦うのなら、これではダメだ。もっと、信用できる武器が要る。今の俺の力では、この刀を全力で振れない。刀の方が耐え切れない。

2尺1寸5分（約65cm）山浦真雄銘の偽作、良い刀ではあったが、これ以上は無理だ。長らく役に立つてくれたが、致し方ない。

「そこで、これに変わる武器を探しています」

「正確に言うなら、その武器を作れる者をつて事ね」

「その通りです。どなたか心当たりはありませんか？」

「そおねー」

マリツカさんは、顎に指を当てて考えるしぐさを見せる。指が髭に埋もれているので、少し変に見えるが。

ふと目線が合うと、マリツカさんはニヤリと笑う。

「でも、何でかしらねえ？」

「何がですか？」

「貴方は、本質的に他人をそんなに信用しないはずでしょう？先日、1日だけあった私を信用して、武器のことを聞くなんて、何でかな？そう思ったの」

「そうですね」

そう考えてみれば良く分からない。以前の俺ならば決して行わない行動であるのは間違いないだろう。

「何と無く。何と無くでしょうね」

そう、そう言うしかないだろう。他にはなんとも言葉にならない。

「あら、あら、あらあら。貴方に似合わない言葉ねえ」

「そうでしょうね。最近、どうもおかしい事が多いですが」

「ですが？」

「それが、嫌ではないのですよ」

自分の知らない一面が、見えてきたということだろうか？そして、今回の一件まで、調子に乗っていたのも確かなのかもしれない。どうも、こちらに来てから強くなりすぎていたように感じていたが、油断だったとしか言えない。

ロツソとの戦いに現われた男。

あの男に勝てた気がしない。いくら、ロツソとの戦いがあつた後とは言え、勝てる確信が持てなかった。いや、むしろ負けると思った。

もう一度、俺はニュートラルな所に戻るべきなのかもしれない。だが、既に弟子を持ち、フレッド達の守護者を誓ったのだ。現状で足掻くしかない。

「それに、さっきも言いましたが、オカマさんは嫌いになれません。

そしてそれ以上に、俺は負けず嫌いにしてね。負けると思ったのが、許せないのですよ。それを払拭するためならば、すぐれる所にはすがりますよ」

クククツと、マリツカさんが笑う。口元を手で多い、笑いをこらえるようにしても声が漏れるその姿は、形だけなら完全な女性だろう。

「そういうのは嫌いじゃないわ。それならちょうど良い事に、王都の傍のローグ山にドワーフの里があるわ。そこに私が直接案内してあげる。マリツカ・ローグが、貴方の望む武器を作れる職人に会わせてあげる」

しっかりと俺を見据えるその目には、優しさだけではなく、断固たる決意と熱意の炎が燃えていた。

戦いと限界（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

休んでいる間に、多くの登録がありまして、休んでいる方が増える
って何？と思いましたがありがとうございます。
今後も頑張ります。

やるせない時

その日は一晩町に留まり、夜にロツソの死体や、そのほかの犠牲者達の火葬を済ますと、翌日早くに俺とバイエルラインは町を出た。

兵たちは、未だに周囲の警戒と警備、そしてジギスムントとの関係性を示す証拠を探すために町に残っている。案内を約束したマリツカさんは、2日ほど遅れて後を追うとの事なので、軍と一緒に王都へ来るように手配しておいた。

急ぐ道でもないのに、来た時よりはゆっくりと馬を走らせながら、王都へ戻る。その道中、バイエルラインがこう呟いてきた。

「師匠の戦いが見れず、残念でした」

「お前も燃えたかったのか？死んでいたぞ。お前も、そしてマウゼルも」

現実問題として、あの状況で誰かを守りながら戦うのは勿論、あの男が出てきた時点で、行動を起こせとは思わない。ガスマスクも数が無かったし、毒の中に晒すわけにも行かないだろう。ロツソがもう少しみ易ければ、刀だけでも倒せただろうが、今の俺では無理だった。

「俺もまだ弱い。少なくとも、お前を守りきれ自信はなかった。俺はさらに強くなる、お前もさらに強くなってついて来れば良い」

「ロツソはそこまで強かったのですか？」

「アレは、強い弱いと言葉で言うのは難しいが、倒しにくさで言えば一級品だな。少なくとも、対策無しに戦える相手ではない。変態だったし」

思い出すとゲンナリしてくる。心の底から気持ち悪い変態だった。

「変態ですか」

「ああ」

「そうですね」

「ああ」

よく分からない空気が流れ、お互いになんとはなく気分が悪くなった。倒したはずなのに、さらにダメージを与えらる。何処までも厄介な相手だ。

しかも、正確には倒し切っているのかも判らない。考えるほどに気持ち悪い奴だ。本当にプラナリアの様に、生えて来たらどうしよう？と言うか、何か生えて来そうな気がする、頭持って帰られたし。

「良い天気ですね」

「そうだな、良い天気だな」

バイエルラインの、何とか空気を変えなければならぬと言つ意思がはっきりと感じ取れる言葉に、とりあえず返事を返しておいた。

そのまま、痛々しい空気も変わらず、会話もないまま街道を進んでいた。確かに、雲の流れは緩やかで、穏やかな日差しは遮られる事もなく辺りに降り注いでいる。しかし、良い天気であればあるほど気持ちが悪くなるのは、今回俺が負けたからだろうか？昔はこんな事は無かったのに。

ため息の一つでもつこうかと、肩を落としかけたその瞬間。バイエルラインの叫ぶ声が聞こえた。

「師匠！煙が！」

見ると、街道の先に黄色い煙がたなびいている。アレは以前聞いた事があるこの世界での発煙筒、緊急を表す色。

「急ぐぞ！バイエルライン」

「はい！」

一気に馬を加速させ、そのまま一気に駆け抜けながら、意識を拡大していく。呪式を併用させ、一気に知覚範囲を増やす。しかし、有効範囲内には存在がない、最低でも500mは離れている。

さらに馬の腹に蹴りを入れ、加速をかけて走る。

バイエルラインが、やや先行している。俺の馬も借りた物なので、そこまでの名馬と言うわけではない。しかし、バイエルラインのほうに乗っている馬が良い、そして乗馬に関しては、俺よりも上だ。そのバイエルラインから通信呪式が届く。

「視認しました。馬車が賊に襲われています」

「人数は、生存者はいるか？」

「生存者は不明です。馬車の周りには、賊らしき奴等が6人ほどいます。いえ、山賊ではありません、傭兵らしき格好をしています」

傭兵だと、6人と言うのは賊にしては人数が少ない。訳あり？狙われたと言うわけか？

「一人は生かせ、生存者は判らないが、できれば守れ。ただし一人たりとも逃すんじゃない。賊も、そして生存者もだ」

「了解」

バイエルラインは、馬の鞍から外したグレイブを逆手に構えて突進をかける。鞍に脚を掛け立ち上がると、両手を広げて跳躍する。ようやく気が付いた賊達が、武器を手くこちらを向く。

「遅い、遅すぎる」

取り出した棒手裏剣を、武器を構えた賊達に擲つ。2人は目を貫かれ、絶叫を上げて倒れ付す、ただ1人だけ反応し、辛うじて避けたが額から血を噴出す。

「クソがあー！」

視界を奪われた男が声を上げるが、そこをバイエルラインのグレイブが見逃すはずがない、太ももと両肩に、続けて攻撃をくり出す。

四肢から血を流しながら倒れていく男を見て、背筋が黒く固まるの

を感じる。その男は、マウゼルの町で門衛をしていたあの傭兵だった。

やっと俺もその場に到達し、鞍を蹴って馬車に飛びつく。馬車の中には、人が4人剣を構える男が2人、そして隅にうずくまる血まみれの男女。いや、もう1人。

「なあ、なんだてめえは」

男の1人が誰何するが、応えてやる義理はない。この男にも見覚えがある、しかし相手は俺たちを覚えてはいない様だ。つまらない奴らだが、人に危害を加えるのなら容赦はしない。

「てえ、ぐああ！」

「ふうつくつ！」

刀の柄を、鳩尾に深々と突き刺す。胸骨の折れる音、肋骨のきしむ音、そして筋肉の引き千切れる音がする。死にはしないだろうが、決して健康体でいられるわけではないだろう。

「いつそ、死んだほうが楽かも知れんな」

だが、情けはかけないよ。

「助けられなかったか。すまなかった」

隅でうずくまる2人は、既にこと切れていた。外に居た連中を片付けたバイエルラインも、馬車の中を確認し言葉を失っている。固まる女を包み隠し、こちらを睨みつける男の顔は、視線のみで人を射

殺せるほどの形相のまま固まっている。

しかし、その視線も、そして決意もむなしく、男も女もこと切れていた。

「すまん。間に合わなかった」

見開いたままの目を閉じる。まだ若い男は、俺とそう変わらない年齢だろう。命をかけて誰かを守るものとして、そして、その行動をとったものの先達として、貴方を尊敬しよう。

同時に、貴方達を殺してしまった一因は俺にもある。あの町で、俺がロツソを倒しきり、一気に町を陥落させていれば、このような人間を無造作に放つ事はなかった。

すまない。

男の体をどかし、女の体に声をかけた瞬間。

「師匠！」

バイエルラインの叫びと共に、小さな影が飛び出してきた。その影が持つ小刀は、俺の腹に浅く突き立った。

「師匠」

とっさに駆寄ろうとするバイエルラインを手で制し、震える小刀を素手で握りこむ。

「お前の両親は守れなかった」

握った手から血が漏れる、腹にはうつすらと血が染み出していく。

「そして、お前の敵を討たせてやる訳にも行かない」

手から漏れた血は、小刀を伝わって相手の手にも広がる。

「お前が俺を怨むのも自由。誰かに憎しみを撒き散らすのものも自由だ」

震える手が小刀から離れる。1歩2歩と後ろに下がり、ペタリと尻餅をつく。

「だが、それでは何も生み出さない。俺は復讐を勧めない。恐らく、お前の親もそう言うだろう」

尻餅をついたままの少女は、自分に良く似た顔立ちをした母と、同じ髪の色をした父を見て、涙も流さず下に手を付いた。

「泣けば良い。涙を流せる時に流せないと、後で後悔する」

俺は後悔をした。あの時泣き叫び、絶叫したかった。

「かならず後悔する」

だから涙を堪えるな、泣け、涙を流し、叫び、慟哭しろ。

「泣け、君の両親は死んだ。君に出来るのは、ただ泣く事だけだ」

自分の無力を、涙で流せ。一時で良い、覆い隠せ。

「泣け」

他の誰でもない、君自身の為に。

「泣け」

少女の双眸から玉のような涙がこぼれる。

「叫べ。しがみ付いて泣きじゃくれ」

大きく息が吸い込まれ。

少女の絶叫が響き渡る。

動かぬ両親にすがりつき、物言わぬ顔を見つめて。

ただただ涙と叫びを解き放つ。

俺とバイエルラインは、賊たちを馬車から担ぎ出し。

静かに馬車の扉を閉めた。

少女の絶叫は、その声が掠れ、少女が疲れて眠り込むまで続いた。

やるせない時（後書き）

ちよつと短めですが、難産でした。
御意見御感想、誤字脱字をお待ちしています。

曇天と雨（前書き）

今回は、結構な痛いシーンがございます。

残酷な表現が苦手な方には、申し訳ございません。

しかも短めだし…頑張ろう

曇天と雨

今だ息のある、3人の男を引き摺って、街道脇の林に入る。

先ほどの、賊の内2人は、バイエルラインが切り伏せた。俺が胸骨を潰した男のうち片方は、そのまま窒息して果てた。彼らの死体は、林に入つてすぐの場所に積み上げてある。

生き残つた3人を、木にそれぞれ縛りつけ、1人を覚醒させる。

「なあ、て、てめ、ぐおっ！」

目を覚まして、直ぐに騒ぎ立てようとする男の口に、そこらに合つた棒切れを突つ込む。歯をへし折りながら突き込まれた棒に、男は目を白黒させて黙り込む、いや、話せるはずもない。

「黙れ、黙っていれば、もうしばらくは生きれる。騒げば、拷問の末死ぬ。好きな方を選べ」

黙つた所で、死んだ方がマシから、順当な死へと変わるだけだがな。

「なぜ馬車を襲つたか答えて貰おう。誰かに頼まれた、もしくは理由が有つたなら片目を、ただ、欲の為に襲つたのなら両目を
「睨れ」

男の両目は、静かに閉じた。全身を瘧のように震わせ、股間からは小便を漏らしている。

俺は、黙って口に突っ込んだ棒を横に薙いだ。頬が横に裂け、幾つかの歯が飛ぶ。悲鳴を上げようとする男を、勁の一撃で静めて黙らせる。猿轡を咬ませ、舌も噛めず、言葉も発する事ができないようにする。そう強く打ってはいない、直ぐに目が覚めるだろう。

残りの2人にも、ほぼ同様のことをしたのだが、俺が胸骨を折っていた男は途中で死んでしまった。別段、生かす理由もなかったし構わない。行動が何処までも素人臭い、素人が、素人のまま、一般人を傷つけた。言ってしまうとただそれだけの事。

だが、こいつ等を行動に走らせた一因が、俺にもあるというのが気に食わない。拳句にあんな小さな子供を、あんな若い少女を孤児にしゃがった。俺にはそれが、我慢ならない。

正義でもない、偽善ですらない、ただただ気分が悪い。

だからこいつ等は、ただ俺の気紛れと、八つ当たりで死ぬが良い。

あの子に復讐はさせない。その代りに、無意味に俺に甚振られて死ぬが良い。

これは、あくまでも、俺の、俺による、俺のための八つ当たりだ。

空には、黒い雲が広がり始めた。空気が重い、雨が降るのだろうか、それとも曇天のまま、重苦しい空気を作り出すのだろうか。

おれは、漸く目覚めた2人に告げた。

「お前達に、止めを刺す気もない。餓えて死ぬか、猛獣に食われるか、どうでも良い」

ああ、そうだ。

「良かったな、今の季節なら凍えて死ぬ事はない。どうか、残りの生を全うしてくれ」

男達は、ビクビクと震え、涙を流し、身を擦っている。せいぜい、体力を消費して早く死ぬが良い。もしくは、さっさと狂ってしまえ。

足取りも重く、馬車のある場所に帰ってくる。未だに続く少女の慟哭に、雲はその厚さをどんどん増していく。

馬車に寄り添うバイエルラインも、静かに声を出さずに咽び泣いていた。良い男だ、見ず知らずの他人の為に、声を殺して泣く。この男が羨ましい、俺にはこの他眩しく見える。

俺に気が付いたようで、袖で涙をふき姿勢を正す。恥ずかしがったのだろう、何処までも自分の感情に素直なこの男には、俺が持つていない物が幾つあるのだろう。なにやら気が遠くなってくる。

俺も馬車に寄り添い、ただ時の過ぎるのを待つ。

少女の鳴き声を聞きながら待つこの時間は、他のどの時と比べても、遅く流れていくのを感じた。

お父様

お母様

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、目が熱いよ。

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、のどが痛いよ。

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、頭がガンガンする。

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、のどが渴いて何も言えないの。

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、お父様頭を撫でてよ。

悲しいよ、痛いよ、寒いよ、苦しいよ、お母様抱きしめてよ。

悲しくて悲しくて、悲しいの。

痛くて寒くて、何も分からないの。

苦しくて、怖いの。

怖くて怖くて、悲しいの。

嫌だよ、嫌だよ。

「何か言っつてよ」

何時もみたいに、優しく。

「抱っこしてよ」

高い高いって。

怖いよ。

お母様が抱きしめていてくれた。

最後の時に痛いぐらい、息が詰まるぐらい抱きしめてくれた。

鼻が、お鼻が熱くて痛かったの。

でも、今は触っても冷たくて、濡れてるの。

冷たくて、痛くて、泣いてるの。

泣いてるのに、泣いてるのに。

泣いてるのに、お父様もお母様も来てくれない。

何時もならすぐに来てくれるのに。

お父様

お母様

寒いよ

声が止んだ。

泣く音も、名前を呼ぶ声も、静かになった。

扉を開けると、少女は床に突っ伏して寝ている。

その両手は、両親の服を掴んで離さない。

まるで、その魂もその場に留めようとする様に。その温度を、失ってしまわないように。

「やりきれない」

扉の向こうにいるバイエルラインは、俺にも聞こえないように呟いたのだろう。だが、バイエルラインお前の声はでかい、全てが耳に届く、素直に耳に着く。

「今は眠れ、悲しみだつて有限だ。せめて別れは後悔しない様に」
少女に毛布をかける。馬車も、中の調度品も中々の物がそろっている。少なくとも、一般的な家庭の物ではない。せめて、やわらかく暖かな毛布が、少女にひと時の安らぎを与えてくれれば。

馬車の外に出て扉を閉めると、バイエルラインが何かを引き摺ってきた。

「御者だと思いません。そこの直ぐ先で殺されていました」

「やはり居たか」

バイエルラインの顔が歪み、御者の服を掴む手に力が入る。

「主人を捨てて逃げ出すなんて。何たる！」

「そう言つな」

「ですが！ですが」

「死にたい奴なんて中々居ない、命をかけて守る物を持たない者も多い。それに」

「それに、何ですか」

逃げたのか、人を呼びに行ったのか？他に守りたい物があつたのか、ただ恐怖からか？死んでいる御者の顔も、恐怖でゆがみ体中には血がこびり付いている。彼とて必死だつたのだ。

いや、分からないまま夢想しても答えは出ない。御者が何故逃げたのか、それは分からない。ただ、彼も犠牲者だ。そして、その死因の一因は俺だ。

「いや、少なくとも彼に罪はない。死者を責めてやるな」

今回の俺は負け続きだ。

あの男に負け、作戦を完遂できず、その所為で被害を出し、被害者を前に守りきれなかった。

「死者を責める位なら、自分たちの無力でも呪うか？もしくは嘆くか？」

バイエルラインも、あの傭兵達の顔は覚えていたのだろう。顔がさらによがみ、唇をかみ締めている。

「無意味だろう」

「はい」

「なら、せめて強くなるう。もうこんな思いをしなくても済む様に、俺もお前も」

「はい」

せめて意地でも張っておこう、それくらい出来なくては、情けなさ過ぎる。空の雲は厚みを増す、黒い雲はさらに湿気を帯びる。一筋、また一筋と雨が落ちる。雨粒が、髪を濡らす。

「馬車はまだ動く。馬を繋ぎ直して、王都に帰ろう」

2人で無言で動く。

御者台に座り、強さを増す雨に只管打たれていた。

横では、雨の中バイエルラインが震えていた。

曇天と雨（後書き）

少しばかり言い訳を。

これまで、アルト1人の視点で進展してきました。（別話では有りましたが、話は進まない形でした）しかし、此処からはあるとの人称だけでなく、三人称や別人視点も入ってくることになると思います。

一人称形態で行くと言うのが、自分なりの取り組みでしたが…諦めました。というわけですので、今後少し変わって来ます。

御意見御感想、そのほか何でも受け付けます。
誤字脱字なども大歓迎です。どうかよろしく

燃え落ちる（前書き）

時間が開いた上に短いです。

一応もう一話書けているので、確認作業後に明日くらいにはあげるつもりです。

燃え落ちる

一つの大きな穴が掘られている。

正確に長方形の形にくりぬかれた地面は、職人的な技で掘られたのであろう。直線的に下に伸び、底も綺麗に均されていた。

しかし、それを今見ることは出来ない。なぜなら、穴の上には材木が組まれ、その上には箱が載っている。二つの黒い棺桶が。

参列しているのは、俺とバイエルライン、メイリンとミア、そして少女だけだ。穴の両脇には、青いフードをかぶった男が2人長いスコップを持ってたたずんでいる。

王都に着き、メイリンとミアに預けた少女は、2日間かけて本人の名前は聞き出せた。しかし、何処に居たのか、何処に向かっていたのかそついった全ての事はわからなかった。

両親の名前すら分かっていない。ただ、お父様とお母様と呼んでいただけだった。

故郷も分からず。

両親の名前も分からず。

縁者や係累も全て分からない。

現状天涯孤独の少女は、シーラ。

家も、親も、一斉にたくさんの物を失っている。

棺の下の組まれた材木に火が点けられる。油をしみこませた材木は、一瞬で炎を巻き上げ辺りに熱気を撒き散らす。

「あああああああああ！」

先頭に立ち花を抱えていたシーラが、声を上げて走り出す。炎を上げる棺桶に、すがり付こうとして走り出す。

「シーラちゃん」

メイリンがとつさに抱き止め、背後から抱きしめるが、シーラは宙を掻き筆るようにして身をよじり走ろうとする。

「シーラちゃん」

何度も、何度も何度もシーラをメイリンが呼ぶが、ただ燃えていく棺桶に目を向けて、涙で頬を濡らしながら身をよじる。メイリンは後ろで涙を流しながら何度も呼びかけ、ミアアが前に回り優しく抱きしめる。

「やりきれない」

横で呟くバイエルラインに、顔を向けずに俺は言う。

「喋るな、情けない顔をするな」

俺の方を、信じられない物を見る様な目で見つめてくるバイエルラインに、俺は視線を向けない。

「あの子の両親を守れなかったのは俺だ。お前もその1人だ、受け止める。受け止めて耐えろ、それが俺たちには強要されている」

自分たちの無力さを思ったとき、人は誰しも顔をゆがめる。目には涙を浮かべ、喉から絞り出すように声を上げる。しかし俺たちはそれをしてはならない。

ガラガラと音を立てて、棺桶を支えていた材木が崩れ落ちる。その瞬間、一段と多く舞い上がる火の粉と炎はともゆつくりと動いたように見えた。

炎の勢いが弱まり、横にたたずんでいた男達が穴に土をかけ始める頃、シーラは気絶するように眠りに落ちた。

シーラを抱き抱えたメイリンと、その脇を歩くミアの後を追って城に帰っていく。シーラの両親は、城からも程近い墓地に埋葬された。言ってしまうえば、貴族や富豪、ある程度以上の権力を持った者達が入る墓だ。死んだ後に眠る場所に意味などは無いが、シーラの乗っていた馬車は中々の造りだった。本人たちが望むかどうかは分からないが、他に出来ることは無い。

城に戻った後、メイリンとミアはシーラをベッドに寝かせに行った。2人と別れた俺とバイエルラインは、執務室へと向った。

執務室の中に入り、扉を閉めた瞬間。

俺はバイエルラインの頬を張った。

突然の張り手に、驚いたのだろう。バイエルラインの目は白黒して

いる。

「情けない顔をするなど言っただろう」

「ですが、ですが！」

パンッ

もう一度、俺は頬を張る。高い音が響き、バイエルラインの顔に怒りの色が見える。

俺は、語気も荒く怒鳴りつける。

「馬鹿者が！情けない顔をするなど言っただろうが。今もそうだ、そう易々と感情を顔に浮かべて如何するつもりだ」

俺はそのまま喋り続ける。

「お前のその表情で、お前が負けることがあるかもしれない。お前のその表情で、お前の愛する者が分かった時、お前の敵がそれを利用したら如何する。お前の弱さが、お前の愛する者を傷つける原因になっただら如何する」

考えた事もないのだろう。バイエルラインの顔からは、怒りの色が抜けて行き、同時に悲しみの色が映る。

「そんな事が…そんな事が起こりうるのですか」

俺はゆっくりと首を横に振る。

「分からない。起こらないかもしれない。しかし、愛する者が居るのなら、只管慎重に事を運べ、あらゆる被害を想定しろ。全ての状況に対応できるように、考え理解し行動しろ」

「怒りも、悲しみも、恐怖も、それらの全てを逆に利用してまで戦え。お前は戦士になりたいのではないのか、誰かを守れる者になりたいのではないのか」

首を大きく縦に振り、俺の目を見据えて、また首を振る。

「その通りです」

「ならば、痛みを感じたときこそ笑え、へらへらと笑い軽口を叩き戦え。敵に恐怖し、その力を忘れずに。怒りを胸に抱え、悲しみを背負って。それでもなお笑え、それらの圧迫を跳ね返せ。そしてそれらの感情すらも味方につける」

俺はバイエルラインの頬を殴る。今度のは、軽い張り手ではない。体重を乗せ、痛める様に殴った拳だ。バイエルラインは、体ごと飛び床に倒れ付す。口が切れ、端から血を流している。

肩を震わせ、ゆっくりと起き上がると、口元の血を拭いながら言った。

「これは、中々痛い授業ですね」

口の端はわずかに上がり、笑みを作ろうとしているのはわかる。しかし、如何見ても無理が出ている。

「お前も、俺も不器用だな」

「師匠には負けます」

「そうだな」

つまらない意地だが、それでもそれしか張れない時ならそうするべきなのだろう。俺は、少なくともそう教わってきた。

「俺たちが、誰かに守られるのならば、こんな事はしなくても良いのかもしれない。だが、俺は選んだ。守る者の剣であり、盾として生きる事を選択した。お前は違うのか？」

「無論です！」

顔の決意はみなぎるが、今の俺たちには重く、そして苦しい言葉だ。実際には、無理かもしれないと思いつつも虚勢を張る事に心血を注ぐ。

「ならば一振りの剣として、一枚の盾として在る様に、そうしなくてはならない。剣は弱みを見せない、ただ武器として在る。盾はその頑強さを示さねばならない。俺たち自身がそうならなくてはならない」

小心者の決意を俺達は固めた。自分のままでは、思いを成せそうに無いからこそ、道具としての役割を果たす決意を。同時に、それ以上で成長するための行動を。

しかし、その後俺たちの聞いた報告は、その決意を根底から否定する事実だった。

燃え落ちる（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

暗い展開が続きます・・・が、さらに続きます。

おかしいなあー私はハッピーエンド重視なのに・・・何処で間違っ
たかなー？

時には昔の話をしようか。(前書き)

と言っわけで、続きです。

昨日よりは少し長めです。

時には昔の話をしようか。

「ふざけるなああ！」

テーブルに打ち付けられた拳は、打ちつけられた形のままブルブルと震えている。離れて座っている俺にも、歯の軋む音が聞こえてくるほど食い縛った口元からは、続けて憤怒の音が漏れる。

「くそ。くそおおお」

だんだんと漏れる声は息へと変わり、あたりからは音が消えていく。それぞれがそれぞれに、思いを受け止めようと、拳を握り、上を見上げ、頭を抑える。

シウルツをマウゼルの町の管理に残し、報告に帰還したキュリアら査察部隊の布告は、思っていた内容をはるかに超える悪報だった。

端的に言ってしまったえば、ジギスムントの暗躍がはつきりとした形で証明されてしまった。文書に残り、傭兵の中にはジギスムント内からの依頼で行動した者も多く、その証言も多量に取れた。

そして、それらの事実が、噂として市井レベルで広がっている。異様に早く、しかも同時多発に起こった噂だ、如何考えても情報管理されている。それは、ジギスムント側の諜報組織が、多数国内に存在すると言つ事実繋がる。

唯一の救いは、あくまでも噂であるという一点のみだが、それすらも危うい。

「戦争か」

シウトラウス將軍の、呟くような声が静まり返った部屋にはやけに響く。

「すみません將軍。戦争を起こさない為に、お誘いしたのに」

俺が謝った所で、どうにかなる問題でもないだろうが、謝らずには居られなかった。

「お前が謝る事ではない、どちらにせよ国のために何かをしたかったのは事実だ。良い機会だったという事だ。そのことと今回のこれは居てしまえば無関係だ」

將軍の言う事も、事実かもしれないが。俺にとっては約束を早々に破った事に他ならない。

「いや、わしもまったく想像すらしていなかったことじゃ」

「実はの」と前置いてから爺さんの話が続く。

「ジギスムントは、ここ半年ほど王位継承争いに近い事が起きておった。王弟の造反に近い事じゃが、表面化しておらんかった。そんな中では、こちらに出せる手にも限界があるうと見ておったんじゃが」

「ロツソクラスの奴が、少なくとも後1人、名前が出た奴でもう1人。最悪国一つなら落とせない事も無いというレベルだな。隙を見て入り、王を落とせばできない事でもない」

さらに言えば、ロツソですら死んでいるとは限らない。

「さらに言えば、ロツソが死んだ確証は無く、ロツソを入れて3人とは限らない。いや、そんな少数とは思えない」

「国家間において、明らかにこちらに非が無いにも拘らず折れたとあらば、各国から舐められる。それは第2第3の戦争を呼ぶことに繋がる可能性が高い。悔しい限りですが、こちらから開戦するしかないでしょう」

フレッドの悲痛な発言は、悲しいが事実だ。多少の遅延や戦闘協定は結べても、開戦自体は避けられない。避ければ、回りに国から寄ってたかつて食い物にされる可能性すらある。

「戦をかける。そのこと自体には、もはや抗えまいて、じゃがその落とし所を如何にかせねばならんが…アルトの言っておる連中が気がかりじゃの」

皆が一斉に頷く中、バイエルライン1人が顎に手を当てて考え込んでいた。

「如何した、バイエルライン。何か思うところでもあるのか？」

フレッドの尋ねる声に、バイエルラインは頭をかきながら応える。

「えーとですね。ロツソの仲間、まあ、どう言ったら良いのかは分かりませんが、あの一党が居る以上単騎で高い戦闘能力を持つ者が要りますよね」

再び皆が頷く。

「そうなった時の事を考えると、少なくとも師匠の様な力を持った人が複数人要るかと思うのですが、如何しましょう。師匠は確定で良いとして、俺ではまだ相手が出来るとは思えません。どなたか心当たり等ありますか？」

皆が一斉に考え込むが、俺だけはその言葉に対して別に思うところがある。

「実は、今回の一戦で俺の刀が壊れた」

その場にいる人間全ての視線が瞬時に集中するというのは、控えめに言っても心臓によるしくない。皆言葉も無い様で、そのままその場の空気はさらに重くなる。

「実は、王都にマリッカさんと呼んだのも、それがあつたんだ。ドワーフの鍛冶を紹介してもらおうと思っていた」

マリッカさん自身は、王城へ行くのはどうにも気分がよろしくないという事で、城下の宿に泊まっている。ドワーフが国に関与するのは、本来であれば好ましくないらしい。

「まだ詳しい話は詰めていないが、このままではあいつらと戦つても負ける要素の方が大きい。できれば早急に武器を手に入れたい。しかし、兵の訓練やこの城の守りもある、如何すればよいのか、正直悩んでいる」

バイエルラインもこれについては知っていなかった。同様に驚いたまま、自身の言った事が思ったよりも大事に繋がったと、内心は汗を流しているだろう。しかし、表面上は落ち着いた風を取り繕って

いる。足は震えているが。

そこで口を開いたのは、シュトラウス將軍だった。

「シユルツが今王都にいないのは少し残念だが、辞令を出して、明日か遅くとも明後日には王都に来る者がいる。アルトほどの腕は無いが、吸収が早く素直だ。そいつとキュリアに兵員指導方を仕込むのに、何日かかると予想する?」

「3日ですね。バイエルラインを残しておけば、もう一日短縮できるかもしれません」

「俺は師匠と一緒にいきます」

「という事なので、3日ですね」

「話は済んだかな?」

突然、俺の背後から声がかかる。全員驚いてそちらに目を向けるが、そこには誰も居ない。

「大体終わった所だ。窓の外にへばり付いているのは、変態か虫と相場が決まっているが、お前も変態か?それとも虫か?」

「変態とは酷いね。これでも気遣いの出来る紳士としてご近所でも評判なのに」

窓を開けてやると、素直に入ってきた。痩せ型長身の茶色をベースにしたつなぎの様な服を着ている。正直、特徴らしい物がない。武器らしい武器を持っている様子も無い。つかみどころの無い人間だ。

「それで変態は何の御用かな。当方においては、無断で壁にへばりつく物は洗い落とすのが常なのだが、モップで良いかな？」

「まあそう邪険になさらずに。私はただの連絡員ですから」

「変態から通達される事に、耳を傾ける必要を感じないのだが。言いたいのなら、断末魔として叫ぶ事は許可するぞ」

どうにも敵意がまったく感じられない。と言うよりも、人間的な意識が感じられない。こんな世界ではあるが、SFのアンドロイドなどと言うのはこういった感覚なのかもしれない。戦闘などの障害で、感情をなくした人間などは見てきているがそういった様子も無い、まるで紙に描かれているかのように希薄な存在感。イライラする。

「遠慮します」

「では如何する？」

「そうですね、受け取り拒否された時の事はあまり想定していませんので。ところで、何時から私に気が付いておられましたか？」

さてと、如何答えたものかな。

「私の見解では、私が上から紐で降りてきた辺りではないかと思うのですが」

違うな、こいつはもっと変な方法であそこにいたはずだ。ロープワークなどで降りてきたとは思えない。しかし、先ほどの壁の位置に

来るまで気が付けなかったのは事実だ、感覚は広げていたにも拘らず察知できなかった。

「壁の外にいる虫に気を配るほど、俺は暇じゃないぞ」

「虫でもないのですが、まあ良いですよ。一応伝えておきます。ロツソの友人から、ロツソの敵へ。しばらく忙しいのでお休みするよ、準備をするなら3ヶ月以内でやろうね。との事です」

「だから？」

「連絡員に意図を聞かれても困りますね。連絡員の仕事は連絡のみ、言葉を正確に伝えるだけですよ」

「それはおかしいのお」

今まで黙っていた爺さんが口をはさんだ。

「真に情報の伝達を担う者とは、背景やその意図までも酌んで動くものじゃよ。それが出来ぬのなら、単なる手紙で良からう？」

「痛い所を突きますね」

それでもまだ、男の顔には描いた様な笑顔がへばりついている。仮面ですらない、平面に描かれたような笑顔が。

「おぬしと話しておるのは、なにやら気持ちが悪いわい。年寄りの短い寿命をさらに縮めそうじゃ。本題は早めに済ますとしよう。ロツソらの与する集団、そしておぬしの受けた依頼元は、教団じゃな」

教団？この世界の宗教は教会一つだと聞いたが、新興宗教か、もしくは分派などが存在すると言う事だろうか？しかし、俺だけではない、フレッドやバイエルライン、そしてキュリア、シュトラウス將軍に至るまで、知っている様子が無い。皆一様に首をかしげている。

「別段、守秘義務は有りませんからね。そのとおりですよ」

「ふむ、研究対象にしたいくらいじゃな。それはそうとして、城を管理している者の立場としては、このような形での報告は気に入らんの。連絡用の箱でも用意しておいてやるでの、そちらを使う様にするのがよいと思うぞ」

「ご親切にどうも」

そう言うと、男は床を蹴って窓へ飛んだ。窓ガラスが割れ飛んで、その破片が床に落ちきった時には、男の姿も完全に消えていた。気配も同時に消えている。

「気味の悪い奴じゃのお」

「強い奴が多すぎて嫌になるな」

「ほっ、こちらの陣営の切り札がそれでは頼りないのお」

「面目ない」

正直な所、この少ない人数で、国をまわしているだけでもすごいと思うのだが。その主動力がこの爺さんなのだから、むしろ切り札は爺さんではないかと思うが、爺さんに剣を振らせる訳にも行かない。先頭面では、当面俺が出張るしかないのだろう。

「その為にも、早急に武器を手に入れたい。しかし、ああ言った奴がいるのではな」

「少なくとも、さっきの奴は敵ではないと思うの。いや、少なくともロツソ達の一党の直接与している訳ではないと言うのが正しいかの」

「どういう事ですか先生？それに教団と言うのは」

「ふむ、歴史のお勉強をしましょうかの」

爺さんは、少し嬉しそうに話し始めたが。少なくとも窓ガラスを粉碎していったんだから敵ではないかもしれないが、見方でもないだろうに。自身の研究対象になりうる事柄が見つかったのが嬉しいんだらうな。

基本的には学者だな、爺さんは。

時には昔の話をしようか。(後書き)

感想ご意見等お待ちしています。誤字脱字も大歓迎です。

新作を投稿してみます。意向く続きを書けと
新作を投稿してみました。報告くだから続きを(r y

聞く怖さ(前書き)

少し間が開きました。

もう少し早く頑張ろうと思います。

早く暗い展開を抜きたい・・・

聞く怖さ

爺さんは、本職の教授さながらに、白板に黒炭で文字を書いていく。五芒星のそれぞれの頂点に時計回りに名前を書き連ねていく。

碧神・ナーガス

白神・ズヴォルニク

黒神・オルリアエウエク

黄神・ノリエンキュエス

紅神・アルケオス

「主神である碧神ナーガスについては、今は置いておこうかの。白神ズヴォルニクは男神で、配偶神は紅神アルケオス。黒神オルリアエウエクは、男神でその配偶神は黄神ノリエンキュエス。さて、ここまで考えて不思議に思った事は無いかの？」

真実、教育者であるのが楽しいのだろう。その問いかけは、正しく生徒を導く教導に心血を注ぐ教師の姿だ。

しかし、以前から当たり前のように知っている事に、今更疑問をはさむのは難しい事だ。全員の首は傾げられたままだ。唯一シュトラウス將軍だけは、そうかと手を打っている。

「ヴェルギエールとあるとは気付いたようじゃな。さて、年長を立

ててヴェルギエールに聞いてみるとするかの」

「主神たるナーガスのみ、配偶神が居りませんな」

教師は、教え子の答えに満足したようだ。

「そうじゃの、中々気にもならんことじゃが、ナーガスのみが個として存在してある。これは顕現などの際にも言えることじゃの、ナーガス降臨のみ単独で行われておる。他の神々は、常に配偶神と共に顕現されるからの」

「神教の授業か、この世界ではあまり行われていないと聞いたが」

「うむ、殆ど行われておらん。いわば、答えの書いてある推理物語みたいな物といえはよいかの。聞けば分かる事を一々研究はせんて」

「殆どと言う事は、している者もいるということか」

「そうじゃの。さて、レグリアス期の末期と言われておるから、今からざつと1300年から1400年前、ナーガスの神殿に務めておった神官は」

そこで、フレッドの口が入る。

「ちょっと待ってください。ナーガスの神殿とはなんですか？教会ではなくて神殿？初めて聞きますが」

「ふむ、そうじゃの。では一から説明するとしよう」

そこからは、延々爺さんの1人語りが始まった。フレッドは平気な

ようだが、バイエルラインなどは、途中で少し舟をこいでいた。長時間の座学には余り耐性が無いようだ。

そもそも、最初に降臨された神はナーガスじゃった。

これはその後400年ほどは続き、当時の世界にとって神とはナーガスの事じゃった。

その結果として、ナーガスの神殿が出来たわけじゃが、当時は神の声を聞く事もなかったらしいの。

呪式も存在しておらず、神殿は単純な祈りの場として存在して居った様じゃ。

さて、そんな神殿じゃから神官の仕事とは神の研究になる。しかし、神の存在証明はあるわけじゃから、それまでの神教とは一線画した物になるわけじゃな。

つまり、神との連絡を取る技術。宗教的に言うならば、いかに神に祈りをささげるかと言う所かの。

しかし、ある時世界中の人間に同時に声が聞こえたわけじゃ、神の声なの。それは5柱の神々の声で、むしろに指針を示した。と言うのは有名な話じゃ。

つまり、神教の変化とは、神の存在証明に始まり、神との交流を試み、神の声を聞いた事によって終焉したわけじゃ。

しかし、その神官たちや、一般民の中に、5柱以外の神の声を聞いたと言う者達が現われた。

その神の名は、オルゴルク。

無色の神と呼ばれておる。

彼奴らの言を借りるならば、本来オルゴルクとは世界の創生神で主神の座について然るべき神じゃったそうじゃ。

しかし、本来自身の配偶神であるナーガスに裏切られ、ほかの4柱の神々とも対決し、多勢に無勢でいずこかに封じられ、奉られたと言われておる。

しかし、何時の日か以前に倍する力を持って復活すると伝承にはあるようじゃな。

そして、この神の声を聞いた者達は、自らを真の主神の声を聞いた者、真の神の使徒と称した。

彼奴らは、自らがオルゴルクの庇護下にある者達として、無色の下色としての灰色を自認し、灰色の根を名乗っておる。

まあ、知っておる者は教団と呼んでおるがの。

そしてその教団は、元々神教を研究して居った神官を中心に発展したわけじゃな。神教が現在行われておらんにはそんな理由もある。

逆に言えば、教団内ではいまだに神教は行われていると言っわけになるかの。

おかげで、少数居た神教の真っ当な研究者や歴史研究者まで非難を

受けた事実もあるんじゃないよ。

先ほどの男に関しては、教団と言うのは、外部の者が便宜上名づけた物での、彼らに取っては蔑称に近い物の様じゃ。

あの男は、教団と言われても否定せず肯定すらしおった。真実、教団の構成員であればそれを受け入れはすまいの。

「そうであるならば、あの異様な男は直接の敵ではないのでしょうか」

シュトラウス將軍の意見は、一種の希望でもあった。その意見はこの場にいる全員に共通する項目だ。

「であれば良いのお」

「確約できないのは仕方が無い。事実として、ああ言った人間は居る、そして、向こうに雇われている以上、今回の情報に関しては間違いなくあちらに渡ると見て間違いない」

皆に重苦しい雰囲気が出る中、爺さんが將軍と視線を一瞬交わした。

ほんの一瞬であったが、何かを制するような視線を、爺さんが送ったと感じた。

城の廊下に、静かに歩く2人の姿があった。すれ違う者に気さくに挨拶をしながらるく2人ではあったが、その動きはどこか固い。

部屋に入ったりヒテンシュタイン宰相とシュトラウス將軍を迎えた

のは、宰相の執務用の椅子に腰掛けたアルトだった。

「爺さん、それに將軍も、遅かったな」

「わしらが部屋を出た時には、まだあちらに居らんかったかの？」

「あいつの真似して、壁を這って見た。これで俺も、立派な変態の仲間入りというわけだな。だが、あの状態で完全に気配を消すのは難しい。何か、特殊な能力でもなければ説明がつきにくい、それと」

「なんじゃね？」

リヒテンシュタイン翁は、とぼける様に首を傾げる。

しかし、それに対して反応はせず、あるとは自分の話を続ける。

「最近、俺の事が噂になっている。色々と、話はあるのかと思いきや、きちんと纏まっているんだ、これが」

「ほお」

「南方のルクス諸島連合王国の没落貴族の三男に生まれ、修行と見識を深めるため、力を隠して旅をしていた。しかし、フランで世話になった人のために隠していた力を明かし、穢れ物を倒し、メイリンを助け、国王に気に入られ、一気に国の中心へ。中々の成功譚だな。言つてて恥ずかしくなってくる」

「よく出来た筋書きと言つても良いのではないかな？」

1歩前に出てきたのはシュトラウス將軍、そのまま口を開こうとす

る將軍の言葉を遮り、アルトの語りは続く。

「しかし、少し金を払って事情を調べると他の話が浮かび上がる。いわく、俺はヴェスター宰相が秘密裏に養育していた人間で、国外において力を蓄えていたと。そして、その生まれには王族も関わっていると言う、大げさな話。よくもまあ、大きな話を広げた物だな」

「不味かったかの？」

リヒテンシュタイン翁は、ため息混じりに聞いてくる。アルトは、軽く首を横に振ると、椅子から立ち上がった。入れ替わりに翁が椅子に座り、將軍がその横に立つ。アルトは、窓際に歩み寄り、外を見回した。

「いや、ありがたい。あのままだと、城中の女官から求婚されそうだったからな」

「ほお、よい話ではないか」

アルトは、何かを思い出し一瞬身を震わせると。

「止してくれ、情報収集の為に、女官どものたまり場で話を聞いていたが：あれなら、戦場で千人相手に戦ったほうがましだ」

女性に対しての経験値が少ないアルトは、辛うじて維持していた女性に対する幻想を、少なからず打ち砕かれたようだ。

「それが話の内容かの？」

「いや、オルゴルクが封じられているのが、異世界と言うのを確認

したかった」

突然の言葉に固まる2人と、逆光で顔が隠されたアルトは、しばらく動きを止めた。振り向くアルトの顔に笑みが浮かぶ。

「将軍は、演技には向いていない。人がよすぎるからな」

それはどちらかと言えば、自嘲に近い笑みだった。

聞く怖さ(後書き)

読んで頂きありがとうございます。
御意見御感想などお待ちしています。

手を横に上げ肩を竦める、少しふざけた様な仕種をしてみせる。

「この世界の女官は、金払って男の事を調べるのが普通なのか？怖い物を見てしまった」

どこか遠くを見る目をして、再び窓の外へ眼を戻す。

「ふむ、確かにお前さんも演技には向かんの」

爺さんは、2人を交互に見てため息をこぼす。

無理やり意識を他に向けて、思ったよりも大きかった自分のダメージを誤魔化そうかと思っただが、何の意味もなかったらしい。

「そうだな」

自嘲の笑みは止まない、しかし、時間の動きも止まることはない。

「爺さんは知っていた。そして、今は將軍も知っている。少しは悩んでいたんだがな」

「だから感謝すべきだろう。俺が言い難い事を爺さんが言ってくれて、俺の覚悟も決まった。同時に、情けなさも感じてはいるがな」

爺さんは、顔に微笑を浮かべ、將軍は無表情の仮面をかぶっている。

「お前さんに、弱さも、優しさも捨てさせたくは無かったからの。おせっかいは承知の上でも、年長者は年少者を守ろうとする。しかし、無意味な悪意をお前さんに向けたくはなかった」

「感謝している。そして、俺のつまらない演技に付き合ってくれた事についても、不肖の教え子として礼をしなくてはならないのだからな」

「異世界か」

将軍がポツリと呟く。そうだ、俺は会話中わざと世界という単語を入れていた。それに反応をせず流した事は、将軍が俺は異世界の住人であった事を知っているという事に繋がる。

しかし、爺さんはもとより、百戦錬磨の将軍もそんな陳腐な策に引つかかる人間ではない。忙しい爺さんと将軍、この2人が固まって爺さんの執務室に来る意味も低い。須らく俺の行動を読んだ上で、俺の贖罪の言葉を聞いてくれるためにいるのだ。

将軍は、行動はともかく、表情や言葉から隠しきれぬ意図が見えてはいたが、結局俺はそのとおりに行動した。

負けたとは思う、しかし、それは俺の枷も解いてくれた。

「俺は、結局俺が殺しうる人間にしか秘密も明かしていない。弱くて情けない人間だ。爺さんに関して言えば、見通しも甘かったとかいえない」

さあ、涙を流せ。これが最後だ、最後の甘えだ。

「俺は、俺は、俺しか信用できない小心者で。保身ばかりを考え、自分を良く見せようと画策し、それすら満足に出来ず。先走った結果失敗し、犠牲も出した。言った事も守れなかった。小心者の嘔吐きで、弱者だ。何が保護者だ、何が守護者だ」

拳が震える、目尻からゆつくりと涙が滴る。

「すみません、すみません、すみませんでした」

ゆつくりと頭を下げる、何に謝っているのか。誰の為の謝辞なのか、爺さんと將軍は、代わりに受けてくれただけ。本来は2人だけじゃない、フレッドに、ミリアに、メイリンに、バイエルラインに、アリシアさんに、シーラに、皆に謝らなくてはならない。

それが出来ない俺の為に、それを許さない現状の為に、二人は代りに受けてくれたのだ。

「ならば、次からは如何するかね」

「ならば、今後は如何するのじゃ」

二人の声には、優しさが含まれている。多くの優しさと、大きな意志が含まれている。

「ならば」

そう、ならば俺は。

「走る、走り抜ける。俺の言葉を貫き通す」

静かに意志の燃える目を見た二人は、ゆっくりと肩を震わせて笑出す。

「良いのお、こういった役目は何度やっても良い」

「初心が思い出されますな」

「お前さんの時も面白かったのお、子供が出来てあたふたしおってからに」

「ははっ、酷いですな。それにずるいですよ先生、先生だけ私とアルトの両方を知っているのですから。1人勝ちじゃあないですか」

「それこそが、年寄りの特権じゃて。いやあー歳をとるのは楽しい。老いてこそ分かる楽しみという物じゃの」

お互いに、手を叩きあって笑いあう二人を、アルトは憮然と見つめていた。

「気は済みましたか」

ムスツとして腕を組んだアルトは、耳の方まで赤くしている。照れ隠しが多分に入っているのだろうが、多大な感情の発露の直後だ。隠しきれない。

「ああ、お前さんも済んだ様じゃの」

「これで、君も年長組の仲間入りを真に果たしたと言う事だ。歓迎しよう、今度晩酌に付き合っ欲しいね」

「そおじやお。良い男になったことじゃし、真面目に見合いを考えようかの」

「良いかもしれませんが、結婚と子育ては、精神を更なる高みへと進めることでしょう」

「それでは、お前さんの娘が第一候補じゃの」

「許されることではございませんな、先生」

俺のさっきの感慨はなんだったのか。さっきの内省はなんだったのか。そう思っているとは深くため息をこぼす。先ほどの態度は、多分に照れが入っていたが、今はただただ不機嫌の様だ。

「こんな年長者が周りにいて、若者組は気の毒な事だな」

「若い時の苦労などは、後の経験にしかならんよ。幾らあっても困りはせんさね」

爺さんや將軍の目に浮かぶのは、只管慈愛だ。俺はまだ若者組か、そう感じて、情けなく思うも、それ以上に嬉しさが湧き上がる。

「そうだな、將軍の娘さんについても真剣に考えてみるかな。大事な事だろう？爺さん」

將軍の顔が、早変わりの劇の様に瞬時に変わる。齒を擦り合せ、ギリギリと音を立てて青筋を立てる。その顔面からは呪いが物質化して流れてきそうなおどろおどろしい雰囲気漂う。

言葉も無く顔をしかめる何時もの將軍を見て、爺さんもあると吹

き出すように笑い出す。

部屋に響く笑い声は、もはや乾きも冷たさも感じない。

心の底からの笑いだった。

その翌日、王国に置いて、初の非常事態宣言がなされることになる。

あくまでも内々にはあったが、軍関係者や官僚、ギルドの幹部には発布され、大いに彼等を困惑させた。

壁（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
誤字脱字や感想などお待ちしております。

ガタ漫 二人?のショートショート その4 (説明) (前書き)

説明です

ガタ漫 二人？のショートショート その4 (説明)

ラ「ラッセルです」

バ「バウマンです」

ラバ「ラバウル小唄です」

ラ「いやー、久しぶりです。今回も始めましたラバウル小唄」

バ「一応一区切り毎に入れていきताかつたんだが、中々難しくてズルズルとココまで来た感じだな」

ラ「まあ、今回は一応発表があつてのことらしいぞ」

バ「ここまで40何話書いてきて今更か？確かに、文章形態については一人称を貫き通せなかつたが・・・」

ラ「いや、ストーリー上の事らしいぞ」

バ「ん？」

ラ「ストーリーライン上での一区切りらしい」

バ「ほお。どうなる事やら。では作者、話を聞こうか」

「「どうも作者です。Kishneghです。以下はKで行きます」

ラ「一区切りか。何が？」

k「第一章終了になります」

ラバ「・・・・・・・・・・章立てだったのか？」

k「実は、当初予定では主要人物を殆ど出した上で第1章終了になる予定で、それでも25話位で一章終了になるはずだったんですが・・・・・・・・」

ラ「改訂前の話数から考えてもありえん話だな」

バ「しかも、改訂前に出てきたキャラすら未だ出てないぞ」

k「ですから、アルトの精神的な転機で一区切りにしました。シーラの登場は、その辺りの事で実現しました。本来は次の章の最後辺りになっていたはずですよ」

ラ「お前の言ってる当初予定ってのは、何時の時点での当初予定だ？」

k「2回目のプロット直し位ですかね。アルトが主人公の話になった最初のプロットでは、60話位で終わるはずでしたから。全5章の予定でしたが」

バ「2回目のプロットでは？」

k「全100話で4章の予定でした」

ラバ「現状は？」

k「・・・・・・・・・・・・・・・・さあ？」

ラ「まあ、ネタをばらすのも馬鹿な話だしな」

バ「少なくとも第1章での主題はアルトの成長だったわけか」

k「いえ、世界説明です」

ラバ「・・・・・・・・全然していないよな」

k「破綻しました」

ラ「ダメじゃん」

k「本来なら、宗教や神話、国家に人種、そして新しい武器まで1章の予定だったのですが・・・・人員すらそろっていません」

バ「まさに破綻か」

k「そうですね、一応世界観に関しては、閑話を入れて少し補足する予定ですが。当初予定は殆ど達成できなかったのが事実ですかね」

バ「言う事ではないな」

ラ「そもそも何で今回のアルトの件で1章の区切りにしたんだ？」

k「アルトが私の考えていた以上に歪んでいたからです。書いていて、アルトが死ぬと思ったんです。このままでは、早期に精神崩壊を起こさないはずが無いと思いましたので、やや強引に吹っ切らせました。元々將軍との絡みでそうなる予定ではありませんでしたが、予

定よりも早く行つたため爺さんが出撃しました」

ラ「まあ、危うい奴だったからな」

バ「そうだな」

k「色々引つ張られたんですね。精神的に弱いというのは当初からの設定でしたが。脆いと言うよりも歪んでいるになったのは誤算でした。決定的に思ったのはマウゼルでの一件なのですが。必要以上に自分と言うものを評価しすぎているような気がしたんです」

ラ「？」

バ「むしろ、自信が無くて困ってたぞ？自縄自縛的なところは認めるが」

k「白い世界で加速された技能と、体と精神が噛み合っていないんです。ゲームでたとえるなら、いきなりすごいスキルだけ持った初心者みたいなもので、何処かに齟齬が出来てくるんですよ」

ラバ「なるほどね」

k「一応今回でかなり吹っ切りましましたので、今後は徐々に合ってくる筈です」

ラ「では、その辺りも含めまして今後もよろしく」

バ「次回は閑話です」

ガタ漫 二人?のショートショート その4 (説明) (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

閑話その1（前書き）

ちよつとした裏話です。

閑話その1

フランの町には酒場がある。ギルドに程近い酒場には、常に冒険者達が集まり、罵声が飛び交い、情報の渦が流れる。

「儲かった様だね」

酒場の主に声をかけられた男は、機嫌よく応えた。

「おうよ、ぼろ儲けよ。しかも、このまま戦争になるって話じゃねえか、ここが稼ぎ時だぜえ」

腰に無骨な剣を指し、傷の入った皮鎧を装備した男は、盗賊でなければ傭兵と言った所だろう。実際に彼は傭兵で、そして過去には盗賊として物を奪った事もある。

「そうか、調子も良さそうだな。せいぜい豪勢に飲んでくれ」

「へっへっへ、良いぜえ。はらわた破れるまで飲んでやる」

「戦争か、お前さん達には良いだろうが、こちとら遠慮願いたいね」

「まあ、今回の戦は相対した事にはならねえんじゃねえか？前の戦の時程にやならんだろ」

「ほお、どうしてだね？」

「あああん？皆言ってるじゃねえか。適当なところで終わるだろう」

よ。どっちもそんなに地力がねえ、たいした事にはならないだろうよ。傭兵うちじゃ常識だぜ、常識」

「そうか、そう願いたいね」

静かに笑みを浮かべる主をよそに、男は杯を重ね、そして酔いつぶれた。

すっかり店の灯も落ち、静まり返った店内で、3人の男女が話し合っていた。

ウィルキンズ、ライオネル、アリシアの3人だ。

戦争、その言葉の重さに3人の顔は暗い。

「避けられんか。情けない、見所があるかと思ったから服まで作ってやったのに」

「無茶を言うな。1人の人間に出来ることは限りがある」

「既に十分事を成したでしょう。あの王子を倒したのは、紛れも無く彼の实力です。ですが・・・」

「そうだな、揺らぎ歪んだ青年だった」

「ええ」

「しかし、リヒテンシュタイン学長が付いているんだ。大丈夫だろう、ああ言った人間は大好物のはずだからな」

「違うない」

「ですね」

「で、ウィルキンズ、アリシア、お前達は王都へ行くのか？」

「まだ、早かろう。ここでもう少し情報動かせ」

「私も、現状では動かない方がいいでしょう。それに、ここで絞めておかないと、無駄に冒険者が傭兵になってしまいます。それは、是非にも避けたいですから」

「そうだな」

「傭兵達の多くは、ジギスムントに付くようだ」

「そして、この王国からは傭兵がいなくなるでしょうね」

「知っていたか。いや、私も確信はしていない。だが、あの青年は軍制改革をシュトラウス將軍と行っているようだ。態々命令系統を混乱させかねん傭兵は使うまい」

「ふんつ。あいつは小心者のようじゃからな。奴自身もかつては傭兵じゃったろうに」

「少なくとも、望んでではないだろうな。しかし、多くはあちらと言えども、少なからずこの国に傭兵として付く者もいるだろう。そいつらの受け口は冒険者ギルドでは足るまい」

「ええ、野盗とならない様に何か対策が要りますね。それに関しては、教会が動いている節があります。程度はわかりませんが」

「私もそれは掴んだが、動いているという事柄だけだな」

「きな臭いな。不動の教会が何故動く」

「かつては、どっちにも付いて浮動の教会とまで言われた物だ。特権を持てば腐る者がいるのはしょうがないな。いかに神が実在し、神の信徒を名乗っていてもそこに欲がある限りは」

「ですが、此度は違うでしょうね」

「「「教団」」」

3人の声は重なり、そして皆顔色を悪く、そして暗くした。

「ヴェスター宰相閣下の努力も足らなかつたか。30年前殲滅したかと思っていたが」

「生き延びたのだろうか。もしくは、新たに生まれたか」

「国内に関しては、あの時に打倒せしめた筈です。ですが、ジギスムントでも活動があったと報告はされていました」

「しかも、国家間の戦に関わってくる時期と言い、王家に付いていると思えん」

「先々代のジギスムント王は、秘密裏とは言え宰相閣下と協力し合っただけだな」

「彼の国では、協力者も少なく、情報も回っていません。後代への伝達も行われなかったのでしょうか。私達も人のことは言えませんが」

「宰相閣下ご自身が望まれなかった。忘れるべき事実だと仰ってな」

「ジギスメントにせよこのアイゼナツハにせよ、この近隣の諸国は小国だ。大陸中心部の大国とは比べ物にならない。もはや無い脅威に手を伸ばせば、国家そのものに悪影響を与えかねんと考えられたのだらう」

「宗教が、道義を超えて偏りを持った時」

「偏執と狂信は暴力へと変わる」

「そしていとも簡単に壊すだらうな」

「世界を…か」

「神はそれを鑑みられ顕現されたと言うのに、それが結果的に狂信の象徴を産むとは、悲しい話です」

「ままならんな、そして神でも万能ではないという事だな」

「神なんぞ、最初から居なければ良かったものを」

「今も、そして遙かな昔から宗教団体などという物はクズの集まりだな」

「常に力と信仰を集めるからこそ、腐敗と混乱の温床になる」

「私自身は、神も宗教も否定しません。ですが、それは個々人の中にあるべきでしょう。教義を持ってかえって混乱に進むならば、それはもはや宗教ではありません」

「混乱と騒乱、そして戦い」

「30年前の戦いの後、8年の平穏」

「21年前の戦いの後、10年の平和」

「そして、今度はたった4年間。永遠ならざる平和と言つにもあまりにも短い時間」

「だがその短い時間は、玉石にも勝り黄金の価値すら歯牙にかけぬ。それほどに貴重で尊い物だ」

「無残な死はもう見たくないものだな」

全ての目には同意が映る。しかし、そこから吐き出されたのは、今までよりも大きなため息だった。

閑話その1（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

見つめる瞳（前書き）

第2章です。

閑話があんまり閑話になっていなかったので悩み中・・・
如何したものか。

見つめる瞳

今日は日差しがあつて風が無いの。とっても温かくて良い気持ち。

お家の軒先に座ってるの。

「大丈夫か？」

影になつたと思つたら目の前に男の人がいたの。

黒い服を着た黒髪のおんまり大きくない人と、同じ様な服を着た赤毛の大きな人。影になってちよつと悲しいの。

「大丈夫か？」

「如何しましょう？師匠」

「仕方が無い。一旦城につれて帰ろう。このままではどうなるか分からん」

「分かりました。ですが、町医者などに運んだ方が」

「さつきから誰も出てこない、声をかけても反応が無い。何か事情があるんだろう。関わりたくない様な、そんな事がな」

急に持ち上げられたの。少し痛い。

痛かったけど、そのまま寝ちゃったの。

「どう言つ事だ」

「王都の騎士団に所属している者と関係があるようです。申し訳ありませんが近所からの聞き込みではそれ以上は分かりませんでした」

「兵も騎士も使えないからか」

「俺だけですからね。まさか、メイリン達に手伝わせる訳にも行きません。フレッドの活動についていた者達にも今手伝わってもらっています。・・・はかばかしくはありませんね」

「頭がいたい話だ。士気は最低だな」

「王宮警備隊を解体して一部を騎士に組み込んだのも影響しているようです」

「馬鹿の頭を幾つも作るように、命令系統を幾つも温存して如何する。他に方法なんて無いだろ」

「現在、王都の騎士団を束ねているリッパ・サンプル団長も苦慮しているようです。何しろ、今までまったく交流が無く、訓練なども別物ですから」

リッパ・サンプルか。能力はあるが、あくまでも命令に忠実で、王子を抑えることもできたはずだが、王からの命令が無いので動かなかつた人間だ。悪くは無い、悪くは無いが、信頼して動くのは難しいだろう。

「現状騎士の数はおよそ300。しかし、警備兵は別で用意しなけ

ればならない。自治や騎士に全て任せるわけにも行かないからな、警備組織の発足は急務なんだが。そいつら自身の士気が低く腐敗していてはな」

机の上に書類の束を投げ出してため息を着く。

「何時までこんな書類にまみれた生活をしなくちゃならんだ。將軍の言う有能な連中はまだ来ないのか？」

「見たいですね」

「お前が、投げ出した分も俺がやってるんだぞ。この馬鹿弟子が」

「俺がやったら8倍の時間が掛かりますよ」

「事実だから余計に腹立たしい。破門にするぞ馬鹿弟子」

深く深くため息をつく。

「しかし、將軍は俺の3倍、爺さんに至っては軽く10倍の仕事をこなしているからな。文句も言えん」

「フレッド様も、リヒテンシュタイン宰相の下で仕事を覚えているとの事です」

「爺さんの事だ、嬉々として教えているだろうよ」

「じゃったら、面倒な話を持ち込まず専念させて欲しいもんじゃの」

扉が開いて爺さんが部屋に入ってきた。

「ご教授の邪魔をして悪かった。が、爺さんの所の人員が使いたかったのだな。それで、どうだった？」

「お前さんの思った通りじゃよ。貴族の馬鹿息子、しかも嫡男でありながら、お家騒動にもなっておる。心痛は分からんでもないが、それで暴れるようでは先は見えておるの」

「では、こちらで如何にかしておこう。その馬鹿の名前は・・・」

「ここに全て情報を纏めておるよ。まあ、後は任せたでの」

「爺さん」

背を向けて帰る宰相に、後ろからアルトの声がかかる。

「そんな事だけを言いに、態々来たわけでもないだろう？」

「ジギスメントに送った使者が帰ってきておった。しかし、様子がおかしい。後で見えておいてくれんかの？」

「分かった」

「うむ」

扉を閉めて、部屋から出た途端にリヒテンシュタイン宰相はため息をついた。

「さて、どうなるかの」

目が覚めたの、目の前に知らないお姉さんと綺麗な女の子がいたの。

お人形さんみたいに綺麗なの。

でも、本当のお人形さんみたいなの。

「お名前は？」

お姉さんが聞いてきたの。

「？」

「貴方のお名前は？」

「リルなの」

「そう、リルちゃんは痛い所とかある？」

「？」

「大丈夫？」

「痛くないの」

「そう、大丈夫なのね。良かったわ」

どうにも質問に対しての応答が遅れるというか。会話のテンポがずれている。

「私はメイリン、そしてこの子はシーラよ。よろしくね」

そう言った事に、特に反応は示さずメイリンは会話を続ける。

やはり、しばらく間をおいてから、リルはコクリと首を縦に振った。

ただ何もせず、まったく動かないまま日向に座っている二人を見つめるメイリンからは、ため息がこぼれる。

子供は、5歳か6歳の子供は、もっと活発に動き回って遊ぶ物だし、笑う物だ。何が楽しいのかも分からないまま、顔が笑みを作るのが子供だと言うのに。

この2人の少女、いや幼女には笑みが無い、動きが無い、感情が見えない。

再び深くため息をつく。

見守るメイリンの後ろから、部屋へ入ってきたバイエルラインが声をかけた。

「メイリン」

「バイエルライン…どうでしたか？」

バイエルラインは静かに首を振る。ゆっくりと大きく横に首を振った。

「では」

メイリンは息を呑み、静かに頭を垂れる。

「あの子にも両親はいない、今はとりあえずシーラと共に面倒を見ていて欲しいそうだ」

「分かりました。ですが…」

「師匠もフレッド様も宰相閣下も、そしてシュトラウス將軍も皆考えて下さっている。報いは必ず、報いは必ず下衆の上に落ちる」

ゆっくりと躊躇いがちに肩に手を置くバイエルラインは、それでもしっかりと肩を抱き、メイリンをなぐさめた。

「大丈夫さ」

それでも、辛そうに目を伏せるメイリンに、バイエルラインは如何したものかと頭を悩ませた。

元々、精神の機微とかその場の空気などについては鈍感な人間だ。当人もそれを自覚しているが、こんな際には一層それが悩ましかった。

それでも、自分の悩みも振り切るかのように、もう一度声に出した。

「大丈夫さ」

見つめる瞳（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想などお待ちしております。

誤字脱字の報告も、いつも何時もお世話になっていきます。自分でも頑張りますが、見つけられた方は教えていただければ幸いです。

追記・活動報告にも色々書き込んであったりします。見ていただければ幸いです。

新たな波瀾

「つまり、文務に優れた副官と、自分がいない間部隊をまとめる人間が欲しい。そういう訳だな」

「ええ、騎士将を受けるのであれば、それは必要になりますからね。少なくとも武器を持ってない兵士に、何らかの価値を見出せというのは難しいでしょう。現状の私は正にそれですよ」

シュトラウス将軍は、顎に手を当てて考え込む。

「問題は無いでしょう」

その将軍の後ろから、1人の男が声をかけた。

「文務に優れた人間には心当たりもありますし、隊をまとめるのは、シュルツ辺りで良いでしょう。幸いにも今日帰ってきますから」

背が高く、ひよろりとした体つき、長めの銀髪を後ろに流した温和な50前の男だ。目元は、穏やかな弧を描いているが、薄く開かれた眼には一片の隙も無い。

マリーン・オブライエン。

シュトラウス将軍の左腕、主に兵站補給広報任務の専門家。たった1人で国家予算10年分の編纂を行えると言っ、ある種の変人として知られている。

「感謝します」

「えらく丁寧だな」

マリーンに対して、丁寧な頭を下げるアルトに少しばかり思うところがあったらしい。シュトラウス将軍が訝しげに聞いてくる。どうやら、最近少しずつ態度が雑になってきたアルトに慣れていた為、丁寧な態度を取るアルトに違和感を感じたらしい。

「初対面ですからね」

「私に対して、必要以上に敬意を払う必要はありませんよ」

「いえ、結果的にはありますが、弟子を横取りしてしまいましたからね」

少し、大きく開かれたマリーンの眼に剣呑な光が宿る。

「どう言う事ですか？」

アルトは、ソファーに深く腰掛けると、大きくため息をついた。

「悪いと常々思っていたんですよ。バイエルラインの動きには明らかに癖がありました。誰か専門的な師がついていたとしか思えませんでしたので、少し調べたんですが、誰かと言うのは、確とは分かりませんでした。ですが」

アルトは、一旦言葉を区切りシュトラウス将軍の執務机の角を指した。

「そこを曲がった時の歩き方、歩法と重心移動、それがバイエルラ

インと合致しましてね。勿論貴方のほうが洗練されていますが」

マリーンは、アルトの指差した角を見下ろすと、首を振って答えた。

「気を付けてはいたんですが」

「身に染み付いた動きほど、自然に出るものです。また、自然に出なくてはまずいでしょう」

「そうですね、あなたは非常によく訓練されている」

「まだ、動きを隠せるほどの錬度ではありませんからね、そう言われても仕方は無いでしょう。精進しますよ」

「皮肉ではなかったんですがね」

漸く、マリーンの眼から剣呑な色が抜ける。そこへ入ってきたのは、武人同士の会話に、中々入り込めないシュトラウス將軍だ。

「鞘当と挨拶は終わったかね？まったく、武人というものは、どうしてこうも挑発しあうのか。理解が及ばないよ」

理解できないと言われた武人2人は、お互いに顔を見合わせて苦笑を交わす。

「何であれ、セシルの事は任せましたよ。私には、実際の問題として教える時間も、教えきる力ありませんからね」

「謹んで、お受けします。非才の身では有りますが、互いに高みに至れるように精進します」

「よろしくお願いしますよ」

「しかし」

「なんででしょう?」

アルトは、顎に手を当てて、考え込むような形を取る。

「いえ、話の流れから、セシルと言うのがバイエルラインのことだとは思いますが。その名前は知りませんでした」

マリーンは、納得した様に、手を打つ。

「ああ、あの子は恥ずかしがって、この名前を名乗りませんからね。本来はセシリエルと言うのですが、セシルは愛称なのですよ。あの子の母親、つまり私の姉なのですが。非常に少女趣味とでも言いましか、女の子が欲しかったようで、当時流行っていた女性名を彼につけたのですよ」

「成程、分からない話ではないですね」

「何で、女性の名前は流行り廃りが激しいんだろうな?」

「分かりかねますね。男よりも、なんらかに敏感なんでしょうが」

「そう言ったものこそ、独身者に聞かれても分かりませんよ」

此度は、3人がそれぞれ納得して、各々目線を交わした。

途中でアルトは、「アリシアさんと、バドウィックさんの奥さんのアリシアさんは、同年代で同名だったが、あれが流行っていた名前だったのだろうか？」と、どうでも良いことに思い当たったが、そのまま、確かめる気もないので放置した。

「まあ、青年のささやかな愛着コンプレックスです。尊重して、その名前は聞かなかった事におきますよ」

「そうした方があの子は喜ぶでしょうね」

そう言って頷くマリーンの眼には、只管な慈愛が溢れていた。

室内に居並ぶ人員に、バイエルラインは少し緊張していた。正確に言うならば、その中の人間に対して引け目があるのだが、そうでなくても、緊張はしていただろう。

そこには、かつてこの国を守り抜いた歴戦の勇将達が揃っていたからだ。

先王と前宰相ヴェスター、そしてシュトラウス將軍と共に、かつてこの国を守り抜き、その後も僻地に飛ばされながらも、国家と王家と將軍に忠誠を誓う戦士達が揃っていたからだ。

その前に立つアルトは、大きく声を張った。

「細かい状況については、皆さん既に周知の事実と思われる。したがって、今更のように状況説明はしない。階級並びに所属部隊、そして権限に関しては、おって説明する。私は、現状シュトラウス様軍の元今回の議長を務めさせて頂く。アルト・ヒイラギ・バウマン

です。以後よろしく頼みます」

名々が、頷くのを確認すると、居並ぶ人間に役職を告げていく。

「まず始めに、ヴェルギエル・シュトラウス閣下。閣下は、騎士軍総大将、騎士総将にして大将の位を有する。閣下より上に立つのは、国王にして軍元帥の称号を持つフレリック・ウルト・アイゼナツ八陛下のみであり、閣下の地位は軍の最高責任者にして総指揮をとる司令官である」

「騎士総将副将、中將の位を有し、騎士総将不在の際に指揮権を委譲される副指令にプリストル・ローデンハーグ殿」

首筋に大きな傷のある、シュトラウスと同年代の男が立ち上がり、礼を返す。

「続いて、騎士総将副将、中將の位を有し、兵站管理後方管理の一切を取り仕切る後方指令にマリーン・オブライエン殿」

マリーンが立ち上がり、礼をする。

「私は、第1師団師団長、騎士将にして少將の位を預かります」

「第2師団師団長、騎士将にして少將、ゲルムハルト・バーゼル殿」

立ち上がり礼をしたのは、茶色い眼と、それよりも赤味があった髪を持つ、長身の美男子だった。その美貌は、女性が10人いれば内8人は顔を赤らめて見惚れるだろうと言うほど整っている。

「第3師団師団長、騎士将にして少將、マルイレル・コーデローム

殿」

マルイレルは、ゲルムハルトと双璧と言って良いほどの美貌を持っている。黒瞳黒髪に、引き締まった長身を持つ、ハンサムな美女だ。

「第4師団師団長、騎士将にして少将、ウォーリック殿」

ドワーフのような固太りの短軀を、大量の筋肉の装甲で包んだ男は、立ち上がりもせず、視線だけで礼を返してきた。

「第5師団師団長、騎士将にして少将、ジョレラ・パトリシオ殿」

紫がかった巻き毛を、腰まで伸ばした妖艶な女性は、静かに立ち上がると、色気を振りまく様に流し目を作る。本人にその意識は無いのだが、勘違いした男が彼女に群がるのは、避けようが無い。

「第6師団師団長は、現在おられません。元王都駐留騎士団指揮官、リップパー・シャンプール殿が務められます。同様に騎士将と少将の役職が与えられます」

リップパーの名前が出た時、幾人かが顔をゆがめる。本人に悪意は無いのだが、ルールと規律の権化とでも言おうか、その厳しさに合わない人間も多いのだ。

好かれてはいないが、嫌われてもいない、でも苦手とする人が多い。そう言った人間だ。

「なお、各騎士将の副将については、マリーン殿から説明される」

アルトが1歩下がると、マリーンが咳払いをしながら書類を持って

立ち上がる。

「それでは順次説明していこう」

「アルト殿：いや、面倒なので仲間内と言う事で敬称は省略しよう。アルトの副将はシュルツ。ゲルムハルトにはキュリア、マルイレルにはノンリエッタ、ウォーリックにはクーンルル、ジョレラにはタラップウエル、そして、ベリオラはシャンプール騎士将の補佐を務めてくれ」

既に、それぞれが顔見知りや上官部下の間柄にあり、問題なく席を移動し副将は騎士将の隣に席を移す。しかし、そこで少しだけ悶着があった。

「納得がいきません。何故、ノンリエッタが副将に就いて、私がマルイレル様の傍に侍る役職につけないのですか」

双子の姉が副将に就いたことに対してよりも、マルイレルの傍にいらなくなる可能性が出来た方が問題らしい。副将に就任した当のノンリエッタから慰められているノエラを見た周囲の人間は、如何したものかため息をついた。

「副将ではなく、騎士団長としてマルイレル殿のところに組み込めば如何だろう。本来は、教導官筆頭になる予定だったが、兼任でも問題は無いんじゃないか？」

アルトが書類を捲りながら言うと、食いつくようにノエラがそれに同意した。

「それです。それに決めます。中々良い事言うじゃないですか」

ちなみにアルトは、名前と役職は把握しているが、顔は分かっていた。しかし、鏡に映したような対称の姿を持つ二人は、マルイレルに侍る姿とも相まって目立っていたので、アルトにも直ぐにそれと知れた。

マリーンは、ため息をつきながら書類に変更を加えると、マルイレルに顔を向けた。

「仕方が無いので、そういう事にしましょう。ですが、部下の管理はきちんとして下さい。と云うか、躰けて置きなさい。以前からあなたは女性関係で問題を起こしすぎです」

「すまん」

マルイレルは、素直に頭を下げたが、その手はノエラの頭をなでたまま。本人にその手の趣味は無いのだが、その風貌と、基本的に女性に優しく強く出れない性格から、各方面の女性から圧倒的な支持を集めているのだ。

彼女の部下に配属されるのは、恐ろしい競争率を勝ち抜いた女性が殆どであり、その隊内の女性率は全部隊の中で、圧倒的な数値を記録し続けている。その壮大な闘争の歴史は、アルトが知れば、新たなトラウマを作るのは避けられないだろう。

「仕方が無いので、教導官筆頭はアルトに兼任して貰います。貴方の言った通り、兼任しても問題は無いでしょう」

アルトにしても、自分から振った話なので断れなくなってしまうた。

「分かりました。何とかします」

どんどん被せられる自分の役職に、漸く重圧から抜けたと思っていたあとは、新たな重圧に胃が痛むのを感じた。

そこで、それまで黙って推移を見ていたシュトラウス総将は、さらにあるとの胃を痛める言葉を口にした。

「お前達、適当に自分の部下の中から、教導官に出来る人員をアルトに押し付けて置け、後で楽になるぞ」

気楽に返事をする面々を見て、アルトは胃薬の使用を本気で考え、以前実際に服用していたラッセルの苦勞をしのんだ。

新たな波瀾（後書き）

人が多いー。

とか叫びたくなってます。これでも大分削ったんですが。

ともあれ、読んでいただきありがとうございます。

ご意見や御感想、その他なんでもお待ちしております。

他の作品も読んでいただければ幸いです。

活動報告なども地味に書いております。

それでは。

発憤 勘違い

「師匠、顔色悪いですよ」

「ああ」

会議の後、兵員教導は明日からとなり、とりあえず体を動かすために、裏庭の外からは見えない所に2人は来ていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ」

心配そうにするバイエルラインを余所に、アルトは柔軟を繰り返している。それに習って、バイエルラインも柔軟に入る。

体の柔らかさを保つのは、単純に戦闘能力の向上にも繋がる上に、鍛錬中の怪我を防ぐ意味も高い。自然と、そこには真剣になる。しかし、アルトはそんな柔軟の間もぐったりしていた、酷く疲れている様子だ。

「本当に大丈夫ですか？」

「フ・・・フフッ」

心配そうなバイエルラインに、やっと反応したアルトの眼には、なにやら黒い陰がうごめいている。それに反応したバイエルラインは、1歩後退りそのまま逃走するかどうかを瞬時に天秤にかけた。

しかし、それを決断する時間をアルトは用意していなかった。

「弟子に心配される様では…おしまいと言うものだな。違うか？バ
イエルライン」

「いえ、その、なんと言いましたか。そんな事は無いのではない
か…と、まあ、そう思ったり」

「いやいや、お前にも心配をかけたようだ。そこで、お前がもう心
配しなくても良いように、きっちりと見せ付けておこう」

「いやっ、そんな、そのですね。心配なんかは全然、その、してい
ないと言いますか。あの、そんなに気を使っていたただかなくても、
いや、嬉しいのですが」

その言葉に、アルトは口角を引き上げニヤリと笑う。バイエルライ
ンは、踏んではいけない竜の尾を踏んだ事を自覚したが、もはや対
処の方法は無い。

「そうか、嬉しいのならば、大盤振る舞いだ。そうだな、組み手を
行こうか」

少し後悔したバイエルラインではあるが、鍛錬は自分望む所と、
無理やり自分を納得させ、ややヤケクソ気味に聞いた。

「はい、何回でしょうか？」

「何回？」

心底不思議そうにアルトは答え、絶望的な言葉を返した。

「限界を超えて、さらにその次の限界までだ」

当然だとばかりに、早速鍛錬用の棒を構えるアルトに、背筋を凍らせたバイエルラインは呐喊する。

優しく手加減されながらも、グレイブを弾かれ、吹き飛ばされて壁に激突し、地面に叩き付けられ、空中に弾き上げられて、身動きの取れない所に追撃を喰らう。

傍から見れば、一方的ないじめか、もしくは虐待かのようにも見えるが、端々で聞こえてくる忠告は、間違いなくバイエルラインへの助言である。

「背の筋肉を意識し、そこから回転の軸をずらす様に突き出せ」

「足先から腕までに、一本の流れを作り出せ。力の流れを纏め上げる」

「後が留守だ。視線だけではなく、皮膚感覚で危険を察知しろ」

「そんな無茶な」

何とかバイエルラインも言い返すが、その次の瞬間には、背後からわきの下に棒が通り、そのまま体制を崩されて弾き飛ばされる。

「無茶ではない、相手の行動の予測と、さらに勘と言われる経験と全体を想像する能力を十全に使え。自分の周囲に、自分の支配する空間を構築しろ」

そう言うと、足元から蹴り上げた拳ほどの石を、胸元の高さで砕くと、それを飛礫として飛ばす。散弾のように飛ぶ礫は、バイエルラインの視覚を奪う。

「眼晦ましをしたのだ、次の攻撃は死角から来るぞ、そう言った事を考えつつ、なおかつ反射的に動け。思考と勘を両立させろ」

脇腹に叩き付けられる棒を、何とかグレイブの柄で防御したバイエルラインは、嬉しそうに応える。

「はい！師匠」

しかし、次の瞬間、後方からの衝撃に地面に顔から突っ込む。防御された形から、半回転したアルトの棒が、バイエルラインの後頭部を直撃したのだ。

痛みは激しいが、加減してある為気絶も出来ない。涙目になりながら痛みをこらえるバイエルラインに、上から声が降りてくる。

「中々良かったが、そのままの形で固まって如何する。すぐさま次の行動に移れ、攻撃であれ防御であれ、防がれた時防いだ時に重要なのは、その後如何動くかだ。一つ一つの技ではなく、一連の流れの動きとして術に昇華させる」

瞬間、アルトの足元に銀光が走る。

うつ伏せになったままのバイエルラインが、脚払いを掛けて来る。空中に飛び上がったアルトの動きを追う様に、力で無理やり軌道を上に向けられたグレイブは、正確にアルトを下から突き上げる。

しかし、次の瞬間グレイブは空を切った。

棒に捕まったアルトが、そのまま棒の上に直立している。その棒が立っているのは、バイエルラインの肩の上だ。

まるで、奇術か曲技の様な光景。いや、魔法の様な光景にバイエルラインは息を呑む。

「悪くは無いが、あまりにも透けて見える攻撃だな。もう1つ2つ工夫が必要だ」

そう言つて、アルトは棒を捨てた。

その後、素手になったアルトに2刻に亘つて修行をつけられたバイエルラインは、糸の切れた操り人形の様に崩れ落ち、ピクピクと痙攣を繰り返しながら倒れている。

指も動かないが、筋肉が勝手に収縮し、痙攣し続ける体を無理に奮い起こし、棒に縋つて立ち上がるうとするも、立ち上がれないでいる。

「今日はこの辺りにしておこう。メイリンに看病を頼んでやる、もう気絶しても良いぞ」

その言葉に安心した様に、一気に意識を手放すと、バイエルラインは一言呻いて白目を剥いた。

バイエルラインを肩に担ぎ、棒とグレイブを持って医務室へ歩き出す。途中で出会った兵士に、メイリンを呼んで来る様に頼むと、既

に医務室に居る様なので、そのまま医務室へと向かう。

医務室に入ると、バイエルラインの惨状に息を呑むメイリンを余所に、アルトはバイエルラインをベッドに投げ出す。

「手当てしてやってくれ」

投げ出されても、呻き声一つ上げないバイエルラインに呆然としていたメイリンは、アルトの言葉にみるみる顔を紅潮させた。

「何をしてるんですか！アルトさん！」

「ん？手当てを頼」

大きな声を出しているのは不思議に思ったが、とりあえず聞かれた事に返事を下アルトは、その返事すらも最後まではさせてもらえなかった。

「違います！バイエルラインさんに何をしたんですか。ああ、こんなに怪我して」

あたふたと、周りにある棚から薬剤や包帯を用意し、洗浄の準備を片付けながらメイリンはさらに声を荒げる。

そんな様子を、不思議そうに眺めながらも、アルトはさらにその場にそぐわない物言いをする。無論、それはメイリンの怒りに油を注ぐだけの行為だが、アルトは気が付かない。

「怪我はたいした事ないぞ、手加減もしているし、殆ど疲労だけだ」

「黙ってて下さい。それから、そこで待ってなさい」

よく分からないままその近くにあった椅子に座る。横の長いすを見ると、シーラとリルが座っている。どうやら、意思表示の少ない2人に対して、メイリンが健康診断を行っていたようだ。2人の前には、各々の体重や身長を含めた身体特徴の書かれた紙が置いてある。

2人は、こちらから話しかけない限り、いや、話しかけた場合であっても行動を起こさない事が多い。その為、当初は2人を一緒にして置くのはいかがでしょうか、それは杞憂に終わったようだ。

2人は、目線を合わす事も話し合うことも無いが、二人の手は結ばれている。無言な少女同士、何か通じる物もあるのだろうか。

そんな、どこか保護者のような目で微笑ましげに2人を見ていたアルトの前に、気焰を上げかねないほど怒りを上らせたメイリンが立った。

「説明をしてもらいましょうか。何故あそこまで酷い事になったのかを」

「修行だ」

「説明になっていませんね。私は、あそこまで酷い事をする必要があったのかと言っているんです。一体何刻の間修行したんです？」

「3刻程だな。この程度ではまだまだ」

肩を竦めながら言うアルトに、ついにメイリンの雷が下った。

「まだまだじゃありません！分かっているなら、それなりのやり方があるでしょう。バイエルラインさんを殺す気ですか！」

「いや、しかし」

「しかしじゃありません。そんな事は聞いていないんです。手加減という物じゃありませんよ、何であそこまでボロボロになるんです。良いですか、もう少し、ご自身の感覚が他人と違うという事を認識して下さい。大体、貴方は私を助けてくださったときも私を気絶させて下さい。いや、勿論感謝はしていますが、あれは女性にする事ではありません。それにですね、フレッド様やミア様に渡された武器の件もそうですが、ご自身が特別だという事を知っているのかいないのか、訳のわからないような言動は慎んで下さい。それにですね……」

延々と続く叱責の言葉に、何で自分は怒られているんだろうと、不思議に思いつつ耳を傾けていたが、幼い少女2人の前でしかりつけられるのは流石に恥ずかしかった。

途中で、「分かっているんですか？」と聞かれたため、「ああ」と応えたら、「返事は、はいです」と言われ、さらに説教の時間が倍加したりもした。

そのまま、半刻に亘って説教を受け、一向に反省の見えないアルトに、さらに憤慨したメイリンは、話しながら怒りが加速してきたよう。如何考えてもアルトに関係の無い愚痴についてまでアルトに被せ、自身の怒りを全て吐き出した。

結果として、最近の慣れない城での生活や、急変した現状などについての愚痴も吐き出し、すっかりストレスを解消したメイリンはシ

ーラとリルを伴って寝室へ向かい。

残されたアルトは、救護室で眠るバイエルラインを一目見た後、ため息をつきながら棚から胃薬を出し、服用してから部屋へ戻った。

「何で俺が怒られる？」

しかし、やはりメイリンの怒りを、理解もしていなければ、反省もしていなかった。

発憤 勘違い（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

御意見御感想等もお待ちしております。

誤字脱字等のご報告も熱烈歓迎しています。

モラルとルール

「総員、整列！」

「右向け、右」

「10歩前進、前向け、前」

「左向け、左」

「10歩前進、前向け、前」

「総員、30歩後退」

「総員、駆足で前進、線上にて停止」

総員で、60人の兵員が6本の列を成し、掛け声にあわせて指示された行動を取る。

「総員、整列！休め」

既に、時間にして半刻。隊列移動を繰り返した騎士達は、慣れない訓練に既に顎を出していた。体力的にも勿論、精神的な疲弊は大きく、漸くもたらされた、休めの言葉に一気に緊張を解いた。

上層部の、一斉刷新とも言える、極端な人事異動、そして騎士組織の一斉改革の命令は、現場の騎士達を不安にさせていた。

気を抜いた騎士達の上に、檀上からアルトの声が響く。

「さて、先ほどから、諸君らの動きを見させて頂いた。私は、非常に喜んでいいる。素晴らしい、実に素晴らしい動きだった」

お褒めの言葉かと、騎士達の目が輝く。しかし、そこに続けられる言葉は、騎士達の期待を裏切った。

「素晴らしいほどダメな動きだ。諸君らはアレか？一切の訓練を今までしてこなかったのか？そこらへんの乞食でも連れてきた方が、まともな動きをしそうだな。この、蛆虫並みの貴様らを、せめて2流の兵士に育て上げるまで、いかに過酷な訓練を課すか、それを思うとむしろ楽しくさえ思えてくる」

思いもよらぬ辛らつな意見に、騎士達の顔が歪む。中には顔を真っ赤にして、今にも殴りかからんばかりに前のめりになっている者もいる。

「さて、今までの順位にさほど関わり無く、そして無論家柄やその他の階級などにも関わりなく、諸君らは今、軍内において最低のごみくずだ。役に立たぬお荷物だ。それを、何とか2流の兵士にまでしてくださるのが、私を含めたここに居並ぶ教導官だ。光栄に思い、歓喜の涙でも流すと良いだろう」

アルトは檀上から飛び降りると、今にも掴みかかってきそうな、一人の男に歩み寄って行った。男は、あまりの言葉に殴りかかろうと思いはしたが、事前に、上官に逆らった者は原則軍から追放の上厳罰対象と言う命令を思い出し、何とか睨みつけるだけで、その場を耐えていた。

「そう、時に貴様のような、蛆虫にも劣る最低の階層を這い回るよ

うな奴には、実に苦勞するだろう。どうだ？今からでも、その壁に頭でもぶつけて死なんか？誰の役にも立たんのだ、生きているだけ無駄だろう？」

流石に、その言葉には耐えかねたのだろう。拳を作りアルトに殴りかかったが、アルトは軽くかわすと、その手を掴んでねじり上げた。

「なるほど、ただ能力が無いだけでなく、短慮で、無駄な暴力を振るう。自分自身で、己が蛆虫にも劣る、最低の存在だと認めたい訳だ」

「貴様！私を誰だと思っている。私の父は、マライア子爵だぞ。かのリユーベック侯爵の外縁にも連なる、由緒正しい名家だ。貴様の様な、ぽつと出の若造など、父がねじり潰してくれる」

痛みに顔を歪めながらも、アルトに向かって気焰を吐く男を、アルトは冷徹な眼で見下ろした。

「貴様は、さらに無能を晒したな。先ほど言っただろう、軍内において、貴様の家柄など何の意味も無い。それに、俺が言っている貴様が最低である所以は、他にある」

「何の事だ！この無礼者が！手を放さんか」

男は、ジタバタと見つとも無く暴れるが、完全に決められた腕は外れず、ただ男の痛みを増すばかりだった。

「ケーン・マライア、マライア子爵家の嫡男」

「そうだ！次期マライア家当主たるこの私に、何たる狼藉を…」

「そして、これより軍事裁判に入る。被告は、貴様だ」

突然の発言に、辺りの空気は凍りついた。

「なっ！」

しかし、アルトは無視して、言葉を続ける。

「先だつて、城下街に置いて殺人事件が発生した。城下で食堂を営んでいた、アンリとクラッドの夫妻が何者かに殺され、夫妻の娘である、リルと言う少女も、暴行を受け重症を負った。」

その言葉に、鈍く震えながら汗を流し始めたのは3人。1人は、アルトに押さえ込まれているケーン・マライア、そして、残りの2人は隊列の中で立ちすくんでいた。

「調査の結果、犯人が判明した。1人は貴様、そして、その場に同行していた者が2名。何か弁明があれば聞いてやろう、しかし、それが刑を減じるに足る物でなければ…貴様達の罪はさらに重くなる」と理解した上で喋れ」

「…」

3人とも、何も喋ろうとはしない。何かを喋る事によって、刑が重くなることを恐れているのだろう。しかし、過去軍規違反で死刑になった者は少ない、しかも、未だ爵位は継いでいないとは言え、貴族であるケーンがいる。

彼らの考えた刑罰とは、軍からの追放と金銭の納付、その程度だっ

た。

「何も言う事は無い様だな。それでは3名を死刑に処す。軍規に則り、刑が執行された後、氏名と階級、罪状を公にし、その首を2週間に亘り晒すものとする。親族への遺体の引き渡しは、これを認めない。今回は、明確な被害者が存在するため、罪人の持つ財産は、全て没収の上その被害者に渡される」

3人は、何とか抗弁をしようと、身を振りながら声を出そうと努力をする。しかし、ケーンはアルトによつて首を押さえられ声が出せず、残りの2人は、背後から歩み寄っていたバイエルラインに、口を押さえられ声を出せないでいる。

「ここに宣言しよう。騎士として、そして国家を守る軍人として、諸君等が成すべき事、そして、犯してはならない事、それは全て既に通達してある。略奪、暴行、そして虐殺、これらを犯した者は、全て死刑。それを助長した者も、同様に死刑に処す。命令に違反した者への刑罰なども、全て記してある。ゆめゆめ、忘れない事だ。この屑の様に、貴族であろうが、幾ら金を持っていようが関係は無い。軍規は、王の名の下に絶対だと言う事を、心に刻み込んで置け」

縛り上げられ、猿轡を咬まされたケーン達は、練兵場の地面に転がっている。

その耳元に、そつと口を寄せたアルトは、冷たく重い声で囁く。

「お前がいかに最低か分かったか？これから、刑が執行されるまで、およそ1日。その最後の瞬間まで、自分の罪を悔いている。幾ら悔いた所で、貴様の殺した人間は帰ってこない。貴様の所為で、少女の心に付けられた傷は癒えない。それでも貴様は、悔いて、悔いて、

それから、死ね」

ケーンは眼から止め処なく涙を流し、他の1人は既に気絶している。もう1人は、アルトを睨みつけていたが、アルトが眼を向けると、急いで眼を逸らせた。

「連れて行け」

バイエルラインは言葉に頷くと、3人を引き摺って練兵場を後にした。

後に残る空気は、有り体に言って重苦しいものだったが、あるとの発言はさらに拍車をかけた。

「さあ、蛆虫以下の屑は死ぬ。お前達は如何かな？」

その場にいる全員が凍りつく。それは、居並ぶ教導官達も同様だった。

モラルとルール（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想、誤字脱字の報告、全て喜んで受け取ります。
如何かよろしくお願いいたします。

ついでに他の作品も読んでいただければ嬉しいです。

Widow・Maker

「少々、薬が効き過ぎたきらいがあるのお」

杯を傾けながら書類に眼を通し続けるリヒテンシュタイン宰相に、アルトはため息を一つ着いて、杯の中の酒を飲み干した。

やや濁りのある琥珀色の酒は、まだ若い様で、少し当りが強い。それはそれでと、きつい当りを楽しんだアルトは、自分の杯を再び満たした。

「いや、本来の目的とは少し逸れてしまった。思った以上に、貴族に対する意識と言うのは強かったんだな。俺のいた世界では、既に廃れてしまった感情だったからな、読み間違えた」

「確かにのお、聞いた所だと、規律に対する遵守と言うよりは、お前さん自身への恐怖と衝撃。どうも、そちらへと意識が向かっておるの」

「最悪、俺が規律の権化になって、兵を引き締めれば良さ。訓練にも身が入るだろう、怖い親父の下で…そう言うのは、万民に共通する物だろ？」

「そんな若い身空で、何が親父じゃね。嫁さんを貰ってから言うんじゃないの」

腹のそこから笑う爺さんに、アルトはやや懨然とした様子を見せながら酒を飲み続けている。

「しかし、訓練が厳しすぎるのではないかの？兵達は、皆涙を流しながら訓練をしておつたと聞いたぞ。他の教導官達も怖がっておつたそうじゃが」

「命を懸けてもない訓練では、戦場では瞬時に死ぬだろうな。少なくとも、実際の戦場よりも先に地獄を見て、そして始めて戦場で生き残れる。それすらも、それすらも危ういんだ。今のうちに、吐ける反吐は吐き尽くした方が良い」

「優しい事じゃの」

爺さんの眼が細められる。やっと書類から眼を離し、執務机から立ち上がった。アルトに向かい合うように座り、杯を干す。

「フレッドは、あいつは人を数字では認識できないタイプの人間だろう。いや、出来ない訳ではないだろうが、傷つく事には変わりない」

「あの子は、良い子じゃからな」

「そうだな。こんな貴族社会でよくも残った物だと思うよ。フレッドも、ミリアも、それに不肖の弟子も」

「なあに、お前さんも良い子じゃよ」

照れた様に、顔の前で手を振るアルトに、実に楽しそうに爺さんは笑う。

「さてと、この爺を楽しませに来たわけではあるまい？今回は何の

お話かの。無論、酒に付き合うだけなら、これはこれで楽しいがの
アルトは、静かに杯を卓に置いた。そして、執務机に山の様に積み
あがる書類を見つめる。

「なあ、爺さん」

「なんじゃね？」

「爺さん。あんた、死ぬ気が？」

アルトの言葉に、爺さんは何の反応も返さない。ただただ静かに酒
を干している。

「俺の居た世界でな、千軍は得やすく、一将は得がたいという言葉
があつた。有能な個人を得る事は、烏合の衆を干々と集めるよりも
難しいと言う意味だが、この国はむしろ逆だ。将は居る、勿体無い
ほどの将が居る。だがな、文官は如何だ？財務は、政務は、外務も
内務も纏めて爺さんが直接監督、そんな状況が何時までも持つ筈が
ないだろう！」

息を荒げ、立ち上がりながら弁を振るうアルトだったが、爺さんの
反応は薄い物だった。

「お前さんの言った通りじゃよ。人が居らん。こればかりは、どう
しようもない事実として受け止めざるをえん」

アルトは、顔を手で覆う様に隠し、力なくソファーに座り込んだ。

「ここでも、ヴェスター宰相の弊害か……」

これに関しては爺さんも同意見だったのだろう、力なくではあるが、頷いてみせる。

ヴェスター宰相。

既に故人ではあるが、シュトラウス將軍を筆頭に、多くの弟子や関係者が居り、ある種の不可侵的な影響を今も色濃く残している。

「軽く調べただけでも、非常に優秀な人間だったのは分かる。軍関係から財務、外務、内務、全てに関して影響を残しているなんて、ある種の超人だな。だが、良くも悪くも超人過ぎた」

1人で何でも差配してしまっただけ、中間の管理者が育たなかった。さらに、推測ではあるが、感情と国論の基本が軍に傾いていた様で、能力の高い人材を軍に多く振り分けていた。戦時下であると言う事も大きく影響して、軍には将が揃いつたが、他の方面では、とうの昔に限界が来ている。

「あの時代は、国を外夷から守るだけで精一杯、それ以上を望むのは難しかった。そして、現状が当時よりも悪い訳ではない。ならば何とかなるじやろう」

「爺さん。俺は勿論、この国の誰も宰相と言う職業を、後家作りにしたいなんて思っていないんだ。ヴェスター宰相ですら、超人と評した彼ですら、若くして死んだんだぞ」

過去、後家作りといわれる職業、役職、もしくは職場があった。

ある船の船長はなぜか若死にする。その職に就くと死ぬ。その階級

になれば死ぬ。ある人間と働けば死ぬ。

それらは、何も呪いと言う訳ではない。単純な理屈が、本当に単純な理屈が、それを現実の物にする。

先進的な職場で、個人の能力を超えた業務内容。

それが、後家作りの一番大きな原因となる。

そして、それは多くの場合、超人的な能力を持った人間が、先にその職についていたことが理由となる。

不幸にも、超人がその職業を、一般人には賄えないほどの激務をこなしてしまった為、その職業が定着する。しかし、超人がそう何度も輩出されることは少ない。結果として、後任の凡人は、その激務に耐え切れないのだ。

「後家作り、確かに激務には間違いない。しかし、ヴェスター宰相はこなしておった。わしとて、後任を育て、部下を育てる間ぐらいは持たせる事が出来るじゃろ」

にこやかに笑う爺さんに、アルトは頭を抱えて首を振る。

「自分でも信じてないだろ、爺さん。なあ、爺さん、今は貴族が好き勝手していた当時とは違う。純粹に周囲は敵だった当事とは違う。全部の内容を1人でなんて、ヴェスター宰相が生きていたって、いや2、3人いたって無理だ。そんな事は、あんたが一番分かっているだろ」

笑みを崩さず、穏やかな爺さんに、アルトの焦燥は加速度的に上昇

する。眼からは、既に殺気に近いものを放っているが、それでも爺さんは揺るがない。

「のお、アルト。おぬしが嫌われ役をしてまで軍を纏めようとしておるのは何の為じゃね？」

「それは…それは、別にたいした事じゃない。出来ることをしているだけだ」

「わしもじゃよ。お互いにそれだけのことじゃろ」

何も言えず、言葉に詰まり、アルトは拳を振り上げはしたが、結局脱力してため息をついた。

「幸せが逃げるぞい」

「莫大な世話だ。頑固ジジイ」

「お互いに、犬馬の労を惜しまない、それで良くはないかね？」

「泥被りか…」

アルトの顔には苦笑が浮かぶ。

「裏方仕事は嫌かの？」

「いや、望む所だ。だから、爺さん。俺も泥被ってやるから、もう少し慈愛してくれ」

「年寄り扱いしてくれるとは優しいのお。やっぱりお前さんは、良

い子じゃのお」

ほっほっほと高らかに笑うリヒテンシユタイン宰相に、照れた様子のアルトは吐き捨てるように呟いた。

「ジジイをジジイ扱いして何が悪い」

それを聞いた宰相は、さらに笑みを強めて、大きく笑う。

腹を押さえながら笑う宰相の目には、一筋光る物があった。

「子供を、子ども扱いしておるだけじゃて」

「クソツ。頑固ジジイが」

W i d o w ・ M a k e r (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想頂けましたら嬉しいです。

誤字脱字の報告も、していただければ恐悦の極み。

ガタ漫 2人のショートショート5

ラ「ラッセル」

バ「バウマンの」

ラバ「ショートショート、ラバウル劇場」

ラバウルは激戦区ですが、この二人とは、なんら関係ありません。

ラ「始まりました流浪の番組、ラバウル放送局。今日も、お師匠からの、ありがたいお言葉がありますので、心して聞くように」

バ「うむー。えー皆さん、ただの友達であっても、女の子が、「エー、何それー」とか言いながら、肩をポンと叩いたりすると、リアル面が充実していない人間は、結構動揺します。惚れてまったりします。だから、あまり気軽にやらないでください。後で、思い返して、すごく凹みます。orz」

ラ「はい、ありがとうございます。ラバウル小唄の、ショートショート。今回は、修行について」

バ「俺はあんなにきつい修行させた事無いんだけど、何で、あんなにスパルタに？ラッセルの元にいた時代になんかした？」

ラ「俺らが知ってる時は、狂ったように鍛えてたな。でも、あそこまで鬼畜な所行はしていなかったぞ」

バ「自分で、勝手にブーストしたかな？」

ラ「可能性は高いなあ。結構思い込みは激しいと思うしなあ」

バ「なんかあったの？」

ラ「催眠術とかにかかりやすかった。情報漏洩とかが怖かったのもあったし、酷い感情移入は、作戦の邪魔になりかねなかったから、訓練で直したけども。時間が、かなり掛かった、本質的には、今でもあるんじゃないかと思う」

バ「はー、どうりでねえ。まあ、根は素直だからな」

ラ「まー、そうかも知れんなあ。律儀に後を着いて来てたからなあ」

バ「しかし、俺もお前も言えた話ではないが、もう少し常識をなあ。あんな遣り方をしていたら、最終的に残る弟子は、一割を割るぞ」

ラ「あいつは、自分が凡人の極みだと思っているんだよ。だから、自分に出来たことは人にも出来ると、そう思ってるんだろう」

バ「見込みの無い弟子なんか、取らないがなあ」

ラ「その辺は、お前の教育も悪い」

バ「そうかな？」

ラ「ハートマン並に、キツツイ罵声怒声を浴びせたらう。お前、そう言うのの好きだったから」

バ「ああ、だが基本だろ。訓練の」

ラ「十にもならん子供にするな、馬鹿野郎。お前も常識が足らん」

バ「そうかな？」

ラ「なににせよ、お前の孫弟子なんだから。何も出来んが祈るくらいはしてやろう。バイエルラインに」

バ「そうだな、では」

ラバ「南へ無へ」

バ「縁起悪くないか？」

ラ「知らん。宗教に興味は無い」

結局皆異常人。

k「さて、ここまでが改訂前の流れですね。一部変わった所もありますが、基本的には同じなので、ここでの考察は改訂後のアルトにも適応されます」

ラ「お、作者」

バ「お前、活動報告に描いてた暦に関する話は如何するの」

k「考えてはいるんだけどね」

バ「じゃあ、ちゃんと書き上げて載せなさいよ。今後は時系列が大変になるんだろ？」

k「うん」

ラ「いや、うんじゃ無くて。書けって、そんなに時間もいらさないだろ」

k「それがね。考えていたのが、どうもね、すでに出尽くした感がね、酷くて」

バ「しかし、自転周期と公転周期は既に書いただろ。ってことは、1年は365日で、1日は24時間、これは変えようが無いだろ」

ラ「どっちにしても、時間の経過を書かない戦記ってありえないだろ。時間の概念を説明しない事にはどうにもならないだろ。と言うか、現時点での季節すらまともに書いてないよな」

k「うん」

バ「情景が浮かび難いだろ。せめて季節感くらい出しておかないと」

k「一応、温暖期の終わりまで、これから涼期をへて寒期だな」

ラバ「サラッと！」

ラ「今まで、執拗にそこら辺に触れてきていなかったのに」

バ「でも、一応気温なんかについては言っていたぞ」

k「ポカミスです」

ラ「暦を忘れていたのか…もしくは、気温について言ってしまった事か。そのどちらについてミスだと言っているんだ？」

k「当初は、6つに季節を分けて、神様は5柱なのになんで6つ？とかにしたかったんですが…あまりにもバレバレなフラグだったので撤回。そして、そのまま忘れると言う事がありました」

ラバ「……」

k「結局5柱の神に合わせて、雨季・豊穰期・乾季・寒冷期・涼期と考えたのですが…これだと上手い事、365日を説明できなかつたので、これを断念」

ラバ「……」

k「一応、地球的な時間に直すと、アルトがこの世界に来たのが9月の終わり、そして現在が11月の始まり。現在35日経過中」

ラバ「……」

k「それで、結局神様が現われて、宗教の原型が出来る前に、既に暦は出来ていたと言う設定にして、大きく6つに分けることにしました」

ラ「恥の変遷を態々さらけ出すなよ」

k「弱いところを出せる俺カッコイイと思う」

バ「それは弱者の勘違いだぞ」

k「何はともあれ、それで決定したので」

ラ「今から発表？」

k「いえ、後できちんと設定資料を」

バ「ここは、お前の愚痴で終了か」

k「と言いますか、あなた方をたまには出しておきたいと言う、コーナーの定着化が目的です」

ラ「そもそも俺たちに需要はあるのか？」

バ「疑問だな」

k「そもそも、作品自体の需要も不安なのに何を今更」

落ちは自重ネタ…

だめかね？

ガタ漫 2人のショートショート5 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。
設定自体は次回で。

御意見御感想等お待ちしております。

設定 暦 地理（前書き）

設定資料 その2

設定 曆 地理

前述のとおり、曆と季節、さらに主な祭日などに関する記事を行います。

地球における月	気候	アルトが現在居る世界での呼称
---------	----	----------------

3月	4月	
----	----	--

温暖期	
-----	--

緑幹 <small>りょっかん</small> の月

59

5月	6月	
----	----	--

乾季	
----	--

黄天 <small>こつてん</small> の月

60

7月	8月	
----	----	--

雨季	
----	--

青枝 <small>せいし</small> の月

59

9月	10月	
----	-----	--

温暖期	
-----	--

赤空 <small>しやくう</small> の月

59

11月	12月	
-----	-----	--

涼期	
----	--

白根 <small>はっこん</small> の月

59

1月	2月	
----	----	--

寒期	
----	--

黒地 <small>こくじ</small> の月

59

緑幹の月・ 1日 年始

3日 新年際 年始は家族などとしめやかに過ごす物であり

われる。 新年際は国家規模の行事として行

黄天の月・45日 顕現節 神が始めて顕現した日と言われている。

青枝の月・10日 水精の祭 現在の信仰以前の精霊に対する祭。水鎮祭。

赤空の月・25日 豊穰際 収穫を祝う祭。もっとも盛大に行われ、地域差はあるが2日から3日かけて行われる場合が多い

上記が主な行事・祭日になる。

自転周期と実際の時間に対する誤差は、8年に1回1日減らす事によって釣り合いを取っている。減るのは黒地の月、これが58日になって、新年。

気候に関しては、温度差はそこまでひどくはありません。アルト達がいる所（アイゼナツ八王国）は地理的に見ると、比較的赤道に近い位置になります。

彼らのいる大陸は、南半球にありますので、北にいくほど暖かくなります。しかしながら、南方も精霊の加護などがありますので、温度にそこまで大きな変化はありません。

アイゼナツ八王国周辺は、夏はうだるような暑さになります、同時

に雨季も来ますので、蒸すような暑さになります。しかし、逆に言えば雨季と夏が同時に来るので、砂漠地帯のような猛暑などにはなりません。

冬には雪が降る事もありますが、積もる事はまれです。

無理矢理分類するならば、温暖夏季湿润気候、もしくは温暖冬季少雨気候になるでしょうか。

植物相的には、温帯の物を主軸に、精霊の加護が強い地域には、それ以外にも生えていたりするので、多彩な植生を見せます。

反面、動物、特に野生動物に関しては、穢れ物との淘汰作用であまり多くは生息していません。

野生動物と穢れ物に関しては、以前にも述べたとおり、一度でも人間に害を与えてそれが報告されれば、穢れ物扱いになりますので、以前は野生動物扱いでも、現在は穢れ物に認定されている場合などがあります。

P・S

前回の話を、早速変更しました。何でかと言いますと、古い方の資料を見ながら書いたので、今書いた説明と明らかに齟齬があるからです。

お詫びを申し上げます。

設定 暦 地理（後書き）

次は本文になります。

騎士将のお仕事（前書き）

アルトの仕事風景が主です。

騎士将のお仕事

「バイエルライン、爺さんの所から、ひったくって来れそうな書類を纏めてもってこい」

机と書類棚を増設した執務室で、アルトは山のような書類に向かっていた。

既に、王都に帰還したシュルツも、隣で書類に立ち向かっている。一時的に、職責を預けなくてはならないので、引継ぎを兼ねてそばに付いているのだが、アルトが大量に持ち込んだ書類に埋もれる事になっている。

自分が、武器調達と、ドワーフとのコネクションを造りに行く間、仕事はシュルツと未だに来ない副官に任せるわけだが、せめてそれまでは出来る限りの仕事をこなして置こうと言う腹なのだ。

もう一つは、自分が騎士将に復帰した時、シュルツを一時的にでも爺さんの下に置いて置きたいという考えもある。仕事の軽減は勿論、護衛としての価値が非常に高いからだ。

「それから！今爺さんの護衛についている女がダレてやがる。天井の右奥の隅に居やがるから声掛けて、シャキッとさせておけ。気配の消し方が下手糞だからここに居ても判ると言っておけ」

カリカリとしたアルトに、触らぬ神に祟り無しとばかりに高速で頷いたバイエルラインは、部屋から駆け出していった。

横ではシュルツが呆気に取られたような顔をしているが、そんな事

は無視して書類に向かっていく。

「マリーンの言っていた副官は、一体何時来るんだ。このままでは出発も出来ん」

爺さんと話をしてから既に3日、山の様な書類を、寝る間を惜しんでこなしたアルトは、精神的にかなり疲弊していた。

爺さんが倒れる前に、アルト本人が倒れそうな程の憔悴具合だ。

これは、リヒテンシュタイン宰相の仕事の一部を、代りに行っている事による仕事量増加もあるが、もう一つの原因が大きな理由になっている。

現在シュトラウス騎士総将の行っている軍制改革は、アルトが主体となっていている物だ。少なくとも、アルトの持ち込んだ階級整備や、軍規の徹底化にはアルトに認証や、意見の整備などが確実に必要になってくる。

漸く、指揮階級が揃った今になって、一気にそれらの仕事がアルトを襲っていたのだ。仕事量で言えば、教導官としての指導は他の教官への教育と言う名の拷問が終わったので、そちらに任せてはいが、単純な書類仕事は以前の5倍近い量になっている。

シユルツが補佐しての5倍なので、実際には10倍近い量がアルトを襲っている事になる。元々書類仕事が得意ではないアルトには、致死量に近い仕事量であった。

「このままでは、嫁も居らん内に後家作りになってしまう」

「騎士将、一息入れますか？」

シュルツは心配そうにアルトに声を掛ける。シュルツは、初日の教導において、アルトの規律を重視する発言に感銘を受け、さらにはその圧倒的な強さを見た結果、アルトに心酔に近い感情を持つ様になっている。

マウゼルの町では、アルトに対する呼称はアルト殿だった。教導を見た後では、アルト様になり、様付けを嫌ったアルトが止めてくれと言ったので、騎士将閣下になった。しかし、それに関してもアルトは辞退し、アルトの呼称は単純に官職を呼ぶという事になった。

内心、既に弟子になっているバイエルラインに対抗意識や、自信も弟子になりたいという願いからのうらやむ気持ち等もあるので、バイエルラインとの関係は微妙である。しかしながら、シュルツ自身は、それらの感情を認めた上で、それらを律しようとしているので、表立った波風は立っていない。

しかしながら、その一瞬の微妙な感情の変化を感じ取った様で、バイエルライン側からはあまり好意的な目では見られていない。

感情を読む能力は、妙に高いバイエルラインだった。その辺りは、むしろアルトとは好対照といって良いのかもしれない。しかしながら、バイエルラインにしても、その能力は男性に対してだけであり、師弟揃って女性はどこらかと言えば苦手である。そう言った所は、似ている師弟だった。

「ん？」

「どうかなさいましたか？」

怪訝そうに眉をひそめたアルトを見たシュルツが、何事かと尋ねる。

「いや、爺さんの所から帰ってきているバイエルラインに、誰かもう1人付いて来ているんだが…これが誰なのかがわからん。会った事が無い人物だな」

あっさりと規格外の能力を披露したアルトに、分かっではいたもののシュルツの眼は輝く。

「そんな事も分かるんですからすごい物ですね。人間の可能性という物を見させて頂いていますよ」

「現状、城内の警備は殆どこれでまかなっているからな」

「兵員一同が教導中ですからね。しかし、城兵全てを一気に教導するのは無茶だと思いましたが、何とかなるんですね」

「せめて、フレッドと爺さんを守れる状態にないとな。俺が城を空ける事もできん。騎士総将にはマリーオン中将が付いているから安心だが…知覚範囲が広い人間がもう1人は欲しいな」

書類に判を押しながら、如何にかならない物かため息をつくアルトを見て、シュルツの顔には苦笑が浮かぶ。

「そんな事が出来る人間が大量にいれば、苦労はありませんよ」

ちなみに、アルトは殺意や害意などには異常なほど鋭いので、この人物も城に入った段階から確認はしていたが危険は無いと判断した。

その人物が会っているのが、マリーンと会った後で宰相の執務室へ行っていると言う事から、危険は無いと判断したわけだが、こちらに向かっているのを不審に思ったただけだ。

そうこう話している内に、バイエルラインともう1人の人物が扉の前に到着する。何時もなら、ノックも無く入ってくるバイエルラインではあるが、同行者がいるので扉を叩き声を掛けた。

「師匠、お客さんです」

正直な所、その声の掛けかたは如何かとも思うが、アルトは礼儀に対しては頓着しないので、そのまま中に入るように促した。

「入ってもらえ」

扉を開け、中に入ってきたのは、小柄な女性だった。それなりに装飾の整った騎士の服を着込んだその女性は、やや緊張しながらも胸を張って右拳を胸に置く礼を取った。貴族や騎士の中などでは、目上の者に対して行われる敬礼の動作である。

ちなみに、バイエルラインは基本的にこの動作を好んでいないため行わず、シュトラウス將軍の周囲の人間は、今更とでも言わんこの動作をあえて行っていない。結果として、この敬礼に対して返礼を行ったのはシュルツだけだった。

アルトは、そもそもこの動作を知ってはいない。対応から、それが敬礼と返礼である事は察したが、遅れて返すのも変なので特に対応は取らなかつた。

「私は、この度アルト・ヒイラギ・バウマン騎士将閣下の副将を拝

命いたしました。プルミエール・シュトラウスと申します。以後よろしくお願いいたします」

「了解した。着任を確認する、プルミエール副将。そう固くならずに、気楽にしてくれ。それから、君の席はそこで、君の仕事はその山のような書類を片付ける事だ」

「ハッ！了解いたしました」

固くならずにとわれはしたが、やはり固いまま執務机に座ると書類に眼を通していく。その席に回しているのは、予算管理と人員の名簿が殆どなので、そのまま仕事に入れるはずだ。

そうして、仕事に入ったプルミエールに、アルトからの声が掛かる。

「君は、名前からするとシュトラウス將軍の娘さんか？」

「はい、私の父は、現在騎士総将に就いている、ヴェルギエール・シュトラウスです」

「そうか、やはり君が噂の娘さんか」

プルミエールは、噂の一言に一瞬眉を上げたが、そのまま仕事を続けた。アルトも、その確認だけが目的だったようで、その後は自分の仕事に戻る。

暫く何事も無く仕事を続けていたが、正午の鐘が鳴ろうかという時間になって、アルトは眉を顰めた。

「来る」

重苦しいアルトの発言に、バイエルラインとシュルツは再び敵襲かと身構えた。しかし、その後そこを襲ったのは、面倒さではそれすら凌ぐものだった。

廊下を駆け抜ける慌ただしい騒音と共に部屋に転がり込んできたのは、娘を愛する馬鹿親父だった。

「総将、何か御用ですか」

ゲンナリとして訊くアルトを無視し、プルミエールに抱きつくシュトラウス騎士総将に、追ってきたマリーンを含めた一同は、深く深くため息をついた。

「この間は頑固ジジイで、今回は親馬鹿か……胃が痛い」

最近、アルトの机には、胃薬が常備されている。

騎士将のお仕事（後書き）

アルトさん苦勞人。

読んでいただきありがとうございます。
御意見御感想、誤字脱字の報告など、何でもいただければ嬉しいです。

今後もよろしくお願いします。

吉先を殺して、万を排する。

「説明を聞こうか」

書類の事で話し合っていたアルトとマリーンに、シュトラウス将軍は腕を組んで威厳たつぷりに尋ねた。尋ねた内容が、娘に関してでなければ、それは非常に堂々とした姿であるが、一連の行動を見ていた周囲からすれば、その差に情けなさすら覚える状況である。

「何についてです？」

「とりあえず、娘さんに叩かれて赤くなつた所冷やしませんか？」

マリーンはにこやかに惚け、アルトはため息混じりに尋ねたが、そんな冷静な返答を、親馬鹿は求めてはいなかった。

「説明を聞こうか？」

「プルミエールをアルト殿に付けたのは、私と宰相の判断によるものですよ。と言いますか、他に居らんでしょう、事務能力に長けた者である場にはいない人材といえ、凡そ推測は出来たと思いますが」

「レーベルンだと思っていた」

「レーベルンは、南方視察からまだ帰ってきていません。それに、帰ってきてても宰相の元に預けます」

「ああ、爺さんの所の人員の薄さは致命的ですからね、そうして貰えれば良いでしょうね」

「それにしたって、人員数は足りていないのですがね」

もはやシュトラウス将軍は半ば無視され、アルトとマリーンは考え込む。根本的な問題として、中間層の人員不足は深刻だった。

理由の主な物としては、教育を受けた者の多くは、貴族の後押しによって教育を受けているので、その後貴族の子飼化してしまっているのが一つ。識字率はともかくとして、そもそも教育程度が低いのも一つ。先の戦争において、20代30代の働き盛りの世代が被害を受けているのが一つ。

「貴族を潰して、そこから溢れて来た人員を徴収しますか？」

アルトの、やもすれば危険な発言に、マリーンは首を振る。

「結局、その貴族の治めている土地の管理で人員が割かれます。結局人手が足りません」

「諸国から人手を募る訳にも行きませんか」

「そうですね、隙を見せるわけにも行きませんし。目聡い人間なら現状この国に関わるうとはしないでしょう。何らかの形で、ジギスムントに勝利を収めれば、話は変わりますが」

現状、周辺国から見れば、この国の状態は、ジギスムントにしてやられた国という印象を受ける。これは、初戦において敗退したと言っても良い。今後の巻き返しを見せなければ、さらに後の戦争を呼ぶ結果になる。

「即効性の高い方策は、現状難しいとしか言えないですね」

「あちらの言に乗るのは癪ですし、信用はしていません。しかし、しかし、現状は時間が何よりも欲しい」

それは、上層部全体の切なる願いだった。

内務は勿論、軍事面、経済面、そして貴族の力を殺ぐ為にも、時間は出来るだけ欲しい。

しかし、外務の面。ジギスムントとの関係においては勿論、その他の周辺諸国との関係においても、早急に勝利を必要としているのは事実。

そして、国民感情と士気の面においてもそれは同様だった。

時間を稼ぎたい面と、早急な開戦を欲する面、その釣り合いを如何取るかが現在の問題だった。

しかし、上層部としても、何とか戦闘は回避したい。無理なのは分かっているが被害を出したくは無い。本心で言えば、ジギスムント側が折れ、謝罪をすれば、多少のしこりは残っても、それを受け入れてでも戦闘を回避したいと言うのが本心なのだ。

それが起こる事の可能性が、絶無に等しくはあっても、理解をして戦争の準備をしてはいても、それは願いとして存在している。

流石に、真面目な空気を出しながら話す2人に、場を弁えたのか、シユトラウス将軍もそれ以上の言葉を続ける事が出来ずに聞きに回っていた。

その時、アルトの眼が細められ、口元には獰猛な笑みが浮かぶ。

「来ました。屑様のご登場のようですよ」

「思ったより遅かったな」

「脳の枯渇した連中です。馬鹿は馬鹿なりに、何かを話し合っていたでしょう。時間の無駄ですね」

冷たく笑う、軍の最高責任者たちに、その場にいる面々は、恐怖を禁じえなかった。

「ええい、雑兵では話しにならぬ。將軍を出せ、もしくは王への謁見をさせぬか」

豪奢な衣裳に身を包んだ一団が、声を上げながら廊下を進んでくる。一応門に配置していた兵は止めようとはしたが、貴族の集団の前では強く出ることも出来ずに結局押し切られてしまっている。

無駄に金を使い、華麗と言うよりは下品に近しいほどの派手な衣裳の一団は、道を阻むように立つアルトの前で止まった。

アルトに向かい、尊大な調子で声を掛ける。

「その下郎、貴様、軍の一員であろう。將軍の元に案内せよ」

「申し訳ございませんが、ここに入る事が出来るのは許可された者のみです。あなた方は、予定を入れた上でお越し下さい。おとなし

く帰れば今日のところは良しとしましょう。ですが、そうでないならば不審者として取り押さえさせていただきます」

アルトの言葉に青筋を立てた貴族達は、怒りも露わに怒声を浴びせた。

「貴様のような下郎が、その様な身も弁えぬ発言、万死に値する！」

「あなた方は、言葉も通じないのですか？既に通達した通り、事前の連絡無しに王への謁見は認めない。これは決定事項です。さらに王城への登城も、それに準じるため事前の連絡が必須、また、貴族の將軍への意見は文章の形で行うと、これらの事項は全てお知らせしてあるはずですよ」

慇懃無礼を絵に書いたようなアルトの発言に、貴族の1人が剣を抜き、アルトに切りかかってきた。

しかしながら、当然のようにそんな攻撃が通用するはずも無く、あっさりと首筋を叩かれて昏倒する。そんな様子を見て、他の貴族はやや不安に駆られている様だが、幼い頃からの貴族教育で肥大化した自意識は、それを無視してその場に留まった。

「城内で剣を抜くとは不敬の極み、司直の手で裁かせていただきます」

淡々と人の意識を刈り取りながらにこやかな笑みを見せるアルトの姿は、恐ろしさをいや増させる。すでに多くの貴族の腰は、完全に引けていた。

しかし、その中にも例外はいた。

「ほう、貴様が最近話しに上っている、ぼっと出の成り上がりか。ケーン・マライアを害したのは貴様だな」

笑みを顔に貼り付けたまま、アルトは頷く。

「確かに、あの下衆の処刑を命じたのも、そして結局首をはねたのも私ですよ。あの下衆のお友達ですか？」

明らかに挑発しているアルトの言葉に、尋ねた男の体が憤怒でガタガタと震える。眼は血走り、怒髪は逆立って、まさに怒り心頭の様子だ。

「私の甥を、よくも下衆などと！」

「おー、下衆のご親族で、それはそれはご不幸な事ですね。如何です、掃除が済んでスッキリしたでしょう。下衆もゴミも捨てるに限りますな」

「貴様アアアア！」

「おや？声を荒げて何ですか？頭の血管が切れますよ」

さらに挑発を続けるアルトに、周囲の人間の顔は、すでに蒼白を通り越して土気色だ。

「良くぞそこまで言った下郎、もはや我慢ならん。貴様に決闘を申し込む」

「良くぞそんな大それた事を言った、下種の血族。その決闘を、あ

「つさりと受けてやるう」

「貴様！もはや生かしてはおかぬ。この伝家の宝剣の錆にしてくれ
る」

筋骨隆々、身長ではアルトより頭一つ以上高く、体重や力において
も一回りも二回りも上に見えるその男は、ゴテゴテと飾り付けられ
た剣を抜いた。その体格に見合い、剣も長大で幅広の剛剣となつて
いる。

「さあ、来なさい。下衆の血族相手に武器を使うのは勿体無い」

唸り声を上げて切りかかる光景に、貴族の集団の誰もが真二つにさ
れるアルトを想像した。しかし、その後の光景は、彼らの予想を遙
かに上回る物だった。

貴族の中でも、剛勇で知られる男の腹には、彼自身の持っていた剣
が突き刺さっている。いや、今もその手は剣の柄にあり、握り締め
ている。

「やはり下衆に連なる者、まともに剣も使えない様ですね。それと
も、自分で自分を恥じて切りましたか？だったら少しは見直してあ
げましょう」

アルトが押さえているので、剣から手を放すことすら出来ずに、男
の剣は腹に潜り込んで行く。ゆっくりと自分の腹が切裂かれる光景
は、男の意識を摘みそうになるが、痛みが意識を覚醒させていく。

結果として、気絶する事もできず激痛の中で男は事切れた。

あまりの光景に、周りの貴族の中には失禁している者すらいる。

「さて、これだけ時間を差し上げたのに、未だにここに留まっていると云う事は、あなた方は侵入者ですね」

貴族達は、抗弁の暇もなく叩き伏せられ、気絶した。

そして、その光景を見た門兵によって、アルトの名は恐怖の代名詞として兵たちに広まっていく。

その強さも、その冷酷さも、全ては規律の上に。

兵士達は、瞬時の遅れが死に繋がると意識し、僅かな命令違反も命を投げ出す事に同義と一層訓練に精励した。

吉先を殺して、万を排する。(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

御意見御感想を頂けますれば恐悦至極。勝る喜びはございません。誤字脱字なども、気を付けてはおりますが手が回らぬところがございます。

報告いただければ嬉しく思います。今後もよろしく願いたします。

互いに立つ位置

「これから…ですか？」

「ああ、暫く留守にする。なるべく早く戻ってくる」

心配そうに尋ねるフレッドに、それ以上の不安を与えない様、努めてさり気無くアルトは応える。

「貴方には、過分なほどの職責と、そして辛い立場を背負わせてしまいましたね」

何かを堪える様に拳を握り締めるフレッドは、自分自身の不甲斐無さを悔やみ、頭を垂れた。

アルトは苦笑して、フレッドの頭に手を置く。撫でたりはしないが、軽くポンポンと頭を叩き、顔を上げさせた。

「俺が望んで、いや、半分以上俺の為にやっている事だ。それに、前も言っただろ、戦争で人が死ぬのは見たくない。自分の意思で戦う者は勝手に死ねば良い、しかし、日々を生きる事が目的の者が戦いで死ぬのは見たくない。俺は、その為に出来る事をしているだけだ」

頭から離れた手は、腰に佩びた刀に置かれる。軽く音が鳴った刀を見ながら、アルトの言葉は続く。

「これで守れるならば簡単だろうな、俺自身、俺だけを守るならばそれでも良い。しかし、他に守りたいものがあればそうは行かない。

手を汚す事も、悪意を受ける事もあるだろう。それが俺自身の我が侷でないのかと言えば、それは我が侷なんだろうがな」

「ですが、貴方を悪役にしたかった訳ではありません。むしろ、貴方には英雄になって欲しかった」

その言葉に、アルトは体を振るわせ笑い出した。以前に自分が言った言葉を思い出し、人間の考え方の狭さにむしろ安心感を覚えたせいもある。同時に、自分が英雄とは一体どんな悪い冗談だろうと、それが単純に面白かったと言う事もある。

「なるほど、俺もバイエルラインに似た様なことを言ったよ。お前を英雄に仕立て上げるとな。しかし、俺には如何考えても似合わない話だ、俺に似合うのは憎まれ役ぐらいだな」

「しかし」

「それにな、憎まれ役と悪役は違うぞ。俺は憎まれ役にはなっても悪役にはならんよ」

この言葉はフレッドの理解からは外れていた様だ。そのどちらもが悪意を向けられる立場、ならばどちらにしても損な立場ではないか、何処に一体差があるのだろうか。

その様子を見たアルトは、自信も確信は持てないでいたが出来る限りの言葉を紡いだ。

「俺にも、詳しい説明は難しいんだが。悪役と言うのは敵であり、正義に対して反抗する者だと思う、勿論正義が一つである事など少ないし、そもそも正義と言う単語自体があやふやだ。しかし、思想

…いや趣味や思考と言う物に沿って行動しているならば、それは悪役ではなく憎まれ役で良いと思う。少なくとも憎まれ役は仲間の中にいる、敵ではないさ」

「その結果が、あの恐れられかたと地獄のような訓練ですか？」

「そうだな」

フレッドの顔に、どこか突き抜けた様なさわやかさが加わる。

「貴方が仲間でよかったです」

「保護者だからな」

にこやかに笑いあう二人の姿は、近くで見れば兄弟のようにも見えた。

髪色や顔貌は明らかに違っているが、お互いに通じ合っている空気と、お互いがお互いに思うところがありそうな、相反する空気を同時に纏っている。

それは、反抗期の親子や兄弟に見られる空気に近い物だった。

「ところで、総将の娘さんを副将に就けて、行く行くは嫁に迎えると言うのは本当ですか？」

アルトの頬に一筋冷たい汗が垂れる。

「誰がそんな事を？」

「他の騎士将の皆さんや宰相が、楽しそうに話しておられましたよ。宰相は、子供の名付け親になると意気込んでいましたが」

返事を返す事も無く、ただただ深くため息をつくアルトの様子を、フレッドは楽しそうに見ている。

「なんでしたら、国家の雄と国家の大將の娘の結婚ですから、婚約から結婚まで派手に行いますが」

「冗談と言う物は、ある程度の一線を越えた瞬間から、一切笑えないと言う事を知っているか？」

肩口をギリギリと握り締め、鎖骨が悲鳴を上げるほどの力を込めているアルトに、流石にこれ以上からかうのは危険が多いと知ったフレッドは、素直に頭を下げた。

「すみません、冗談が過ぎました」

「冗談ではすまないから止めてくれ、少なくとも総将の前でやると、俺と総将とマリーンさんの業務が半刻は滞るんだ」

アルトは、先日の延々と間の縮まらない並行線上の会話を思い出して、胃の辺りを押さえながらうなだれる。

アルトは貴族どもを片付けた後、一旦爺さんの部屋へ向かって時間を稼ぎ、幾つかの懸案について話し合っていた。しかし、中々帰ってこないアルトに業を煮やした総将は、マリーンと共に宰相の部屋へと向かってきた。

本来なら総将に気配を感じる能力はないはずだが、娘に関わる状態

においては、未知の力を引き出すらしく、真直ぐに宰相の執務室へと向かってきた。

当然アルトも気が付いていたが、逃げるのも何なのでそのまま待っていた。

その後巻き起こされた親馬鹿台風と、それに拍車をかける宰相の茶々はアルトの精神面を実に効率よく疲弊させた。

「あの、大丈夫ですか？」

自分の想像以上に、この件に関して被害を被っているであろうアルトの様子に、フレッドも流石に心配になったようで、気遣う様子を見せる。

しかし、その気遣いがかえってアルトに被害を与え、より落ち込ませる。

とぼとぼと城門の方に歩いていったアルトを見て、フレッドの口から言葉が漏れる。

「宰相の言っていた通り、思っていたの5倍は面倒な人だな」

しかし、それならば自分にももっと支えられる所や、助けになれる所もあると思つたフレッドは、アルトとは逆に機嫌よく自分の仕事に戻って行った。

互いに立つ位置（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想お待ちしております。

誤字脱字の報告を含めまして、いただけましたらば望外の喜びでございます。

それでは今後もどうぞよろしく願います。

ガタ漫？ 2人？のショートショート6 + (前書き)

今回は説明回になります。

あと 長いです。

ガタ漫？ 2人？のショートショート6+

ラ「ラッセル・ジャスパー」

バ「フレデリック・バウマンの」

ラバ「ラバウル放送局」

ラ「今回もやってまいりました。流浪の番組ラバウル放送局、今回も張り切ってまいります」

バ「ラジオ番組ペースだな」

k「何と無く2、3人の会話は、ラジオの雰囲気からインスピレーション貰っている物が多いので」

バ「作者今回早いな」

ラ「大体ゲスト扱いなのにな。ラジオペースで行けば」

k「今回語る人が多いので」

バ「別段話しの上での大きな転機は無い様だが？」

k「いや、もつと基本的なことですがね。主人公の事で」

ラバ「アルトの事で？」

k「まあ、ここで言う事でもないのですが、この話は一番最初に友人に見せてまして、本来は誤字を見つけてもらいたいんですが、そっちはほぼ放置なんですよね」

ラ「ああ、誤字多いよな」

k「私が書く>友人が見る（誤字スルースキル発動）>私がもう1回見返して掲載。これが流れなんですけど、結果として友人からの感想もあるわけですよ」

バ「それはそれで有用なんじゃないのか？」

k「その友人はあまり本を読まない人間（漫画のみ）なので、読みやすいかどうかの試金石代わりなのですが・・・最近話し合った結果、私の意図を間違った方向で理解していた事が発覚」

ラ「つまり作者の文才がないと」

バ「今まで感想を逐一貰っていて気が付かないほうもおかしいな」

k「そういわれると立場は無いのですが、なにせよ、同じように思っておられる方が多いのではないかと」

ラ「それは何か？再び改訂フラグか？」

k「いえ、少なくとも1回書き終わるまで改訂はもうしません。が、せめて」

バ「この場で説明をしていくと？」

k「そうなります」

ラ「作中での説明努力はしないのか？」

k「そっちはそっちでも頑張ります」

バ「まあ、それが足りてないからこそその補足だからな」

k「と言う訳で、ここから暫く作者語りです」

かなりネタバレと言いますが、作品の根幹に関わります。

そう言った物を見たくない方は読むのをおやめ下さい。

ここを読まなくても、今後の作品を読むことは可能ですし、今後の面白さを減じる可能性もあります。

しかし、こうしたバックボーンがあるということを理解すれば、他の面も見えるのではないかと言う思いもあります。

しかし、これが私の描く主人公像です。

私の主人公のイメージなんです、いろいろな話（小説や漫画や映画など）で主人公の弱さが出される場合、それにはいろいろな側面があると思います。身体的なコンプレックスや精神的な軋轢、周囲環境からの問題、純粋な精神的な暗さや重さ、もしくは被害者意識など様々です。

そういった逆境や、何らかの障害から一気に立ち直る主人公、それは確かにカッコいいです。話としては確かにそうしたほうがおもしろいでしょう。

しかしですね。

人間ってそんなに一気に変われますか？

一旦乗り越えたと思っていた物が、その1回で完全に越えたと確信できますか？

意志の力や決意はそんなにも強いですか？

周囲のサポートはそんなにも有効ですか？

覚悟を決めればそのとおりになりますか？

私はならないと思います。一旦決めた覚悟が揺らぐ。何か他の要因で再び崩れ去る、もしくははぶり返す。フラッシュバックのように襲う恐怖や悪意の波は、周囲の人間がどんなに助けても結局は自分の問題です。欲望や、外的なストレス、内的なストレス、自発的なネガティブイメージの連鎖や、積み重なる悩み、時には善意さえ悪意にしか見えない時だってあるはずですよ。

僕には誰かがいるからとか、支えてくれる人のためにとか、これは俺の覚悟だとか、その場でかつこいい事を言うのは簡単です。

しかし、有言実行はそんなに簡単ではありません。

有言し、そこからの努力で何とか最終的には形になれば大成功。その努力の期間には、何らかの変遷があり、曲がったり落ち込んだり、もしくは覚悟に反する事だっただけであると思っただけです。

だから、この作品の主人公はぶれます。

悩みますし、間違えます。

一旦覚悟を決めて切り替えれば、その後はスーツと通って行く様な事はありません。

それは弱さでしょうし、それをなお言葉にするのはある種の狂気だと思っけていますし、それはある種のがむしやらさでしょう。彼自身は、只管狂人に近い存在だと思ひます。

しかしながら、私の個人意見としては、まともな人間なんて居ません。

皆がそれぞれ狂っけていると思っけています。狂人と狂人が会うところに、関係性が出来、社会性を保つ、だからこそ人間なんだと思っけています。

社会を構築する最小単位は、最低限複数名の人間集団です。家族や友人関係を持っけていて始めて人間と言ひます。そういつた関係を持たない人間は、狂人であり、社会的に見て人間ではありません。

動物的な意味での、ホモ・サピエンス（人間）ではありまするが、社会的文化的な人間ではないのです。

アルトは、かなり関係性の断絶を經ています。この論理で言っける所の、社会的な人間と、そうではない狂人の中間域にいと設定していません。

いわば、この物語は、社会性を構築していく青年男性の物語であると言ひます。

そして、アルトのキャラクター定義の一つとして、もしくはこの作品の位置付けとして、「武俠」と言うものがあります。

格闘技、武技、闘技、それが何であれ、誰かを攻撃し傷つける行為は、決して社会的な行動ではありません。

戦争においてそれが成されるのは、大儀があるからです。

国家として、国や民を守るために戦う。それは侵略戦争においても変わりません。国民の生活向上や、周囲の国からの影響をなくすための攻撃にはある一定の大儀があります。

しかしその大儀は、あくまでも社会的な大きな存在、国として物です。

しかし、それを持たない人間が戦う場合は、個人の正義や大儀が必要なわけです。大儀と言うと、よろしい意味に聞こえるかもしれませんが、これは単純に意味と言い換えても良いでしょう。復讐や欲望もそれに含まれます。個人的な正義は、往々にして周囲から見れば悪に見えるものですしね。

しかしながら、武俠たる者その個人の正義や大儀で人を攻撃し、時には殺さなければなりません。

過去のアルトは、完全に復讐と絶望で戦っていました。それはむしろ純粋に、私の思い描く武俠を体現したものといえます。

しかし、今のアルトは国に所属し、誰かのために戦いたいと言う希望を持っています。これは、武俠の精神ではありません。

つまり、アルトは現状、 武俠から国家所属の軍人への過渡期にあるといっても良いでしょう。

社会的人間と狂人、 個人の正義を持つ武俠と国家に大儀を預ける軍人、 この大きな二つのカテゴリーがアルトの存在する間です。

アルトは、 個人的な武術技量、 もしくは戦闘技術においては、 周囲をうてなから見下ろすような高みにいます。

しかしながら、 その立ち居地や社会的な面においては、 5歳の子供と変わらぬような不安定な状況にいます。 しかも、 子供ならば当然持っている庇護者もいません。 そこからの社会性の構築は、 非常に難しい者だと簡単に推測できません。

肉体的には強く、 精神的には弱く不安定な主人公。

私の書きたい物語は、 改訂後はそこに落ち着いています。

k「と、 言う訳でな」

ラ「一つ言っただい？」

k「何？」

ラバ「暗い！」

k「何を言うか、 お前らが主人公になっていたら、 青年じゃなくて中年だぞ。 よほど暗いわ！」

ラ「まあ、そう言った理由があったわけだ。しかし、当初の予定とは違っただろ？」

ク「そうですね、ここまで不安定と言うか、矛盾する属性を持つ人間ではありませんでした。それが決定的になったのは、サラツと書いたあなた方2人の会話です。改訂後は、わざと外していたショート3+ の中の文章です」

バ「酒に関するくだりか」

ク「言うか、漠然と感じていた内容が、あれを書いたことで纏まったんだ。それで、暫くは書き進めたけど、結局は改訂へとなった」

ラ「それではそれもここで掲載だな」

ク「そうですね、一気にいきます。改訂前の物で、文章などの書き方が違いますが、そのまま載せます」

ラバク「どうぞ」

再掲載 改訂前幕間劇 ガタ漫？ 二人のショートショート？3+

ラ「ラッセルです。」

バ「バウマンです。」

ラバ「二人合わせて、ラバウル小唄です。」

はい、つかみをやった所で今回のお話。さぁ行きましょう。

ラ「三度目の登場ですね、取り乱しまして、ラッセルです。」

バ「もう御馴染みになっているのでしょうか？取り繕いました、バウマンです。」

ラ「気にせずに、本題に入ります。作者もすっかり忘れかけていて、説明もしていなかったワードがあります。」

バ「そうですね、その名も「称号名」貴族には付いている、という様にいつていたのに、プロローヤシュトラウスなど、軒並み出てきた貴族連中に付いていなかったあれです。」

ラ「実はちゃんと考えていたんだけど、説明を入れるのを文中に忘れたのでここで補足。決して、今考えた後乗せサクサクではありません。」

バ「まあ、説明すると、基本的には王から直接賜る名前にして、幾つかの例外を除いて。ですから、王が代替わりすると、基本的に無効になります。勲章授与の代わりになったりします。」

ラ「ですから、先代王が無くなってから、フレッドはまだ誰にも授与していないので、誰も名乗っていません。例外的に王族は、生まれた時から持っています。」

バ「ウルトやエルノルというのが、それにあたります。もっとも、

王族の場合は称号名とは言わず、祝名とされています。が、一般的にはあまり広まっています。基本的には皆称号名と思っています。」

ラ「もう一つの例外は、神託を受けた神官ですね。神託を受けた人間は、どの神からの神託を受けたかによって、名前が変わってきます。ですが、神は基本的に放任主義なので、めったに居ません。そして今は一人も存在しません。」

バ「もう少し説明すると、家名を名乗ることに、特に規則はありません。ですが、基本的に家名は、貴族もしくは何らかの称号授与を受けたような家などが名乗ります。普通は、地名を付け加えて、何処何処の誰誰と名乗ります。」

ラ「最初に出てきた村長さんを、例としてあげると、パルムエイトのバドウィックと名乗るのが普通ですね、彼の場合は村長であるという事等も付け加えるかもしれませんが。」

バ「大体各国同じようにしているので、他の国での称号名を持っていたり、まれではありますが、複数の称号名を持っている人間も居ます。」

ラ「勝手に自分で家名を名乗っている人間は、流民である場合が殆どで、名乗るのは構わないけれど、逆にイメージが悪くなったりもします。ですので、どこかに定住した時点で、地名を名乗る場合が殆どです。」

バ「完全に予断ですが、ジプシーや公界（苦界）の民の様な人々も居て、彼らは、芸を売ったり、春を売ったり、もしくは占い師等の様な事をしながら世界を回っています。彼らは自分たちを、ドウカの民と言い、民族名としてドウカを名乗ります。」

ラ「それ、何か本編に関係してくんの？」

バ「多分、全然関係ない。」

ラ「じゃあ言うなよ。」

バ「ふと浮かんだとかでな。言いたかったんだろ。」

ラ「まあいいか、それでは高齢お便りコーナー。」

バ「字が違うぞ。」

ラ「この間、お便りいただいて、誤字が多いと指摘いただいたんで、実はわざとです、と言うような演出を試してみた。意味は無いが。」

バ「意味無いどころか、心象を悪くするわ。まじめにしようや、それで他にお便りは？」

ラ「励ましかは有ったけど、質問とかは無かったから、今回のネタには難しいんだ。だから、チョットごまかしてみた。」

バ「まあ、名前を掲載する許可とかも、取っていないしな。」

ラ「それもある。だから今回は、ショートストーリーを掲載してみる。」

バ「地球での話ってやつだったか。あまりにも空気が違っちゃってんで、掲載しなかったスピノフだよな。」

ラ「正解にはそのリメイク、ショートバージョンだな。全文掲載すると、読み終わる頃には「もう止めて、作者のライフはゼロよ」ってなるから。」

バ「にしても、ガタ漫なのか？イメージが全然違っぞ。」

ラ「実は、頂いたお便りの話で、パンツに関しての話とかがあって、こだわりについてなんだが。そのあたりのことに対する説明をするためにも、掲載して見ようかと思って。」

ラバ「それでは、チョット変わった形ですが、どうぞ。」

バ「無駄に重苦しいのとか嫌いな人は、止めた方がいいかもね。」

ラ「そだねえ。」

ノーマンズランド

誰も居ない、ここには、誰かは居なくて、何かがあるだけ。

死臭と、焼け焦げた臭い、嵐の前のような、湿った不安定な空気。

いろいろな物が、不安定で、不安が満ちている。

ザッ

くラビットヘッドより、ラビットエコーへ、状況を伝えよ。く

「ラビットエコーより、ラビットヘッドへ、自分は、問題なし。僚員は全滅した。当方の被害は11、敵方は25、オーバー。」

「ラビットヘッド確認、ベースへ戻って来い」

「ラビットエコー了解。」

好き好んだかのように、激戦地、前線部隊ばかりを選んでいる。別にたいした意味は無いのに。師匠、貴方の教えてくれたことは、世界何処に行っても通用する。黒くても白くても、信じる神が何であれ、人の死に方に大差は無い。人の生き方にも大差は無い、少なくとも戦場では。

平原で、街道で、塹壕で、凍土で、草原で、砂漠で、森林で、海上で、空中で、泥中で、湿原で、密林で、山中で、市街で、俺は戦ってきた。

何処に行っても、殺すことには変わらない。

一人の時もある。ラッセル達のような、見知った連中と組むこともある。今回のように、会ってから別れるまで、二日も無い様な事もある。

戦場から戦場へ、皆が休みを取る中、また別の戦地へ。地球は狭い、何処に行っても何かしらの戦争がある。争いに満ち満ちている。

その事について、何か特別な感慨が有る訳でもない。少なくとも食うには困らない、と言うことぐらいだろうか。

戦争で奪われ、戦場で学び、戦争の中で人を知り、戦場で成長し、戦争で糧を得ている。まったくもって困らない、ただ食べて、ただ生きて、ただ殺している。

昨日までも、そうして来た。今日もそうした。明日からもそうだろう。生きているならば。

食べて、寝て、殺す。

食べて、寝て、殺す。

守るために、もしくは、守られたから。殺す。

戦うために、戦い続けるために。殺す。

ホモ・ルーデンス、と言う風に、人間を言うことがあるそうだ。人は、食べて、寝て、学び、遊ぶ。そういった生活。遊ぶ人、ホモ・ルーデンス。

だとすれば、俺は何なんだろう。

食べて、寝て、殺すために学び、殺す。

ラッセル達に、最近遊びに付き合わされる。楽しくない訳ではないが、なぜするのが判らない。あっても無くてもいい物の様に感じる。

誰も居ない土地で、誰も居ない場所で、遊び相手のいない人間は、一人静かに準備をする。

彼が唯一知っている遊びの準備を。

彼はそれしか知らなかった。彼は、それしか経験できなかった。

自分の事を、普通の人間と思っている彼は、本当は、戦う為に普通のふりをする。

それしか知らないから。それしか認められたことが無いから

ラ「以上、ノーマンズランドでした。」

バ「時期的には、ラッセルが核で吹っ飛ばす二年位前だな。」

アルトの幼児性というか、おかしな所をどうまとめめるか、そう説明するかって事で考えた文章のリメイクなんだけどね。

バ「作ってて、凹んだんだろ。精神的に。」

ラ「これでも大分マイルドになっではいるな。」

うん、殺戮シーンとかは排除した。それと、死体の描写とかも無く

した。

「バークで、思った形にはなかったのか？」

良く分からん。結局、殺すとか壊すって言うのは程遠い所にあるとしか思えなかった。グロさってのとは違うけど。自分たちは、身内が死ねば悲しむけど、親類とかであっても、その相手とのつながりが希薄なら、冷静に骨を拾ったりする。そのあたりの感覚で思う事があつたんで書き直したんだ。前の文章は、いかにグロテスクに悲惨について文章だったから。

「ラ、淡々と、人を殺せる人間の気持ちって事か？」

「というか、思考停止的な状態と、冷静な状態、無感情と無思考って所で考えてたんだけど。分からなくなった。」

「パンツや酒などに対する思いも、結局は人から言われたことを、そのままに実行してるんだよ。パンツについては、母親が引き離される前にせ、めて着る物を少しでも与えたい、と思って縫ってくれたのがパンツだったんだよ。周りに見えてしまうと、問題が起きたり虐待が酷くなったりすると言うこともあつたし、まともな服が縫えるほどの布も無かつたんだ。だから、母親から貰った覚えているプレゼントは、それ位だった訳だ、物ではな。」

「酒に関しては、バウマンが言ってた事だな。」

「バーク一人前の戦士は、酒くらい飲めて当たり前って奴か。自分が飲みたかつたから、言い訳でしかなかったんだがな。その当時はあいつには酒は飲ませなかつたし。」

ラ「認めてもらって、一緒に飲むのが目標の一つだったんだろ。そういう小さな事にすがっている以上、細かい事でも、気になってしまう。そういう性格なんだよな。」

個人としてのバックボーンが、非常に不安定で、しかも少ない、そういう人間な訳だ。だから、アリシアに感じた恩義でも徹底的に気になるんだよ。一度深く関わった人間を、見捨てるのが難しい人間な訳だ。でも。訓練されてるから、見捨てる時には自動的に見捨ててしまう。そして後でまた苦悩する。そう言う人間性なわけだ。チヨット暗い話になったが。

と言うか長いな・・・ここまで書く気ではなかったのに。もう、全然ショートショートじゃない。

ラ「まあ今回は、この辺で。お便り等もどしどしお待ちしています。感想など頂けましたら嬉しいので、どうかお願いします。」

ラバ作「よろしく願い申し上げます。」

了

k「こうなっていた訳だ」

ラ「もう一回言つが長げえよ」

ク「一応これで主人公の説明にしておこうと思います。だから何？
と言う話ではありますが、皆様が楽しんで読んで頂けるのならば、
これに勝る喜びはありません」

ラバク「それでは、今後もよろしくお願いします」

ガタ漫？ 2人？のショートショート6+ (後書き)

と言っわけで、今後もよろしく願います。

淑女の随行（前書き）

本編です。

淑女の随行

アルトが城門を抜け、門前にある繋馬場へ行くと、マリツカさんとバイエルラインが荷物と共に待っていた。

「淑女を待たせるものではないわよ。アルトさん」

「申し訳ありません。ちょっと話してしまして」

内心は、淑女と言う言葉に思うところが無かったわけではないが、恩義があり、今から世話になるマリツカに言う事でもあるまいと言葉は飲み込んだ。

横で、バイエルラインは首をかしげているが、それはその言葉そのものではなく、何時もは相手を気にせず話す師匠が、何で気を使っているのだらうという疑問だ。

「ところで、言われたとおり馬は2頭しか用意していないけど良いの？」

「ええ、俺とバイエルラインは走りますから」

その言葉に反応したのは、マリツカでは無くバイエルラインだった。

「馬が2頭な時点で俺は走るものだと思っていましたが、師匠もですか？」

「そつだ、馬の1頭にはマリツカさんが、もう1頭にはマリツカさんの荷物を載せる。駆足で行って貰わなくてはならないからな。馬

の負担は軽減しないと」

「俺たちの負担は軽減しないんですね…」

「軽減どころか…まあ良い」

ニヤリとほくそ笑むアルトに不吉なものを感じたバイエルラインだったが、今更何かを言っても始まらないと諦める事にした。諦念漂う師弟である。

「仲が良いのは微笑ましいけど、そろそろ出発しましょうか」

「そうですね」

歩き始めた面々だが、流石に街中で馬を走らせる訳にもいかない。マリツカは馬に乗り、それぞれの馬の口を取ってゆっくりと門へと進んだ。

門から出て、人影も少なくなってきた所で、アルトがマリツカに話しかけた。

「そのドワーフの里までは、馬を使っておよそ3日、それは間違いないですね」

「そうね、明後日の夕刻には着くかしら」

現在は、朝の鐘がなってからおよそ1刻、宿や休憩の時間を含めても30刻ほどあれば着くと言う所か。

「ちょうどよい時間ですね」

「何の話です？」

「訓練にはちょうどよい時間だ。なぜか、最近厳しい訓練をする度にメイリンが怒鳴り込んでくるからな、遠慮していた所もあったのが。少しばかり、本気の訓練と行こう」

「あらあら、大変なお師匠さんね」

「いえ、強くなるためですから」

強がって応えるバイエルラインではあったが、今までの地獄のような訓練メニューが遠慮していたと言われ、今回の訓練には内心恐ろしくしていた。

「とりあえず、水と保存食を全部出せ。あと金もだな」

「はあ？まあ良いですが」

自分の背囊から、保存食と水筒、それから財布を出したバイエルラインは、アルトの差し出した袋にそれを全部入れる。アルト自身も背囊からそれらの品を出し、袋に入れて濡れた紙で封印をした。

それを背囊に仕舞うと、小さな袋を差し出した。手にとって見ると、中には液体が入っている様子だ。

「何ですか？これ」

「塩水に幾つかの成分を混ぜ込んだ液体だ。と言うか、出汁の

薄い塩分大目の野菜スープと言った所か」

「はあ、100パト…は無いくらいですか。これを如何しろと？」

「里に着くまで、俺とお前が摂取して良いのはそれだけだ」

「？」

言っている意味が分からないと、首を傾げるバイエルラインにアルトの宣告が突き刺さる。

「本来は完全断食にしたいんだが、お前は初めてだしな。一応の栄養と水分などは取らせてやる。喜べ」

もはや言うべき事もないと天を仰ぐバイエルラインに、更なる条件が示される。

「道中は宿などには一切泊まらない。マリツカさんには泊まってもらうが、その間俺たちは町のギルドで難しめの依頼をこなす。更に、道中は勿論依頼中であっても、俺はお前に不意に攻撃を加える。手加減はしてやるが、討伐系の依頼中なら死に繋がる事も十分に考えられる、気を付ける」

「いや・・・気を付けるって」

「少量の糧秣で動く訓練と、不眠不休で動く訓練、更に戦闘訓練を同時に行う。無駄な力を使わないように留意しろ、出来なかつたら死ぬぞ」

流石に顔を引き攣らせながら、横で聞いていたマリツカがバイエル

ラインに言う。

「遺言があれば聞いて置いてあげるわよ」

「止めて下さい、縁起でもない」

「では、始めよう。マリツカさんは先行して走って行ってください。その後を俺たちは追います」

「分かったわ」

マリツカの乗る馬が走り出すと、バイエルラインは背後から強烈な殺気を感じた。

振り返ると、今にも自分を殺そうとする気配をアルトが発している。

「ついでだ、強烈な殺気や悪意に萎縮しないで動く訓練も同時に行こう」

前を向き、目じりに涙を煌めかせながら、バイエルラインは疾走した。

猛獣から逃げる小動物の気分と言つのを嫌ほど味わい、まさしく逃走と言つ言葉が正しい疾走だった。

「涙なんぞで、水分を浪費するな馬鹿弟子が！」

「すみません！」

バイエルラインの左右に、微妙に的をずらして石が飛ぶ。気配に踊らされ、避けると逆に当る位置と言う微妙な位置を飛んでいく。

「相手からの攻撃をよけるのは勿論、遠方から攻撃されぬように常に不規則に動け」

「はい！」

いつの間にか右斜め前方に移動していたアルトから拳が突き出される。何とか急速に方向を変え、更に激しく体をねじって避ける。

「避ける時は次の動きに移る事を考えて避ける！」

瞬前まで、バイエルラインの顔があつた空間をアルトの蹴りが薙ぐ。もはや返事をする余裕も無く地面に転がり、その勢いを利用して立ち上がる。そのまま駆け出すと、そこを狙って投石が来る。

「不規則な動きと言つたろうが、何を馬鹿正直に動いていやがる。天から自分の動きを俯瞰的に観察する様な感覚を持って」

「はい！」

「観の目鋭く、見の目弱く。一点のみに集中するな。全体に集中を配るんじゃない、全体を大きな一つとして捉えろ」

前方から、アルトが何かを振りかぶる動作をしたので、投石かと思いがグレイブで弾こうとしたが、投石ではなく砂を投げる目潰しだった。

「常に騙される事を意識しろ。攻撃の形態は常に変化する、相手の

動きを読んだと過信したら、そこを逆手に取られるぞ」

瞬間目を瞑った後目を開けると、目の前には2本の指があった。固まるバイエルラインに、アルトが脚払いを掛ける。

「気配が読めないのなら視界を有効に活用しろ、目潰しに関しても、対処法は幾らでもある。視界か気配のどちらかは維持していないとな」

アルトが背後を指差す。

「それから、目標物と離れすぎだ。俺が少しずつ進行方向をずらし誘導していたのが分かったか？ 相手や見方との位置把握は、集団戦においての大前提だ」

見れば、マリツカが進んでいる街道からはかなり距離が開いている。既に姿も見えてはいない。

「これ以上離れると、俺も感知できん。一旦は全力で追いつくぞ」

「はい！」

「息が荒くなっているな。息を整えたら、少しだけ水分を補給しておけ。少量をこまめに取った方が良く、一度にとっても汗として流れるぞ」

馬に追いつくように走りながら息を整えろと言うのは、一体どんな基準でものを言っているのだろうか、師匠と自分の力量の差にバイエルラインはため息をこぼす。

「如何した？」

「いえ、精進が足りないと思ひまして」

そう言うと、アルトは笑って応えた。

「そんなものは俺だって足らんさ。もっともっと強くならなくてはな」

「そうですね、もっと、もっと強く」

漸く姿が見えたマリツカの向こうには、今日宿泊する予定の町が見えた。

宿に泊まるのは一人だが。

淑女の随行（後書き）

1パトは10グラムほどです。

アルトが渡した袋の中身はおよそ750ccくらいですね。

読んでいただきありがとうございます。

最近なぜかランキングにのってしまって、非常に驚いているんですが・・・

の前とのった後のユニーク件数の差に驚愕しました。

私もそうですが、これだけ多くの作品の中から何かを探すのは大変なので仕方が無いのですが、それにしてもすごい差ですね。

40とか50位でもこれですから、本当の上位の方は、どの位の差ができたのでしょうか？

それとも上位の方は最初からすごいのか？

ちよつと興味があります。

乱学者（前書き）

PCがお亡くなりになってしまったため、更新が遅れました。
この土日は多めに更新出来ればと思います。

乱学者

「依頼が無い？」

ギルドの受付を兼ねている酒場で、アルトは首をひねった。

「いや、B以上の依頼は、と言う事だがね。C級以下ならあるが、推薦付きのB級に振れる様な依頼は無いんだ」

「何で、また。いや、聞いていた限りでしかないんだが、失礼になるかもしれないが支部すらない町などでは、上位の冒険者が少ない事もあって、B級以上の依頼は長期に亘って残る事が多いと聞いていたんだ」

現在いる町、オーザムと言う宿場町と言うにはやや寂れた町だが、ここにはギルドの支部は無い。人数が少ない町などでは、ギルドから認可を受けた宿屋や酒場、もしくは町長の家などが代理にギルドの依頼を受けたりしている。

村のレベルになるとそれすらも無いが、街道沿いの町ならば、大抵は支部か兼業のギルド依頼受付所がある。そして、そう行った所ではある一定以上の依頼は消化されにくい。

「まあ、普段はそうなんだがな。この間、1週間ほど前に通りがかった冒険者が、一気に終わらせていったのさ。おかげで今は空いている状態だな」

「そうか、それならば良いんだ」

「ああ、悪かったな」

「いや、心配事が無いなら何よりだ」

「ああ、また寄ってくれ。そのときには多分溜まっているから」

やや自嘲的な酒場の親父の言葉を背中であいて、アルトは酒場を出る。

「予定が崩れたな」

「如何します？」

「適当に狩るか？」

そう言われ、バイエルラインも少し考えたが、結局首を横に振った。

「幾らなんでも、D級以下なら訓練になりません。C級以上がこの辺りにいる可能性は低いですしね」

「それもそうか」

「如何します？C級が居る可能性に懸けてみますか？」

顎に手を当て考えるアルトだったが、良い考えは浮かばない。希望としては、盗賊団の殲滅などがよかったのだが、まさか何も無いとは予想もしていなかった。

そうこうしていると、横のほうでパチパチと言う音が聞こえる。

「何だこの音？」

「ああ、あそこの子供達ですよ。色火です」

横を見ると、焚き火に砂をかけている子供たちが居た。かけられた砂は、火に当たるとパチパチと音を立てながらピンク色の火花を散らしている。

「何種類があるんですが、おがくずか何か粉を混ぜて置いた物だそうです。燃えると綺麗な色を出すので、暗くなると子供が遊んだりするんですよ。俺も良く、色街から拾ってきて遊んでました」

「色街？」

「何でか分かりませんが、色街では良く燃やされていますよ。いっぱいあるので所々に落ちてるんですよ」

ちなみに色街で燃やされている理由は、ピンク色の発色が艶めいているので、客引きなどのために大店が利用しているからだ。

「ん？…ピンク色の炎色反応」

何かに思い付いたかのように考え込む、少し半眼になり、遠くを見つめるように思考を探る。

「後は、紫とか緑とか、濃い黄色なんかもあります」

「ピンクや紫の炎色反応…硝石！あれは硝石か」

「なんです？それ」

「どう言えば良いのか…簡単に兵器に転用できる物の主材料とでも言えば良いかな。言ってしまうえば、爆発の呪式を知らない者でも似たような効果を出せる物の材料の一つだ」

「それって凄いいじゃないですか」

硝石・硝酸カリウムは言わずと知れた黒色火薬の材料の一つだ。殆どの配合の黒色火薬で全体の7割から8割を占める主材料と行って良い。黒色火薬は、多少の差異はあれ硝石と硫黄、そして木炭の混合物である。

「あそこの子供達に話を聞いて見るか」

「そんなことしなくても、売ってるのはあそこですよ」

通りの少し先を見ると、一人の男が道端に座っていた。

青年は知っていた。自身が決して無能ではないと知っていた。しかし、有能とは思っていなかった。

彼は王都の学院に通っていた、小領とは言え貴族の後ろ盾があり、学ぶ機会が与えられた。しかし、彼の成績は低く、更には地方で行われた学士試験にも落第した事で、卒業を前にして支援を打ち切られた。

試験に落ち、貴族から見放されたとは言え、途中まで学院に通っていた男は王都で職につくことはできた。全体的に教育を受けた人間

は不足している、中退とは言え、引く手は数多有った。

しかし、仕事を投げ出し個人的な趣味の文章ばかり書いていた彼は、早々に退職を余儀なくされた。と言うよりも、首を切られたと言った方がよい。そう言った事を幾度か繰り返し、王都での職が絶望的になった彼は、適当に燐棒^{マッチ}売りと色火売りをして日銭を稼ぎながら生活していた。

その日も、子供達に色火を売った後、道端に燐棒を並べて軒下で文章を書いていた。

「色火の事を聞きに来たつもりだったが…変わった事をしているな」

「燐棒も売っていますが、色火も置いていますよ」

客の話を見殺して、ペンを走らせる彼に、アルトも見殺して話を続ける。

「何を書いているんだ」

「10本纏めて買われますと1本おまけしますよ」

勝手に後ろに回りこみ、男の書いている文章を読む。

「言語学…いや、こちらは料理の方法だな」

「こっちは地理についてですね。あとこっちはオムツの上手な洗濯方法です」

「これは軍棋の手についてか？あと占いの方法」

「きのこの栽培方法。石臼に向いた石の産出場所。子供の髪を使つた筆」

「地方による屋根の作り方の違い。馬の調教方法。穢れ物から作る特産品」

「槍の穂先の作り方。上手なジャムの保存法」

「何者だこいつ」

「脈絡も節操もありませんね」

勝手に摘んである文章の束を読んだ2人は、そのあまりにも多岐に亘る文章に呆れた顔を見せた。

「お前、推薦してやるから王城で働かないか？」

「働きます」

「あ、直ぐ応えるんですね」

唐突に話しかけたアルトもアルトだが、それに即応する男も男である。

アルトは、自分が持っていた紙に名前と紹介文を書き、男に城門で見せるように言つと紙を渡した。

男も特に言う事も無い様で、その紙を手にとると店じまいをして歩き去っていった。どうやら即座に王都へ向かう様子だ。

歩き去る男を見てアルトが呟いた。

「そつういえば名前も聞いていないな」

「今さらですね」

その後は、朝日が昇るまで、アルトのしごきに悲鳴を上げるバイエルラインの声が町にまで聞こえていた。

途中で声を聞いた自警の兵が様子を伺いに来たりもしたが、それ以外はおおむね変化無くバイエルラインの訓練は続いた。

乱学者（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想お待ちしています。

誤字脱字などありましたら、お手数ですがお教え願えれば嬉しいです。

今後もよろしく願います。

そそり立つ岩壁

「見えたわよ」

先に行くマリツカが声をかけるので、その視線の先を見ると、不思議な光景が広がっていた。

「しかし、変わった地形だな」

「まあ、幾つか理由があつてね」

広い広い平原に、いきなり急角度の山がそびえる。いや、山と言うよりは巨大で鋭い頂を持った岩塊、それが平地の真ん中に鎮座している。

更に遠くには同じような山並みもあるが、明らかに仲間はずれのように、山の頂だけを平地に移動させたような、違和感を覚える風景が広がっていた。

「思っていたよりも、小さいんだな」

「そうねえ、ドワーフの数自体も少ないからね、あんなものよ」

「そうなのか、鍛冶をするには鉱石なども必要だと思うが…それもあそこで採れると言う事ですかね？」

「まあ、その辺りも行ってみればよく分かるわよ。ちょっとしたお楽しみって所ね」

「そうしますか」

「それにしても、結局バイエルラインちゃんは保たなかったわね」

オーザムの町で依頼は取れなかったが、その次に寄った村でも依頼らしき物は無かった。やはり、先に通った人間が厄介事を片付けて行ったらしい。

その結果、直接のアルトの訓練を休み無く受けたバイエルラインは、今朝完全な限界を迎えた。今は、マリツカの荷物と共に馬に掛けられた状態になっている。

「よくもった方です。元から無理だとは思っていました」

「あら？そうだったの」

「ええ、よくやっています。俺などよりよほど才能がありますね。楽しみですよ」

「うふふ、いいお師匠さんね」

アルトは、やや気恥ずかしげに目をそらすと足を止めた。

「あら？どじつしたの」

「少し時間をください」

「ええ、良いわよ」

アルトはその場に座り込むと、瞬時に寝息を立て始めた。少し戸惑

ったマリツカだったが、馬から下りて休憩をしようとする用意を始めた。固形燃料と薬缶で湯を沸かし始める。

しかし、その用意も終わらぬ内にアルトは目を覚ました。

「お待たせしました」

「あら？もう良いの」

「ええ、少なくとも集中力は回復しますしね」

「それじゃあ、お茶だけでも飲む？もう入れ始めているから」

「そうですね、頂きましょう」

2人はお茶を飲むと、出発しようとした。僅かながら残っていたお湯を、マリツカが捨てようとする、アルトが呼び止めた。

「ああ、それちょっとください」

言われるままにアルトに薬缶を渡すと、寝ているバイエルラインにその湯は注がれた。

「起きる。目的地までは直ぐだぞ」

熱湯にのた打ち回るバイエルラインを見て、マリツカは呟いた。

「いいお師匠？」

「顔だけでも拭いておけ、ついでに水分も補給しておけよ。非常食も適当に腹に入れておけ」

バイエルラインに手ぬぐいを投げてよこすと、アルトも水分と糖分の補給を終わらせる。既に、お茶を飲み幾分か的水分補給は済んでいるので、水飴を卵膜で覆った物を食べ、残っていたスープを飲み干す。

水筒の水で顔を洗い、軽く刀を見ると、アルトは歩き出した。

「あそこまでなら、後四半刻。さっさと行きますか」

「そうですね」

「バイエルラインちゃん、動じないのね。慣れてるの？」

「ちゃん付けは止めてください。師匠になるべく心は平静に保つようにと言われていますので」

「そう、それは良い事よね。ただ、まあその動揺を与えているのもその師匠だけど」

「試練だと思っています」

「あらあら、まるで惚気ね」

「俺が好きなのは女性ですが？」

「師弟揃って冗談は通じないのね……」

少なくともアルト本人は、軽口を良く叩いている自覚があるのだが、それが他人に伝わりにくいのは、本人の自覚とは別問題である。

「天然の要塞ですか」

てつきり山の周りにあると思っていたドワーフの里は、その岩の中にある様だ。岩肌には洞窟が開いており、中で曲がっている様で、その先は見えていない。しかし、奥からの風の流れがあると言う事は、奥が開いているか、どこかに抜けていると言う事だろう。

「損な物騒な物じゃないわよ。入里制限はあるけどね」

「制限？」

「1回に5人まで。それ以上は入れないし、入れないわ」

「なにやら面倒な事ですか？」

「まあ、そのあたりも説明してあげるわ。でも、まずはいらっしやいね。ドワーフの里へ」

洞窟に入り、2つ角を曲がると中は大きく吹き抜けた空間が広がっていた。

そそり立つ岩壁（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想をお待ちしています。

紅金

「周囲を完全に囲まれた岩の壁。固い岩盤を通る、先の見えない洞窟には仕掛け。周囲から見えにくく、一方的に攻撃を加えることのできる監視台。そして、中に入った時に感じる違和感。固すぎるほどの守りだな」

洞窟を抜け中に入ってしまったえば、火山口にも似た巨大なすり鉢状の空間には日が差し、のどかな村の風景が広がっている。差異と言えば、所々から上がる煙が煮炊きの煙ではなく鍛冶の煙で、そこらを歩き回っているのが、やや背の低いドワーフ達と言うだけだ。

しかし、見る者が見れば堅牢鉄壁の要塞にもなる空間。それがドワーフの里だった。

「あんまり言いたくは無いんだけどね、過去、私達ドワーフは他の種族から攻撃を受けていた時期があったの。現在はそう言った事も少ないんだけど、もはや本能の領域なのかしらね。自衛意識が高いのよ」

「別にこちらも攻撃を仕掛けに来たわけではないからな。ただ単純に感心してただけだ。しかし、守るには理想的と言っても良いんじゃないだろうか。特に少人数で守るなら、ここに勝る環境は無いと言っても良いだろうな」

「褒めて貰っているって事かしら？」

「ああ、素晴らしい対策が出来る土地だ」

敵意さえ向けられていなければ安心を覚えるのだろうか、そう内心では思ったがそれを口に上げたりはしない。アルトは、周囲からの狙撃を避けるように、動きに緩急をつけ、馬の体格を利用し死角を作る様に歩いていった。

直接的な殺意ではないが、圧迫感を覚えるような敵意がまとわり付いてくる。安全確保をしておいて損は無いだろう、過去感じた事のない違和感のようなものも感じる。その違和感は、周辺環境から来る感覚だけではないはずだ、何らか別の要因がある。それが何かまでは分からないが。

「用心は必要さ。砦にしても里にしても、人にしても」

「ベルゲインさん。お客様よ」

「マルゼフか、久しぶりだな」

炎火に向かい、全身を黒く焦がしたドワーフの男は、振り向きもせずに応えた。腕には無数の火傷の痕が見え、濃い髭の下にも幾つか深い傷が見える。長年鍛冶に携わってきた者の証明、そして誇りだろう。

「マリツカよ、マリツカ」

「ふん！まあ良い。客なんぞ寄越した所で無駄と分かっているだろうに。つまらん事にしかならんぞ、お互いにな」

「アルトと言う、この刀を見てくれ」

アルトが腰から刀を抜き、目の前に突き出す。そこに眼を向けた瞬間、ベルゲインと呼ばれた男の顔色が変わった。

「これは……刃色が出ているだと。単純な鋼か、単純な鋼でここま
で、ここまで」

「水入り刃金、鉄をひたすら叩き鍛えて精錬した物。恐らく、鉄を
使った武器では最高峰の系統だろう。形式としては、だがな」

「そうだろうな、作った奴の心は乱れてやがる。この鋼と武器とし
ての完成度、そして作った奴の技量は大したものだ。しかし、悩み
ながらでは……刀と言ったか、駄作になっている」

アルトは、刀の柄を外し茎なかしを見せる。

「ここに作り手の名前が彫ってある。銘を切ると言うが、ここに入
っている銘は製作者本人の物ではない」

「偽物」

「そうだ、名工と呼ばれた男の名前が彫ってある。しかし、明らかに作り手は違うそうだ。金の為か、もしくは他に理由が在ったのか、それは分かりかねる。しかし、悩んでいたと言うのならそうなんだ
ろうな」

彫られた銘は山浦真雄、新々刀時代の名工。新々刀にも拘らず、古
刀の様な趣を持ち、実戦本意の荒刀あらいがたな。偽作としてこれを作った作者
も、目指していた物はそこだろう。既に実戦での使用をこなし、十
分な強度と切れ味を示している。しかし偽物は偽物。

「だが、もう使えない。これほどの地金を持ち、硬軟取り合わせた素材から作られた物であろうと、芯が折れては」

「そうだな、刃切れは完全に中まで通っている。実践には耐えんな」

「そうだ、だから名工の腕を持つと言うドワーフの鍛冶師に武器を作ってもらいたい」

「これと同じ物をか？」

アルトはゆっくりと首を振る。

「いや、これはあくまでも例として持ってきただけだ。似た様な形で使える物が欲しいが、同じ物を求めるわけではない」

アルトは柄を付け直し、刀を腰に戻した。刀が鞘に戻る音が響き、暫くは静寂が流れた。

「無理だな」

ベルゲインは、一言で応えた。その答えはアルトも予測していた様だ。同様は見えない。

「理由を聞いても良いか」

ベルゲインはアルトの顔を指差す。

「お前の両の耳につけている耳飾。それは意思疎通を可能にする物だ、それは無論呪式による物だが、何故そんなことが出来ると思う

「？」

「皆目見当も付かん。ドワーフの手による物との説明は受けた、俺自身も呪式は学んだ。しかし、それがどうやって行われているかは、分からないままで」

ベルゲインは立ち上がり、釜の火を落ち着かせる。手を軽く叩き合わせて、手袋を外すと腰を伸ばした。

「説明してやろう、茶でも飲むか」

釜の横に薬缶を置くと、ベルゲインはアルト達に座るように促した。

「そうだな、如何説明すれば良いのか。その右耳に付けている物と、左耳に付けている物、それは性能がかなり違うな」

アルトは右耳に着けた飾りに触れる、それはバドウィックさんから譲り受けた物だ。そして、左耳に着けたやや赤みの深い飾りに触れる。こちらは、城に来てからフレッドから礼品代わりに貰った物だ。会話は勿論、言語の理解が読み書きにも及ぶ高級品、かつて国家でも宝とされた、速読をも可能にする逸品。

「ああ、おかげで色々な面で助かっている。こちらを貰ってからは、実に便利に活用させてもらっている」

「その2つの品の性能差、それは何処から来ると思う」

「作った者の技量の差ですか？呪式の刻印には、それを彫る者によって差が出来ると聞いていますが」

バイエルラインが答える。彼の感覚でいえば、武器などと同じように名工の作る物が高性能なのは当然の感覚だ。

「無論それもある。しかし、刻まれている刻印は、つまり呪式円は基本的には同じ物だ。ならば、何故そんなに差が出来ると思っね？」

「つまり…腕以外の所、材質か？」

アルトの指が、左耳の飾りに触れる。明らかに装飾も違い、全体としての緻密さや均整に大きな差があるのは判る。それ以上に、素の材質に違いがあるのも一目でわかる。

「そうだ、その赤み。それこそが、神が我々に与えたもつた金属だ。紅神アルケオスが与え伝えた金属、アルケオニムと言う」

「アルケオニム」

「そうだ、呪式との高い親和性を持ち、概念の域にまで高める事が出来る唯一の金属。そして、非常に高い硬度、弾性、衝撃耐性を持ち、武器として利用すれば非常に高い機能を持つ。お前の望むような武器を、お前さんが望む様な性能が欲しいのならば、必要不可欠」

「そのわりには、簡単に貰えたものだな。素材として優秀ならば、再利用も可能ではないのか？」

右耳に着けているバドウィックから貰った飾りに触れる。確かに、王城でフレッドから貰った物よりも薄くではあるが、こちらにも赤みが差している。

「一度何等かの形にしてしまうと再利用ができないと言つのも特性だからな。1回きりの勝負だ、そして、中に含まれる量が増えれば増えるほど、加工の難しさは加速度的に上がる。そこまで赤い物は、ほぼ純品と言つても良い」

「つまり、原石なり何なり、素になる物を持ってこなければならぬと言つ事か」

「いや、原石はここで採れる。と言つかな、ここでしか採れん」

「それじゃあ話は早いじゃないですか。ここで採れるのならば、作つていただければ」

バイエルラインは嬉しそうにそう言ったが、それを遮るようにベルゲインの声が掛かる。

「さつき無理だと言つただろう。無理だ」

「理由は？」

「確かに、原石はここにある。しかし、その採取は出来ない。そう言つ事だ」

「何故だ？」

「番人がいるのさ。押しかけ番人がな」

「番人……」

ベルゲインは深く頷くと、重々しく答えた。

「近づけば……殺される」

紅金（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想、誤字脱字の報告などなんでもお待ちしています。

双剣の

「殺される…か。殺される。それは穏やかな話じゃないな」

「諦める事を勧めよう。武器を、まあ剣等を作るならば、最低でも100パトは要る。しかし、今、村に残っている量をかき集めたとしても、到底必要量には足りん。大人しく諦める方が無難だな」

「強いのか」

アルトの目が細められる。決して笑みではない、興奮でもない、事実を確かめ嘔み締める、そんな目だ。同時に、何かしら思うところもあつたのだろうか、顔を隠すように手で覆い、天井へ顔を向ける。

「いや、強いのは間違い無い訳だ」

「そうだな、有り体に言つて化け物だ」

「ここに宿はあるのか？休息を取りたい」

アルトはマリツカに尋ねたが、バイエルラインはそれを不思議に思つた。

「師匠、直ぐには行かないんですか？」

「ああ、ここに居ても感じる事が出来ない相手、それに、違和感もある。少しでも危険は避けたい」

「そうですか、感じる事ができないと言うのは…」

「恐らく2人いる。1人はここからでも十分把握している。しかし、横にいるはずの存在がぼつかりと消えている様に、な。何も感じないのではない、いつぞやの奴の様に気配が無いわけではない。気配が歪められ、感知できなくなっている。正直、少し怖いな」

「師匠が……怖い」

震えるバイエルラインにアルトは笑って答える。

「恐怖を忘れたら強くはなれんさ。それに、俺はお前との訓練でも、仮に弱い相手と戦うときであっても、常に恐怖を感じる。問題はそれに囚われるかどうか、多分それだけなんだろうな。それに」

「それに？」

「良い訓練だ」

ベルゲインは、アルトの様子を見ると、ため息を吐きながら言った。

「そこまで分かるのならば、なぜ死に急ぐ。今日は家に泊まってもかまわん。出来れば諦めてくれ」

「世話にはなる。だが、諦めるかどうかはこちらの問題だ」

「そうだな、俺たちも困っている。倒してくれるのならばそれに越したことはない」

そう言うベルゲインの顔は、重苦しく沈んでいる。それは、アルトが死に行くと思っているのか、それとも他に何か思いがあるのか、

それは分からない。

ともあれ、アルトとバイエルラインはベルゲインの家に泊まる事になる。マリツカは友人の家に泊まるとの事で、翌朝合流する事にして、今日の所は分かれた。

「天気が悪いですね」

バイエルラインが空を見上げて言う。雨が降っている訳ではないが、重く立ち込めた雲は湿気をはらみ、頭上を覆っている。

「ああ、しかしこの位の方が動きやすいな。まあ、その辺りは好き好きだとは思うが」

「この間、宰相は雨が近いと関節が痛いって言ってましたよ」

「ああ、爺さんだしな」

「年取るとそうなるんですかね？」

「さあなあ」

これから戦いに行こうかと言う時に、どうしても良い話をしている二人にベルゲインは呆れ気味だ。

「お前らは、緊張感がないな」

「緊張して勝てるのならば緊張するが、大体は逆効果だからな」

「師匠が負けるとは信じれませんから」

「良い師弟なのよね。まあ、色々と如何かと思う所も見たけれど」

マリツカは、ベルゲインの肩を叩き、案内するように促す。草が踏み均された細い道を進んでいく一行の足取りは、今から始まるであろう戦闘とは裏腹に軽い。

「しかし、鉱石を運び出すと言うには道が整備されていないな」

「そうですね。単なる獣道に近いですね」

「まあ、色々と理由があんのさ。それから、もう直ぐだぞ」

木々を抜けると、そこには僅かな開けた空間。真直ぐ立った錐の様な岩と、そこから流れる紅い滝。岩の横に立つ若い男と、白い髭を生やし額から後頭部へ大きく火傷の痕がある老人。

その老人が口を開く。

「まあ、性懲りも無く来やがったか。さっさと帰れ、この孺子が」

「口が悪いな爺、こつちにもやる事がある。年寄りの冷や水はやめて、そこを退け。この禿げ火傷が」

お互いに、言葉の応酬を繰り返した後、2人は言葉を発しない。ただピリピリとした空気が辺りに張り詰め、他の面々の顔には汗が浮かび、緊張の極地にある。

「ぶ」

「ふふ」

「ふはっはははははははははははははははははあっ」

突然老人が笑い出し、その場の空気が一気に変わる。

「驚いたぞ孺子じゆんし、異能を持たずして、そこまで練り上げるか。お前の歳でお前の体で、良くぞここまで練り上げた」

「爺、興奮して勝手に発作で死んでくれるのか？一応推奨しておいてやる」

「ふわっはっは。孺子じゆんし、お前の様な面白い奴がいる限り逝って堪るか。退屈していたが、面白い、実に良い、これだから人生は堪らん」

「いい加減、生に飽きる爺」

アルトの手から棒手裏剣が飛び、3つが次々と投射され、老人がそれを背から出した短剣で弾く。両の手に握られた短剣は、二重ふたえの螺旋を描いてアルトに襲い掛かる。

上下左右から伸びる双撃を、紙一重でかわして行く。目へと伸びてくる剣戟を避ける。髪が切れ、こめかみから血が流れる。

しかし同時に放たれたアルトの蹴りは、老人の腰をかすめ衝撃を与える。

2人は同時に後ろに飛び、間を保つ。あまりにも早い攻撃の応酬に、周囲の面々は動く事も出来ずにただ息を飲む。

「孺子、何故剣を抜かん。そのまま死ぬか？」

「爺に使うには勿体無くてな。爺こそ、何故あの世へ行かん。何時まで生きる？」

「けっ！減らず口を叩きやがって。死ぬ」

瞬時に間をつめた老人は、地面を蹴ってアルトへ迫る。その時、アルトは腰を深く落とすと、老人に背を向けた。

「何のつもりだ孺子、本気で死ぬか！」

上から襲い掛かる老人の脇が開いた時、捻り力を溜められたアルトの体は一気に元へと撥ね戻り、抜刀の勢いを増して老人へと叩き込む。

「がっ！」

辛くも、短剣を立てて攻撃を受け、その勢いを利用して老人は後方へと飛ぶ。地に降り立った老人の手から、短剣の刃だけが落ちる。

「切りやがったか。やるな孺子」

アルトの攻撃は、老人の体へは届かなかったが、老人の短剣の片方を半ばから切り折っていた。しかし、それはアルトの刀にも重篤な被害を与える。いや、既に与えていた傷を、更に大きく広げる事になる。

「爺」

「何だ孺子」

「ちよつと待て」

「ああん？」

アルトは刀を見下ろすと、刀の峰に手刀を叩き込んだ。齒切れの場所に正確に叩き込まれた一撃は、刀を半ばから折り取った。

「師匠！何を」

「見ているバイエルライン、現状の俺の出来る限りって奴を見せてやる」

「ほお。おもしれえじゃねえか」

「受けるか、爺」

「良いだろう、来いよ孺子」

アルトは、折れて短くなった刀を右手に持つと、腕をだらりと下げた。

「さて、死ぬか」

アルトの言葉の死は、恐らく自らに向いていた。

双剣の（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想等お待ちしております。

央（ナカバ）

両肩はだらりと下がり、腕は重力に惹かれ下へと垂れる。

腰に乗る重力は、より深くたわめられた背骨に溜まり、背骨は更に強くS字に曲がる。

体中から力が抜け、脱力と揺らぎ、そして大きな余裕を作り出す。

「隙だらけ。隙だらけだぞ、孺子^{こども}」

「ああ、だろうな」

ゆらりゆらりと揺れ始めたアルトへ、老人から声が飛ぶ。

「未完成の不完全、そんなことは分かっている。だからこそ試してやる」

「命がけの実験かよ。けっ！肝の太い野郎だ」

「悪いか」

声からも力が抜けたアルトの言葉に、老人は眉を上げて獰猛な笑みを浮かべる。

「悪かねえ、ああ、悪かねえさ。それにな」

「何だ」

「そう言うのは、好みだ。個人的にな」

「そうか、俺は嫌いだ」

刀を握る手が、更に大きく回り始める。ゆったりと、ゆっくりと円の動きを大きくしていく。

「っち。いけすかねえ孺子だ」

老人は深く構えると、背中からもう一本短剣を出し、再び両手に構えた。

「今、お前さんをやっちまう事は可能かも知れねえ。だが、それは粹じゃねえ。まったく持つて無粹って奴だ。それじゃあ、面白みがねえ」

緊迫した様な、どこか箍が外れた様な、相反する空気の満ちる中、バイエルラインは目を見開いて見つめている。瞬きも許さないほど、その両眼は戦いを見る事に全ての力を注いでいる。

そして思う。

老人は、今のアルトに攻撃を仕掛けることが出来ると言った。今のアルトを殺める事が出来ると言った。しかし、それは彼らには想像もつかない事だ、老人の脇に立っていた青年とバイエルラインの2人には、それは不可能だと己の声が内から叫んでいた。

常に揺れる視点と体、全ての、周囲の空間すら揺らめかせる様なアルトの動きは、距離感は勿論、方向感覚も、そして攻撃の意志すら

も惑わせる。幻惑、それがアルトを守っている。隙などは微塵も見えない、そんな物が在る等とは理解できない、そう2人は叫びたかった。

その動きは虚気楼。在ると思えば無く、無いかと思えば存在する。遠近の揺らぎ、それを発生させる身体の揺れ。

アルトの足元から発生した揺れが、大きな揺らぎとなって胴体を通り、刀を持つ腕へと伸びる。波が寄せて返す度に大きさを増すように、少し、また少しと力は腕へと蓄積されていく。大きな力が体を流れ巡る。

「行くぞ、爺」

「来い！ 孺子」

アルトが足を一步踏み出した瞬間。

腕が伸び、鞭の様に空間を侵食した。

老人の周囲の空間そのものを飲み込む様に、百鞭が刀と言う刃と腕と言う重さを持って空間を食い荒らす。

波打つ腕が、刃という破壊力を伴って老人に襲い掛かる。

その時、老人の両腕が、甲高い音を立てて霞む。

蜂の羽音にも似た振動音と、金属同士のぶつかり合う音が響く。

一瞬の攻防が終わると、アルトは手から刀を離して腕を押さえ、老人は体中に傷を作り、深く息を吐く。

超人や達人と言われる者だけが生息する世界の出来事は終わり、そこには、満身創痍の老人と、同じく痛む体を抑える青年だけが残された。

「師匠！」

バイエルラインが駆寄り、倒れかけるアルトに肩を貸す。老人にも脇にいた青年が駆寄り怪我の様子を見る。お互いに、死ぬ心配はないだろうが、決して軽症と言える状態ではない様だ。

「こりゃあ、俺の負けだなあ、なあ、孺子」

老人が手に持つ剣に目を落とすと、両手の剣は乾いた音を立てて碎け散った。

「爺が、適当に花でも持たせる気か」

「馬鹿孺子が、武器を2度も壊された。これで負けを認めねえのは、俺の矜持が許さねえ」

「俺だって武器を壊している。分けにしておいてやるよ。糞頑固爺」

そう言うと、アルトは身を翻して里へと帰り始めた。バイエルラインが再び肩を貸そうとするが、アルトは断って歩く。

マリツカとベルゲインも後を追ひ、その場には老人と青年だけが残

された。

「っけ！花を持たせたのはどっちだ孺子」

老人は、吐き捨てると同時にその場に崩れ落ちる。とっさに青年が抱き起こすが、荒い息を吐き、体は痙攣を起こしたのか震えている。いまだ手に握られていた剣の柄を落とすと、震える手を見てため息をつく。

「あの時間で、もう音を上げやがる。老いかよ…やっとな理を成したかと思えば、その時には、体が付いて来ねえ」

「ですが！ですが何時もでしたら、2刻でも3刻でもあしらっているではありませんか。何故、これほどまでに」

自分を、何時までも化け物じみた体力と剣技で押さえ込む老人が、これほどまでの衰弱を見せた事に青年は驚愕する。それを成したのが、自分とさほど歳も変わらぬ青年だと言つのが信じられなかった。

「それよ。その事よ。あの孺子、あの歳でどうやってあそこまで練り上げた。体を作り上げる前に技を練り上げる、一体どんな絡繰だ」
未だ震えの収まらぬ、老人の両眼が笑みに引き絞られる。獲物を見つけた猛獣、生け贄を決る瞬間の猛禽、その笑みから連想されるのは、正しくそれだ。

「おもしれえ、おもしれえぞ孺子。手前にゃあ、もう一度相手をしてもらう。こんなにおもしれえのは久しぶりだぜ」

咳き込みながらも高笑いを上げる老人に、青年は恐怖すら覚える。同時に、そこまでこの老人の心を動かしたアルトに畏れと憧れ、そして嫉妬を抱いた。

「よお、ケントワールド。お前もその歳にしては中々だ、しかしな、あれに会っちゃあ齒も立たんな」

からかうような老人に、青年、ケントワールドは一瞬顔を顰めたが、背中に負った巨大な剣に目をやって答えた。

「徒歩ならば、確かにそうでしょう。しかし、騎馬の戦においてなら」

震えながらもケントワールドは応える。それが痩せ我慢なのか、もしくは本心なのか。しかし、言うなれば彼の矜持は、彼の誇りはそこに在るのだろう。

「ふんっ。最近の若い奴も血の氣が多いぜ」

老人は楽しそうに笑う。

高らかに笑う。

央（ナカバ）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想等お待ちしています。

誤字脱字の報告なども頂けましたら嬉しいです。

主戦場

さて、旅先でアルト達が武俠小説の主役のような派手な立ち回りを演じている頃、城内軍内を考えて、最も忙しかったのは兵站管理の総責任者、マリーン・オブライエンと、宰相、バルヴェルホーン・リヒテンシュタインだった。

老宰相の忙しさは、その年の人間であれば、普通衰弱して干物のようになりそうな程であったし、隠れた天才マリーンにしても、流石に弱音を上げるほど酷かった。

さて、少しばかり話はそれるかもしれないが説明をしよう。兵站と言う物は、要するに補給であり、移動を含めた人員の管理、衛生、設備や装備の維持管理も含めた総合的な戦時後方管理でもある。近代戦においては非常に多岐に亘り、正しく戦争の主役は兵站と言っても良いほどだが、中世規模の戦場においては、兵站とは物員補給の側面が強い。

中世の戦争に等しいこの世界の戦争では、軍力という物は人員数、つまりは兵力と食料の量にほぼ比例する。兵数が少なければ敗北は必至であり、すきつ腹の軍隊などは悪夢以外の何ものでもない。

青銅器と鉄器の差があるような時代ならともかく、各国装備においてはほとんど差がない。

つまり単純な兵力と食料が大きな勝敗要因になるのだ。

無論のこと、食糧を備蓄し、兵員を募集して数をそろえなくてはならない。同時に、それらをいかに戦場に送るかが大事になってくる。

人員輸送、そして食糧輸送をするためには大量の馬車、飼葉、そして飼育員や御者などの専門家が必要不可欠になる。

元来、馬という物は極端にデリケートな生き物で、酷く弱い。肉体的な損傷を起こしやすく、大量の食料は必要で、牛などのほかの草食動物に比べて胃腸が弱い。つまり、管理と運用に多大な労力を必要とする。

その馬と馬車の関係者を集めるだけでも大変な事だったが、食料の問題はさらに大きかった。

アルトからの進言で、過去殆どの国が使っていた、小麦粉をそのまま練^ほつて、言わば蕎麦掻のような状態にしたものを用意するのは止め、^ほ糲^{しい}を用意する事になった。

アルトの感覚では米であったが、これを小麦で代用し、スープである程度火を通し味をつけた小麦を、天日で乾燥、軽量化した物を軍食に採用した。

実際の使用では、そのままゆでると短時間で味のついた粥の様な状態になる。これは、消化吸収がよく腹も膨れると言う事で、満場の賛成を受けて決定した。

しかし、初めて作るものであり、その生産は思うように伸びなかった。マリーンは、軍だけでは足らず一般の商家へも、この糲の製作を委託した。

ちなみに、この時点では兵員の募集は大々的には行っていない。ただし、各都市で自警団の増員を募集している。各騎士団の下部組織

としての募集ではあるが、戦時には即座に軍に吸収される予定にな
っている。

なぜこんな面倒な事をやっているかと言うと、騎士道精神の煩い国
家間外交において、宣戦布告を前に一方的に兵員を増量するのは後
で追及を受ける場合があることが一つ。いま一つは、かつて結んだ
休戦条約の中で、騎士以外の兵員増強を禁止する条項があったか
らだ。

現在、常時は200人ほどの自警団員は、全都市で1、300人ほ
どにまでなっている。厳密に言えば、これも条約には抵触ギリギリ
の所ではあるが、背に腹は変えられないということで行っている。

直前に動員されただけの兵と、少しでも訓練を受けている兵士では
天と地ほどの差があるからだ。自発的に兵となった彼らは、来る戦
時には主力となる事を期待されている。

忙しくしているマリーンの状況は、このようになっていた。国家
全体のことで忙しいリヒテンシュタインの元には、少しばかり変わ
った客が現れていた。

オーザムでアルトに拾われたあの青年だ。

「ふむ、それで紹介を貰ったと言う事かね」

宰相の言葉に男は頷く。どうにも反応が薄い青年で、リヒテンシュ
タインも少しばかり対応を考えていた。しかしながら、この人の良
い老人は、かえってそれを楽しむように手ずからお茶を淹れていた。

「さて、砂糖は入れるかね？蜜もあるが」

青年は軽く首を横に振ると、両手でカップを持ってゆっくりとそれを飲んだ。

リヒテンシュタインは、基本的に自分の事は自分でやってしまおうと言う考えを持っている。料理もするし、洗濯や掃除なども好んでする、庭の手入れなどにも楽しみを覚えている。

彼は、研究者であることを自認し、むしろそうなるうとしてきた人ではあるが、かつての職等からもわかるように、むしろ教育者の側面が強く、また、それに適している。研究者として、没頭の末に寝食を忘れると言う事もないが、それよりも生徒と語らったり、教育をしている時期のほうが長い。

言ってしまうえば、マメで人の世話を焼きたがるおせっかいな面が大きいと言う事だろう。そして、それを実行に移せる能力を生活面においても持っている。

本来であれば、小国とは言え一国の宰相が自ら客人に茶を淹れるなどありうることはないし、立場上はそれをしないべきだろう。

さて、その非常に稀なお茶を飲んでいる青年に話を戻そう。彼はかつて貴族から見放された事はすでに述べたが、彼自身はそれに対しても頓着していない。というよりも、人間と言う者に対する見方がやや変わっていて、突き放していると言うか、一個の現象としてみている。リヒテンシュタインよりも、よほど研究者であると言えるかもしれないが、この場合も、彼は大して気にも留めずにお茶を飲み干した。

単純にのどが渴いていたからだ。宰相が淹れたとか、目上の者がま

だ飲んでいないとか、そういったことを彼は考えない。貴族から見捨てられた事の一因には、彼がそう言った、貴族からすれば無礼とも取れる態度をとったことも関係しているのだろう。

「さて、君は非常に面白い物を書いているそうだが、それを見させていただけるかな？」

青年が差し出した紙の束に軽く眼を通し、リヒテンシュタインは瞳目した。非常に簡潔に、そして読みやすくまとめられた文章の数々は、そのまま教科書に使いたいほどに纏め上げられている。

これほどの人間がやに埋もれていたのかと驚く反面。良くぞ見つけてくれたと、アルトに感謝の念を覚えた。

「さて、君をわしの秘書官として雇いたいと思うのだが」

まさに大抜擢と言うもので、一挙栄達と言うものであるが、青年は語尾についた「が」に疑問を持った。

軽く首を傾げると、やっと自分の考えと言うか感情らしきものを口にした。

リヒテンシュタインから幾つかの質問を受けている間を含めて、無口と言うわけではないが、希望や感想といったものを、青年は一切発言してこなかった。

首を傾げる姿に、若さ相応の可愛げを発見したりヒテンシュタインは、楽しそうに尋ねた。

「君の名前をまだ聞いておらんよ」

クーデロイと言つその青年は、まだ名乗つてすらいなかつた。

主戦場（後書き）

文体などが少々変わった感じがします。

あと、会話が異様に少ないですね。まあ、こつこつといった形のほうが書き易いんですが。

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想等、常にお待ちしております。誤字や脱字なども指摘していただければ幸いです。

疑念と嘘

ベルゲインの家に帰り着くと、アルトは上着を脱いで上半身裸になる。マリツカが、後ろで顔を隠すふりをしながら指の隙間からばかりと見ているが、今ここにはそれを気にする人間は居ない。

アルトの腕は、肘を中心に赤くなり熱を持っている。そして、所々内出血で紫色になった腕は、少し触れただけで崩れ落ちてしまいうだ。

「師匠、大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっと無理をしたただけだ。大体想像はついていたんだが、まだ不可能だったな」

アルトはそう言うと、ベルゲインが持ってきた水の張ったタライを呪式で冷やし、腕を肩口まで突っ込んだ。氷が浮かぶ冷水に腕を入れたアルトは、一瞬顔を歪めるが、段々と退いて行く熱を心地よさも感じていた。

「あゝ、これ気持ち良いなあ。あの爺のおかげで試せだし、まあ、良かった」

「しかし、師匠。それじゃあ武器が作れないじゃないですか」

心配そうに尋ねるバイエルラインに、アルトは負傷していない方の手を軽く振った。

「心配要らんさ、どうせ自作自演、いや、嫌な客を追い返す演技みたいなものだ。ベルゲインさんはちゃんと作ってくれるさ」

ベルゲインは、椅子に深く腰掛けると煙草に火を点け、紫煙を吐き出した。

「何時、分かった」

「最初に番人と聞いた時から…いや、あなたがあっさりと案内した時、それと、マリツカさんが付いて来た段階でな。大体想像がついた、選定か拒否のための演技かな…と」

「ちよつと違うな。ありゃあ、あの爺の趣味だ。俺たちは基本的に断ってるんだよ、武器製作に関してはな」

ベルゲインは顔を顰め視線をそらす。

「まあ、何らかの理由はあるんだろうがな。如何考えてもおおかしいほどの警戒をしていた、むしろ最初にあんたが蹴りださなかったのが不思議だったんだよ」

ベルゲインは、唾を吐き出す。どうやら、やたらめったらキツイ葉っぱの様だ、辺りに漂う匂いは、バイエルラインが咳き込むほどだ。

「お前ら武芸者なんぞは、手が早いからな。蹴った返しに斬られたら堪ったもんじゃない」

「まあ、それもそうかな」

「しかし、師匠は少なくともあの爺さんと分けました。いや、俺は

師匠の勝ちだとは思いますが。約束通り、武器は作っていただけのことでしょうね」

「バイエルライン、約束はしていない。あくまでも、番人がいるから作れないと言っただけで、そこを突破すれば作ることも、作らないとも言っていない」

「そんな！」

「それが分かっているながら、何故言質を取らなかった。今だって、脅して作らせることだって出来るだろう」

「良い物がか？」

アルトは淡々と訊きながら、腕を曲げ伸ばしている。痛みはあるらしく、動かすたびに顔が細かく歪む。

「そんな気持ちで作ったどうでも良い物ならば、ドワーフに頼むまでも無い、人が作るうがただの鉄で作ろうが」

「お前はドワーフの鍛冶を馬鹿にするのか！手慰みだろうがなんだろうが、人の作る物では比肩すら出来んわ！」

アルトの言葉を遮り、ベルゲインの怒声が飛ぶ。椅子の手摺を叩き付け、手を震わせて立ち上がる。そこへ、更に倍する迫力、いや、比べ物にならない威圧感を持ってアルトの声が返す。

「お前こそ何を馬鹿にしている！職人であれ、戦士であれ、腕に命を懸けるのが本懐。極致を目指すのに、躊躇や悩みが不要とは言わない。しかし、行動を起こさないのは、その矜持と誇りに真っ向か

ら反する行為だ」

アルトは、震えて萎縮するベルゲインの胸倉を掴んで壁に押し付ける。

「一体何に怒りを覚える。馬鹿にしている、ああ、馬鹿にしている。理屈を付けようが何であろうが、お前が自らの職能に叛くのなら、馬鹿にされるのは必然。その何処に怒りを覚える」

激しく詰め寄るアルトは、正しく殺気の塊で、マリツカは勿論、バイエルラインもその殺気に当てられて動けなかった。その殺気は、本来長命なはずのドワーフの寿命さえ削りそのような物理的な攻撃性を持つていた。

「思ってもいねえ事を、良くもまあ言いやがる。孺子も俺もそんな殊勝な人種じゃねえだろうに」

いつの間にか現れた老人は、入り口の壁に寄りかかり、つまらなそうに中を覗いている。

「爺が、恥ずかしそうに外で悩んでいやがったから機会を作ってたんだだろうが、それにまるつきり信じていないわけでもない。勝手に爺と一括りで纏めるな」

殆ど吐き捨てるような形でアルトは言った。彼自身が自覚しているかどうかは別の問題かもしれないが、彼は自身が職能的な戦闘屋であることを、どこかで疎ましく思っている。しかし、同時に自分の技量に誇りも、自信も持っている。そうでなければ、戦場の中で今まで生き残っていない。しかし、その相反する感情は、どこかでアルトを不安定にしている。

自身の能力を扱うと言う事について、それを外的要因に、いわば責任を預けた形で回避しようとするベルゲインと、自分を何処かしら重ねたのかもしれない。

「そりやすまねえな。孺子」

どちらかと言えば、技術屋に近しく、自身の能力に疑問を抱かないこの老人でも、どこか察するところはあつたのだろう。彼は素直に謝辞を述べた。

「それで何の用だ。爺」

アルトは、瞬時に殺気を解くとベルゲインを開放した。途端に呼吸の事を思い出した様に深く息を吸い込み、その場にへたり込む。顔からは血の気が失せ、球のような汗が浮かんでいる。

「爺は優しく扱え、それでも俺より年寄りだぞ」

「爺が言うな」

ドワーフやエルフは通常人間の倍の寿命がある。初老ほどに見えるベルゲインだが、常の人間の歳はとつくに越えているだろう。

「それでは、爺が爺を助けに来たと言う事で良いんだな。あれは軽い冗句だからさっさと帰れ。身体直したら再戦で良いだろう」

「馬鹿やろう、やるんだつたら万全な状態でやらなきゃ意味がねえだろう」

「それは何か？お前が1回死んで復活してからか？何時まで待たせる気だ、爺」

「縁起でもねえな、おい。爺には敬意を払え」

「死んだら砂はかけてやるぞ」

何処まで冗談なのか、または威嚇なのか。周囲の人間は、一体何が始まるのか、戦々恐々としているが2人は、やや気だるげに話を続けている。

「ひ孫が尋ねてくるまでは死なねえよ。孺子に訊いておきたくつてな」

「構わんが、その横で俺を睨んでいるのは何だ？弟子か何か」

老人の横に立つケントワールドは、槍を構えてアルトを睨み続けている。今にも襲い掛かりそうだが、最初は中から感じたあまりにも大きな殺気に意思を反らされ、今は2人の会話で間を外されている。

「馬鹿にするんじゃない。弟子ならもう少し出来る」

「家の弟子は、こんなもんだぞ」

「え？俺で？え？」

いきなり話の中に出されたバイエルラインは、とっさの事に反応も出来ずに混乱する。

「まあ、ボチボチじゃねえか？育ちが良すぎる気はするがな」

「素直で良いだろう」

「しかし、覇気は有っても詰めが甘そうだな」

「そこは俺も気にしているな」

「どうせ、弟子にとって間もねえんだろ。これからって所か」

「そうだな」

突如始まった弟子の品評会話にバイエルラインは緊張するが、アルトは勿論老人の意見も決して否定的ではないと知って安心する。少なくとも、素直とは褒められたので嬉しそうだ。

反面、自分に意識が向いたかと思いきや、一転話がそれたケントワールドは、良い面の皮である。持った槍をカタカタと震わせて、怒りを顔に表している。

「貴、貴公に試合を申し込む！」

「良からう、しかしまずは弟子がお相手する」

槍を突きつけアルトに一騎打ちを挑んだケントワールドの槍前に、アルトがバイエルラインを引きずり込む。

「俺？」

急な出来事に、バイエルラインは混乱のしっばなしだ。

「俺？」

疑念と嘘（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想などありましたら、お願いいたします。
誤字脱字などの報告も、ありましたらお願いいたします。

外蒐？内厭？

アルトが悩んだり、ベルゲインが冷たい汗をかいたり、バイエルラインが戸惑ったりしている頃、1人だけ国外にいる人間がいた。

いや、護衛もついているので、今まで名前が出てきた人間の和かずで言えば3人。

彼女たちは、隣国リヒテンラーデ公国にいる。

ミリアリア・エル・アイゼナツハ、マルイレル・コーデローム、ノンリエッタの3人だ。彼女達は、無論遊びに国外へ来たわけではない、重要な案件があつてこの国にまで来たのだ。

以前も書いた事はあつたが、直接的に教会と国家は関係をしていない。お互いがお互いを尊重しあうと言うの建前をつかつて、距離を取り合っているのだ。

そう言った風に見せかけている。

実際には、権謀術数の嵐の中にあることは否めない。貴族や国家と結託する例は多く、貴族や王家、大商家などの次男や三男が教会に入り、何らかの地位に至る事は少なくない。

もつとも、神の前にある物は全て等しいと言う考えは根幹にある。したがって、年功や人気により、勢力と言う物はあるが、直接的に神の声を聞ける者以外は、階級と言う物は無い。

しかしながら、部署の責任者と教会支部長は居る。

彼らは当然ある程度の権能を持つし、国家から何らかの称号を授与される場合や、貴族としての地位を得る者もいる。それは、教会における立場とは無関係とされて入るが、少なくとも目立つ立場に居る事は利益となるほうが多い。

さて、そういった一般論の中で、リヒテンラーデ公国が如何かと言うと、これは、国家と教会の関係性が薄く、その建前に近い事が知られている。

公王家の家訓とでも言おうか、そもそもが、敬虔な信者であり、自身もかつて教会に直接所属していた事もある初代公王は、国家からの直接の寄付以外は、貴族の寄付金を禁止し、国家からの影響も排除するように交付を出したのだ。

その精神は今なお健在と言える。

もう少し、リヒテンラーデ公国の境界について説明を入れよう。

かつて、アイゼナツハ王国やリヒテンラーデ公国よりもさらに南方に、護国の鬼であるとか、鎮護將軍などと呼ばれた勇将が居た。

戦場においては、正しく名前にふさわしく、負けた事は無く、引き分けに甘んじたとはしても、被害を少なくし、智勇完備の名将だった。しかしながら、政治の場に合っては、非常に凡庸、むしろ無能だったのかもしれない。

有り余る功績を持ちながら、いや、功があまりに大きいため、かえって周囲から疎まれ、悪意を向けられていた。

そして、その名将にも危機が訪れる。

軍政争に負けた結果と言おうか、むしろ貴族の嫌がらせとして、保持兵力を削られ他所にまわされた所で、大軍の攻勢をうけ、大敗必至の状況に陥ったのだ。

大して信者としての経験を持たず、同時に、自身の才能などに十分な自負を持っていた彼ではあったが、この時ばかりは神に祈り、天佑を待った。

結論から言えば、その天佑は起こり、竜巻と同時に穢れ物の襲撃が起こり、敵軍は撤退。彼の祈りは天に通じた事になる。いかに地の利があつたとは言え、7千の兵で3万の敵を防ぐ事は不可能だつただろう。攻め手ならばともかく、平野地を守る上での寡兵と言うのは救いようがない。

事が終わり、報告と増兵を求めて、国都に戻った彼を襲つたのは悲報だつた。

すでに亡き愛妻との間に生まれた彼の子供が、亡くなったと言う知らせだ。国外に大使付きとして赴任していた長女は、急病で亡くなり。軍人、いや、騎士として多方面にて戦場を駆けていた長男は、戦場に散った。

家族を全て失い、貴族の薄ら汚い謀り、いや、いたずらによって自身も命を失いかけた將軍は、いろいろな意味で絶望した。

職を辞し、わずかな、とは言え余生を生きるのに十分な額の金だけを持って国を出奔した。

悲嘆した彼は、1人で静かに旅をしながら様々な場所を巡って、ある所に落ち着いた。それは、リヒテンラーデ公国とさらに南にある国の境にある山のふもとだった。

しばらく静かな生活をしてきた彼だったが、当時の彼は絶望できるほどの若さと力があつた。

しかし、10年ほど過ぎ、40代も終わりを迎えた辺りから考えが変わってきた。生来活動的で、どちらかと言えば楽天的な彼は、危機の際の祈りを思い出し、そこに意識を向け始めた。

天佑が、神の意思であつたかは分からない。しかしながら、偶然と言ふにはあまりにも大きな助けを受けたと考えた彼は、そこに何らかの必然性を求めた。それを簡潔に言い表すのは難しい、しかしながら、彼は神の信徒ではなく、純粋な祈りの信奉者になろうとした。

その純粋性を望んだために、権力の影響の少ないリヒテンラーデ公国に居場所を求め、そこで教会に入る事になる。

教会に入った彼は、元々持っていた将帥としての人事能力、そして一種の人徳とも言える求心力によって、教会内で一勢力を築き、現在はリヒテンラーデ公国の国内教会をまとめている。

彼の立場は公国国都の教会支部長であり、それ以上のものではないが、独自勢力としての力を十分に持つリヒテンラーデ公国の教会では、総体の意思と言って良い。その辺りに関しては、むしろ貴族よりのアイゼナツ八王国の教会とは違う。

ミリア等3人が、わざわざ国境を越えてきた理由も、そこにある。

ミリア達は、戦争が起こった後の、講和の調停者として第3者を求めていた。そして、その第一候補となったのが彼、ステッセル・レネンキャンプだった。

外蒐？内厭？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

キーボードを買いなおしました・・・薄型はなんだか使いにくい。
明日、もう一度買いに行きます。

御意見御感想等お待ちしています。

誤字や脱字などもありましたら、どうかお寄せ下さい。

梳る時

バイエルラインとケントワルドの戦いは、翌日の朝と決まった。

爺はベルゲインに何か話があるようで、2人連れ立ってどこかへ消えている。マリツカは、料理を一通り作るとこれまた村内の知人の家に行ったようで、今はいない。バイエルラインは、家の裏でアルトの教えたとおり型を行い、明日の準備に余念が無い。

では、アルトは如何だろうか？

彼は、1人作業場近くの板間に寝そべっている。時々思い出したように、手帳を広げ、そこに何かを書き込んで、再び目を閉じて微動だにしない。

アルトは、悩まされていた。

彼の軍内における立場と言うのは、実戦指揮官や教導官の立場を軽んずるわけではないが、参謀と言うのが一番大きい。いや、軍の概念自体を改革している彼は、総参謀長、もしくはもっと上の立場だ。

これが彼を悩ませている。

アルトは、常に前線に立つてきた。一時的に小部隊の指揮をとった事もあるが、その戦場における生活の殆どを、一介の兵士として生きてきた。

ゲリラの討伐作戦中に、居住区に火を放ち、非戦闘員もろとも女子供含めて殺した事もある。

狙撃手として、相手を殺さぬように腕や脚に玉を撃ち込みつつ、それを救助しようとする敵兵士を、友釣りにして全滅させた事もある。爆破を実施し、敵の兵舎や司令部をまとめて灰燼に変えたこともある。

殺した数など、覚えているはずも無い。

地球でも殺した、この世界に来てからも殺している。

しかし、それはあくまでも、アルト個人の技量や才幹、そしてその意思に従った結果だ。

共に戦場にある者を殺す事に躊躇いはない。かつてであると自身が幼子だった時のように、年齢に関係なく、性別に関係なく、殺さなくてはならないものは殺す。

そこに疑問を感じた事はない。いや、感じないように、自身を訓練してきた。

自身が思うように人を殺せるように。

自分の意思が、確実に命を奪うように。

そうあるべしと、自らを構築して来た。

しかし、参謀となり、軍を指揮するとなると話は違う。命令によって、数千数万の兵同士を戦いあわせて、殺す。

見方も敵も、殺す。

アルトは、自身が殺人者である事を否定はしない。殺戮者であることも否定をしない。しかし、彼は恐怖していた。かつて、自分が最も嫌ってきた、指導者、指揮者となる事を恐怖していた。

後方に、もしくは遠路にあつて戦いをする者を嫌悪してきた。

人に死を強いて、自身は安全の中に暮らす者を嫌悪してきた。

戦場に死があふれている事を知りながら、それを煽り、時にはそれで利益を得る者を嫌悪してきた。

しかし、彼自身も傭兵として、戦場で糧を得ていた人間だったから、そこには別種の思いもある。アルトは自身を嫌悪してきた。それは、疑問の余地も無い。

だが、だからこそ、アルトは殺傷を自分の手で直接行う事を選んできた。

しかし、今は立場として兵に命令しなくてはならない。

「戦え」

「殺せ」

「そして、死ね」

極論すれば、アルトの立場はその作戦の根本を構築することだ。その計画に基づいて、殺し、殺され、戦わされるのは、元は普通の民

衆である兵士達。

兵士の精神と参謀の精神は、まったく別の次元にあるものだ。兵士は、むしろ精神を鈍化させる事によって、殺人の連鎖を実行に移す。しかし、参謀は想像力を豊かにし、精神を鋭敏化させている。いろいろな事に思い至らなくてはならない。

それはアルトにとっては初めての経験で、初めての感情で、初めての悩みだった。

ドワーフの里への道中、バイエルラインと共に一睡もせず修行を続けたのは、バイエルラインを特訓するのが第一の目的であったのは間違いない。しかし、動き続ける事によって襲い来る悩みから逃げようとしていたと言う事も、無いわけではない。

もう一つ、理由がある。

アルトは、王城に詰め出してから、様々な文章を読んでいる。シュトラウス将軍のかつての報告書なども読んでいたが、前大戦の軍報告書などにも眼を通したし、シュトラウス将軍揮下の面々にも様々な質問をしている。

その結果、敵兵力が同数なら圧倒的に、3倍までならば互角に戦い必ず勝てるかと確信を得る事ができた。公言もしていない、彼の中だけのことではあるが、十分にそれを認めていた。決して、油断でも、自信過剰から来る妄想でもない。

敵の兵種の少なさと、作戦運用の幅の狭さ。一般的な兵の命令系統の貧弱さと、実戦指揮官の程度。何よりも、過去数十年に亘って行われてきた戦闘の実際が、アルトの中にある記憶としても、地球に

においては中世の物よりは古代に近い。

対穢れ物用の戦法として、個人技が重要視されるのは分かる。しかし、その武装種類の充実に反して、一般兵の武装とされている物は、中柄の槍が殆どで、超長槍やパイクなどと言った物はない。冒険者や、武人の感覚と、戦場における意識が隔絶していると言っても良い。

これは大きな謎として、アルトはそれを知ったとき、しばし呆然とした。

この世界が遅れているのか、地球の戦場が飛躍的に進んでいたのか、それはわからない。しかし、社会制度は、完全に中世ヨーロッパに匹敵し、むしろそれを超えている分野もあるほどなのに、戦争と言う物に関しては、稚拙と言っても良い現状はどうして出来上がったのだろう。

兵種は大きく分けて2種類しかない。歩兵と騎兵の二つだが、それは大きな問題ではない。問題は、歩兵においては、一般兵である槍兵と弓兵しかないと言う事、騎兵においても馬上指揮官と呪式兵しかないこと。そして、それらが渾然として突撃し、それぞれの利点を得られない事にある。

特に弓兵にその弊害が大きく、元々少数しかない弓兵を突撃に際して、援護に使わず、時には帯剣させて、他の歩兵と共に突撃させている。

そもそも、弓兵と言う物が城壁守備に特化した形でしか使われていない。攻撃の兵種ではなく、防御の兵種だと一般的に思われ、実際にその様に使用されている。

騎兵は、歩兵と同時に使用されるため、機動力を生かせず、結局は馬上にある指揮官でしかない。

祝式騎兵は、この中にあつては花形と言つて良いはずの兵種だが、それも結局は乱戦になつてしまえば効果は薄い。

まったくもつて、戦術とか、兵法とか言つたものが発達してないのである。また、それらを軽視し、むしろ蔑視する流れがある。シユトラウス将軍は、かつて陣形の重要性を説いたが、他の貴族指揮官達から、弱者の思想、貴族の誇りを知らぬ恥さらしと罵られ、実行には至らなかつた。

これは余談になるかもしれないが、シユトラウス将軍自身は、戦争を忌避しているし、出来ることなら一生関わりたくはないと思つている。しかしながら、アルトが持ち込んだ、戦術談義と言つものには心躍らされ、それを楽しむ気持ちがあつたのも事実だ。それは、今まで彼とその一党だけが持つていたもので、遙かに精練されたアルトの語る戦術は、彼を興奮させた。

つまりアルトは、軍事の一大改革者と言うよりは、階層の違つ物を一気に持ち込んだ創設者とも言える。

だからこそ、自身の知つている地球の歴史を顧みて、今後、この牧歌的な世界が血みどろの戦史を紡いでいく出発点を作ることを読んだ。

指揮官として恐れ。

参謀として恐れ。

戦史の流れを変えることを恐れた。

アルトの精神は、かつて無い環境に、やすりで静かに削られるような痛みを覚えていた。

梳る時（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

御意見御感想等お待ちしております。

・・・また、ちょっと暗くなっちゃた。良いのやら悪いのやら。

補足。

補足説明として、現状の世界の軍事についての説明を入れよう。

すでに述べたとおり、かなり遅れている、もしくは発達していない。

これに関しては間違いが無いのだが、なぜそんなことが起こっているのかと言うと、まずは貴族社会が固定化されているため、守旧をもって最良と成すという精神が長年に亘っていることが一番大きい。

そこに、劇的な状態を好む貴族の感性と、やや誇張された騎士道、そして、平民を使い捨てる事に疑問を抱かない騎士（貴族）が軍祖支配階級から現場指揮官まで全てを支配していたからだ。

現在は、シュトラウス将軍、リヒテンシュタイン宰相、ヴェスター宰相、そして先代国王の努力により、平民からも学院に入り、軍の中で騎士階級になる事も出来るし、官僚として栄達の道もある。

しかし、それは簡単な事ではないし、その新貴族とでも言うべきエリート達の背後には、やはり多くの場合貴族が付いている。基本的に、平民にも貴族にもほぼ同等の学費がかかるからだ。それは、貴族にとっては安価ではあるが、一般民からすれば、家族3人が余裕をもって1年生きていけるだけの費用が毎年かかる。

と、同時に、彼ら新貴族の殆どは、出世我欲の権化であり、キュリアなどのように、国家に奉仕しようなどと考えるものは少ない。ある程度以上の力は余裕を生むが、急激に力を得たと思う人間は、より上を目指す。そのため、出世のためという風には思っているが、

それ以上には至らない。

結果として、彼らとて貴族と変わらない精神構造に至り、なんら変革は起きなかった。それは軍事面、行政面、各方面に共通した事だ。（経済面はちよつと違う所がある）

つまり、国家規模でと言うよりも、人間社会全体が停滞の中にあつたといえる。そして、その根本は、神の現出にある。

神が結局は如何にかしてくれる。

人知の及ばない部分は仕方が無い。

そういつた考え方がふたになり、それ以上の神秘に疑問を感じ、好奇心のままに突進すると言う精神が全体から薄れていたのだ。（勿論例外もあるが）

結果として、発展もしないが、人口の増加や自然破壊なども起きなかった。

もう一つは、全体の人種的な特性による。

実は、各国の王家はその原点を一つの国家に持っている。人種的な面では、様々な人種がいるのは事実なのだが、その指導者層、その首魁は同一の国家と同一の人種を根本にしている。（勿論例外はある）

その国家と人種は、その軍事的な思考として、物量をもつての守備を重視すると同時に、歩兵同士の総当りを決戦行動とするという面がある。

物量をもって守備をしようというのは、城郭都市を基本として、守備を長期間に亘って維持し続け、お互いの疲弊を待つ。という事で、基本的には、全て城郭をもって戦場を支配し、その周辺で戦闘を行う。

簡単に言えば、お互いに籠って小競り合いを繰り返し、互いの疲弊を待つて、お互いに合戦を布告、最終的には歩兵同士をぶつけあわせて決戦。この形を延々、繰り返してきた。

このような形態が維持されてきたのは、その国家から発生した一族つまり、現状の各国家の王家には、共通した教育がなされているからだ。

地球においても言われた、騎士道や帝王学などに近い物ではあるが、より宗教的な、修身法に近い物だ。

支配者として民に君臨する優れた物である事に誇りを持つ。神を奉じ、神の前にのみ跪く。個人の武技を尊び、その習得に努める。国家と王家を維持するために、あらゆる手段をとる。

他にも多々あるが、主だったものはこの系統に含まれる。

礼儀作法や、武術などについても言及されているこの指導要領が、はっきりと長年の請ってきた事には理由があり、教科書とも言える書物が存在する。

「王権論」と呼ばれるこの本には、無論合戦の仕方も書いてあり、戦争は、基本的にそれに則って行う。これが続けられ、その影響は無論のこと貴族にも広がり、全体がそのまま固まってしまってい

る。

そのため、戦術なし、奇襲なし、夜襲なし、陣形なし、伏兵なし、予備兵なし、と言う、馬鹿のような戦争が長年続いてきたのだ。

このような、言ってしまうえば子供の殴り合いのような戦争しかして
いない世界に、戦乱の世界を経験し、過去の戦術戦史に造詣のある
アルトが現れた。当然のように、そこに戦術を組み込もうとするわ
けだが、状況を見てみれば、勝利があまりにも簡単に見えて、不思
議に思うほどののだ。

ちなみに、シュトラウス將軍は、補給に関しては大きな革新を起こ
したが、実践戦術に関しては、兵員整列を考えたくらいで、そのほ
かは過去の流れに沿っていた。（兵員整列だけでも画期的ではある
のだが）

したがって、彼がアルトと楽しんでいる戦術論というのは、主に兵
站に関した部分についてだ。そのほかの部分では、アルトから教わ
っていると言うのが正しい。

以上のような理由で、非常に軍としても政治としても弱い基盤の上
に成り立っている世界、それがアルトが今いる世界になる。よく言
えば、牧歌的な世界と言う所だろうか。

そのほか、兵種などについても例外や、過去の特例などはあるのだ
が、それらの説明はまた別の機会に。

補足。(後書き)

言ってしまうえば、宗教的な固陋さで守旧に尽くしてきた世界なんですよね。

頭硬い人間ばかりと考えて下さっても結構です。

次話は今日中に。

戦場単騎

「爺」

「何だ孺子」

「俺は、言葉の難しさと言うものを目の前にしているわけだが、どう思う」

「呆れ果てて言葉も無い」

「同感だ」

アルトと老人の目の前には、二組の騎士がいる。

1人はバイエルラインで、今回旅に使った馬に、借りた鞍を載せてグレイブを構えている。本来付いていた鞍は、旅用で柔軟性には富むが、武装の装着や細かい馬の取り回しには向かないので、専用の物を借りたからだ。

もう1人は無論ケントワルドで、こちらはきちんと自前の鞍で長騎剣を構えている。別名を斬馬刀とも言い、騎乗者を馬ごと切裂けるほどの長さと言った剣だ。

さて、お互いに長物を持ち、馬にまたがっているのはいいのだが、二人の間には大きな隔たりがあった。

簡単に言えば、ケントワルドの馬は宙に浮いているのだ。

羽の生えた馬を見た時、アルトはペガサスを連想し、その想像図との差異に少なからず困惑した。

形はやや小柄な馬なのだが、全体を長毛犬種のように長い毛が覆っており、垂れ下がった毛で、全体が隠れて特に目は埋もれている。そして、その翼は羽ではなく、蝙蝠の様な飛膜に毛が生えたものようだ。

「飛んでるな」

「珍しい物を持ってやがるじゃねえか」

「あれは、何だ？」

老人がなにやら知っていそうなので、アルトは尋ねた。老人は、軽く目を細めると、思い出すように額に手を当てて答えた。

「確か、エルフどもの使っている、リオンだからリオンだか…馬のようには見えるが…確か竜に近いとか、何とかか」

「じゃあ、馬じゃないって事でいいな」

「羽の生えた馬はいねえよ」

どうやらこの老人も、ケントワールドがこのような物を持っているのは知らなかったらしい。鼻を鳴らすように答えたのを聞くと、アルトは2人の間に入り、声をかけた。

「止める、止める、騎馬同士というから経験と思ってやらせてみよ

うと思ったが、これは予定外もいい所だ」

老人のほうも、興がそがれたようで、アルトの後ろで頷いている。

「何を言うか、騎戦にはなんら変わりないだろうが」

ケントワルドは、頭上から返答を返したが、バイエルラインのほうも戦えと言われたり、一方的に止めると言われたりで、少しばかり心象よろしくないようだ。不服そうな顔をしている。

「しょうがないな」

珍しく、困った顔をして腕を組んでアルトが考え込んでいると、後ろから声が掛かった。

「素手でやらせてみるのも面白えかもな」

そう、言うやいなや老人の手から4つの飛礫が飛んだ。それは、2人を馬から落とし、同時に得物を手から弾き飛ばした。

「お互いに、素手で殴り合って決着つけてみるや。そんな事も、たまには楽しめるってもんだ」

一瞬呆気にとられた2人ではあったが、直ぐにお互い向き合つと、拳を突き出し構えを取った。羽の生えた馬と、生えていない馬はなにやら分からないまま上に乗る荷物が無くなったので、その場に留まったまま動かない。

「いくぞ！」

「応！」

ケントワルドの足が伸び、バイエルラインの太ももを蹴る。バイエルラインはひざで受け、上半身をひねるように肘をケントワルドの胸に突き入れようとす。ケントワルドの拳が、同時に突き出され、お互いに胸と頬を打ち合い分かれる。

互いが、互いの拳にあたり、ひざを打ち、肘を叩き付け、脚が払い、足がふむ。技巧を凝らしたと言うものではない、ただ、当るに任せた稚拙な立会い。

「良いねえ。若いもんは、こんな物も楽しいじゃねえか」

老人が、アルトに向き直ると、アルトは老人がはっと驚くほど苦く、そして寂しげな顔をしていた。

「孺子、お前：名前はなんと叫んだ」

急に名前を聞かれたアルトは、不意を突かれたこともあり、素直に答えた。不意を突かれたのではなく、他の心の動きもあつたらうが、その事を簡単に表面に出したりはしない。それでも、苦い顔をしていたのは、老人なればこそ見抜けたもので、常人であれば、平呑な表情にしか見えはしない。

「アルト・ヒイラギ・バウマン」

「そうか……ちょっと、そこで待ってる」

老人は、一言そう言うと、何処かへと歩き去った。アルトの目は、2人の戦いから離れはしない。焼き付けられた光景のように、杭で

貫かれたかのように凝視している。

殴り合い。

子供のけんか。

子供達の戯れ。

知らない。

そんなもの、知らない。

した事も、見た事も。

殴るとき、それは相手を殺すため。

攻撃は、殺意を持って。

相手に必殺の一撃を。

相手に死の道を作るため。

アルトにとって、攻撃とは、確殺の力を手に持ち、殺意を胸にするもの。

相手を殺さない時には、情けをかけるわけではない。

更なる情報を、何らかの利益を得るために殺さないようにする。

もしくは、ただ殺すよりも、大きな痛みと恐怖を与えるため。

バイエルラインのケントワルドの2人の応酬は、子供のじゃれあい
と言うには力が強く、いつそ獅子の決闘のようですらあったが、ア
ルトにとっては子供の喧嘩のようにしか見えなかった。

それが、アルトの心を締め付ける。

俺にはあんな事はなかった。

敵と、拳を交える時。 殺すか殺される時。

訓練で拳を交わす時。 幼年の時は一方的にやられ、後年は一方的に

応酬？

知らない。

知らない。

知らない。

感傷と言うならばそうなのだろう。

他の要因から傷つきやすくなっている事も事実だ。

しかしながら、その光景はアルトの心を深くえぐった。

戦場単騎（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
御意見御感想等お待ちしております。

ガタ漫？ 2人？のショートショート7+？

ラ「ラッセル」

バ「バウマンの」

ラバ「ラバウル劇場」

k「+1」

ラ「作者？」

k「えーとですね。説明しておいたほうがいいかなってところがありません」

バ「せっかく、感想頂いたんだからラジオパーソナリティーのノリで行くんじゃなかったのか？」

k「許可取ってないんで」

ラ「今から取れば？」

バ「別に今直ぐに書く必要は無いだろう？ちゃんと聞いてから書けば良いんじゃないか？」

k「疲れが溜まってて、面倒なんです」

バ「暇すぎるからって、徒歩旅行なんかしてるからだ。結局電車で

帰るって、何だそれ」

k「3日かけて歩いて、電車で帰れば2時間だね」

ラ「3日で100kmほどしか進めなかったんだよな。予定の日に40kmってのはやっぱり無理があったか」

k「ですな」

バ「まあ、それはいいとして。話す事ってのは？」

k「前回の補足の、さらに補足ですかね」

ラ「宗教的な要因による、軍事レベルの話か？」

k「それなんですがね。まあ、感想の返事にも書いたんですが、イメージはある程度ありまして。その説明もしたほうが分かりやすいかなと思ひまして」

バ「後はあれだ。本編が暗くなりそうなので、ちょっと抜けた話をおいておきたいんだろ」

ラ「本編内で調節しろよ」

k「そんな小器用な事が出来るわけが無いじゃないですか」

ラバ「開き直り？」

k「まあ、説明に入りましょう。背景的なイメージは、江戸時代の日本ですね。多少、と言うかかなりIFの要素が入ってますが」

バ「もしも…って奴か」

ラ「架空戦記とか好きだしな」

k「ずばり、海外の要素を一切排除した江戸時代。これです」

ラ「黒船が来なくて？」

バ「長崎などから文化の流入も無くて？」

ラ「安土桃山までの文化流入は如何するんだ？」

バ「そもそも、町民文化なんかに海外影響は大きいしな。雪輪紋様とか。そもそも、武家社会の基本修学である、儒教自体が外国産だしな」

ラ「薩摩を始めとした九州諸藩や琉球、それに蝦夷地における密貿易とかも無視か？」

k「その辺は無視で。そうですね、江戸時代が始まって、50年くらいで、日本以外全部沈没が起こったみたいな」

バ「筒井康隆先生のおれか？」

ラ「小松左京先生の日本沈没のパロディーユーモアだな」

k「説明した所で続けますが、さっき言ったみたいなお事ですね。黒船も来ない、出島からの情報も追加されない、密貿易なども起きない。まあ、密貿易に関しては情報自体が漏れないのであまり影響は

無さそうですが、薩摩飛脚なんて言葉もあつたくらいですし」

バ「行つては戻れぬつて奴だな」

ク「実際問題、黒船来航の時に、幕府は当然対応を迫られたわけですが、幾つかの藩に沿岸警護を依頼するわけですよ。そのときの有名な話で、藩士達への教育、と言いますか軍事訓練があつたわけなんです。これが酷い。首実検の作法や、敵に対しての名乗りの上げ方などを教えて、後は剣術の上位者に訓練を頼む。その程度の事しかしなかつたわけですよ」

ラ「戦国時代の軍術軍学をそのまま継承してるからな」

ク「そうですね。旧来に対する保守が強すぎて、なんら変化が起きてないわけですよ。文化というものに対しての考え方は色々あるでしょうが、特定の条件だけで形成された文化はどこかで止まると私は考えています。外からの影響が無ければ、必ず停滞すると思ってるんですよ。まあ、文化全般についてではないですけど」

バ「中国の歴代帝国や徳川幕府のように、わざと弱兵に育てるような場合もあるぞ。軍事に関しては」

ク「それにしたつて、外からの害をあまり考慮する必要性が無いからですからね。ヨーロッパのように、お隣が敵でしかも力の拮抗が起こってるような状況ならそういった政策は取れませんよ。強兵こそが正義です」

ラ「そう考えたら、今アルトのいる世界はヨーロッパ型なのでは？」

ク「その解決策として王権論を持ち出したんですよ。修身法も

しくは基礎学問と言った所でしようかねえ。この辺りも説明が全然足りていないんですが。結局言いたいのは、文化的には煮詰まっていると言う所なんですよ。神様の存在が、言い方は悪いですが徳川幕府的でも言いませうか、実行武力を持った恐怖になっている、と言うか」

バ「実在の神に対する配慮か？」

ラ「もしくは、畏怖と恐縮の表れ？」

k「そんなところですかねえ。説明難しいですけど。江戸時代以前における天皇や公家に関しての感覚に少し近いものを、神との感覚に規定していますので。当時の日本では、公家の入った風呂の水が万病の薬として高値で売られたり、公卿の近くにいれば、寿命が伸びるといった事が信じられたりしていたそうですから。結構即物的」

バ「神の存在が、蓋、もしくは重石になっている」

ラ「もしくはそれを理由に人間が怠けている」

k「穿てばその辺りですか。怠けていると言うよりは諦めでしょうけど」

バ「諦念が勝った社会は早晚崩壊するもんだしなあ。旧帝ロシアしかり、ソ連しかり、清国しかり、隋しかり。と言うか、革命の動力は、怒りをもった一部の暴発家が大多数の諦観者をバックに従えて起こす物だし」

k「この世界だとその前に神様が出てきてしまっんですよね。神様は、諜報面なら万全ですから」

ラ「遍く地上を見下ろす目か」

バ「何も出来ない世界だな」

k「抜け道はありますけどね」

ラ「でも、神には勝てないんだろ？」

バ「今までの感じならそうだろうな」

k「如何ですかねえ？」

バ「お前が疑問系なのか？」

ラ「フラグ隠しか？」

k「ともあれ次回は本編です」

・
・
・

ラバ「おわり？」

k「まとめ様が無いので」

ラ「酷いな」

バ「読んでいただきありがとうございます。また自戒でお会いしましょう」

ラ「自戒って何さね」

バ「作者の心理じゃね？」

k「自縄自縛状態ですので」

バ「それと自戒は違うだろ」

k「次回に語呂が合わないんですよ、他のでは」

ラ「如何でもいいな」

追加説明です。

シュトラウス将軍がかつて考えていた階級制も、彼の考えでは補給と物資の分配に便利だからって事で考えた物でした。アルトの考え方からすれば指揮官を配するのは当然戦闘指揮のためだと考えたわけですが、将軍の考え方はちょっと違ってたわけです。その辺の事もアルトは後に気が付いて愕然とするんですがね。ちなみにですが、地方の管理をしている騎士団には一応階級に近い物があつて職業の分配などもあつたのですが、国家間戦争には利用されていません。マウゼルの場合なども、名目上は立てこもる事によつて意見を通そうとする、ストライキのような物でした。以前からあるものをなぞる事が正義って訳ですね。考えなくても物事が進むので便利ではありませんが発展はしません。しかも、戦争は起こってしまうので平和でもないと言つてどうしようもない世界です。

以上です。

見知らぬ仮面

ミリア達が招きいれられた部屋には、誰もいなかった。

穏やかにまとめられた調度品は、どれもかなりの一品であるとは直ぐに知れたが、特に重厚感のある椅子には誰も座っていない。

ミリアが長いすに座って待ち、他の2人は立ったままその場で待っていた所、扉が開き人が入ってきた。

入ってきた女性は、ミリアが目を向いて驚くほど派手な装いをしており、板を入れたように大きく上に広げた髪と、そこに飾られたいくつもの宝石や貴金属がシャラシャラと光を反射している。衣裳も大量のフリルと、爆発したような色彩とで、どちらかと言えば地味な装いを好むミリアとすれば、理解も共感もできない絢爛さと言える。

しかし彼女は一言も発せず、彼女についてきた女官が茶と茶菓を出す、そのまま出て行った。

「ミンケドリアの一部ではああ言った装いもあるとは聞いていましたが」

「すごかったですね」

素直に驚くミリアとノンリエッタだったが、マルイレルだけは少し違う事を感じた。これが、機を挫く外交上の手腕、もしくは何らかの意図あつての事だとしたら、レネンキャンプを用いるのは難しいの

ではないかと言う事を。

その時、静かに一人の男が入ってきた。

歴戦の優勝という過去を知るものにとつては、想像と異なる小さな男で、年の頃は60ほどと聞いていたが、それよりも老けて見える。しかし、がっしりした体とこめかみから額にかけて走る古傷が、かつて戦場に駆けつけた姿を想起させる。

「始めまして。ステツセル・レネンキャンプと申します」

ゆったりと礼をするレネンキャンプに、そこは流石に王侯としての教育を受けてきたミリアも静かに礼を送る。教会の人間は、原則神以外の何者にも屈しない態度をとるので、先に礼をしたのはレネンキャンプの度量、もしくはそう見せかける演技のためだろう。

「お会いできて光栄に思います。ミリアリア・エル・アイゼナツハです」

ミリアの感じた物は、マルイレル、ノンリエッタ両名も当然感じた物であったが、とてつもない重厚さだった。威圧と言い換えてもいい、レネンキャンプの前に出てきた人間は、よほど覚悟を持つか、先天的に不感症でなければ、飲まれてしまうことになるだろう。

一応の理由は、顔合わせでしかなく、その日は挨拶のみに留め、教会に対する幾分かの寄付のみを収め、場を退いたミリアたちだったが、漠然とした不安が広がった。

確かに、他国家の影響を受けていない権力指導者ではあるが、彼を信用するのはどうだろうかと言う不安だ。かつての逸話などから、

彼を有用たると見て接触を図ったが、策の転換も必要になるかもしれない。

「不思議な印象と言うのでしょいかね？」

ミリアは、マルイレルに対してそう言つて微笑んだが、むしろミリアやフレッドのほうが異端的な王族なのだろう。彼らの印象は、重厚さや厳格さからは遠い。むしろ愛嬌と庇護欲をそそられる存在だ。

無論ミリアやフレッドは知らないが、以前アルトがバイエルラインに対して訊いた事がある。

「なぜ、フレッド達を助けようと思った？」と。

それに対して、バイエルラインは「分かりません」と答えた。そして、逆にアルトに尋ねた「師匠は何で今こうして助けているんですか？メイリンに頼まれて、アリシアさんに頼まれて。それだけですか？」そう言つて、尋ねた。

「なんととはなく。なんととはなくかな」そう言つて、2人で笑い会つたことがある。付き合っている時間こそ短い、アルトもフレッドのために労を厭わない気持ちになっている。しかし、その理由はと言えば、特に挙げることはない。

意味も無く人から好かれる、もしくは第一印象がすこぶる良いと言うのがフレッドの一番の良い特徴なのかもしれない。流石にアルトとの初対面の時には、状況から生まれた焦りや悩みが印象を悪くしていたが、一旦中懐に入つてしまえばその良点が生きる。

リヒテンシュタインであれ、シュトラウスであれ、強い見方を得る

ことができたのは、この持ち前の愛嬌が大きい。特に、リヒテンシュタインが最初期から手助けをしているのは、その人格を愛していると言う事が主な理由と言えるだろう。

ミリアにしても、妹の目から見ても可愛い人だと思っている。もっとも、それが他の女性から如何見られるのか、そして結婚などした結果はどうなのかと言う所には疑念を持ってはいるが。少なくとも、女性からの人気を得ない人間ではないと確信はしている。

現に、最近若い女性の騎士の中で、ファンクラブ・親衛隊とでも言うべき、フレッド講とでも言うべき物ができている。

フレッドが学院に在籍していた頃の同窓生を中心に、現在全女性士官の3分の1がその会員になっている。厳しい訓練の清涼剤、もしくはその原動力として非常な人気をばくしている。

それに反するように、もしくは多くの王侯貴族が持つように重厚さと威厳を強く纏ったレネンキャンプにミリアは少なくない不安を覚えている。

しかし、もしもここにリヒテンシュタインなりシュトラウスなりが居れば、その重厚さに隠された彼の本質をうつすらとではあるが見抜けたかもしれない。残念な事に、有能な戦士であるマルイレルですらそれを感じる事は出来ず、3人とも漠然とした不安を覚えただけだった。

レネンキャンプの本質は、演者であり陶醉者であった。

自分が作った役を演じ、それを自分も気がつかないままで、もしくはそれすらも役の中に練り込み、完全な演技をする。

今回の場合、一般的な対王侯貴族用の仮面を被っていたのであり、その仮面さえ突き抜けてしまえば、好々爺たる人格が見えたはずだが、そこまで気がつかず、少しばかりの不安定さを過剰に受け止め、彼女たちは自分で不安を増大させていた。

「心配、ですわね」

「一旦、国許に帰って相談したほうが良いでしょうか？」

結果として、彼女達の行動は、余計な停滞を起こす事になる。

見知らぬ仮面（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想お待ちしております。

誤字脱字なども、ありましたら教えてくださいただければ幸いです。

踊る双刀(前書き)

体調良くなりましたので復活です。

踊る双刀

アルトと老人が最初に出会った場所、霧のように立った岩と紅い滝。その前に老人は立っていた、何か悩むように、快活であろう老人の全身からは、鉛のように思い心情が液体として流れ出ているように見受けられた。

「このまま、朽ちるのは嫌だよなあ。なあ」

老人の独白は、何処に向かっているのか。目の前には、ゆるゆると流れ落ちる紅い水があるのみだ。

老人の手の中にあるのは一振りの短剣。先ごろアルトとの戦いで用いた物とは違う、むき出しの刃に白い布の巻かれた、地味な短剣。しかし、その刃は、燃えるような紅色をしている。

「そうさ、朽ちたくはねえよな」

老人の心に浮かぶのは、すでに長前の世代。長命を誇る老人が、いまだ1人の子供だった時代。いや、独ひともでは…ない。

老人、いや、彼の住んでいた町には有名な悪童が2人居た。1人は彼で、もう1人はその隣の家に住む同年の少年。

2人は同年代は勿論年下、年上構わず従っていた。近辺のガキ大将として君臨し、自分を従えて街の各所へと遠征を仕掛けた、彼らは連戦連勝で、常に勝利の歓声を上げてうちへと帰りついた。

彼らは日替わりでその主導を代え、それでもお互いが一個の生物のように、しかしまったく違う個性で成り立っていた。大人たちは彼らを悪童として恐れたが、子供にとっては英雄だった。

けんかが何よりも好きで、他の町のガキ大将を攻めぬ時にはお互い殴りあった。血を流し、泥だらけになりながら、お互いに本気で殴り合い、常に引き分けた。

そんな事で友情に傷が付かない事は知っていたし、お互いに勝利を得ようと希望しながら、その勝利を恐れても居た。

心からの悪友で戦友でそして最大の対抗者だった。

彼らの人生は、常に戦いと栄誉と繁栄と、そして豪奢と言う言葉に彩られていた。

少なくとも、人が見ればそう言うだろう。

彼らは中原の英雄へと上り詰めた。

しかし、その内情は如何だったのだろうか。

それを知る術も、語りうる口もない。

ただ、事実はその片割れの生を終焉に導き、今一人は老人になって滝を見つめている。

老人の顔には決意の色。同時にあふれる、悲しみと少しの怒り。

「形見に…なんて、おれたちにゃあ、似合わねえとは思っていたんだ。思ってたはいたんだが、後生だな」

老人の視線は持っている短剣へと降りる。

「こいつも、あれだな。なんて言って良いのかわかんねえんだがよ。俺たち2人のもんだ。だから、離したくはねえ。一緒に預けちまおうと思ってる。」

何で、あいつだと思ったのか、それは良くわかんねえ。

ただ、あんな悲しい目をした奴には何かをしてみてえ、そう思った。

それに、あいつは面白そうな奴だからな、好きだろ、お前なら特に「流れる紅水に手を差し入れると、魔法の様に、しかしそれが当然であるかの様に、彼の手の中に剣が現れた。」

すでに手の中にあつた短剣と同色の、燃えるような紅色。しかし、黒い刃文を持ったその剣は、紅蓮の焰のように色鮮やかに目に突き刺さる。

軽い反りを持った、片刃の剣。浮かぶ刃文の黒さ、地金の紅々とした色を除けば、大降りの打刀と言っていていい物だ。

反して、すでに老人が持っていた短剣は、両刃の剣。そりは無い直剣で、幅広く、重さもあり、貫き穿つことに重視したものと思われる。紅い刃の中には蒼く光る筋が見え隠れし、動く度に全体がざわめくように見える。

「燎原に天吼よお。やっぱりお前たちを朽ちさせるのは悲しすぎる。若造だが、あの孺子の腰に座ってくれるか？悪くは、ああ、悪くはねえぜ」

右手が静かに空を走る。左手が疾風の壁を越え、空気を裂く。

両手が肅々と、轟々と、時に跳ね、流れ、軽やかに、重厚に翻る。

舞う老人の姿には、往年の若い自身と友の姿を重ねる事はできないのかもしれない。

しかし、彼の目に写る世界は、今も昔も友と見た世界で、それは変わらない。

だからこそ、彼の傍に友がいないことが、共に剣を振るわれない事が、事実の重さを彼に背負わせる。

舞う事を止め、静かに立つ老人の背後に地面に座るアルトが居た。声を掛ける事もせず、ただ静かに老人を見つめている。

「如何した。孺子、行儀がいいじゃねえか」

「邪魔をしたな。いい物を見させてもらった。礼を言わなくてはならないな」

「けちくさい事をぬかす。そんな殊勝な玉じゃあねえだろうに」

座ったまま頭を下げるアルトに、老人は齒をむいて笑った。

アルトからしてみれば、どこかに消えた老人の気配が、一気に異様なほど大きく膨れ上がったので、何かあったのかと駆けつけてきた。そこで、武の先人の珠玉の動きを見る事ができたのだから、礼の一つでもしようという気持ちになったのだが、老人からすれば見せようとして見せたものだ。逆に、先ほどの感傷と感情からして気恥ずかしくなったのだろう。

ちなみに、若者二人の戦いは、両者が互いに相手の顎を打ち抜き、共倒れになっている。互いを認めると言った形ではなく、悪態を付きながら崩れ落ちたのだ。アルトも、面倒なのでそのまま寝かせている。

「付いてきな」

老人が顎をしゃくつて、付いてくるように促す。

アルトも、何も言わずに後を付いていく。

基本的に、老人に対しては一定量の敬意を持っているアルトだが、言動からはそれが伝わりにくい。

しかし、促されるままに無言で付いていく姿は、後を追う犬のようで、どこか可愛らしい。アルト自身は否定するだろうし、そう思うような人間も、この老人や王都にいる老宰相など極一部だろうが。

しばし歩いて、小さな小屋の中に老人が入る。アルトは、小屋の前で待っていたが、老人は直ぐに小屋から出てきた。先ほどは持っていなかった、剣の鞘と飾りをその手に持っている。

無言のまま、剣を鞘に収め、鍔や飾り紐などを組み立てていく。そ

して、出来上がったそれを、2本まとめてアルトへ無造作に突き出した。

「やる」

「いらない」

踊る双刀（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

御意見御感想等戴けますれば、狂喜乱舞をいたします。

誤字脱字なども、ありましたら教えていただければ幸いです。

腹中の石に灼熱の酒を

アルトは武器を得るために他所にあり、ミリアも国難を救うため国外へと旅立っている。

その国難はすでに国民遍く知るところとなり、日々自発的に兵員となるべく若者から初老の人間までが王都へとやって来る。その数は加速度的に増えていると言える。

その中で、体に自信のあるもの、と言うよりは、事務方に回された者以外は全て、アルトの残した地獄の特訓を受けている。大抵の場合、志願した事を後悔し、中には神を怨む者もいるが逃げる体力すら残さないで、結果として脱走者は出ていない。

しかしながら、彼ら地獄の中にいる兵士にも例外がある。別にその例外にあたる兵員が楽をしているわけではない、別種の地獄にいるだけだ。

第4軍の騎士将に、ウォリックと言う男がいる。固太りの体に、短い手足を持つ短軀にして筋肉の塊のような男だが、騎上における戦闘では、他の騎士将に追隨を許さない。

この、ドワーフとの混血児とも呼ばれるウォリックが、馬上においては長い槍を旋風のように振り回し、周囲を制圧する。そしてその馬術も、元から馬と繋がって生まれてきたかのような人騎一体と言つ言葉の体現者でもある。

そのウォリックの元で、騎乗経験者達は騎兵となるべく別種の特

訓地獄の中にいた。

騎乗した面々が、槍と盾を手に突貫しては離脱、突貫しては離脱を繰り返している。騎上での訓練は、馬の体調も考慮し最大でも一日に2刻までとなつてゐる。しかしながら、人間の体調にはなんら考慮せず、体力増強や戦闘技術訓練、全体運動や、陣形の組み換えまで、日に5刻以上の訓練も珍しくない。

「そんなへつぴり腰じゃあ、馬にも舐められるぞ。もっと、体で当たれ！」

百酔戦士と呼ばれたウォーリックの檄が飛ぶ。

これも、ドワーフに近いのかもしれないが、彼は常に酒精の強い火酒を腰に提げている。本人は、着付けと消毒もかねてると嘯いているが、その殆どは彼の胃袋に消えていく。ドワーフと違うのは、彼が髭を生やしていないことだろうが、その所為で酒に酔った赤ら顔が良く分かる。

しかし、顔には出ても頭には回らないらしく、彼は酒を飲んでいる時のほうが頭の回転が速く、冷静にもなる。また、食事を取らなくても、酒で代用が出来るのか、酒さえ飲んでいれば問題なく活動する事が出来る。異常体質の男といえるだろう。

一軍の将となり、第4軍を任されてからは、常酔將軍と呼ばれているが、彼自身がこの異名を好んでいて、自らの号あざなとしている。字ではなく、号に用いるあたり、彼が単なる剛直な戦士ではない証明であるのかもしれない。実際の所、事務的な能力もかなり高く、特に馬車による物資運輸には定評がある。

部下は増えたし、給料も増えて上手い酒が飲める、なにより自身が最も好む騎兵の、しかもその総領に据えられて、彼は最近ご機嫌だった。部下に飛ばす激の中にも、笑みが混じろうというものだ。もつとも、アルトが基準を作っていた訓練は、ケツの毛まで筆られて鼻血も出ないと呼ばれるほど厳しいが。

さて、その彼が、楽しい馬との訓練を止め、兵士の訓練も副官であるクーンルールに任せ、丸い体を弾ませるように、会議室へと駆け込んできた。

「緊急会議とは何事だい?!」

そう問いかけたが、部屋にはまだ人が揃っていない。シュトラウスとゲルムハルト、そしてシュルツはすでに着席しているが、そのほかの面々が揃っていない。

「ひとまずは席についてくれ、今、国王陛下も来られる」

シュトラウスに言われ、酒瓶を片手に席に着く。彼は、特例として何処でも酒を飲んで良いと言う許可をフレッドから貰っていた。この一事だけでも、ウォリックはフレッドのために死んでいいとすら思ったと後に語っている。

ちなみに、アルト以下数名も同様の許可を求めたが、それに関してはミリア・メイリン・ブルミエールの女性軍によって不許可の沙汰が降りた。ブルミエールは、単純に将官としての品位に欠けるとの意見だったが、残りの2人の意見は主に健康面での心配だ。

数瞬の後、各騎士将、リヒテンシュタイン宰相、宰相の下で筆頭書記になったクーデロイが入室してくる。

そして、最後にフレッドが上座に着く。ミリアとその護衛についているマルイレル、アルトとその友についているバイエルラインを除いた主要陣がそろつう。

宮廷儀礼などは、もとより気にしない面々なので、即座に会議が始まる。その口火を切ったのは、リヒテンシュタイン宰相だ。本来であれば、書記役のクーデロイが話すべきなのかもしれないが、彼は文章面での才能に反して、話す事にはまったく向いていなかった。

「さて、本日の議題についてじゃが、我らと戦線の開かれようとしている最中ではあるが、ジギスムントにおける情報が幾つか覆された。まず、今回の問題の発端となつておつたジギスムント国王、ヴァルトリートがすでに死去していた事がわかつた。どうやら、こちらで問題になつておつた時期にはすでに死去して居つたようじゃ」

この発言に、皆がざわめく。シュトラウス將軍とフレッドはすでに知っていたのだらう、眉一つ動かさない。クーデロイに関しては、どう思っているのか外見からは理解が出来ない。

「そして、改めて新王に即位したエルンガード王より、親書が来た。内容は、ミリア様を後に迎えたいとの事じゃな」

この言葉には、先に倍するざわめきが返つた。フレッドは、拳を握り締め腕を震わせている。

少しばかり説明を要するだらう。

死去したジギスムント王、ヴァルトリートは享年43歳、まだ死ぬような歳ではなかつた。結構で精力的な国王で、幾つかの問題点を

除けばよい王であつたと言えるだろう。

その問題点の一つは、正式な婚姻を結ばなかった事である。その理由は定かではないが、長年の独身生活への見切りをミリアとの婚姻でつけようとした。結果として、フレッドやアルトの働きでそれを起こさない様にしたのは、すでに述べた。と言った訳で、彼は死ぬまで独身を結果的に貫いた事になる。

しかし、多くの側室、と言うよりも妾と庶子がいた。ご落胤の多い方だったのだ。

これだけならばまだ良いのだが、恐らくはヴァルトリート王の単なる性格、嗜好として酷く英雄を好む癖がある。しかも、自身が英雄になるのではなく、英雄を育て上げる、英雄を作り出すことに多大な興味を持っていたようだ。

そして、その英雄候補として自らの子供達を選んだ。

彼のしたことを端的に説明するならば、後継者争いを激化させたと言ふことだろう。わざわざ、強大な背景のある娘に手を付け、それぞれを煽る。こっちで入れ知恵し、あちらでは煽りたて、そちらでその気にさせる。結果、第何王子擁立派閥と言ふ物が乱立した。

その様な状態で、さらにはミリアを手に入れ、後々アイゼナツ八王国までも手中にしようとしていたのだから、肝が太いと言ふべきなのか、楽観的な王族だったのか。

ともあれ、夢半ばにして彼は死んでしまい、多数乱立した王子は、それぞれが王権を手にとろうと争っていたのだが、思わぬ物が国主たる栄光を手にした。

それが、21歳のエルンガード王子、いや、ジギスムント国王エルンガード・ウルト・ジギスムントである。

強力な背景を持たず、単なる歴史だけは長い騎士の娘の子で在った彼が、なぜか一息に王権を手にしてしまった。

そして、彼はその後、敵対すらしていなかった王子達を肅清し、そして、今新書を贈ってきた。

「新書には続きがあつての、むしろこちらが本命、わしらにとっての問題なのじゃが」

ここまで言った所で、フレッドが後に続いた。

「後継者争いをしていた者の中で、筆頭と思われていた、ヴァーゼルと言う者が、国内に潜伏しているかもしれないので、引き渡し願いたいそうだ」

クーデロイが、調べていた文章をリヒテンシュタインに渡す。その内容は多岐に渡るので、ここではまとめて紹介しよう。

ヴァーゼル・ジェン・ジギスムント

28歳、母にジギスムント内における最大貴族派閥・真古派しんこの首魁ロートマン・クップ・ドーンの妹を持つ。当然、ドーン家を背景に後継者争いでも、首座の位置を占めていたが、急転直下敗北する。

なお、ドーン家はリユーベック家と他国ながら少なからず姻戚関係にあり、潜伏している場合、リユーベック家にかくまわれている可

能性が高い。

さらに、ドーン家のその莫大な資金力と私兵も姿を消しており、リユーベック家、もしくははその縁のある地域に同じく潜伏している可能性はある。

「つまり、国内に、亡命政権になれる大義名分と兵力資金力が隠れている可能性がある。と言おうか、隠れておるじゃろうの」

何時もは笑みを絶やさない老宰相も、国民からの人気も高い美青年国王も、美壮年と言って良い大將軍も、今回ばかりは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

ウォーリックの口に運ぶ酒も、どこか苦く感じられて、それ以上飲む気をなくしてしまった。

「貴族・・・か」

ジヨレラのもらした眩きは、その場にいる全員に一つの思いを抱かせた。

腹中の石に灼熱の酒を（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

御意見御感想等ありましたらよろしくお願いします。

2杯の酒

「何だと、孺子」

「いらぬ。もう一度言っぞ、いらぬ」

老人は片眉を上げると、鼻を鳴らして聞いた。

「おめえは、此処へ武器を作りきた」

「ああ」

「そして、俺はお前の意に足りうる武器をやると言っている」

「ああ」

「そして、それを……断る」

アルトに三度目の返事は無かった。静かに老人を見ているだけ、頷きも、首を横に振りもしなかった。

「それで、酒でも飲むつてのか」

老人が嘆息を漏らしながら言うと、アルトの両手には酒瓶と杯が二つ現れる。

「俺はな、ご老人。先達の意見からは何かしら学びたいと思う。俺に戦いを教えてくれた人がこんな事を言っていた。人類は蓄積を覚

えた事によつて、ただその事だけで他の生命よりも上位にある、と」
アルトがその場に座り込み、老人もそれに続く。ささやかな宴席だが、その後を考えれば歴史的な盃事と言つても良い。

「ごもつともな意見だな、それがお前の師匠の教えか」

アルトが酒を満たした杯を、老人は受け取り口を付ける。

「他にも山のようにあるが、その中で、タダより高い物は無い、嘘をつくにも手順がある、と言つのがある。陳腐な内容だが、的は得ていると思つ」

「それで？」

「損も、得も、説明も何も受けない状況じゃあ選択の余地は無い、危うきには近寄らず、それだけだ。仮に、その説明が嘘であっても、その嘘から得られる情報と言つ物がある。何にも無しで、ただ「やる」と言つのは困るだけだな」

杯を乾した老人は、アルトをギロリと睨むと、杯を突き出した。アルトはそれに酒を注いでいく。

「訳も何も、おめえが欲しがつてるもんを、俺がやる。それじゃあ済まないのか。他に何の理屈が欲しいんだ」

「別に、損をするかもしれないことを問題にしているわけじゃない。損の内容さえ分かつていれば、逆に利点にも出来る。それだけの事だろ。俺も人のことは言えないが、体が器用になると、精神面が不器用だな。たまには、口で伝えないと伝わらない事もある。互いに

不器用なんだ、こんな言い方しか出来ないさ」

アルトもつまらなそうに杯を乾すと、2人の間に酒瓶を置いた。この後は手酌で、と言う事だろう。

しばらくは、ちびちびと2人が無言で酒を飲んでゆく。

「美味しい」

「ああ」

一言唸ると、それから酒を飲む音が止む。

そして、自らの短剣を、目の前にかざす。

「アルケオニム、この紅金には呪式との親和性がある。いや、呪式の枠を壊す」

そう言うと、老人は地面に円を書く。

「呪式円、全てに共通する部分、それは円だ。しかし、これは枠と言っても良い。言ってしまうえば、枷だ」

「枷？」

「ああ、規模を押さえる、どこかに嵌め込む、小さく纏める。それは悪い事じゃねえ、実際に、呪式円の形でなくては、殆どの奴は呪式を使えねえ」

「つまり、その先がある」

「その通りだ」

そこまで言うと、酒を一息にのどへ送り込む。しかし、アルトは頭を伏せた。

「爺さん、それは確かに利点だ。しかし、何で俺にそれをくれる？その説明にはなっちゃんねえ」

そこから始まった静寂は長かった。時に老人からは殺気が発せられ、時にため息が漏れ、時折頭を激しく振った。

その目に、少しばかりの潤いが足された後、老人は小さく言った。

「俺とダチの半身だ。分かれさせたくねえ、それと、お前さんは・
」

再び静寂が訪れた時、アルトはその双刀を腰に差した。

「名は？」

「長刀・燎原りょうげん、短剣・天吼てんこう」

「ありがたく、頂く」

アルトが去ったその場所には、老人と酒瓶、そして一对の杯が残された。

「そつだ、ダチ公。あの若造はお前に似ている」

ちょうど2杯分残された酒を、両の杯に満たし、老人はその片方だけを飲み干した。

2杯の酒（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想等ありましたらよろしくお願いいたします。

分け抜け

半歩前に踏み出した右足は、猫科の猛獣のように撓められ、地を踏みしめる。

背筋から連なる軸足となった左足は、緩やかにその重みを支える。

背を軽く曲げ、両手は重力から解き放たれたように自然に、円をかたどる。

左腰に差した刀の前で、その両腕がさらに大きな円を描く。

水が高さから低きへ流れるように自然に。

そのままの形を保ち、髪の毛の一筋さえも揺るがない。周囲の空間ごとまとめて凍結させたかのように、その場には動きと言う物がなかった。

「師匠……」

その完成を感じさせる雰囲気は圧され、バイエルラインはどう声をかけてよいのかわからず、へなへなと小声で声をかけた。

当然のように無視されたので、かさかさとして左右に動いてもう一度声を掛ける。

「し……師匠……」

先ほどに比べれば、はつきりと発音しているのだが、相変わらず弱い。

「あゝ、師匠！師匠。し・し・よ・う」

激しく動きながら、今度はかりははつきりと声をかけたのだが、やはりアルトは反応を示さない。如何した物かと思ひ悩み、ふと気が付いてここまで引きずって来たケントワルドの事を思い出す。

両者共に気絶した2人だったが、短い期間とは言えアルトにしごかれていたバイエルラインの方が復活は早かった。そのままにして置くのもなんだが、背負って運ぶのも嫌だったので、襟首を掴んでここまで引きずってきたのだ。そうした所、動かなくなっている師を発見し、気配に圧された結果馬鹿馬鹿しい行動をとっていたのだが。

「そつりゃー！」

気合と共に、引きずって来たケントワルドを頭上へ持ち上げると、そのままの勢いでアルトに向かって放り投げたバイエルライン。

その次の瞬間、投げられたケントワルドの体は、しばらく地面を削りながらこっけいな格好で停止し、アルトの姿は軸線上から消えた。消えたアルトは、バイエルラインの両手を関節にとつて極め、首を締め上げる。落とすような絞め方ではないので、単純に苦しいだけの絞め技だ。

「寝惚けているのか、馬鹿弟子」

そのまま、絞める場所を首から頭部へ変えると、今度はかなり力を

込めて締め上げた。バイエルラインは声も出せず、ただ少しずつ息を外に漏らす。

そのまま、絞めたり緩めたりを数度繰り返した後、開放されたバイエルラインは、へなへなと力なくその場にへたり込んだ。

「褒めてやろうと思っていたのに、どういった了見だ。馬鹿弟子」

「こ…、声を掛けたっ、ぬお、ですが。えふっ。はあ、反応が無かったもので」

「何時もやっている修行の延長だろうが。何をそこまでして」

やや呆れながら、ケントワールドを拾いにいくアルトへ、バイエルラインが食って掛かった。

「全然違いましたよ！その雰囲気とか、受ける感じとか。それに、その剣は」

そう聞くと、アルトは不意を突かれた様に目を開いたが、直ぐにその顔を笑顔に変えた。普段中々見ない師の笑顔に、少しばかり動揺する弟子。

「な！何です？」

「いや、弟子の思わぬ成長というのは嬉しい物だと思ってな。もう一度気が変わった、褒めてやるバイエルライン、いい勝ち方だった」

そう言ってアルトが笑みを強めると、バイエルラインは不思議そうに尋ねた。

「でも、引き分けでしたよ」

「先に気が付いたんだろう。だったら勝ちだ。それに、技では劣っている状態から分けを得たんだ。大勝と言っても良い」

勝ちと言われた事には嬉しそうだが、技で劣ると言う事に関しては不満げだ。それに気が付くと、アルトは楽しそうにバイエルラインの頭に手をやった。身長ではバイエルラインの方が高い、ややあべこべな印象は受けるが、それはそれとして子弟に見える光景だった。

「今のお前には、基礎しか叩き込んでいない。だがな、もう少しだ、そこでお前は化けるぞ。一気に強くなる感覚というものを楽しみにしておけ」

そこまで言われれば嫌は無い。

バイエルラインもただ楽しそうに頷いた。

そして、漸く気が付いたケントワールドは、アルトに抱え上げられたまま、それを聞いていた。

悔しそうに、そして、羨ましそうに。

分け抜け（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
御意見御感想等お待ちしております。

あ、忘れてた。うっかり

「それで、その剣を譲り受けたと」

「ああ、これで用事は済んだな。明日にでも帰ろう」

俺は、詳しいことを話さず、ただ譲り受けたことだけを説明した。少なくとも、良い武器であると言っるのは一目でわかるし、バイエルラインにも異存は無いようだ。

マリツカさんが如何するかはわからないが、出来るだけ早く帰ろうと思っている。

「あれ？持ってきた酒が…」

荷物の整理をしながら、バイエルラインが呟いた。

そう言えば、酒好きのドワーフのために珠玉の酒を用意するのとこのとで、それを持って鍛冶師を懐柔する算段だったわけだが、結局出す間も無く話が進んだため、放って置かれた酒があったのだが。

飲んでしまった。

爺さんと。

しかも、貴族ですら中々手に入らない。すでに死去した名工の杯も置いてきてしまった。

爺さんと、その友のために。

まあ、いいか。

美味かったし。

現実逃避も兼ねて、身体力みを抜き、関節の可動域を少しずつ変えていく訓練をしていると、背後にバイエルラインが立っていた。

「飲みましたね」

「バイエルライン……」

「何でしょう。師匠」

「酒が飲み物である以上、飲まれるのは宿命だと思うが。違っただろうか？」

自分としては深遠な哲学的問いかけだったと思うが、バイエルラインには届かなかったようだ。

弟子との意思的乖離。

少しばかり寂しい。

その後、しばらくバイエルラインの説教と言おうか小言といおうかというものは続いたが、明後日のほうを向いて聞き流していたら諦めたようだ。

修行が足りんな。

精神的に。

主に、根気面で。

あ、忘れてた。うっかり（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

しばらくは、予約更新で行ってみようかと考え中。

でも、大体家にいる時間に更新しているので無意味かも。
楽は、楽なのかも知れません。

かつての顎　かつての牙

「お譲りになってしまったのですね」

去っていくアルト達を眺めている老人に、ケントワールドが声を掛けた。

老人は、にこやかに黙って頷いている。

「強かったから…ですか？」

今度は、黙ったまま首を横に振った。しかし、その顔には笑顔が浮かんだままだ。

先だって、アルトと戦ったときに浮かんでいた顔の陰はすっかり流れ落ちていく。つき物が取れたかのように、ただただ好々爺という風情だ。

「では…」

なぜです？とは、ケントワールドは続けなかった。それが自分でも説明が付かない事なのではないかという、確信にも似た予感があったからだ。仮に、何らかの言葉で説明されたからと言っても、それで納得がいくとも思えなかった。

「お前が望むなら、彼奴から受ければよい…とは行かぬだろうなあ。歳が近すぎる、それに、あの孺子は返しに来そうだな…」

「予感がする、と」

コクリ

静かに頷いた老人の顔はやはり穏やかだ。遠くを思うように、何かを待ちわびるかのように、しかしそれをさも寂しげに。

「私は彼に弟子入りします。恐らく、簡単には許してくれないでしょうが、そこは意地でも弟子になります。そして、あなたの元に戻った剣を受け継げるようになります」

淡々と話す。

そう、演技をするケントワールドに、目を合わせることなく老人が頷く。

「またお会いした時には、進歩した姿をお見せします」

段々と声に震えが伴ない、その拳は強く握られていく。

「ですから…ですから…その時まで、どうか御健勝を」

「ああ、楽しみにして置く」

振り返り、己の騎獣リアンに跨ったケントワールドは、騎上リアンを走らせながら叫んだ。

「今は、おさらばです！曾お爺様、どうかご自愛なさって下さい！」

朝焼けの中を駆け出していく若者達を見るかつての英雄の顔は、今

は何処までも優しい。

幾つかの枷を脱ぎ、1人の老人として在る今を、老人は喜びと小さな寂しさの中で生きる。

大陸の北方。激戦渦巻く南方とは違い、平穩の名に相応しい大国、ローデラシア。その大国に残る救国の英雄「竜の顎」。

竜の上顎、シエドバルト。

その生まれもつての剛力と、卓越した剣技を持って周囲に敵を寄せ付けぬ剣の結界を持つ極限の剣士にして軍師^{ぐんすい}。

竜の下顎、リユーイ。

双剣に炎を纏、呪式強化した速度で戦場を疾駆する最高の剣士にして、衆郡もろとも灰燼と化し泥濘のそこに沈める呪式の極み。

かつて乱を治め、現在の平穩を祖国に作り上げた英雄2人。

シエドバルトは、すでに天空の住人となり、地の底で眠っている。

そしてリユーイは、アルケオニムと完全同調した上での呪式開放により、呪を受けた。

呪式を使う誰しもが知っていながら、気付かなかった事、あるいは、意識的に見ぬふりをしてきた事。

呪。

なぜ呪式と呼ばれるのか。

かつて魔法と呼ばれたものから生まれた力、魔法の忌み子。

呪式。

呪、あるいは祝福。

それをどう受け取るのだろうか？それは人によって違うのかもしれないし、万人共通の、真理の様なものがあるのかも知れない。

しかし。

病に朽ち行く友を救わんと、放った呪式により受けた反動。

延命。

寿命の長化。

老化の抑制。

権力者の希求、王者の本懐、霸王の究極の野望、全ての人間が一度は望むであろう事。

その祝福を受けたリユーイは生き。

病の中でシエドバルトは死んだ。

リユーイは権力者の目から逃れるため、名を捨て亜人の里で隠遁し

ている。

かつて、その半身と武器を手に入れた場所。

半身の眠る地を離れ。

家族の下を去り。

尋ね来る者もない。

そして、半身と己の武器を手放した今。

名前を名乗らぬ老人は、1人静かに笑う。

かつての顎　かつての牙（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

一応、タグにもありますが。なんなんでしょう、このご老人方の多
さ。

老人の過去や、考え方を想像するのは物凄く楽しいです。

男はやっぱり50を越えてから。

今も昔も、私のヒーローは秋山小兵衛です。

登場人物紹介

登場人物紹介。

主に容姿や、身長体重などのデータを紹介。
今回は、主人公サイドの紹介。

アルト・柊・バウマン

いわずと知れた主人公、他の世界からのドリフター、元傭兵。
アイゼナツ八王国軍第一軍騎士将、少将。

身長176cm体重70kg
日に焼けた肌としなやかで細身の筋肉質の体を持つ。目は切れ長で、やや細い。世界一般から見れば童顔。黒髪、銅色の瞳。肩口と右の二の腕に刀痕、腰に銃痕が残る。両耳に紅金のカフス。服装などには機能以上の事を求める事は少ない。酒好き。

フレデリック・ウルト・アイゼナツ八

アイゼナツ八王国、元王子、現国王。軍権上は元帥。愛称はフレッド。

身長180cm体重72kg年齢21歳
金髪碧眼、柔和な顔立ち。王族の義務としてそれなりの武術経験はあるがあまり向いてはいない。実父の悪行横暴に叛旗を翻し国家を継承。その意思の強さと行動力、そして外見から最近民間でファンクラブが発足したらしい。王族らしい格好が苦手で、いまだに正規の王冠は国葬と戴冠式以外では被っていない。略式の物すら面倒な

ので、もっと簡易な物にしようと画策中。酒は弱い。

ミリアリア・エル・アイゼナツハ

アイゼナツハ王国、王女。フレッドの妹。愛称はミリア。

身長167cm 体重56kg 年齢18歳

金髪碧眼、柔和な顔立ち。フレッドと共に義拳に参加するなど、行動力は高い。落ち着きがあつて人から頼られるが、反面実年齢よりも上に見られがちなのが悩み。男性に対してや恋愛に対しての興味は薄い様子、反面同性に対しては周囲が驚くほど好意的な面もある。学生時代は後輩に限らず多くの年齢層の同性から慕われていた。酒は弱い。

セシリエル・バイエルライン

アイゼナツハ王国、男爵家次期当主。アルトの弟子第一号。

アイゼナツハ王国軍第一軍第一騎士団長中佐。

身長182cm 体重80kg 年齢20歳

赤毛のやや癖のある髪、薄い黒の瞳を持つ。肩幅の広い青年。元々フレッドとは身分を越えた友人だったが、アルトに突っかつた結果負けて弟子入りする。セシリエルと言う名前は女性名なので、そこにコンプレックスがあり名乗ろうとしない。普段は家名であるバイエルラインのみを名乗っている。マリーン・オプライエンは叔父に当たり、元師匠でもある。力を有効に利用するためグレイブを用いている。メイリンに気がある。酒は強いが、好きではない。

アリシア・ミューゼル

アイゼナツ八王国、フラン冒険者ギルド支部長。

身長142cm 体重56kg 年齢43歳

メイリンの母、かつては将来を嘱望された冒険者だったが、結婚を気に引退、同時に要請を受けフランのギルド職員へ。その後しばらくして当時の支部長が引退したため後を継いで支部長へ。エルフの血が混ざっているためと本人は言い張っているが、それだけでは説明が付かないほど若く見え、さらに言えば幼く見える。外見だけで見れば娘よりも若々しく見える。アルトの祝式の師匠であり、アルトにとっては頭が上がらない人物。夫とは死別。

メイリン・ミューゼル

アイゼナツ八王国、国学院学院生。アリシアの娘。

身長157cm 体重52kg 年齢17歳

アリシアの娘、国学院の学生だったがフレッドの起こした義拳に参加、そのまま崩し的に彼らと行動を共にしている。学院のほうも放置中。なぜか最近増えてきた、子供の世話を王城内でしている。元々はミアと友誼が深く、その関係からである。ミアが学院に在籍していた時分には、周囲がやかむほど仲が良かった。現在の職業は王城内保育さん。酒は飲めません。

バルヴェルホーン・リヒテンシュタイン

アイゼナツ八王国宰相、元国学院学長、フレッド・ミアの父の元教師。

身長170cm 体重63kg

国中の要職人員は殆どが教え子と言つ化け物爺。年端とのだが腰も

曲がっておらずかくしゃくとしている。豊かな白髪と長い白髭を供えた好々爺。現在宰相として事務方を総裁中、小国にはもつたいないほどのお方。現在国をまとめているのは間違いないこの人。お酒も好き。

ヴェルギエール・シュトラウス

アイゼナツ八王国騎士総将、元南方方面留守、親ばか將軍。

身長184cm 体重75kg 年齢58歳

白銀の長髪と口ひげを持つ人物。国内において兵種の管理と兵站管理上における管理職改革、言ってしまうえば、軍内新規階級導入を目論んだ為冷や飯を食わされていた將軍。革新派。貴族に受けの悪い反面、軍人からの評価は高く、シュトラウス私設軍とも言える、彼に心酔する部下を多く持つ。しかしながら、彼自身は一個の軍人である事以上は望んでいない、武人ではなく職業軍人。本質的には、家族と愛と恋に生きる男。目下の愛情は、愛妻シンシアと愛娘ブルミエールへと向かっている。娘がアルトの副官になったので最近ヤキモキ。お酒は嗜む程度。妻は酒豪。

マリーン・オブライエン

アイゼナツ八王国軍中将、兵站管理官。

身長188cm 体重70kg 年齢46歳

長い銀髪を後ろに流し、細い目を緩やかな笑みで飾った温和そうな男。紳士で優しい長身のおじ様として若年層の女性からの人気は高い。何気に軍内で一番もてるのではと言う話もある。独身。恐ろしいまでの計算能力と推察能力、予知的ともいえる洞察力を兼ね備えたハイパー軍務官。同時に高い能力を備えた、対暗殺者暗殺者、バ

イエルラインのかつての師。体に技に軍政から人員管理、物資の管理から国家予算の編纂まで、何でもござれの完璧超人。お酒も強いよ。

シュルツ・コーエンハイム

アイゼナツ八王国軍、第一軍特別管理、大佐。後、宰相付き特認武官。

身長182cm 体重78kg 年齢25歳

騎士道一本やりの武人。銀髪碧眼の騎士絵から抜け出してきたような丈夫。ややお堅い性格。頑丈な手甲と片刃の鍔なしサーベルを武器にしている。現在はアルト不在のために第一軍を代わりに纏めている。その後は、宰相付きの武官として、護衛をしつつ政治を学び、後々はマリーンの後釜辺りにとシュトラウスやマリーンは考えている。将来性抜群。アルトに対して、単なる畏敬以上に心酔している節がある。出来れば弟子入りしたい様子。婚約者あり。お酒は下戸。

667

プルミエール・シュトラウス

アイゼナツ八王国軍第一軍副官、大佐、軍のマスコット。

身長148cm 体重56kg 年齢24歳

オレンジに近い赤毛は母譲り、小柄な体と全体から受ける丸っこいと言うよりは小動物的な印象から軍内女性仕官のマスコットに。父親であるヴェルギエールの苦肉の教育法として、騎士精神を叩き込まれた結果、恋愛などには非常に奥手に。自身はクールビューティな女性を目指しているが、その背伸びをしているところも含めて周囲からは可愛らしいと思われる。実際には事務能力は非常に高く、呪式能力も高い。現在、軍内の呪式使用者の中でも高位に位

置する優秀な軍人だが、見た目ではアリスアに通じるところがある。童顔で幼い小動物。お酒は強いです。これも母譲り。

ブリストル・ローデンハーグ

アイゼナツ八王国軍騎士総将副将、中将。

身長167cm 体重80kg 年齢54歳

首筋に大きな傷痕のあるこげ茶の髪を持つがっしりした体格の男。シュトラウスが軍内での勢力をなくした後南方を纏めていた。厳密に言えばシュトラウスの傘下の将ではないが、騎士将閣員との関係が深い。また、貴族との関係性が少なくな、緩衝役としての面も持っている。本人はあくまでも軍人。

レーベルン

アイゼナツ八王国軍兵站官付き事務官、特務大佐。

身長196cm 体重121kg 年齢32歳

マリーンの事務面の弟子に近い立場の大男。筋骨隆々大きな顎に厳つい顔といういかめしい姿だが、戦いは苦手。言ってしまうと草食動物。現在、いきなり人が引き抜かれた南方で残務整理に追われ中、その後はさらに東方へも回ったあと王都へ帰還予定。帰還後は宰相付きになる予定。

ゲルムハルト・バーゼル

アイゼナツ八王国軍第2軍騎士将、少将。

身長182cm 体重79kg 年齢30歳

茶色の瞳と赤味がかった茶の髪を持つ美青年。既婚。結婚後しばらくは奥さんに脅迫状が来るくらいもててました。優しいんですが、それが優柔不断に繋がったり、他人に気を持たせたりする型の人間です。男の敵？酒は大好きです。ウォーリックに酒が許されたとき、アルトと一緒に断られたうちの1人。

キュリア

アイゼナツ 八王国軍第2軍騎士将副官、大佐。

身長168cm 体重56kg 年齢27歳

元冒険者から軍属に入った人間としては珍しく事務向き。呪式が体質的に使えない（非常に稀です）にも関わらず、努力と機転でのし上がってきた人です。女性としては少々大柄ですが、冷たい印象と相まってファンは多いです。プルミエールが目指している女性像に近いですね。プルの憧れお姉さんです。武器はスライレット錐剣刺突武器です。お酒は相当行けます。

マルイレル・コーデローム

アイゼナツ 八王国軍第3軍騎士将、少将。

身長170cm 体重55kg 年齢29歳

黒髪黒目の珍しい容貌を持つ。ゲルムハルトと双壁と呼ばれるほどのハンサムっぷりを発揮しているが女性。アイゼナツ八王国内最大派閥のお姉さま。普通に男性が好きなんです、中々良い人とめぐり合いません。と言いますかめぐり合う前に周囲の女性が芽を摘んでいる場合が殆どです。アルトは、久々に出てきた同年代の男性で同じ髪色を持つていることもあって気になっています。基本的に強い男性が好きなんです。武術は盾と短めの直剣を使った護衛を主

とした技を使います。護衛向き。下戸です。

ノンリエッタ

アイゼナツ 八王国第3軍騎士将副官、大佐。双子の姉。

身長159cm 体重SEC 年齢27歳

長い直毛をワンリングスにして右側で分けている。髪色は銀に近い。妹に反して文官向きな性格と能力を持っている。多くの場合は止め役としての立場をとる。妹に振り回されきみ。マルイレル親衛隊の会長のような立場にある。お酒は飲めないふりをしています。

ノエラ

アイゼナツ 八王国軍第3軍騎士団長、中佐。双子の妹。

身長159cm 体重SEC 年齢27歳

姉とほぼ同じ容姿をしています。髪分け方が逆で左分け。武官向きの性格、能力で、突っ走り気味。姉と比べればマルイレルに対する感情は穏やかで、いい人が見つかる事も吝かではないと思っている。元気娘。現在教導官も兼任。お酒は体質的に下戸。

ウォーリック

アイゼナツ 八王国軍第4軍騎士将、少将、常酔將軍。

身長153cm 体重82kg 年齢38歳

ドワーフのような低い身長に太いからだ、短い手足の怪力を誇る猛戦士。体に似合わず騎乗が得意で騎兵隊を指揮、顔に似合わず事務から兵員管理、物資輸送まで器用にこなす、ドワーフとの相違点は

髭を生やしていないこと。フレッドから、常如何なる場所でも飲酒する事を許すという言葉を取っている。結果として、常に飲んでいゝるが、酔う事による不利益は一切受けない異常体質。酒のコレクシヨンが多いため、アルトが狙つてゐる。

クーンルール

アイゼナツ八王国軍第4軍騎士将副官、大佐。

身長176cm体重67kg年齢32歳

針金のように細いからだ、それに反して広い肩幅を持った男。くすんだ金髪に赤味がかつた瞳の男。上司と同じく騎乗に長け、特に騎馬の調練に才能を発揮する。既婚。

ジヨレラ・パトリシア

アイゼナツ八王国軍第5軍騎士将、少将。

身長164cm体重56kg年齢29歳

紫に近い癖のある巻き毛を腰まで伸ばした妖艶な女性。実はキュリアに剣を勧めた人物で、本人は刺突を主とした細剣を使用。しながら、実は足技を主とした打撃系の戦いを得意とします。対人戦闘のみに特化した戦士です。

お酒は大好き。色気むんむん姐さん。

タラップウエル

アイゼナツ八王国第5軍騎士将副官、大佐。

身長187cm体重86kg年齢28歳

片耳が無い、赤毛に茶色の瞳。男としては稀な純呪式師です。過去の事故により、腰に障害が残り動きが阻害されています。片耳がなくなつたのもそのときの事故の所為。非常に生真面目な押さえ役の人です。苦勞人。

リツパー・シャンプール

アイゼナツ八王国軍第6軍騎士将、少将、伯爵。

身長172cm 体重79kg 年齢53歳

口ひげを生やした頭のやや薄い男。元々近衛騎士団の団長だった男、貴族としてそれなりの爵位と縁故をもつ、ブリストルと同じく他の貴族との緩衝役。本人は、あくまでも国家に忠誠を尽くしている、逆に言えば王族であろうが大貴族であろうが気にしない反面、王からの命令が無ければ何もしない。言われればするけど、言われなければ不動。立場上、他の方から浮いています。

ベリオラ

アイゼナツ八王国軍第6軍騎士将副官、大佐。

身長171cm 体重56kg 年齢37歳

レーベルンの姉。同じく大柄な体を持つているが、やはり事務向き。彼女がリツパーと組まれたのは、挙動が礼儀正しく貴族との折衝に向いている事、式典などに出席する事を苦にしないことなどが上げられる。リツパーと王都防衛と言うよりは、予備役の管理と後方の観察を主務とする。既婚2児の母。

シーラ

身長132cm 体重SEC 年齢恐らく9〜10歳

マウゼルの街から帰る途中、アルトとバイエルラインによって凶賊から救出された少女。その際両親は死亡、現在メイリンが保護している。殆ど喋らない。

リル

身長120cm 体重SEC 年齢7歳

家族を貴族の戯れで殺された娘。しばらくの間栄養失調状態だったため、年齢よりは小さく見える。最近は漸くふっくらしてきたが、それでも幼く見えるのは生まれつきだろうか。少しばかり、テンポのずれた話し方をする。現在メイリンの保護を受けている。

登場人物紹介（後書き）

思ったよりも多くて大変だった。

まだ居るんですけどね。ウィルキンズさんとか、他にもちらほら。

プルの日記。白根の月編。(前書き)

アルトの副官、プルミエールさんの日記です。

ブルの日記。白根の月編。

白根の月、初日。

マリーン様より辞令を頂きました。

早急に王都へ帰還、新しく編制される軍の將軍の補佐へ入るそうです。將軍の副官扱いになるとのこと、父のかねてからの願いであった軍内特別階級制が実施されたそうで、それに組み込まれるそうです。

どんな方の下に付くのかはわかりませんが、この年齢にしては大抜擢。

頑張らないといけません。

同月、4日。

王都へ帰還しました。久しぶりに王城へ上がりましたが、今まで行った事もない奥へと通されました。このたび宰相閣下になられたと言う、リヒテンシュタイン翁と面会し、その後、私よりも若い武官の方に案内されて騎士将閣下の下へ行きました。

後で聞いたのですが、その若い武官さんは、あの有名なバイエルラインさんだったらしく、驚きました。

初めて会った騎士将閣下は、黒髪黒目が変わっている以外は、ごく普通の若者と言った感じ。

もしかしたら私よりも歳が下なのではないかと言うくらい。でも、仕事はとても律儀にこなす方でした。決して早いわけではありませんでしたが、真面目に延々仕事をなさっていました。

その後、父が乱入して…恥ずかしい思いをしました。

せっかくの初日なのに、あんなのは酷いと思います。恥ずかしくて部屋から逃げ出しちゃいました。

家に帰ってからも、延々父に心配されました。困ります。

同月、5日。

今日は、各騎士将、各副官を一斉に集めた初めての会議だそうです。他には、教導官であるウインスコット様オルラウ様ノエラ様、それからシュルツ様も出席されていました。

何よりも国王陛下と宰相閣下、それにミリアリア王女殿下が出席され、私は初めてお顔を拝見したのですが、とても優しそうな方だと思いました。かつては、お爺ちゃんと呼んでいたリヒテンシュタイン翁ですが、今となつては宰相閣下、気安い態度はご法度ですね。この会議で驚いたのは、フレデリック国王陛下がウォーリック騎士将閣下にかかる場所での飲酒も遠慮の必要はないと仰つた事です。聞いた事も無い破天荒なお達しですが、ウォーリック様は感動しておられたようです。

私の上官である、アルト様の他、ゲルムハルト様、ジヨレラ様、ベリオラ様も同様の権利を希望なさつておいででしたが、それは許されませんでした。

私も反対しましたが、ミリアリア王女殿下と、その御友人であられるメイリン様が強硬に反対なされましたことに驚きました。昨日から、驚いてばかりです。

同月、6日。

今日は、朝から執務室につめていました。

アルト様は、あまり硬い呼び名を好まれないらしく、呼び捨てて構わないとまで仰っています。とても難しいことです。シュルツ様に習つて、階級でお呼びする事にしましたが、どうも馴染みません。アルト様は、居たかと思えば居なくなり、居ないのかと思えば、い

つの間にか居たりします。仕事の合間合間に、教導官の方々を指導したり、バイエルラインさんに修行を申し付けたりしているようです。ですが、私には何時部屋を出入りしているのか一行に判りません、軍人としては恥ずかしい限りです。

シユルツ様に伺った限りでは、武勇で名の通ったシユルツ様でもまったく敵わないほどアルト様は強いそうです。ちよつと想像がでないような事を話していただきました。同じく有名なバイエルラインさんを弟子にしているようで、ちよつとうかがい知れない方です。

何より驚きましたのが、執務室にフレデリック国王陛下がお1人でいらつしやつた時、アルト様は、国王陛下を愛称で呼んでいました。私が言うのは不敬な事かもしれませんが、兄弟のような感じで、とても仲が良さそうです。

本当に、うかがい知れぬ方、としか言いよつた無の方の部下になったものです。

同月、7日。

毎日送られて来る書類の量が、本当に多いです。

事務仕事には、少なからず自信を持っていましたが、それでも大変です。

何よりも、書類の中に、今まで無かつたような内容が多くあり、一々アルト様に確認を取らなくてはならないことが多く、手を煩わせてしまいます。

情けない事です。

同月、8日。

本日、アルト様が「一応」と言つて、私にも訓練の様子を見せて下

さいました。

シユルツ様と、バイエルラインさんが真剣を持って斬りかかるのを、素手で全て受けていました。お二人とも、呪式まで使っていたのに、アルト様は呪式も無しで軽々と。

人間にあんな事が出来るなんて、伝説だけの事かと思っていました。武術面は、どうにもならないと言われた私とはえらい違いです。

最近、驚いてばかりです。

本日、ミリアリア王女殿下がりヒテンラーデ公国へ赴かれました。先王陛下の喪に服するための旅を行われるそうです。

同月、9日。

明後日から、しばらくアルト様が王都を離れるそうです。

10日と経たずに戻ると仰っていました。

聞く所によると、武器を手に入れに行くそうです。他の騎士将の副官、新しい階級で大佐と言うそうです、私もそうなのですが、まだ実感は余りありません。その方々に聞いた話では、ありえないほど強い者達が敵に回るかもしれないので、アルト様も心配の様子とのこと。

あんなに強いのに。

少し心配です。

同月、10日。

今日から、アルト様がしばらく居られません。

仕事に関しては、シユルツ様と2人で何とかこなしています。

しかしながら、父がいちいち顔を見せに來ます。

シユルツ様と2人きりになったから心配って、私はもう24歳なのですが。軍人だから言われませんが、貴族や市井の娘だったらとくに結婚して、子供の2人や3人居てもおかしくない歳なのですが。

父には参ります。

同月、11日。

今日は平和でした。

昨日、母に相談した所、今日は父も来ませんでしたし、書類も問題なく片付きました。

毎日こうだったなら楽なのですが。

同月、12日。

今日も平和は昨日と変わりません。

今日は、少し暇が出来るほどでした。ですから、他の方からアルト様の話を聞く事が出来たのですが、不思議に思います。

兵士の皆さんから、鬼と呼ばれているとか、貴族の方を挑発し、惨たらしく殺したとか。

その姿と、執務室で真面目に仕事をしながら私を気遣ってくれている様子や、バイエルラインさんやシュルツ様と、楽しげに笑われている様子が一致しないのです。

不思議な方です。本当に。

同月、13日。

昨夜は父に、そして、今日は僭越ながら宰相閣下に尋ねてみました。

「アルト・ヒイラギ・バウマン騎士将閣下とはどんな方なものでしょう?」と。

結果は良く分かりませんでした。

しかしなら、人物評については、何時も当らず触らずといったお2人が、あえて語るのですから、やはりひとかどの、と言うことでしょうか。

それに、あの宰相閣下がアルト様からの紹介状を持っていると言っただけで、楽しそうに市井の人間に直接会うのですから、並々ならぬ信頼を得ているはずですよ。

少なくとも、私は良い上官をもったのではないのでしょうか。

ブルの日記。白根の月編。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

御意見御感想等いただけましたら嬉しく思います。

ガタ漫 8 半分くらいは愚痴

ラ「ラッセル」

バ「バウマンの」

ラバ「ラバウル・ズバアーム」

k「第2章が一応終幕。副題は準備編」

ラ「本来は、全部第1章に入るはずだった物が・・・」

バ「丸々2章使っても終わらず、と」

k「そうですね、敵方の情報はサラッと言っただけですし」

ラ「すでに忘れかけられてるキャラもチラホラ」

バ「シーラとかリルとか、そもそも何ででてるんだと言う様な状態だしな」

k「あの2人はねえー。早く出すぎた。本来だったら、シーラをもつと後に出して、もしくはリルはもっと早く出て、アルトのトラウマを決る筈だったんだけど。扱いきれなかった。後は伏線回収のときまでは雌伏の時期なんだよね」

ラ「伏線？」

k「改訂前の状態から読んでみると、分からなくも無いのかなあー
といたくらいかな？最初あまりにもバレバレな伏線で、ああそ
うよね、みたいな感じになったから隠したんだけど」

バ「隠しすぎた…と」

k「そーね。ワンチャンスありませんでしたね」

ラ「まあ、どうであれ第3章に入るわけだ。で、どうなるのよ？」

k「話の進み方が早くなりますね。多分」

バ「それは希望だな」

ラ「当初予定、半年とか言ってた時期が懐かしいな」

k「そんなものは遙か過去ですよ。途中で色々寄り道してるし」

バ「何作品書いた事やら。掲載してない作品のフォルダが21個。
暇人だな」

k「最近友達も忙しくてねー。夜中に酒をちびちびやりつつ他にや
る事がないのよ。ゲームつてもあまり趣味じゃないし、本を買い
続けるほど金もないしね」

ラ「速読せずにゆっくり読めば？」

k「言うほど早くないけどね。それでも司馬遼太郎先生の「竜馬が
ゆく」全巻を3時間くらいで読んじゃうし、並みの文庫本なら1冊
10分掛からないから時間が潰せないんだよ」

バ「1千円払って本読んで10分潰せないのは、対費用効果薄いな」

k「あの量の本を移す場所が無いから実家から出れないという噂もチラホラ」

ラ「自分で言うなよ」

k「本日も実家からお送りしました」

ガタ漫 8 半分くらいは愚痴（後書き）

愚痴ですね。

申し訳ない。

次話からは、第3章入ります。

噂話

人間とは不思議な物で、初めてした経験ではその抵抗は大きいのが、反復する事によって、過不足無く行えるようになる。

何を言いたいかというと、アルトの拷問を受けた教導官達の、地獄のような訓練も、10日も続ければ、何とか消化できるようになるのだ。

初日は、勿論完遂する事もできず、あまりの運動量に睡眠すら取れない有様だったが、3日目には全ての項目を終了させ、10日目には訓練後の飯が美味いとまで思えるようにはなっていた。

しかし、だからと言って楽な物では当然無い。

その訓練内容の考案者、アルトの名前は、貴族にたいした仕打ちなど相まって「鬼」と同義だ。

ちなみに、この世界における鬼とは、地中に王国を持ち、攫ってきた人間に拷問を受けさせ楽しむ地獄の獄長。魂の拷問吏。肉と血を糺り潰す者。などと言われる伝説で、実在すればS級か墮天になるうと言っ穢れ物の筆頭と言ってもいい。実在すれば、ではあるが。

両肩から長大な黒くねじれた角を生やし、頭には火炎の燃え盛る鬼。

この世界に生きるものならば、小さい頃に親から「良い子にしないとい、鬼に攫われるよ」と脅かされた事が在る。そういつた存在だろう。

その、鬼と比べられるアルトだったが、現在は王城の食堂で、久しぶりに飯を食っている。

基本、酒以外の食生活にたいしたこだわりは持っていないアルトだが、この城の食堂で出されている「ローデラシア風汁そば」に、大いにはまっている。

ジャガイモの粉を良く練り、幅広に切った麺を、薄い塩味と野菜でまとめたもので、少し汁にとろみが付いている。

この地方の料理ではないのだが、たまたま食堂の調理人に作り方を知っている者がいたらしく、冗談半分を出していたところ、たまたま食べたアルトは大いに気に入った。

名前は知れ渡ってはいるが、顔まで詳しくは知られていない。もつとも、黒髪黒目の見知らぬ男と言うだけで知れる可能性も無ではないが、今のところはそう言った事も無い。

食堂側も、むしろ穏やかそうな物腰から新入りの文官か、もしくは最近できたと言う軍事務官だろうと思っていた。

そう言った訳で、久しぶりの汁そばを楽しみながら、胸元に忍ばせた酒をちびりちびりとやっていると、少しばかり面白い話が聞けた。それなりの腕はありそうだが、渡されてすぐと一目でわかる真新しい服を着込んだ新兵が、同じく入ったばかりと思われる兵士と話していた。

アルトの立てた訓練を一日でも経験すれば、服はよれるし血の1ヶ

所2ヶ所はすぐに付く。更の服というだけで、今日来た兵士だと知れるのだ。

「それじゃあ、やっぱりマウゼルのほうもダメか」

「ああ、傭兵ならともかく、冒険者はな。依頼もないし、あつたとしても割が悪いものばかりだ、喰っていけねえよ」

「俺も、傭兵に鞍替えしようかと思ったんだが、経験もないしな」

「ああ、それよりは、国に抱えてもらえるんだから、こっちの方が良いと思ってな」

「俺もだ」

傭兵ならともかく？国内の傭兵ギルドは、殆ど金に転んで武器の供出から、人員の確保まで躍起になってやっているから、逆に傭兵のほうを食べないはずだが、なぜだ？と、心の中だけで思う。

国も、傭兵としては雇わない事は公にしたし、傭兵だった者も大勢一般兵士として訓練でもまれている。

現状、在野にある傭兵は、よほど腕が悪く一般兵士の選にすら漏れた者か、かなり高位で傭兵団などを結成している者か、そのどちらかだろう。

腕の悪い者が美味しい話にありつくとも思えないし、傭兵団などの多くは国外に出してしまった。

それがなぜ？ということだが。

「と、言うわけで、調べねばならん。何らかの動きがあるならば、対処せねばならないしな」

「師匠、また一般食堂で酒を飲んでたんですか」

「騎士将、お願いですから上級食堂で食事をしてください」

上は勿論バイエルライン、続いたのはプルミエールだ。

シュルツはすでに宰相付きにして、リヒテンシュタインの仕事を手伝っている。弟子入り志願してきたケントワルドは、一緒にシュルツの下につけてある。2人揃って、後々鍛えるという事で、ケントワルドはしぶしぶ、シュルツは大喜びで宰相の元へ向かった。

「上級食堂の食事は、お高くとまっていますどうも…それに、一般兵士からもっと人材も拾ってこなければならないし、もうしばらくは続けるよ。それよりも、傭兵の話だ」

人材確保といわれれば、2人のほうも強くは出れない。せめて酒だけは如何にかしたらどうだろうと思わないではないが、今は傭兵のほうが必要だ。

「国内だけでも、常に7から10の傭兵団があったはず。大部分は国外に出てほかの地域に行きましたが、残っている者もいるということでは無いでしょうか？」

「貴族の一部が、私兵として傭兵を望んでいるという話は前々からありましたよ？そのあたりのことでは」

「確かに、傭兵団の1つや2つ残っていてもおかしくは無い。しかし、だからと言って景気は良いはずがないし、それは貴族の下に留まっている者も同様だ。足手まといにしかならないような者でも、集める奴は居ないわけではないだろうが、厚遇するとは思えない。傭兵の中でも、そこそこ使えて個人でやっていた者は、殆どが兵士として今城にいるわけだしな」

「……うーん？」

噂話（後書き）

汁そばのイメージは刀削麺です。
美味しいですね。

読んで頂きましてありがとうございます。
ここから3章な訳ですが、なるべく早く更新していただけるように頑張ります。

実験部隊（前書き）

久しぶりになります。

新作の方に力を注ぎ過ぎておりました。

しかしながらこの後のお話が個人的に納得行かないので、推敲の日々でございます。

下手の考え休むに似たりとも申しませんが、今しばらくのご猶予を。

実験部隊

人が飛ぶ。

こう書くと、少しばかりおかしく感じる。

人が跳ぶ。

こちらならば、ああ跳ねているんだなと、すぐに想像できる。しかし、飛ぶの場合、それは何かに乗って、としか想像ができないだろう。

しかしながら、今、まさに人は飛んでいた。

「ただいまの結果！おおよそ250フィール（ヤードと近似）」

「角度変更目盛1上、次の者、所定位置へ」

「了解！角度変更目盛1上方へ、次の者、所定位置へ！」

アルトの号令に、部下が復唱する。ギリギリと音を立て縄が巻かれ、籠の中に唇までも真っ青にした兵士が乗り込む。兵は肩を抱えて震えているが、周りに居る兵員は同情するよりも、今後自分に降りかかる恐怖のことで頭がいっぱいで顧みる事ができない。

「方向、先に同じ、発射点呼開始」

「了解！点呼開始、5・4・3・2・1・発射！」

解き放たれた重量は、重力の命じるままに下方へ移動、それに繋がる巨大な木材は、支点を境に跳ね上がることになる。その力が集約する場所、すなわち先端から吊り下げられた籠は激しく上へ跳ね上がり、その力を利用して質量を前に飛ばす。

平衝錘投石機と呼ばれる、攻城兵器の実験をアルトは行っていた。

アルト主導で行われている兵器開発案その1で、槌子型投石機と呼称している。ちなみに、木材の反発のみを利用した小型投石機も開発中で、そちらは開発案2、弾性投石機と呼称している。

「ただいまの結果！おおよそ240フィール」

湖面に、盛大な水しぶきを上げて哀れな兵員は水没し、予め待っていた小船が救助に向かっている。

今回の実験は、幾つかの軽い規則違反者に対しての懲罰を兼ねて行われた物で、アルトの恐ろしさを兵員一同が再び肺腑の奥まで教え込まされた。

一応、怪我をしない様に籠ごと飛ばしているわけだが、その恐怖たるや。筆舌尽くしても表せるものではない。

ケントワルドのような、本当の少数を除き、空を飛ぶなどというのは妄想空想でしかない。その様な状態に無理矢理置かれ、しかも見た事も無いような機械で、水面に向かって放り投げられる。彼らにとって、目の前にいる分だけ、伝説の鬼よりアルトのほうが恐ろしい。

そんなアルトに調教されて、第1軍の面々は世界に存在しない工兵・砲兵への道をひた走っていた。ウォーリック率いる4軍はすである程度経験蓄積のある騎兵に、そして、対外的な意味を含めて第6軍には儀礼を専任させている。

元々近衛の騎士やある程度戦歴のある貴族の子弟を無理矢理押し固めたただだが、彼らは自らを持って精鋭と思っっているようだ。

無論、現実には全部隊中最弱なのだが、他の部隊から見ればもっともぬるい訓練にですら、ついて来られない者が大半だ。

しかし、放り出すわけにもいかないので痛し痒しな部隊であるのが実情だろう。

放り出せないというのも、別に人道的な見地からではなく、貴族の一派を人質に取っているからに過ぎないが、それを感じている者は今は少ない。

「続いて、破裂弾実験準備！」

火薬を使用した破裂弾に点火し、縦に深く掘った穴に落とし込む訓練を行う事は、予め説明してはあったが、数日前まで一般人だった者も混ざっている部隊としては、異様に動きが良い。

精鋭と言っても良い動きをしている。

恐怖というのも、役に立つ事が多い物である。現在、アルトは第1軍騎士将、軍事改革計画執行者、教導官筆頭、王城守護、科学技術開発長官など、多くの役割を担っている。

それらにおける部下の殆どを、アルトは主に恐怖によって統制している。状況が変われば、他にも方策はあるのだろうが、現状ではもっとも手っ取り早いし問題がおきにくい。副次的に、皆を気遣うフレッドやシュトラウスに人気が集んだりもするので、アルトとしても良い方向だ。現状、手遅れではあるのだがアルトとしては目立ちすぎない位置にいたい、それに求心力と言うのは一点に集中したほうが堅固になる。

そう言った事もあって、アルトは部下に対しては鬼と言う役を演じている。

もっとも、緊張と恐怖で体を壊している者も居ないわけではないのだが。

実験部隊（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。

御意見御感想等いただけましたら幸いです。

上でも書きましたが、新作を出しています。まだ短いのですが、お暇な方居られましたらどうか一読の程を。

本人的には、長い事暖めておいた話なので、大事に書いていきたいと思えます。

勿論こちらもですが。

状況報告並びにお詫び

さて、拙文ながら少なくない評価を頂いておりますドリフトでございますが、現状書けておりません。

理由を挙げるのでしたらば幾つかあるのですが、一番大きな物は「流行り物を書いてみようと思ったけど無理」と言う事です。

異世界トリップ物は、「小説家になろう」サイト内は勿論、そのほかのネット小説でもとても良く使われる設定です。

これだったら、ある程度読んでくれる人が居るかなと思って書いて見たらば、案の定結構な人が読んでくれました。

しかしながら、何とかテンプレートな状態に乗せよう乗せようとした結果、私の中でほぼ完全に破綻しました。大まかなラインは流行りに乗せたい、でもある程度は個性を出さなくてはならない。その状況が、まず自分の考えありきではなかったことが問題だったと思います。

ここから先の話が、如何考えても「重い」「キツイ」「痛々しい」何よりも「書いていて面白くない」少しの改訂や手直しでは、どうしようもない所に内心至っております。

それから、話の締めが如何考えても皆さんに受け入れられると思わない。

恋愛も絡めようとした結果として自分的に挫折中。

何かはつきりとした目的や敵も居ない。と言うか、それを倒しても話の締め様が無い。

本心語れば、エンディングが「これは何処のトミノ？」と言う感じで人が死にまくり。

「ハッピーエンド？無理だね」と言うもの。

ただらだと、後三百話、字数で言えば80万字位書いて尻切れトンボで終わってもいいのでしょうか、それでは私のモチベーションが持たない。

そう言った訳で、申し訳ありませんが、大幅に書き直します。

もはや改訂ではなく、ほぼリメイクになると思います。

何時になるかは分かりませんが、そう言った形で復活させようと思っています。

考えているシーンや、使いたい情景、本当はもっと出したいキャラクターなどが今のところからの継続では出せないものがあまりにも多い。

此方は此方でそのまま残しておきますので、別の話としてもう一度スタートと言う形にしようと思います。

しばらくは、「獅子竜」のほうに力を入れて書いていくつもりですが、ドリフト改の方も書き始めてはいますので、秋ぐらいにまとめ出せれば良いなと思います。

少なくとも方々に読んで頂いているのに、真に自分勝手な言い草ではありませんが、趣味として行っている以上、まず自分が楽しめない事をする気が起こらないんです。

そう言ったわけですので、どうかご了承いただきたく思います。

温かい感想書き込みや応援などをしてくださった方には非礼かとも思いますが、自分の書きたいものを書いていきたいがゆえです。そのメッセージや感想に励まされる事あまりにも大きく、今まで半ば無理矢理続けてきました。

しかしながら、そのような状態で書いたものを読んでいただく事の
ほうが不義理なのではないかとも考えるようになったのです。
言えた義理ではないかもしれませんが、今後もよろしくお願いいた
します。

お知らせと小話（前書き）

お久しぶりでございます。

幾らか書き溜めも出来ましたので今晚よりドリフト改投稿してまいります。

正式なタイトルは「Triift ドリフト DRiift」です。

重ねただけですね、すみません。

別の話として書き直していますので、作者の投稿小説一覧の所から読んでいただければ嬉しいです。今後は此方では更新いたしません。新作の方をお読み下さい。

ちなみに後から言われると心が痛いので先に言っておきますが、平野耕太先生の「ドリフターズ」の存在は書き始めてから知りました。友人数人から突っ込まれましたが、けしてそこから引つ張ってきたとかではないです。しかし、英語を入れるとよりそれっぽくなっちゃいますかね？しかし、独語読みだとなんのこっちゃってなるような気がしましたので。

更にはなんだかよく分からない小話を描きましたのでここで発表をば。

時期的にはドワーフの里に行く直前くらい。

メインキャストは誰も出てきませんが、友人の話を聞いていて思いついたお話をとりあえずどっぞ。

お知らせと小話

王城の女官達三人の会話。

X「でさ、最近雰囲気が良いよね」

Y「そーだねー、新王陛下優しそうな方だしね、最初は驚いたけど」

Z「貴族の方ども：共が居なくなつたから楽しな」

Y「何で一回溜めておいて言い方悪くするのか理解できないけど、同感！あー行儀見習いの高ビー子女とかも居なくなつたよね。良いよねえーウザかつたし」

X「そだね、仕事も出来ないのに威張り腐つてたからね」

Z「新しく来られた軍の方々や宰相閣下も良いお方だしな。まあ、ウォーリック騎士将閣下は常に酒の匂いがあるので苦手だが」

X「でも、新王陛下が許したんでしょ？お酒」

Y「らしいね」

Z「他の方々も希望されたが流石に断られたらしいな。結構な事だが」

Y「他の人たちもそれぞれお部屋にはお酒隠してるけどね。こないだ掃除してて見つけたよ」

X「そのくらいは良いんじゃない？前の貴族の將軍なんか王城内に女連れ込んだりしてたよ、妾だか何だか知らないけど」

Z「勝手に人を登用して愛人を副官にしたのも居たしな。それに比べれば可愛いものだ。軍には女性登用多いのに將軍や幹部は男ばかりだったからな、小汚い話なら腐るほどある」

X「あれだ、お貴族様の見栄とかそんなやつだ」

Y「単純に仕事できなくてアツチにしか情熱無かったんじゃない？あたし達に手出そうとしてたのも居たしねー、気持ち悪かったねー」

X「結構言っね。でも、新しく来た方、あの方が布告出してからは無くなって良かったよね。軍律を犯したものは厳罰に処すって、かつこいいいよねー」

Z「実際に貴族まで裁いて見せたからな。一般兵なんかは震え上がるぞ」

Y「鬼とか呼ばれてるんでしょ？可哀相だよー、優しいしかつこいのにー」

Z「この間、宰相閣下に申し付けられて菓子をお運びしたんだが、甘いものは苦手と仰られてな。代りに頂いた」

X Y「えええええー！！ずるいー」

Z「美味しかった」

Y「いいなーいいなー、私も何かそうしたことないかなー？」

x「貴方基本的に北区専任じゃない、アルト様が居られるのって南区よ。接点の作りようが無くない？」

y「何でアルト様だけ執務室が離れてるのかなー？他の軍の人は殆ど北区に執務室があるのに」

z「王の護衛を兼ねているそうだが？」

x「でも、近いとは言え新王陛下が居るのってご自身の執務室が宰相閣下の部屋でしょ？南区は南区だけど別の部屋よ？護衛になるの？」

z「それが出来るほど強いのだそうだが、その辺りのことはよく分からん」

y「あー、この間400人を一人で気絶させたらしいよー怪我もさせずに殆ど一瞬だったんだって、訳分からないまま皆が沈んでいったって兵士さんが震えてた」

x「どんな化け物よそれ、A級冒険者でも無理なんじゃないのそんな事？」

z「しかし、今までは軍内では国内最強の一角と呼ばれていたシルツ様が弟子入りしたがっているそうだからな。そんなこともあるのかも知れん」

y「シルツ様って言えばさー、アルト様がバイエルライン様に稽古をつけてるとき物陰から覗いてるらしいよ。アルト様もそれが分かかって、最近シルツ様の名前をよく稽古中に出すんだって」

X「うわー、バイエルライン様としては心中穏やかじゃないねー。
あの方アルト様に心酔してるみたいだし」

Z「それを分かってやっているんだろぅが……アルト様も人が悪い」

Y「でもね、でもね、アルト様優しいんだよー」

X Z「？」

Y「修行で毎回のようにな絶したバイエルライン様を抱っこして連れて帰ってるの、お姫様抱っこだよー、アルト様のほうが体ちっちゃいのに」

X Z「—— / / / / /」

X「そ、それは……良いわね」

Z「憧れる所が無いわけでもないな」

X「あんたでもやっぱりお姫様抱っこが好き？」

Z「それは……まあ」

Y「やっぱりアルト様×バイエルライン様……かな？」

X「どうかなー、結構アルト様って受けっぱいよね」

Z「シユルツ様を絡ませると如何かな？」

Y「生真面目だからこそその横恋慕……みたいな」

X「三角関係つてのは良いよね」

Z「やはりそうなるとアルト様受けのシュルツ様とバイエルライン様が攻めか」

Y「そだねー、誘い受けのアルト様と、ちょっと強く出切れない攻めのシュルツ様、本能でガンガン行っちゃうバイエルライン様かな」

X「でも、新王陛下とも仲がよろしいようで……」

Z「そこまで含めると不味くないか？流石に」

Y「でもアルト様って見た目細めでさー、強そうに見えないし繊細そうじゃん。そうなると優しい新王陛下との相性は良さげだよなー」

Z「否定は出来んな」

X「良いよねー、二人ともお上品だし。その点シュルツ様やバイエルライン様は少々無骨と言うか……まあ、そこも良いんだけど」

Y「マルイレル様が男性だったら是非絡めたいんだけどなー」

Z「いや、あの方は女性だからこそ良いんだ」

X「ゲルムハルト様は？」

Y「あの方はもう奥様が居られるしなー」

Z「マリン様」

X Y「それだ!!」

以後、益体も無い話が継続。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9546o/>

ドリフト TrifT

2011年10月2日22時10分発行